

中在家南遺跡
(第3・4次)

押口遺跡
(第3次)

発掘調査報告書

2002年3月

仙台市教育委員会

中在家南遺跡
(第3・4次)

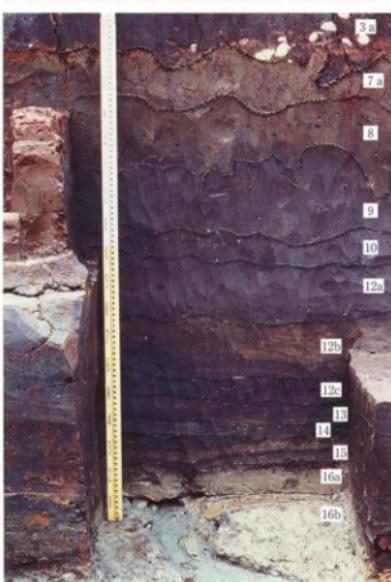
押口遺跡
(第3次)

発掘調査報告書

2002年3月

仙台市教育委員会

I 中在家南遺跡第3・4次調査区



II 中在家南遺跡第4次調査区遺物出土状況



1 河川路12層遺物出土状況－東半部（北より）



2 河川路12層遺物出土状況－西半部（北より）



3 12層出土柄付き直柄平鎌L-61（南西より）



4 12層出土四脚盤L-41（南西より）



5 河川路14・15層遺物出土状況（東より）



6 14・15層剣L-71・槍打棒L-77（南東より）

III 押口遺跡第3次調査北区・南区



1 北区全景（東より）



2 北区西部突出河川跡（南東より）



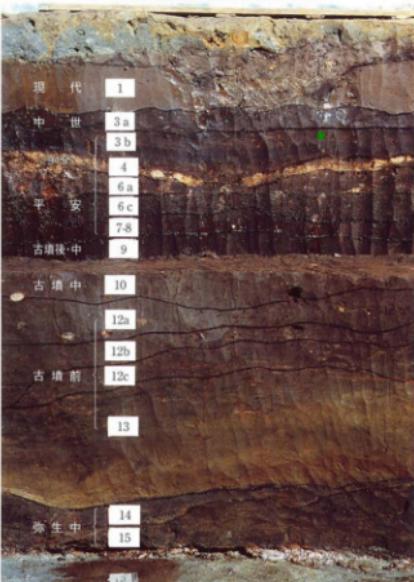
3 北区北壁西部土留面（南西より）



4 北区河川跡堆積土層断面一調査区西壁一



5 南区9層下部～10層遺物出土状況（東より）



7 南区河川跡堆積土層断面一調査区北壁中央一



6 南区全景（南より）

IV 出土遺物



1 器台形土師器（古墳時代前期：中在家南遺跡第4次調査）



6 漆器鉢（弥生時代中期：中在家南遺跡第4次調査）



2 斧柄（古墳時代前期：押口遺跡第3次調査）



3 一木二叉鋤（古墳時代前期：押口遺跡第3次調査）



7 堅杵（弥生時代中期：中在家南遺跡第4次調査）



4 直柄平頭（古墳時代前期：押口遺跡第3次調査）



5 四脚盤（古墳時代前期：中在家南遺跡第4次調査）

序 文

仙台市には約 800 カ所の遺跡があります。これらの遺跡では、発掘調査が行われる度に、仙台の地に暮らした先人の様々な足跡が明らかになり、わたしたちに悠久の歴史の追体験をさせてくれます。そして、教科書や歴史書の写真で見た世界が、足元の大地に眠っていたことに驚かされます。遺跡から発見された生の遺構や遺物に、数百・数千年前の時を隔てて接したとき、写真などとは異なる感動を得ることができます。このように私たちの生活に、豊かな歴史的感動を与えてくれる遺跡は、一度壊されたら二度と元に戻すことはできません。だからこそ、遺跡を先人の残した文化遺産として護り、あるいは活用できるようにして未来に伝えていくことは、わたしたちにとって大切なことと考えております。

今回発掘調査が行われた中在家南遺跡と押口遺跡からは、以前に行われた調査と同様に河川跡が発見されました。河川跡からは、木製品などをはじめとする多くの遺物が出土しており、その中には市内・県内で新発見の本製品も含まれております。これらの遺物は、考古学研究の貴重な資料となるばかりでなく、やがて展示に供された際には、歴史資料として仙台市内外の多くの方々に感動を与えてくれるものと期待されます。

仙台市教育委員会では、今後とも、各方面のご理解とご協力を得ながら、遺跡をはじめとする様々な文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力くださいました多くの方々に深く感謝申し上げるとともに、本書が研究者のみならず市民の皆様に活用されることを期待いたします。

平成 14 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 阿 部 芳 吉

例　　言

- 1 本書は、宮城県仙台市若林区荒井所在の中在家南遺跡第3次・第4次調査、及び押口遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 向遺跡の発掘調査は、「仙台市荒井土地区画整理事業」に伴う仙台市関連事業として実施された。
- 3 本書の執筆・編集は、仙台市教育文化財課の工藤信一郎・加藤徳明と協議のうえ工藤哲司が担当した。
- 4 出土木製品の樹種同定は東北大学理学部鈴木三男氏と農水省森林総合研究所能成修一氏にお願いした。
- 5 石器・石製品の石材の鑑定は、東北大学理学部石川賛一氏にお願いした。
- 6 調査と報告書の作成にあたり次の方々と機関のご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
東北大学文学部須藤　隆氏・愛媛大学法文学部田崎博之氏・古代の森研究会吉川昌伸氏・同吉川純子氏
- 7 本調査に関わる資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した上色は、「新版標準上色帖」(小山・竹原：1976)に準拠している。
- 2 本文図版等で使用した方位は、全て真北で統一してある。
- 3 図中の座標値は、平面座標系Xを基準とし、単位はkmである。
- 4 標高値は、海拔高度(T, P)を示している。
- 5 調査及び報告の作成にあたり、下記の遺構略号を使用した。
S B：建物 S D：溝跡 S K：土坑 S X：その他の遺構 P：ピット S R：河川跡
- 6 遺構図におけるは、搅乱の範囲を示している。
- 7 土層断面図における網目は、灰白色火山灰を示している。
- 8 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田：1980)は、現在、「十和田a (To-a)」と同定されており降下年代は西暦915年初夏とされている。(岡田：1981・1996)
- 9 河川跡の遺物出土状況図においては、出土遺物の位置を次の略号で示した。
土器：● 木製品：■ 材：□ 杭：○ 石器・石製品：★
- 10 遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
A：縄文土器 B：弥生土器 C：非ロクロ土器 D：ロクロ使用土器 E：須恵器 F：丸瓦
G：平瓦 I：陶器 J：磁器 K：石器 L：木製品・材・杭 N：金属製品 O：自然遺物
- 11 土器内面の網目は黒色処理されていることを示している。
- 12 磁石器に関する網目は、磨り面の範囲を示している。
- 13 本書では、完成品・未製品の木製品及び建築材を含む各種加工材及び杭材の総称として「木製品類」という呼称を用いた。
- 14 木製品類の分類は、中在家南遺跡・押口遺跡第1次調査報告書(仙台市文化財調査報告書第213集「中在家南遺跡他」仙台市教育委員会1996)に準拠した。
- 15 木製品・材・杭の実測図においては、表面の状況を下記のとおり表示してある。
割り面(割れ面)： 树皮残存： 焼け面： 破損・腐食部分：
- 16 木製品類の断面における弧線及び同心円は、年輪の方向を示しているが、年輪の間隔を示すものではない。
- 17 遺物観察表の()内の法量は、残存値を示している。

目 次

卷頭写真

序 文

例言・凡例

第1章 中在家南遺跡と押口遺跡の概要

| | |
|------------------|---|
| 第1節 立地と環境 | 1 |
| 1 地理的環境 | 1 |
| 2 歴史的環境 | 1 |
| 第2節 過去の調査概要 | 5 |
| 1 中在家南遺跡と過去の調査成果 | 5 |
| 2 押口遺跡と過去の調査成果 | 7 |
| 第3節 調査経過と調査要項 | 7 |
| 1 調査に至る経緯と調査経過 | 7 |
| 2 調査要項 | 8 |

第2章 中在家南遺跡第3次調査の概要

| | |
|------------------|----|
| 第1節 発見遺構の概要と基本層位 | 9 |
| 1 第3次調査区の位置 | 9 |
| 2 基本層位 | 9 |
| 3 発見遺構の概要 | 10 |
| 第2節 河川跡の堆積土と出土遺物 | 13 |
| 1 河川跡の基本層位 | 13 |
| 2 主な層の状況と出土遺物 | 20 |

第3章 中在家南遺跡第4次調査の概要

| | |
|------------------|----|
| 第1節 発見遺構の概要と基本層位 | 23 |
| 1 第4次調査区の位置 | 23 |
| 2 発見遺構の概要 | 23 |
| 第2節 河川跡の堆積土と出土遺物 | 27 |
| 1 河川跡の基本層位 | 27 |
| 2 各層の状況と出土遺物 | 27 |

第4章 押口遺跡第3次調査北区の概要

| | |
|------------------|----|
| 第1節 発見遺構の概要と基本層位 | 57 |
| 1 北区の位置 | 57 |
| 2 基本層位 | 57 |
| 3 発見遺構の概要 | 57 |

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 第2章 河川跡の堆積土と出土遺物 | 65 |
| 1 河川跡の基本層位 | 65 |
| 2 各層の堆積状況と出土遺物 | 65 |
| 第5章 押口遺跡第3次調査南区の概要 | |
| 第1節 発見遺構の概要と基本層位 | 88 |
| 1 南区の位置 | 88 |
| 2 発見遺構の概要 | 88 |
| 第2節 河川跡の堆積土と出土遺物 | 91 |
| 1 河川跡の基本層位 | 91 |
| 2 各層の状況と出土遺物 | 92 |
| 第6章 自然科学的分析 | |
| 第1節 仙台市中在家南遺跡・押口遺跡出土木製品の樹種 | 110 |
| 同定された樹種 | 110 |
| 中在家遺跡群の利用木材の樹種組成 | 117 |
| 第2節 弥生時代中期の漆器鉢の漆断面 | 127 |
| 第7章 調査成果のまとめ | |
| 1 中在家南遺跡・押口遺跡の調査遺構 | 128 |
| 2 中在家南遺跡・押口遺跡の出土遺物 | 130 |
| 写真図版目次 | |
| 図版1 中在家南遺跡第3次調査区 北半部1 | 139 |
| 図版2 中在家南遺跡第3次調査区 北半部2 | 140 |
| 図版3 中在家南遺跡第3次調査区 南半部1 | 141 |
| 図版4 中在家南遺跡第3次調査区 南半部2 | 142 |
| 図版5 中在家南遺跡第4次調査区1 | 143 |
| 図版6 中在家南遺跡第4次調査区2 | 144 |
| 図版7 中在家南遺跡第4次調査区3 | 145 |
| 図版8 中在家南遺跡第4次調査区4 | 146 |
| 図版9 中在家南遺跡第4次調査区5 | 147 |
| 図版10 中在家南遺跡第4次調査区6 | 148 |
| 図版11 中在家南遺跡第4次調査区7 | 149 |
| 図版12 中在家南遺跡第4次調査区8 | 150 |
| 図版13 押口遺跡第3次調査 北区1 | 151 |
| 図版14 押口遺跡第3次調査 北区2 | 152 |
| 図版15 押口遺跡第3次調査 北区3 | 153 |
| 図版16 押口遺跡第3次調査 北区4 | 154 |
| 図版17 押口遺跡第3次調査 北区5 | 155 |
| 図版18 押口遺跡第3次調査 北区6 | 156 |
| 図版19 押口遺跡第3次調査 北区7 | 157 |
| 図版20 押口遺跡第3次調査 北区8 | 158 |
| 図版21 押口遺跡第3次調査 南区1 | 159 |
| 図版22 押口遺跡第3次調査 南区2 | 160 |
| 図版23 押口遺跡第3次調査 南区3 | 161 |
| 図版24 押口遺跡第3次調査 南区4 | 162 |
| 図版25 押口遺跡第3次調査 南区5 | 163 |
| 図版26 押口遺跡第3次調査 南区6 | 164 |
| 図版27 中在家南遺跡第3次調査出土 弥生土器・土師器1 | 165 |
| 図版28 中在家南遺跡第3次調査出土 土師器2・瓦・磁器・石器1 | 166 |
| 図版29 中在家南遺跡第3次調査出土 石器2・杭 | 167 |
| 図版30 中在家南遺跡第4次調査出土 弥生土器・土師器1 | 168 |
| 図版31 中在家南遺跡第4次調査出土 土師器2 | 169 |

| | | | |
|---------------------------------------|-----|-------------------------------|-----|
| 図版32 中在家南遺跡第4次調査出土 土師器3・須恵器・丸・陶瓶器 | 170 | 図版47 押口遺跡北区出土 弥生土器・土師器1 | 185 |
| 図版33 中在家南遺跡第4次調査出土 石器・石製品・金屬製品・土製品 | 171 | 図版48 押口遺跡北区出土 土師器2 | 186 |
| 図版34 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類1 | 172 | 図版49 押口遺跡北区出土 土師器3・須恵器・陶瓶器 | 187 |
| 図版35 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類2 | 173 | 図版50 押口遺跡北区出土 石製品・金屬製品 | 188 |
| 図版36 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類3 | 174 | 図版51 押口遺跡北区出土 木製品類1 | 189 |
| 図版37 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類4 | 175 | 図版52 押口遺跡北区出土 木製品類2 | 190 |
| 図版38 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類5 | 176 | 図版53 押口遺跡北区出土 木製品類3 | 191 |
| 図版39 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類6 | 177 | 図版54 押口遺跡北区出土 木製品類4 | 192 |
| 図版40 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類7 | 178 | 図版55 押口遺跡北区出土 木製品類5 | 193 |
| 図版41 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類8 | 179 | 図版56 押口遺跡北区出土 木製品類6 | 194 |
| 図版42 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類9 | 180 | 図版57 押口遺跡南区出土 弥生土器・土師器・須恵器 | 195 |
| 図版43 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類10 | 181 | 図版58 押口遺跡南区出土 木製品類1 | 196 |
| 図版44 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類11 | 182 | 図版59 押口遺跡南区出土 木製品類2 | 197 |
| 図版45 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類12 | 183 | 図版60 押口遺跡南区出土 木製品類3 | 198 |
| 図版46 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類13 | 184 | 図版61 押口遺跡南区出土 木製品類4 | 199 |
| | | 図版62 押口遺跡南区出土 木製品類5 | 200 |
| | | 図版63 押口遺跡南区出土 木製品類6 | 201 |

第1章 中在家南遺跡と押口遺跡の概要

第1節 立地と環境

1 地理的環境

仙台市の地形は、西側の山形県境から東側の太平洋に至るまで、山地・丘陵地帯、段丘地帯、平野地帯の大きく3地帯に分けられ、高位から低位の地形に変化する。西部は、東北地方の背継をなす奥羽山脈から派生した標高300～100mほどの山地とその周辺の丘陵地帯となっている。山地・丘陵地帯からは、北から七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川が東流している。

広瀬川中流域とその背後の丘陵部は、標高200～20mに至るまで、古期から順に青葉山段丘・仙台台ノ原段丘・仙台上町段丘・仙台中町段丘・仙台下町段丘の5面の段丘地形が形成されている。宮城県庁から仙台駅付近を中心とする仙台市の旧市街地は、これらの段丘面に立地している。

山地・丘陵地帯及び段丘地帯の東側には、太平洋に至るまで、先の4河川とその支流の運搬物によって形成された沖積平野が広がる。この平野は、幅が10km前後あり、「仙台平野」または「宮城野海岸平野」と呼ばれ、扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形が複雑に入り組んで形成されている。また沿岸部には、現在の汀線に沿って、幅3kmの間に3列の浜堤と、その間に堤間湿地が確認されている。この浜堤の形成年代については、現汀線から約3km内陸の最奥部第I浜堤列が5000～4500年前、約2km内陸の第II浜堤列が2800～1600年前、約1km内陸の第III浜堤列が1000～700年前頃と推定されている。

中在家南遺跡・押口遺跡の所在する荒井地区は、仙台市東部の標高3～5m前後の沖積平野に位置する。段丘の末端からは3～4km海岸に寄り、現汀線からは約4～5kmほど内陸に入っている。付近は広瀬川自然堤防から派生した発達の悪い自然堤防群が幅1kmの間に不規則に東西方向に並び、自然堤防間にには狹隘な後背湿地や旧河道が分布する。自然堤防群の周辺には後背湿地の低地が広範に広がり水田などとなっている。自然堤防と旧河道・後背湿地の比高差は50cm前後である。

2 歴史的環境

仙台市内においては、仙台台ノ原段丘（下末吉期相当）に形成された山田上ノ台遺跡・北前遺跡などで中期旧石器及び後期旧石器が層位的に発見されている。また、沖積地においても、富沢遺跡において現水田面の約5m下層から後期旧石器時代の石器と焚き火跡が当時の森林跡とともに発見されている。

縄文時代は、草創期の遺跡としては、仙台市西部の段丘上の野川遺跡が知られているだけであるが、早期には丘陵部・段丘部に小規模な遺跡が散見されるようになり、沖積地の富沢遺跡や山口遺跡・下ノ内浦遺跡などで落し穴などの遺構や遺物が発見されている。前期になると、三神峯遺跡のような丘陵上に規模の大きな集落が形成されるが、沖積地においては遺物が発見されているだけで、遺構については不明である。中期は、名取川流域では山田上ノ台遺跡や上野遺跡、七北田川流域では高柳遺跡や沼遺跡などの遺跡が丘陵・段丘部に形成されるだけでなく、名取川下流域の自然堤防上には六反田遺跡・ドノ内遺跡等の遺跡が形成されるようになる。後期になると、低地の遺跡はいっそう増加・拡大するが、丘陵や段丘上の遺跡は相対的に縮小する傾向にある。晩期は、丘陵部・平野部とも遺跡は認められるが、低地では遺構の状況の明らかな遺跡ではなく、集落の実態は不明である。荒井地区の縄文時代に関する資料としては、中在家南遺跡から晩期の土器が1個体出土している。

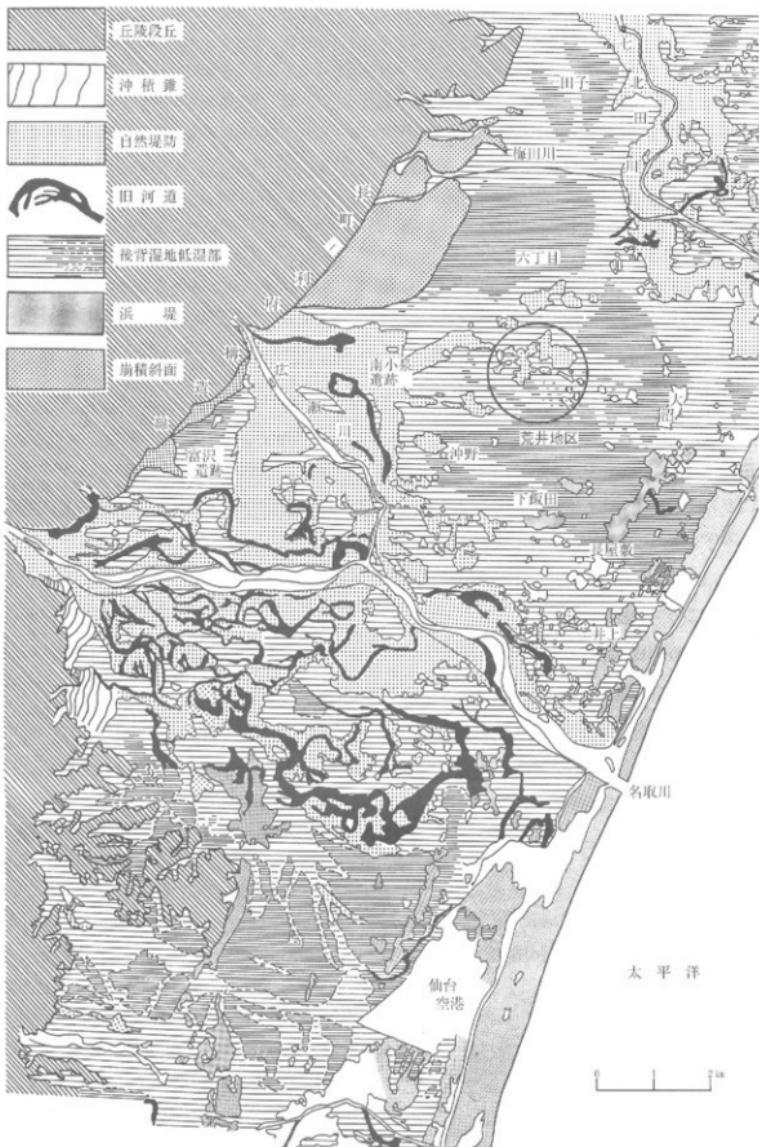
弥生時代は、前期には南小泉遺跡・郡山遺跡・長崎遺跡などで上器等が出土しているが、集落や水田の実態は不明である。中期になると富沢遺跡・高田B遺跡で大規模な水田跡が発見され、水田に伴う農具をはじめとする木製



第1図 中在家南遺跡・押口遺跡の位置と周辺の遺跡

| 番号 | 遺跡名 | 立地 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 立地 | 時代 |
|----|----------|-----------|-------------|----|----------|-----------|-------------|
| 1 | 中在家南遺跡 | 自然堤防・旧河道 | 弥生～近世 | 27 | 野町遺跡 | 自然堤防 | 中世 |
| 2 | 押口遺跡 | 自然堤防・旧河道 | 弥生～近世 | 28 | 妙見日遺跡 | 自然堤防 | 古墳・奈良・平安 |
| 3 | 中在家遺跡 | 自然堤防・後背湿地 | 平安？ | 29 | 中原西遺跡 | 自然堤防 | 自然堤防 |
| 4 | 高照敷遺跡 | 自然堤防 | 古墳 | 30 | 河原林遺跡 | 自然堤防 | 古墳・奈良・平安 |
| 5 | 東井原中道跡 | 自然堤防 | 平安？ | 31 | 那岐大日坂板岩群 | 浜堤 | 中世 |
| 6 | 東井原跡 | 自然堤防 | 古墳・平安 | 32 | 原尻敷板磚 | 浜堤 | 中世 |
| 7 | 下上井走跡 | 自然堤防 | 平安？ | 33 | 遠近石場板磚群 | 浜堤 | 中世 |
| 8 | 長喜城跡 | 自然堤防 | 中世 | 34 | 日向遺跡 | 自然堤防 | 古墳 |
| 9 | 羽殿城跡 | 自然堤防 | 中世 | 35 | 日向御跡 | 自然堤防 | 中世 |
| 10 | 氣井御前口板磚 | 自然堤防 | 中世 | 36 | 上河原遺跡 | 自然堤防 | 古墳・奈良・平安 |
| 11 | 氣井久坂板磚 | 自然堤防 | 中世 | 37 | 上奥日三丁目板磚 | 自然堤防 | 中世 |
| 12 | 勝美川分水跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 | 38 | 梅塙古墳 | 自然堤防 | 古墳（円墳？） |
| 13 | 勝美川分水跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 | 39 | 今泉遺跡 | 自然堤防 | 魏文・平安・中世・貴族 |
| 14 | 志波遺跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 | 40 | 高田A遺跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 |
| 15 | 谷地頭跡 | 自然堤防 | 中世 | 41 | 高田B遺跡 | 自然堤防・後背湿地 | 魏文・強生・古墳～近世 |
| 16 | 北坂遺跡 | 自然堤防 | 平安・中世・近世 | 42 | 篠道遺跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 |
| 17 | 難波浦遺跡 | 自然堤防・後背湿地 | 中世 | 43 | 下飯田堀玉板磚 | 自然堤防 | 中世 |
| 18 | 法雲寺古墳 | 自然堤防 | 古墳（中墳）平安・近世 | 44 | 下飯田遺跡 | 浜堤 | 古墳・奈良・中世 |
| 19 | 若林城跡 | 自然堤防 | 古墳（中墳）平安・近世 | 45 | 垂田新田遺跡 | 浜堤 | 弥生・古墳・平安 |
| 20 | 南小泉遺跡 | 自然堤防 | 魏文・弥生・古墳・近世 | 46 | 尾張赤道跡 | 浜堤 | 古墳・奈良・平安 |
| 21 | 遠見塚古墳 | 自然堤防 | 古墳（I） | 47 | 下飯田篠跡古墳 | 浜堤 | 古墳（円墳） |
| 22 | 曾利松明加内古墳 | 自然堤防 | 古墳（I） | 48 | 興崎御道跡 | 浜堤 | 中世・近世 |
| 23 | 仙台東郷条根跡 | 後背湿地 | 奈良・平安 | 49 | 二木頭跡 | 浜堤 | 中世 |
| 24 | 波井神社坂跡 | 自然堤防 | 中世 | 50 | 大坂山古墳 | 自然堤防 | 古墳（円墳） |
| 25 | 砂押I遺跡 | 自然堤防 | 古墳・奈良・平安 | 51 | 高合郷音室古墳群 | 自然堤防 | 中世 |
| 26 | 神境遺跡 | 自然堤防 | 奈良・平安 | 52 | 中田畠中道跡 | 自然堤防 | 古墳・奈良・平安 |

第1図 遺跡地名表



第2図 名取川下流域の地形分類図

品や石器などが出土し、稻作農耕を基軸とした社会が確立していたことがうかがわれる。後期には、宮沢遺跡で水田跡が発見されているほか、富沢遺跡周辺の丘陵・段丘部の土手内遺跡・原遺跡・八木山緑町遺跡で住居跡と考えられる堅穴が発見されている。また、自然堤防部でもドノ内浦遺跡で土塙墓や土器棺墓が検出されている。荒井地区では、中在家南遺跡で弥生時代中期の集落に伴う遺物包含層と、土塙墓と土器棺墓からなる墓跡群が検出されたほか、河川跡から土器・石器・骨角器・木製品類が出土している。また押口遺跡の河川跡からも土器や木製品類が出土している。

古墳時代前期になると、丘陵・段丘部の燕沢遺跡・土手内遺跡や自然堤防の南小泉遺跡・戸ノ内遺跡・安久東遺跡・下ノ内遺跡・六反田遺跡などに集落が営まれるほか、藤田新田遺跡や、沼向遺跡には浜堤上にも遺跡が形成され、低地の開発の進展が認められる。古墳としては、戸ノ内遺跡・安久東遺跡・四郎丸館跡の方形周溝墓に続き、南小泉遺跡の中央に全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が築かれる。中期には南小泉遺跡に大規模な集落が営まれるほか、沖積地の各地の微高地に集落が形成される。中期の古墳は、前半期は不明であるが、中期後半から6世紀中葉頃にかけては、富沢遺跡北側の段丘上に裏町古墳・金洗沢古墳・砂押古墳・二塚古墳・兜塚古墳が、南側の自然堤防上に春日社古墳・鳥居塚古墳や大野田古墳群中の古墳が次々に造営される。荒井地区周辺では若林城跡内で埴輪を有する古墳が発見される。終末期には南小泉遺跡の西に隣接して、横穴式石室の法領塚古墳が造営されるほか、富沢遺跡の北側などの丘陵斜面には横穴群が形成される。古墳時代の土器は、土師器については主に関東地方の強い影響のもとに成立・展開している。須恵器は、仙台市北部の台原丘陵の大蓮寺窯跡において、5世紀段階の畿内の技術をそのまま移転して生産を行った窯跡が発見されている。中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡からは、古墳時代前期から後期までの土師器や木製品類が出土している。

飛鳥時代の後半に当たる7世紀の後半には、郡山遺跡に全国的にも古い段階の地方官衙（郡山遺跡1期官衙）が造営される。官衙は7世紀末から8世紀初頭には多賀城以前の陸奥国府として改変（II期官衙及び付属寺院等）が行われている。

奈良・平安時代には、段丘面や沖積地の自然堤防・浜堤などの各地に集落が展開する。特に南小泉遺跡及びその周辺は大集落として発展し、各地で住居跡が発見されている。この南小泉遺跡北側の「宮城野」の地には陸奥国分寺・同尼寺が建立され、周辺一帯が陸奥国の中心として栄えていたことがうかがわれる。また、南小泉遺跡から荒井地区にかけては、仙台東郊条里跡と呼ばれる条里型の土地割が近年まで残っていた。

荒井地区周辺の中世遺跡としては、沖野城跡・今泉遺跡（今泉城跡）・二木館跡・日辺館跡などの城館がある。荒井地区内でも中世陶器が採集され、また、荒井館跡や長喜城館跡という遺跡が存在するが、中世の城館や集落の実態については不明である。自然堤防部周辺を除く広範囲な後背湿地の本格的開発は、藤田新田・笠新田（笠屋敷）などの地名に残っているように、近世以降における新田開発によるものと思われる。中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡からは平安時代以降の土器・木製品類のほか、中世・近世の水田跡が検出されている。

近世以降、荒井地区一帯は、昭和20年代までは仙台市東部の田園地帯として、自然堤防上は塚と屋敷林に囲まれた集落と畠地に、後背湿地や沿河河道は水田となっていた。しかし昭和30年代以降になると仙台市の発展とともに、周辺部の水田は耕地整備されたのに対して、自然堤防上の畠地は収穫的に宅地化が進行する状況であった。無計画な宅地化を是正すべく昭和50年代から同地区の土地区画整理計画が立案され、昭和61年から区画整理事業が着手された。土地区画整理事業に関連して、昭和63年から平成5年までは、工事に関係する遺跡の道路部分の事前調査が実施された。以後、現在に至るまで土地区画整理事業が進行中である。

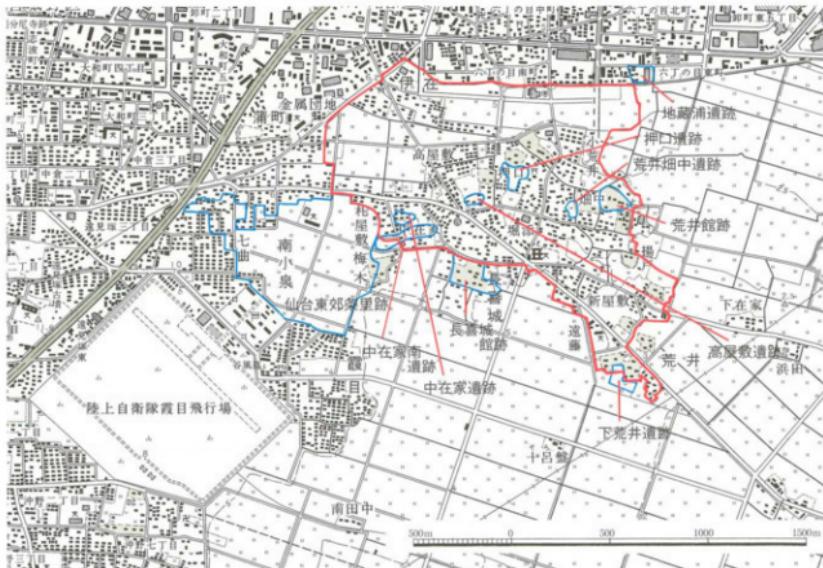
第2節 過去の調査概要

1 中在家南遺跡と過去の調査成果

中在家南遺跡は、仙台市荒井地区画整理事業に伴う事前の分布調査によって1988年に発見された遺跡である。遺跡は、緩やかに蛇行しながら東西方向にのびる旧河道（以下本文中では「河川跡」と表現）と、その南北両側の自然堤防に渡って分布している。遺物が採集されたことから遺跡として認知されているのは東西約350m・南北約100mの範囲で、水田となっている河川跡の幅は約35m、北側の自然堤防の幅は20~40m、南側の自然堤防の幅は50m前後である。地区画整理事業が実施される前は、河川跡は水田として、自然堤防部は畠地ないし宅地として土地利用されていた。自然堤防部の標高は5.5~5.3mで、河川跡との比高差は50cm前後である。

中在家南遺跡の河川跡は、遺跡の東側で北東方向に折れて押口遺跡で発見された河川跡に繋がることが、地形図及び両遺跡の河川跡堆積土層の類似性から推察されている。また遺跡の西側は北側に折れて河川上流へと繋がるものと考えられる（仙台市教育委員会：1996）。

中在家南遺跡においては、これまでに2次11地点の発掘調査が行われている。(第1表)その結果、自然堤防上では、西部においては弥生時代中期(楕円形壠式期)の遺物包含層とこれを切る古墳時代前期の方形周溝墓群などが検出され、中央部では古墳時代ないし平安時代の堅穴住居跡と時期不明の掘立柱建物跡が、東部においては土塙墓と土器棺墓によって構成される弥生時代中期の墓地が検出されている。(第5図)また、河川跡は、幅が25m・深さは約2.5mあり、泥炭質の土壤を主体とする堆積層中からは、弥生時代中期から中世までの木製品をはじめ、土師器・須恵器・弥生土器(中期楕円形壠式中心、前期土器1点出土)・弥生時代の石器・弥生時代の骨角器など豊富な遺物が出土している。



第3図 仙台市若井土地区画整理事業の範囲（赤線内）と関連遺跡

第2節 過去の調査概要

中在家南遺跡の基本層は、自然堤防部が4層に大別され、河川跡の共通する堆積土は大別16層、細別24層に分けられている。河川跡の各土層の性格と時期は次のとおり認識されている。

＜自然堤防部基本層＞

- I層 表土層（現畑耕作土層・河川跡では水田耕作土層となり1層と表示）
- II層 弥生時代遺物包含層（中在家南遺跡の自然堤防部の西部に分布：第3・4次調査区には分布していない）
- III層 遺構の検出される地盤形成層の上部（水平に堆積する複数の地層からなる：上部層で縄文晩期土器出土）
- IV層 地盤を形成する地層の下部（不整に堆積する複数の地層からなる）

X = -195.494



第4図 中在家南遺跡・押口遺跡と河川跡の流路（1/8000）

第1表 中在家南・押口遺跡の発掘調査概要一覧表

| 遺跡名 | 調査次数 | 調査原因 | 調査年 | 調査区 | 調査面積 | 調査場所 | 主な発見遺構 | 主な出土遺物 |
|--------|------|------|---------|-------|-------------------|-----------|----------------------|----------------------|
| 中在家南遺跡 | 区画整理 | 1次 | 1988 | I区 | 640m ² | 自然堤防（中央部） | 聖穴住居跡、獨立柱建物跡、溝跡、土坑 | 土師器 |
| | | | 1988～89 | II区 | 570m ² | 旧河道（中央部） | 水田跡、杭列 | 土師器、弥生土器、本製品類（弥生～中世） |
| | | | 1989 | III区 | 95m ² | 自然堤防（中央部） | 聖穴住居跡、土坑、溝跡 | 土師器、石製機造品 |
| | | | 1989 | IV区 | 383m ² | 自然堤防（東部） | 土礫帯と土器堆积（弥生時代） | 弥生土器、石器 |
| | | | 1989 | V区 | 160m ² | 自然堤防（中央部） | 方形周溝墓、土坑 | 土師器、弥生土器、石器 |
| | | | 1992 | VI区 | 420m ² | 旧河道（中央部） | 水田跡、水田水路、杭列 | 土師器、弥生土器、本製品類（弥生～中世） |
| | | | 1992 | VII区 | 270m ² | 自然堤防（西部） | 方形周溝墓、細跡、遺物包含層（弥生時代） | 土師器、弥生土器、石器 |
| | | | 1993 | VIII区 | 195m ² | 旧河道（西部） | 水田跡 | 土師器、弥生土器、石器、骨角器、本製品類 |
| | | | 1993 | IX区 | 475m ² | 旧河道（西部） | 土坑 | 土師器、弥生土器、石器、骨角器、本製品類 |
| | 2次 | 住宅建築 | 1996 | | 170m ² | 自然堤防（西部） | 方形周溝墓、溝跡 | 土師器、弥生土器、石器 |
| | 3次 | 区画整理 | 1999 | | 300m ² | 自然堤防（中央部） | 獨立柱建物跡、溝跡、土坑 | 土師器、弥生土器、石器 |
| | 4次 | 区画整理 | 2000 | | 110m ² | 旧河道（中央部） | 水田跡 | 土師器、本製品類 |
| 押口道路 | 1次 | 区画整理 | 1990 | I区 | 旧河道（南部） | 水田跡、水路 | 土師器、須志器、弥生土器、本製品類 | |
| | | | | II区 | 960m ² | 旧河道（中央部） | 水田跡、杭列 | 土師器、須志器、弥生土器、本製品類 |
| | | | 1991 | III区 | 自然堤防（西部） | 水田跡、溝跡 | | |
| | 2次 | 住宅建築 | 1996 | | 110m ² | 自然堤防（北部） | 土坑、旧水路 | 石製機造品、管玉 |
| | 3次 | 区画整理 | 2000 | 北区 | 116m ² | 旧河道（北部） | 水田跡、溝跡、土坑 | 土師器、石製機造品、本製品類 |
| | | | | 南区 | 100m ² | 旧河道（北部） | 水田跡、溝跡 | 土師器、須志器、本製品類 |

※1 区画整理はいずれも仙台市青井土地区画整理事業

※2 旧河道=河川跡

<河川跡堆積層>

| | | |
|--------------------|------------------|------------------|
| 1 層 現水田耕作土 | 8 層 平安時代堆積層 | 12 c 層 古墳時代前期堆積層 |
| 2 層 近世水田耕作土 | 9 a 層 古墳時代後期 | 13 層 古墳時代前期堆積層 |
| 3 a 層 中世水田耕作土 | 9 b 層 占墳時代中期堆積層 | 14 層 弥生時代中期堆積層 |
| 3 b 層 平安時代堆積層 | 9 c 層 古墳時代中期堆積層 | 15 a 層 弥生時代中期堆積層 |
| 4 層 灰白色火山灰(915年降下) | 10 層 古墳時代中期堆積層 | 15 b 層 弥生時代中期堆積層 |
| 5 層 平安時代堆積層 | 11 層 古墳時代中期堆積層 | 15 c 層 弥生時代中期堆積層 |
| 6 層 平安時代堆積層 | 12 a 層 古墳時代前期堆積層 | 15 d 層 弥生時代中期堆積層 |
| 7 層 平安時代堆積層 | 12 b 層 占墳時代前期堆積層 | 16 層 弥生時代前期堆積層 |

(仙台市教育委員会：1996・1997)

2 押口遺跡と過去の調査成果

押口遺跡は、1988年に土地区画整理事業に伴う試掘調査が実施される以前は、現在押口遺跡の中央を東西方向に通っている用水路の北側の微高地（自然堤防）部分が、東西約130m・南北約80mの範囲で遺物散布地として遺跡に登録されているだけであった。試掘調査の際に、遺跡の南側の水田にかかる道路予定地を発掘したところ、河川跡と考えられる遺物包含層が発見されたので、この水田部分の東西約40m・南北約70mの範囲が遺跡に追加登録された。

遺跡の標高は、北側の自然堤防と考えられる微高地部分が4.9~4.7m、水田となっている河川跡部分が4.5mほどである。土地区画整理実施以前は、微高地は宅地及び畠地となっていた。

押口遺跡は、過去2次の調査が行われている。第1次調査は土地区画整理に伴い遺跡に係る道路部分で、河川跡を横断するような調査が行われた。河川跡は、幅約20mで、深さは2.5mである。河川跡底面のレベルは中在家南遺跡の河川跡とはほぼ同じである。堆積土は泥炭質の土壤を主体とし、大別層の特徴は中在家南遺跡の河川跡堆積土層と概ね一致し16層に分けられた。堆積土中からは、中在家南遺跡同様に弥生時代中期から中世までの本製品を中心とする多数の遺物が出土しているが、弥生時代の遺物は、量的には減少し、保存状態も悪くなっている。この時期には遺跡の中心から離れていたことが伺われる。これに対して、古墳時代前期（12層）の遺物は中在家南遺跡に引けを取らず、多数の木製品や土師器などが出土している。第1次調査においては、河川跡両岸の上面部の一部も調査されているが、この部分では近世以降と考えられる水田跡や溝跡及び時期不明の土坑が検出されているだけで、河川跡からの出土遺物と関係する遺構は発見されていない。

微高地の調査は第2次調査の際に実施され、土坑と石製模造品・管玉などが発見されているが、これらの遺構や遺物に関係する遺跡の実態は明らかでない。

第3節 調査経過と調査要項

1 調査に至る経緯と調査経過

荒井地区では、1986年に仙台市により土地区画整理事業が着手された。1987年に仙台市の開発部局と教育委員会が土地区画整理事業地内の遺跡の取扱いを協議し、翌年から遺跡の事前調査に着手した。仙台市荒井土地区画整理事業地内においては、周知の遺跡のほかにも未知の遺跡の存在も予想されたので、あらためて表面の分布調査と、試掘調査を実施した。その結果、新に荒井細巾遺跡・高塙敷遺跡・中在家南遺跡が発見され、押口遺跡の登録範囲が拡大された。遺跡の区画街路に關わる部分については、各遺跡の第1次として調査が実施された。

その後、区画整理事業内の各区画内における個人住宅及び共同住宅の建築に関する調査が、中在家南遺跡および押口遺跡で各1回実施されている（仙台市教育委員会：1997）。

区画整理事業に関しては、街路部の調査終了後、開発部局から保留地の販売に関する土壤改良を行うために、事前調査の実施が要請された。この要請に基づき、開発部局と協議の結果、1996年に高屋敷遺跡の第2次調査が行われ（仙台市教育委員会：1997）、さらに本報告書に関わる中在家南遺跡第3次調査が1999年に、中在家南遺跡第4次調査と押口遺跡第3次調査が2000年に実施された。

2 調査要項

- 1) 遺跡名 ①中在家南遺跡第3次調査
②中在家南遺跡第4次調査
③押口遺跡 第3次調査
- 2) 所在地 ①中在家南遺跡第3次調査区 仙台市若林区荒井字中在家23
②中在家南遺跡第4次調査区 仙台市若林区荒井字中在家33・35
③押口遺跡 第3次調査区 仙台市若林区荒井字押口30・33・34・35
- 3) 調査理由 土地区画整理事業に伴う土壤改良工事
- 4) 調査面積 ①中在家南遺跡第3次調査区 300m²
②中在家南遺跡第4次調査区 110m²
③押口遺跡 第3次調査区 216m²（北区116m²・南区100m²）
- 5) 調査期間 ①中在家南遺跡第3次調査区 平成11年7月8日～平成11年8月23日
②中在家南遺跡第4次調査区 平成12年5月30日～平成12年7月31日
③押口遺跡 第3次調査区 平成12年8月1日～平成12年10月30日
- 6) 調査主体 仙台市教育委員会
- 7) 調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査第一係
課長 大越 裕光 主幹兼調査第一係長 田中 则和
調査担当職員 工藤哲司 工藤信一郎（平成11年度） 加藤聰明（平成12年度）
- 8) 調査参加者 青木 吉次 赤間 淳子 浅見 繼子 安部 文子 阿部みのる 伊藤 清子
伊深みつ子 上野 美子 速藤 清子 大内さくえ 小野さよ子 小畑 和子
小野寺達重 小沼ちえ子 加嶋みえ子 菊地 和江 後藤 純子 小林 国子
今田 郁枝 斎藤 麗子 渡井 正雄 佐々木瑞枝 佐藤 爰子 佐藤すみ子
佐藤てる子 佐藤八重子 庄子 弘子 須賀 栄子 皆井 君子 皆井 民子
鈴木美代子 高橋 美香 竹森 光子 只野 宗一 出中さと子 千田タイ子
島中真知子 深瀬 錠子 丸山喜恵子 丸山 初江 三浦 貢 水戸 智
山下 秀子 山田千代子 横尾由紀子 古田妙絵子 渡辺 純子
9) 整理参加者 相沢せい子 安部 文子 有路 尚子 伊藤 清子 大泉 照美 大越ふさ子
柄沢千佳子 今野 順子 佐藤 愛子 佐藤とき子 庄子 弘子 杉松比佐子
闇谷 栄子 高橋 朝子 津谷 貞子 深瀬 錠子 星 芳子 若生恵美子
渡辺 純子
- 10) 調査指導 須藤 隆（東北大学文学部） 鈴木 三男（東北大学理学部）

第2章 中在家南遺跡第3次調査の概要

第1節 発見遺構の概要と基本層位

1 第3次調査区の位置

第3次調査区は、中在家南遺跡の中央よりやや東側に寄った所の自然堤防上から、その南側に沿った河川跡にかけて位置する。現在は盛土整地されているが、区画整理以前の自然堤防の標高は53~48m前後あり、畑地として利用されていた。自然堤防より60cm前後低い河川跡部分は水田となっていた。

過去の調査区との位置関係は、第1次調査Ⅰ区南部からⅡ区北部にかけての地区の東側にある。Ⅰ区は自然堤防に配置された調査区で、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが発見され、溝跡の幾つかは第3次調査区へ延びていると推定される。Ⅱ区は、区画整理実施以前の水田及び河川跡にかかる調査区である。Ⅱ区河川跡の北岸部では、古墳時代中期に祭祀に関係して使用されたと考えられる土師器が出土している。また、第3次調査区は、第1次調査Ⅵ区西半の北側に位置し、Ⅱ区の延長として検出された河川跡の北岸部にあたる。第4次調査区は、Ⅵ区を挟んでその南側に位置する。(第5図) Ⅱ区・Ⅵ区の河川跡では、河川跡内堆積土の基本層2層において近世頃の水田の畦畔痕跡が、3a層では中世頃の水田の畦畔痕跡と杭列を作り水路跡が検出されている。3b層から15層までの各堆積層からは本製品や土器をはじめとする多数の遺物が出土している。

このような、地形環境及びこれまでの調査区との関係にある第3次調査区は、南北に2分割して前後半に分けて調査を行なった。先に行なった北半部の調査区は、主に自然堤防部にあたり、掘立柱建物跡・溝跡・土坑などの遺構が発見されている。後から行なった南半部の調査区では、河川跡(SR-1)の北岸部が検出された。

2 基本層位

第3次調査区の、自然堤防部から河川跡にわたる基本層位は、大別すると、①表土層(盛土層及びI層)・②河川跡堆積土新層(河川跡堆積土上部=2~15層)・③河川跡堆積土古層(河川跡堆積土下部=16層群)・④基盤層群(Ⅲ層:Ⅱ層は、第1次調査の、Ⅶ区の周辺において、表上層と基盤層群の間に分布する弥生時代中期の遺物包含層に付ける番号であることから、前回の調査層位と整合性を持たせるために、基盤層はⅢ層とした。)の4層に分けられる。

1) 表土層(盛土層及びI=1層)

現表土層は、区画整理の際の盛土からなり、自然堤防部で10~20cm・水田部で70cm前後ある。区画整理による盛土以前の表土層は、調査区北側の自然堤防部では暗褐色のシルト質粘土からなる畑耕作上で、調査区南側の河川跡部分は、灰色粘土からなる水田耕作土層である。

2) 河川跡堆積土新層(河川跡堆積土上部=2~15層)

当該河川跡が流路の変更等何らかの事情によって、それまでの流水量が減少し、水流が停滞するようになった結果、黒色を基調とする泥土または泥炭質土壤が堆積することにより形成された堆積層である。この黒色土層は、中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡で概ね類似した堆積状況を示す。両遺跡の調査により、2層~15層に大別されている土層のうち、本調査区では、3a・6・9・10・12・14・15層の各層が確認された。詳細は次節で述べる。なお、河川跡堆積土新層(河川跡堆積土上部)については、今後は單に「河川跡」と呼ぶこととする。

3) 河川跡堆積土古層（河川跡堆積土下部＝16層群）

黒褐色泥炭質ないし粘土質土壤を主とする河川跡堆積土新層が堆積する以前の、河川に一定の水量があり、水流による浸食・堆積作用が盛んであった段階に堆積したと考えられる黄褐色からにぶい黄色系のシルトないし砂質土壤の堆積層を16層とした。16層は、第7図のように細分可能である。各層は河川跡堆積土新層が堆積以前の河川中⼼に向かって下がるように斜めに堆積している。細別層を観察すると砂層や粘土層などを縞状に挟んで堆積しており、水流の影響下に堆積したことが伺われる。

第1次調査Ⅱ区の、15層に近い16層中からは、弥生時代前期の土器が出土している。

4) 基盤層群

自然堤防の北半側は、平面的には16層と類似する土壤であるが、断面を観察すると、第7図及び巻頭写真I-2のように、河川跡の堆積土とは異なる水平の堆積層の重なりが認められる。これらの水平堆積層群は、河川形成以前からのこの地域の基盤層として堆積した地層と考えられる。基盤層は、にぶい黄褐色ないしにぶい黄橙色のシルトおよび粘土層を主体とし、下部の層はグラウシ化している。

第1次調査Ⅰ区の、基盤層上部からは、繩文時代晩期末の土器が出土している。

3 発見遺構の概要

第3次調査区は、自然堤防から河川跡にかかる調査区で、SK-3上坑の南側の段差から北側は畑地となっていた自然堤防部にある。段差から南側は、水田となっていた自然堤防斜面ないし河川跡堆積土上面にあたる。北側の自然堤防部では、掘立柱建物跡1棟・溝跡3条・上坑4基・ピット11個が発見されている。また、検出された自然堤防部の上面では、基盤層と河川跡堆積土古層（16層）との境界が検出されている。河川跡（河川跡堆積土新層）の上端から段差までは約7m、基盤層と河川跡堆積土古層との境界までは約10mあり、三者は互いにほぼ平行して東西に伸びている。南側の水田となっていた自然堤防斜面から河川跡上面にかけては、近・現代の水田耕作による削平が行われ、自然堤防部分も水田耕作による侵食を受けている。

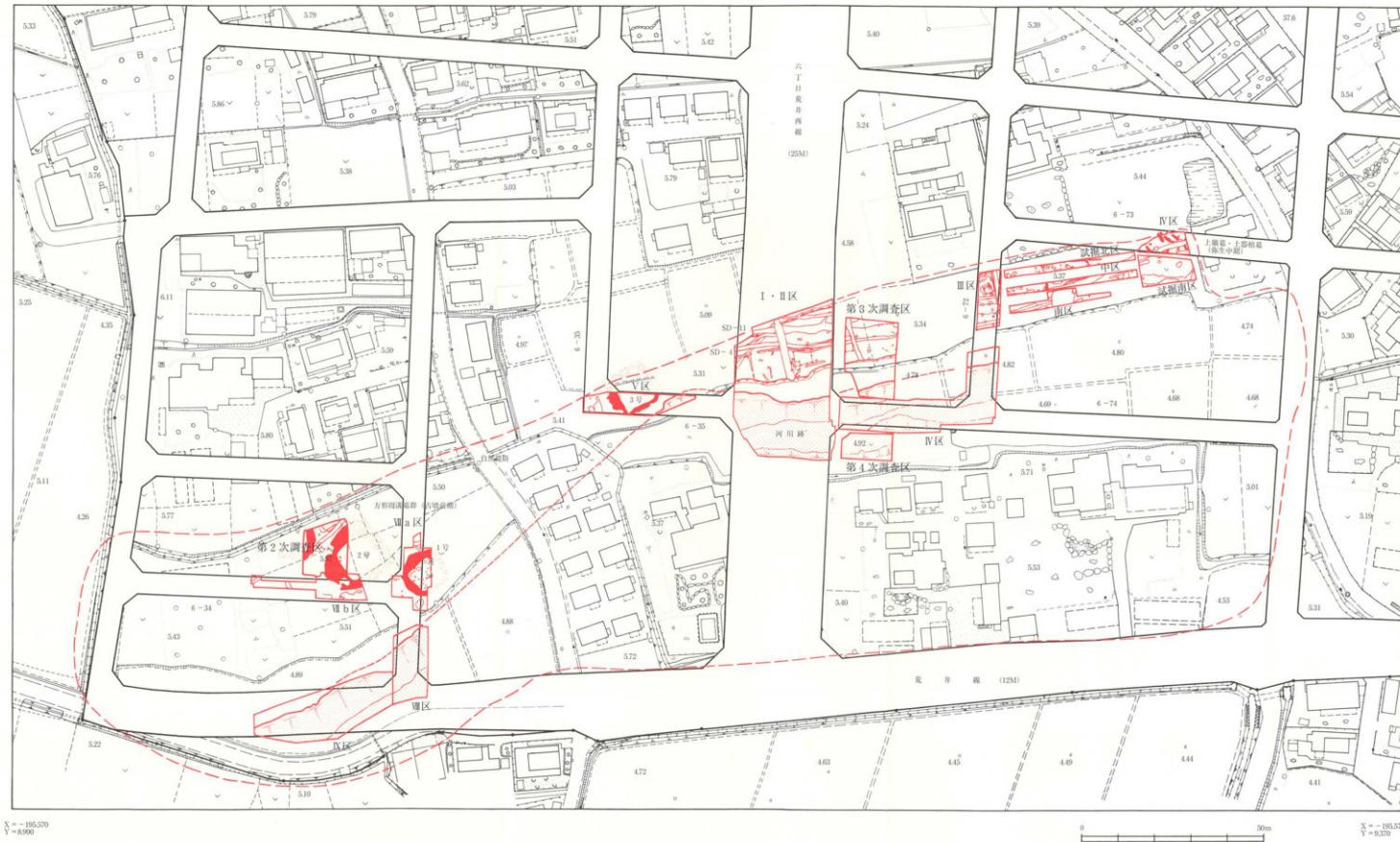
1) 掘立柱建物跡

SB-1 掘立柱建物跡 調査区の西壁際中央付近で検出された。遺構の西部は調査区の外に伸びているが、第1次調査区のⅡ区でこの遺構に続く遺構は検出されていないので、西側には1間だけのびる東西2間×南北2間程度の建物と考えられる。SD-1溝跡に切られている。東辺の総長は386cm（柱間寸法は北から205cm・181cm）である。南辺の検出部の柱間は、232cmである。柱穴の掘り方は、直徑25~30cmの円形で、検出面からの深さは30cm前後である。柱痕跡は不明であったが、P9の底面に直径10cmの円形の落ち込みが認められることから、直徑10cm程度の柱であった可能性が考えられる。柱穴の堆積土は、黒褐色ないし黒色の粘土質シルトで、地山（基盤層Ⅲ層）を起源とする黄色系の土壤のブロックを含んでいる。柱穴からの出土遺物はない。

2) 溝 跡

SD-1溝跡 調査区の北西角から南東方向に伸びて検出された。南端は水田との境目の段差部で途切れる。SB-1 掘立柱建物跡、SD-2・3溝跡を切る。方向はN-20°-Wである。幅は上面で150~95cm、深さは20cm前後で、断面形は緩やかな舟底形を呈する。底面のレベル差はほとんどない。堆積土は、黒褐色のシルト質粘土層で、自然堆積層と理解される。SD-1からは、土師器窯（第10図1）をはじめ、ロクロ土師器・非ロクロ土師器・古代の平瓦片などが出土している。しかし、遺構の年代については、SD-1溝跡に切られるSD-2溝跡が、位置

X = -195,350



第5図 中在家南遺跡と調査区配置図

と方向から第1次調査I区で検出されたSD-11溝跡に統くと推定され、I区SD-11溝跡の底面より缶詰缶が出土していることから、近・現代に掘削された溝と考えられる。したがって、SD-1溝跡から多くの土器片等の遺物が出土しているが、これらの出土遺物は、遺構の時期と関係のない流入品とみられる。

SD-2溝跡 調査区の北部をN-83°-Eの方向で東西にのびる。SK-1土坑を切り、SD-1溝跡に切られる。検出部分では、遺構の重複や耕作の掘削深度の差によって残存状況が異なり、上面幅は一定していないが、最大で2.7mある。これに対して底面幅は1~1.2m前後である。深さは30~40cm程度、断面形は逆台形を呈する。底面のレベルは、西側が東側に比べて10cmほど低くなっている。堆積土は断面実測をした地点で4層に細分されたが、いずれも自然堆積層と観察される。堆積土中からは、第10回にも図示したとおり多数の遺物が出土しているが、遺構の年代については、上述したように、この溝の延長線上にあると推定される第1次調査I区SD-11溝跡の底面から缶詰缶が出土しているので、近・現代のものと考えられる。

SD-3溝跡 調査区中央北側を、N-82°-Eの方向で東西にのびる。SD-1溝跡・P1に切られる。幅は西部で90cm前後、東部で50cm前後である。断面形は、浅いU字形を呈し、深さは西部で約18cm、東部で約8cmである。底面のレベルは西部が約20cm低い。堆積土は2層に分けられるが、どちらも黒褐色のシルト質粘土層で、浅黄色土のブロックを含んでいる。遺物は、上師器片及び赤生土器と見られる縄文の付された上器片が少量出土しているが、いずれも摩滅した小破片であることから遺構の時期とは関係ないものとみられる。

3) 土 坑

SK-1土坑 調査区の北東角で検出され、調査区外にものびている。SD-2溝跡に切られている。検出部分は平面形が隅丸方形ないし隅丸長方形の土坑の南北角付近にある。検出部で東西144cm・南北116cmを計る。深さは、5cm前後で、底面には緩やかな凹凸が認められる。堆積土は、灰黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は、堆積土中からロクロ土師器の壺（第12図1）とロクロ土師器片2点が出土している。

SK-2土坑 調査区の中央で検出された。平面形は略円形を呈し、南北軸長80cm、東西軸長73cmを計る。深さは16cmで断面形は浅いU字形である。堆積土は、上部が黒褐色のシルト質粘土、下部がにぶい黄褐色の粘土質シルト層である。遺物は、堆積土中から摩滅した上師器片が十数点出土している。

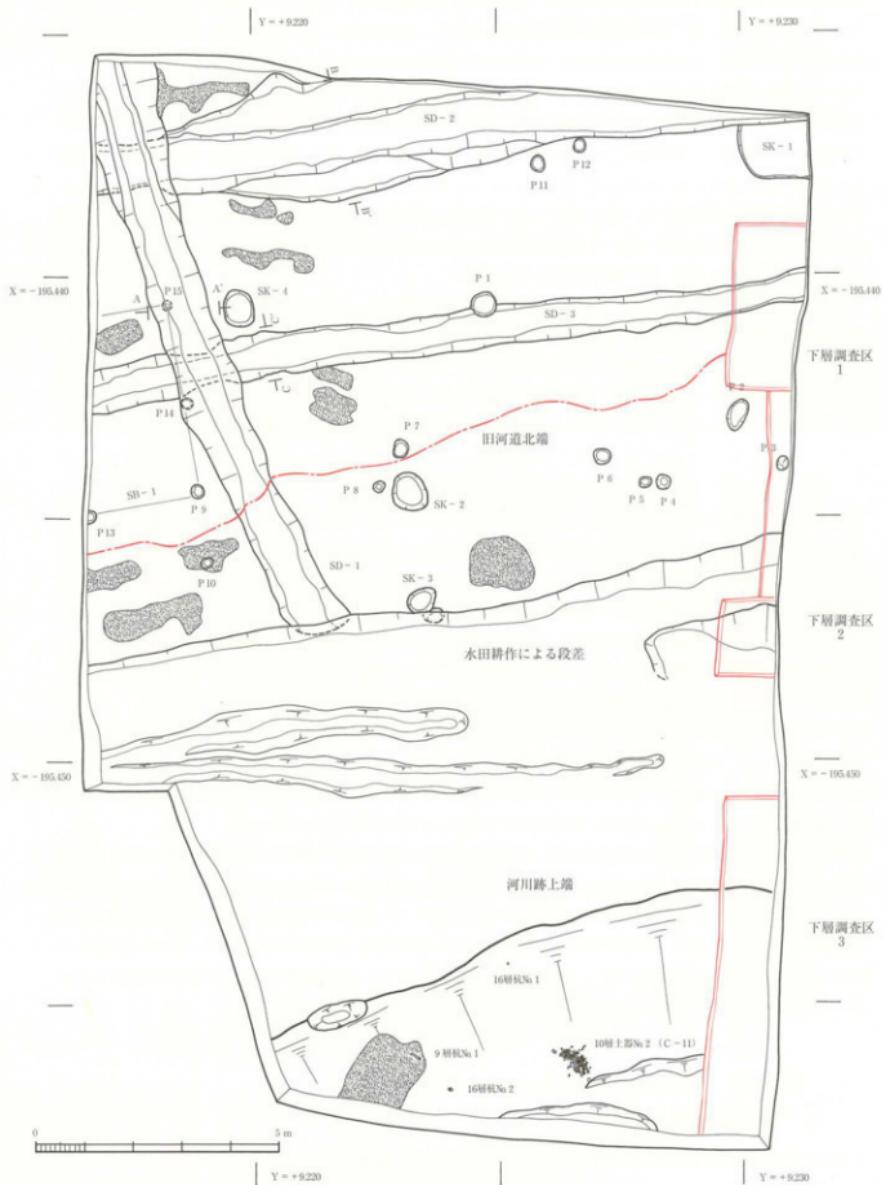
SK-3土坑 調査区中央のSK-2土坑の南側で検出された。南端の上部を水田耕作により形成された段差により削平されている。残存部の平面形は楕円形を呈し、東西長軸62cm、南北短軸52cmを計る。深さは20cmで断面形は浅いU字形である。堆積土は、4層に分けられる。下部はブロック状の堆積土であるが、上部は比較的均一な土壤で、自然堆積層と観察される。遺物は、堆積土中から摩滅した上器片が数点出土している。

SK-4土坑 調査区の北西部で検出された。平面形は楕円形に近い隅丸長方形を呈し、南北長軸73cm、東西短軸59cmを計る。深さは10cm前後で断面形は浅いU字形である。堆積土は、上部の黒褐色シルト質粘土と、下部の褐色シルト質粘土の2層に分けられる。検出面（堆積土1層中）で、非ロクロ上師器の壺（第12図2）が潰れた状態で出土した。この土器は、体部がやや膨らんだ壺の体部上半の破片で、口縁部は厚みがあり、緩やかに外反している。調整は、体部外面上部がハケメ、下部がナデ、内面はヘラナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ調整されている。そのほか堆積土中から摩滅した土器片が数点出土している。

第2節 河川跡の堆積土と出土遺物

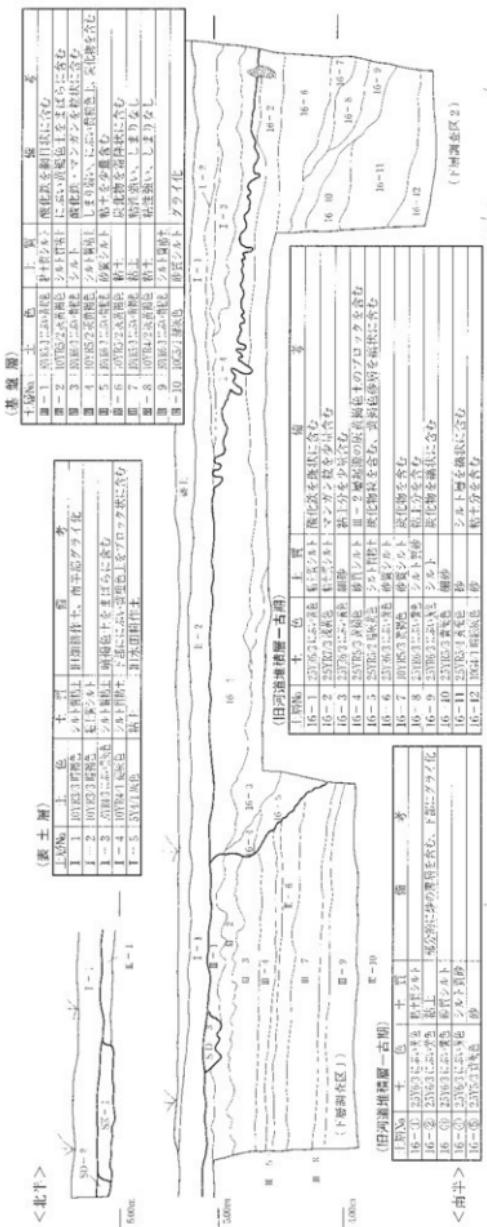
1 河川跡の基本層位

第3次調査区河川跡（河川跡堆積土新層=河川堆積土上部）は、調査区の南辺部で北岸部が検出さ



第6図 中在家南遺跡第4次調査区遺構配図

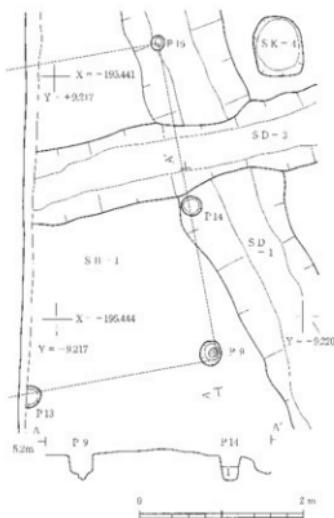
第2章 小在家山遺跡第3次調査の概要



This geological cross-section diagram illustrates the stratigraphy and thickness of the Lower Paleozoic Series 3. The vertical axis represents thickness in meters (m), ranging from 0 at the bottom to 4000 m at the top. The horizontal axis represents distance, with labels 5.0 Km and 4.0 Km. The diagram shows several distinct lithological units, each labeled with its name and thickness. A scale bar at the bottom indicates distances up to 5.0 Km.

| Lithology | Thickness (m) |
|-----------|---------------|
| 1-1 | ~100 |
| 1-2 | ~100 |
| 1-3 | ~100 |
| 1-4 | ~100 |
| 1-5 | ~100 |
| 1-6 | ~100 |
| 1-7 | ~100 |
| 1-8 | ~100 |
| 1-9 | ~100 |
| 1-10 | ~100 |
| 1-11 | ~100 |
| 1-12 | ~100 |
| 1-13 | ~100 |
| 1-14 | ~100 |
| 1-15 | ~100 |
| 1-16 | ~100 |
| 1-17 | ~100 |
| 1-18 | ~100 |
| 1-19 | ~100 |
| 1-20 | ~100 |
| 1-21 | ~100 |
| 1-22 | ~100 |
| 1-23 | ~100 |
| 1-24 | ~100 |
| 1-25 | ~100 |
| 1-26 | ~100 |
| 1-27 | ~100 |
| 1-28 | ~100 |
| 1-29 | ~100 |
| 1-30 | ~100 |
| 1-31 | ~100 |
| 1-32 | ~100 |
| 1-33 | ~100 |
| 1-34 | ~100 |
| 1-35 | ~100 |
| 1-36 | ~100 |
| 1-37 | ~100 |
| 1-38 | ~100 |
| 1-39 | ~100 |
| 1-40 | ~100 |
| 1-41 | ~100 |
| 1-42 | ~100 |
| 1-43 | ~100 |
| 1-44 | ~100 |
| 1-45 | ~100 |
| 1-46 | ~100 |
| 1-47 | ~100 |
| 1-48 | ~100 |
| 1-49 | ~100 |
| 1-50 | ~100 |
| 1-51 | ~100 |
| 1-52 | ~100 |
| 1-53 | ~100 |
| 1-54 | ~100 |
| 1-55 | ~100 |
| 1-56 | ~100 |
| 1-57 | ~100 |
| 1-58 | ~100 |
| 1-59 | ~100 |
| 1-60 | ~100 |
| 1-61 | ~100 |
| 1-62 | ~100 |
| 1-63 | ~100 |
| 1-64 | ~100 |
| 1-65 | ~100 |
| 1-66 | ~100 |
| 1-67 | ~100 |
| 1-68 | ~100 |
| 1-69 | ~100 |
| 1-70 | ~100 |
| 1-71 | ~100 |
| 1-72 | ~100 |
| 1-73 | ~100 |
| 1-74 | ~100 |
| 1-75 | ~100 |
| 1-76 | ~100 |
| 1-77 | ~100 |
| 1-78 | ~100 |
| 1-79 | ~100 |
| 1-80 | ~100 |
| 1-81 | ~100 |
| 1-82 | ~100 |
| 1-83 | ~100 |
| 1-84 | ~100 |
| 1-85 | ~100 |
| 1-86 | ~100 |
| 1-87 | ~100 |
| 1-88 | ~100 |
| 1-89 | ~100 |
| 1-90 | ~100 |
| 1-91 | ~100 |
| 1-92 | ~100 |
| 1-93 | ~100 |
| 1-94 | ~100 |
| 1-95 | ~100 |
| 1-96 | ~100 |
| 1-97 | ~100 |
| 1-98 | ~100 |
| 1-99 | ~100 |
| 1-100 | ~100 |
| 1-101 | ~100 |
| 1-102 | ~100 |
| 1-103 | ~100 |
| 1-104 | ~100 |
| 1-105 | ~100 |
| 1-106 | ~100 |
| 1-107 | ~100 |
| 1-108 | ~100 |
| 1-109 | ~100 |
| 1-110 | ~100 |
| 1-111 | ~100 |
| 1-112 | ~100 |
| 1-113 | ~100 |
| 1-114 | ~100 |
| 1-115 | ~100 |
| 1-116 | ~100 |
| 1-117 | ~100 |
| 1-118 | ~100 |
| 1-119 | ~100 |
| 1-120 | ~100 |
| 1-121 | ~100 |
| 1-122 | ~100 |
| 1-123 | ~100 |
| 1-124 | ~100 |
| 1-125 | ~100 |
| 1-126 | ~100 |
| 1-127 | ~100 |
| 1-128 | ~100 |
| 1-129 | ~100 |
| 1-130 | ~100 |
| 1-131 | ~100 |
| 1-132 | ~100 |
| 1-133 | ~100 |
| 1-134 | ~100 |
| 1-135 | ~100 |
| 1-136 | ~100 |
| 1-137 | ~100 |
| 1-138 | ~100 |
| 1-139 | ~100 |
| 1-140 | ~100 |
| 1-141 | ~100 |
| 1-142 | ~100 |
| 1-143 | ~100 |
| 1-144 | ~100 |
| 1-145 | ~100 |
| 1-146 | ~100 |
| 1-147 | ~100 |
| 1-148 | ~100 |
| 1-149 | ~100 |
| 1-150 | ~100 |
| 1-151 | ~100 |
| 1-152 | ~100 |
| 1-153 | ~100 |
| 1-154 | ~100 |
| 1-155 | ~100 |
| 1-156 | ~100 |
| 1-157 | ~100 |
| 1-158 | ~100 |
| 1-159 | ~100 |
| 1-160 | ~100 |
| 1-161 | ~100 |
| 1-162 | ~100 |
| 1-163 | ~100 |
| 1-164 | ~100 |
| 1-165 | ~100 |
| 1-166 | ~100 |
| 1-167 | ~100 |
| 1-168 | ~100 |
| 1-169 | ~100 |
| 1-170 | ~100 |
| 1-171 | ~100 |
| 1-172 | ~100 |
| 1-173 | ~100 |
| 1-174 | ~100 |
| 1-175 | ~100 |
| 1-176 | ~100 |
| 1-177 | ~100 |
| 1-178 | ~100 |
| 1-179 | ~100 |
| 1-180 | ~100 |
| 1-181 | ~100 |
| 1-182 | ~100 |
| 1-183 | ~100 |
| 1-184 | ~100 |
| 1-185 | ~100 |
| 1-186 | ~100 |
| 1-187 | ~100 |
| 1-188 | ~100 |
| 1-189 | ~100 |
| 1-190 | ~100 |
| 1-191 | ~100 |
| 1-192 | ~100 |
| 1-193 | ~100 |
| 1-194 | ~100 |
| 1-195 | ~100 |
| 1-196 | ~100 |
| 1-197 | ~100 |
| 1-198 | ~100 |
| 1-199 | ~100 |
| 1-200 | ~100 |
| 1-201 | ~100 |
| 1-202 | ~100 |
| 1-203 | ~100 |
| 1-204 | ~100 |
| 1-205 | ~100 |
| 1-206 | ~100 |
| 1-207 | ~100 |
| 1-208 | ~100 |
| 1-209 | ~100 |
| 1-210 | ~100 |
| 1-211 | ~100 |
| 1-212 | ~100 |
| 1-213 | ~100 |
| 1-214 | ~100 |
| 1-215 | ~100 |
| 1-216 | ~100 |
| 1-217 | ~100 |
| 1-218 | ~100 |
| 1-219 | ~100 |
| 1-220 | ~100 |
| 1-221 | ~100 |
| 1-222 | ~100 |
| 1-223 | ~100 |
| 1-224 | ~100 |
| 1-225 | ~100 |
| 1-226 | ~100 |
| 1-227 | ~100 |
| 1-228 | ~100 |
| 1-229 | ~100 |
| 1-230 | ~100 |
| 1-231 | ~100 |
| 1-232 | ~100 |
| 1-233 | ~100 |
| 1-234 | ~100 |
| 1-235 | ~100 |
| 1-236 | ~100 |
| 1-237 | ~100 |
| 1-238 | ~100 |
| 1-239 | ~100 |
| 1-240 | ~100 |
| 1-241 | ~100 |
| 1-242 | ~100 |
| 1-243 | ~100 |
| 1-244 | ~100 |
| 1-245 | ~100 |
| 1-246 | ~100 |
| 1-247 | ~100 |
| 1-248 | ~100 |
| 1-249 | ~100 |
| 1-250 | ~100 |
| 1-251 | ~100 |
| 1-252 | ~100 |
| 1-253 | ~100 |
| 1-254 | ~100 |
| 1-255 | ~100 |
| 1-256 | ~100 |
| 1-257 | ~100 |
| 1-258 | ~100 |
| 1-259 | ~100 |
| 1-260 | ~100 |
| 1-261 | ~100 |
| 1-262 | ~100 |
| 1-263 | ~100 |
| 1-264 | ~100 |
| 1-265 | ~100 |
| 1-266 | ~100 |
| 1-267 | ~100 |
| 1-268 | ~100 |
| 1-269 | ~100 |
| 1-270 | ~100 |
| 1-271 | ~100 |
| 1-272 | ~100 |
| 1-273 | ~100 |
| 1-274 | ~100 |
| 1-275 | ~100 |
| 1-276 | ~100 |
| 1-277 | ~100 |
| 1-278 | ~100 |
| 1-279 | ~100 |
| 1-280 | ~100 |
| 1-281 | ~100 |
| 1-282 | ~100 |
| 1-283 | ~100 |
| 1-284 | ~100 |
| 1-285 | ~100 |
| 1-286 | ~100 |
| 1-287 | ~100 |
| 1-288 | ~100 |
| 1-289 | ~100 |
| 1-290 | ~100 |
| 1-291 | ~100 |
| 1-292 | ~100 |
| 1-293 | ~100 |
| 1-294 | ~100 |
| 1-295 | ~100 |
| 1-296 | ~100 |
| 1-297 | ~100 |
| 1-298 | ~100 |
| 1-299 | ~100 |
| 1-300 | ~100 |
| 1-301 | ~100 |
| 1-302 | ~100 |
| 1-303 | ~100 |
| 1-304 | ~100 |
| 1-305 | ~100 |
| 1-306 | ~100 |
| 1-307 | ~100 |
| 1-308 | ~100 |
| 1-309 | ~100 |
| 1-310 | ~100 |
| 1-311 | ~100 |
| 1-312 | ~100 |
| 1-313 | ~100 |
| 1-314 | ~100 |
| 1-315 | ~100 |
| 1-316 | ~100 |
| 1-317 | ~100 |
| 1-318 | ~100 |
| 1-319 | ~100 |
| 1-320 | ~100 |
| 1-321 | ~100 |
| 1-322 | ~100 |
| 1-323 | ~100 |
| 1-324 | ~100 |
| 1-325 | ~100 |
| 1-326 | ~100 |
| 1-327 | ~100 |
| 1-328 | ~100 |
| 1-329 | ~100 |
| 1-330 | ~100 |
| 1-331 | ~100 |
| 1-332 | ~100 |
| 1-333 | ~100 |
| 1-334 | ~100 |
| 1-335 | ~100 |
| 1-336 | ~100 |
| 1-337 | ~100 |
| 1-338 | ~100 |
| 1-339 | ~100 |
| 1-340 | ~100 |
| 1-341 | ~100 |
| 1-342 | ~100 |
| 1-343 | ~100 |
| 1-344 | ~100 |
| 1-345 | ~100 |
| 1-346 | ~100 |
| 1-347 | ~100 |
| 1-348 | ~100 |
| 1-349 | ~100 |
| 1-350 | ~100 |
| 1-351 | ~100 |
| 1-352 | ~100 |
| 1-353 | ~100 |
| 1-354 | ~100 |
| 1-355 | ~100 |
| 1-356 | ~100 |
| 1-357 | ~100 |
| 1-358 | ~100 |
| 1-359 | ~100 |
| 1-360 | ~100 |
| 1-361 | ~100 |
| 1-362 | ~100 |
| 1-363 | ~100 |
| 1-364 | ~100 |
| 1-365 | ~100 |
| 1-366 | ~100 |
| 1-367 | ~100 |
| 1-368 | ~100 |
| 1-369 | ~100 |
| 1-370 | ~100 |
| 1-371 | ~100 |
| 1-372 | ~100 |
| 1-373 | ~100 |
| 1-374 | ~100 |
| 1-375 | ~100 |
| 1-376 | ~100 |
| 1-377 | ~100 |
| 1-378 | ~100 |
| 1-379 | ~100 |
| 1-380 | ~100 |
| 1-381 | ~100 |
| 1-382 | ~100 |
| 1-383 | ~100 |
| 1-384 | ~100 |
| 1-385 | ~100 |
| 1-386 | ~100 |
| 1-387 | ~100 |
| 1-388 | ~100 |
| 1-389 | ~100 |
| 1-390 | ~100 |
| 1-391 | ~100 |
| 1-392 | ~100 |
| 1-393 | ~100 |
| 1-394 | ~100 |
| 1-395 | ~100 |
| 1-396 | ~100 |
| 1-397 | ~100 |
| 1-398 | ~100 |
| 1-399 | ~100 |
| 1-400 | ~100 |
| 1-401 | ~100 |
| 1-402 | ~100 |
| 1-403 | ~100 |
| 1-404 | ~100 |
| 1-405 | ~100 |
| 1-406 | ~100 |
| 1-407 | ~100 |
| 1-408 | ~100 |
| 1-409 | ~100 |
| 1-410 | ~100 |
| 1-411 | ~100 |
| 1-412 | ~100 |
| 1-413 | ~100 |
| 1-414 | ~100 |
| 1-415 | ~100 |
| 1-416 | ~100 |
| 1-417 | ~100 |
| 1-418 | ~100 |
| 1-419 | ~100 |
| 1-420 | ~100 |
| 1-421 | ~100 |
| 1-422 | ~100 |
| 1-423 | ~100 |
| 1-424 | ~100 |
| 1-425 | ~100 |
| 1-426 | ~100 |
| 1-427 | ~100 |
| 1-428 | ~100 |
| 1-429 | ~100 |
| 1-430 | ~100 |
| 1-431 | ~100 |
| 1-432 | ~100 |
| 1-433 | ~100 |
| 1-434 | ~100 |
| 1-435 | ~100 |
| 1-436 | ~100 |
| 1-437 | ~100 |
| 1-438 | ~100 |
| 1-439 | ~100 |
| 1-440 | ~100 |
| 1-441 | ~100 |
| 1-442 | ~100 |
| 1-443 | ~100 |
| 1-444 | ~100 |
| 1-445 | ~100 |
| 1-446 | ~100 |
| 1-447 | ~100 |
| 1-448 | ~100 |
| 1-449 | ~100 |
| 1-450 | ~100 |
| 1-451 | ~100 |
| 1-452 | ~100 |
| 1-453 | ~100 |
| 1-454 | ~100 |
| 1-455 | ~100 |
| 1-456 | ~100 |
| 1-457 | ~100 |
| 1-458 | ~100 |
| 1-459 | ~100 |
| 1-460 | ~100 |
| 1-461 | ~100 |
| 1-462 | ~100 |
| 1-463 | ~100 |
| 1-464 | ~100 |
| 1-465 | ~100 |
| 1-466 | ~100 |
| 1-467 | ~100 |
| 1-468 | ~100 |
| 1-469 | ~100 |
| 1-470 | ~100 |
| 1-471 | ~100 |
| 1-472 | ~100 |
| 1-473 | ~100 |
| 1-474 | ~100 |
| 1-475 | ~100 |
| 1-476 | ~100 |
| 1-477 | ~100 |
| 1-478 | ~100 |
| 1-479 | ~100 |
| 1-480 | ~100 |
| 1-481 | ~100 |
| 1-482 | ~100 |
| 1-483 | ~100 |
| 1-484 | ~100 |
| 1-485 | ~100 |
| 1-486 | ~100 |
| 1-487 | ~100 |
| 1-488 | ~100 |
| 1-489 | ~100 |
| 1-490 | ~100 |
| 1-491 | ~100 |
| 1-492 | ~100 |
| 1-493 | ~100 |
| 1-494 | ~100 |
| 1-495 | ~100 |
| 1-496 | ~100 |
| 1-497 | ~100 |
| 1-498 | ~100 |
| 1-499 | ~100 |
| 1-500 | ~100 |
| 1-501 | ~100 |
| 1-502 | ~100 |
| 1-503 | ~100 |
| 1-504 | ~100 |
| 1-505 | ~100 |
| 1-506 | ~100 |
| 1-507 | ~100 |
| 1-508 | ~100 |
| 1-509 | ~100 |
| 1-510 | ~100 |
| 1-511 | ~100 |
| 1-512 | ~100 |
| 1-513 | |

第7圖 中在宮南遺跡第3次調查區東壁斷面圖



P 14

| 上層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|-------|-------------|--------|----------------------------|
| 1 | 10YR2/1 黒褐色 | 粘土質シルト | Hc 黑褐色土をブロック状に含む、底面に炭化鉄鉱析出 |

ピット観察表

| ピットNo. | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 掘方形状 | 円形 | 椭円形 | 円形 | 円形 | 椭丸形 | 不整形 |
| 掘方規模 | 52×52cm | 38×66cm | 24×29cm | 27×29cm | 21×22cm | 35×31cm |
| 深さ | 25cm | 6cm | 13cm | 28cm | 14cm | 4cm |
| 柱洞形状 | 柱状 | 柱状 | 柱状 | 柱状 | 柱状 | 柱状 |
| 柱洞規模 | | | | | | |

| ピットNo. | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 | P 11 | P 12 |
|--------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|
| 掘方形状 | 椭丸形 | 円形 | 円形 | 円形 | 円形 | 椭円形 |
| 掘方規模 | 30×36cm | 23×21cm | 25×30cm | 27×21cm | 21×31cm | 23×28cm |
| 深さ | 7cm | 27cm | 25cm | 19cm | 4cm | 4cm |
| 柱洞形状 | | 円形 | 円? | | | |
| 柱洞規模 | 11×9cm | (9×12cm) | | | | |

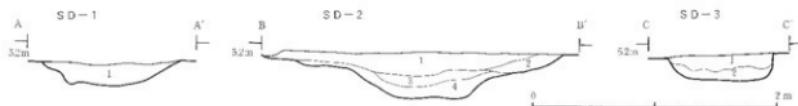
| ピットNo. | P 13 | P 14 | P 15 |
|--------|-----------|---------|---------|
| 掘方形状 | 円形 | 円形 | 円形 |
| 掘方規模 | (20)×24cm | 21×23cm | 16×10cm |
| 深さ | 31cm | 39cm | 39cm |
| 柱洞形状 | | | |
| 柱洞規模 | | | |

第8図 SB-1 掘立柱建物跡

ピット土層注記表

| ピットNo. | 上色 | 下色 | 備考 |
|--------|---------------|--------|--------------------------|
| 1 | 10YR4/1 黒褐色 | シント黄土 | 淡褐色～黒褐色～カブリックを含む |
| 2 | 10YR2/1 黑褐色 | シント黄土 | 淡青色～淡青色～シント黄土の入りブロックの混在部 |
| 3 | 10YR4/2 淡青褐色 | シント黄土 | 淡褐色～淡青色～カブリックを多量に含む |
| 4 | 10YR2/2 黑褐色 | シント黄土 | 淡褐色～カブリックを少量化 |
| 5 | 10Y7/4/1 黑褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリックを多く含む |
| 6 | 10Y7/3/1 黑褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリックを多量に含む |
| 7 | 10Y7/3/1 黑褐色 | 新粘土シルト | 淡褐色～灰褐色～泥化部 |
| 8 | 10Y7/2/2 淡青褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリックを多量に含む |
| 柱洞跡 | 10Y3/2/2 灰褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～灰褐色～泥化部 |

| ピットNo. | 上色 | 下色 | 備考 |
|--------|--------------|--------|----------------------|
| 9 | 10YR3/2 黑褐色 | 粘土質シルト | 堅土～及び黄褐色上のカブリックを多く含む |
| 10 | 10YR4/2 淡青褐色 | シント黄土 | 淡褐色～灰褐色～カブリック状に含む |
| 11 | 10YR3/2 黑褐色 | シント黄土 | 淡褐色～シント黄土の小ブロックを多量含む |
| 12 | 10YR4/2 淡青褐色 | シント黄土 | 淡褐色～カブリックを少量化 |
| 13 | 10YR2/1 黑褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリック状に含む |
| 14 | 10YR2/1 黑褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリック状に含む |
| 15 | 10YR3/2 淡青褐色 | 透青色シルト | 淡褐色～カブリック状に含む |



| SD-1 | 上色 | 下色 | 備考 |
|------|-------------|-------|--------------------------|
| 1 | 10YR2/2 黑褐色 | シント黄土 | こいの葉状の斜柱状シルトのブロックをまばらに含む |

| SD-3 | 上色 | 下色 | 備考 |
|------|-------------|-------|-----------------------|
| 1 | 10YR3/1 黑褐色 | シント黄土 | 透青色シルトをブロック状に含む |
| 2 | 10YR3/1 黑褐色 | シント黄土 | 透青色シルト～黄褐色とのブロック状の混合層 |

| SD-2 | 上色 | 下色 | 備考 |
|------|--------------|---------|--------------------|
| 1 | 10YR3/1 黑褐色 | シルト～灰動土 | 上部に炭化鉄が析出する |
| 2 | 10YR2/1 黄色 | 粘土 | 地質の十種で崩岸上間に分布 |
| 3 | 10YR2/1 黑褐色 | シルト質粘土 | に多い透青色土の小ブロックを多量含む |
| 4 | 10YR3/2 淡青褐色 | 粘土質シルト | 堅土～を傾斜状に含む |

第9図 溝跡断面図

れた部分の幅は、東壁付近で約5m程度である。検出面から調査した河川跡最深部までの深さは、南東角付近で約70cmである。河川跡底面には達しておらず、第1次調査の結果から、河川跡の深さの三分の一程度まで調査が行われたものと推定される。検出された河岸部は、16層が河岸面となっており、傾斜角度は12~13°で、比較的緩やかな斜面となっている。河岸面には、部分的に大小の凹凸が認められる。



| 番号 | | 登録番号 | 出上区 | 地本所 | 出上遺物 | 遺物量 | 取上番号 | 種別 | 説明 | 鉢形 | 径 | 厚さ | 口徑 | 底形 | 底径 | (外) 厚 | 内 | 材 | 内 | 面 | 保存状 |
|----|-----|------|-----|------|------|-----|------|-----|----|-------|--------|-------|---------|----|------------|-----------|----|----|------|---|-----|
| 1 | C-5 | 3次 | | SD-1 | 埋土 | | | 十脚形 | 表 | 16.9 | 22 | | | | ヨコナデ・ハゲメ | ヨコナデ・ハナナデ | 28 | 1 | | | |
| 2 | B-1 | 3次 | | SD-2 | 埋土 | | | 十脚形 | 裏 | | | | | | 平行走溝文 | | 27 | - | | | |
| 3 | D-1 | 3次 | | SD-2 | 埋土上部 | | | 十脚形 | 表 | 44 | (13.6) | (6.0) | 底部倒鉤毛切口 | | ヨコナデ・ハナナデ | ヘラミガキ | 28 | 7 | | | |
| 4 | C-4 | 3次 | | SD-2 | 埋土下部 | | | 十脚形 | 底 | 3.0 | (14.2) | | - | | ヨコナデ・ハナナデ | ナダ | 27 | 11 | | | |
| 5 | C-1 | 3次 | | SD-2 | 埋土上部 | | | 上脚器 | 牙 | (4.4) | 13.4 | | - | | ヨコナデ・ヘラケズリ | | | | | | |
| 6 | C-2 | 3次 | | SD-2 | 埋土下部 | | | 上脚器 | 体 | 3.9 | (11.8) | | - | | ヘラケズリ | ヨコナデ | 27 | 9 | | | |
| 7 | C-3 | 3次 | | SD-2 | 埋土下部 | | | 十脚形 | 环 | 4.7 | (13.8) | | - | | ヘラケズリ | ヨコナデ | 27 | 10 | 樹脂付着 | | |

| 番号 | | 登録番号 | 出上区 | 地本所 | 出上遺物 | 遺物量 | 取上番号 | 種別 | 説明 | 鉢形 | 径 | 厚さ | 重さ | 特 | 微 | 等 | 内 | 面 | 保存版 |
|----|-----|------|-----|------|------|-----|------|--------|-------|------|-----|-------|-------|----|---|----|----|----|-----|
| 8 | K-2 | 3次 | | SD-2 | 埋土 | | | 石器・礫石? | (6.5) | 5.3 | 4.3 | 216.9 | 凝灰岩 | | | 29 | 1 | | |
| 9 | K-1 | 3次 | | SD-2 | 埋土下部 | | | 瓶石 | | 13.5 | 5.9 | 32 | 293.3 | 砂岩 | | | 28 | 11 | |

第10図 第3次調査区清跡出土遺物

検出された河川跡は、上記のように河岸上部にあたるため、第1次調査における基本層位と整合する部分と欠落している部分がある。第1次調査の基本層位と対比しながら、本区の河川跡の基本層位を見ると、次ぎのとおりである。(以下、本調査区に存在する層は太字、存在しない基本層は網目)

2 層 河川跡に形成された近世の水田耕作七層であるが、近・現代の水田耕作による削平を受け、本調査区には残存していない。

3 a 層 黒褐色の粘土層で、層厚は南部で20cm前後あり、底面の凹凸が著しく、深いところでは9層まで攪拌が達している。層下部には灰白色火山灰(4層)のブロックを多く含んでいる。中世頃の水田耕作上層。

3 b 層 本調査区では、3 a 層水田跡の耕作土の母材として起耕されたために残存していないが、3 a 層の下部に3 b 層が起源と考えられる黒色粘土のブロックが含まれている。第1次調査では、3 b 層から8層までは平安時代の堆積層と位置付けられている。

4 層 通称「灰白色火山灰」と呼ばれる火山灰の自然堆積である。この火山灰は、「十和田a」火山灰にあた

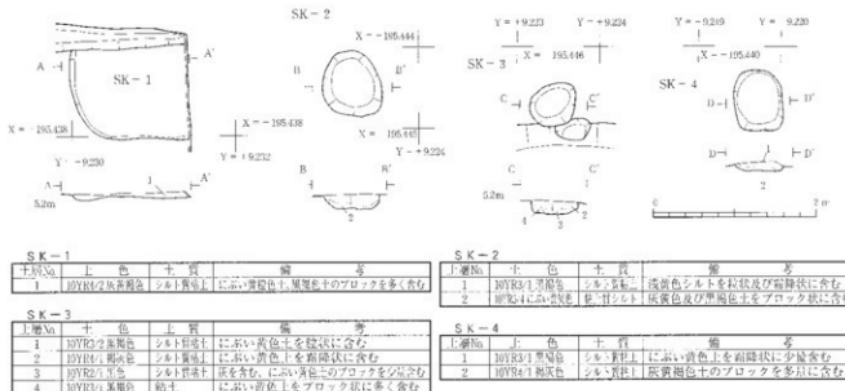
第2節 河川跡の堆積土と出土遺物

り、降下年代は西暦915年初夏とされている堆積層である。3 b 層同様に、3 a 層水田跡のために残存していないが、3 a 層の下部にブロック状に含まれている。

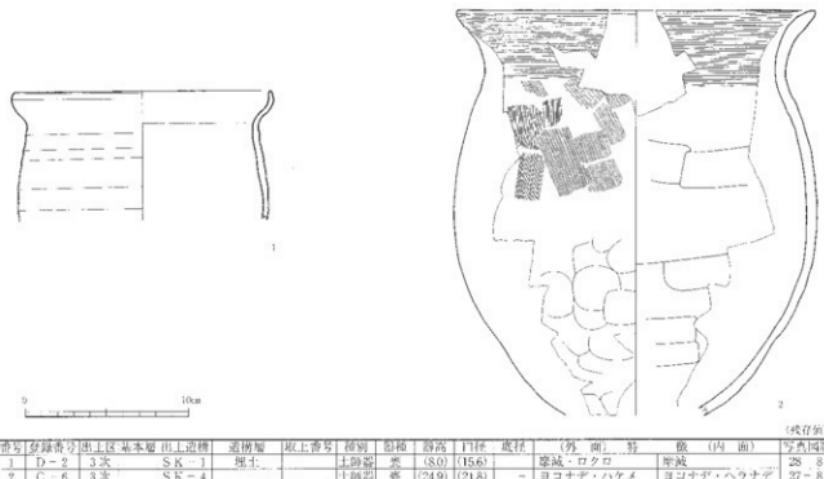
5 層 黒色の泥炭質土壤を基調としているが、本調査区には分布していない。

6 層 河川中央付近では、暗褐色ないし黒褐色の泥炭質土壤を基調として厚く堆積するが、本調査区は、河川跡の岸面上部にあたるため、黒褐色の粘土層として5 cm前後の厚さで南端部分で検出された。

7-8 層 本調査区の河川跡では、前記のとおり河岸上部にあたるために、両層に相当する堆積層は検出されなかつた。

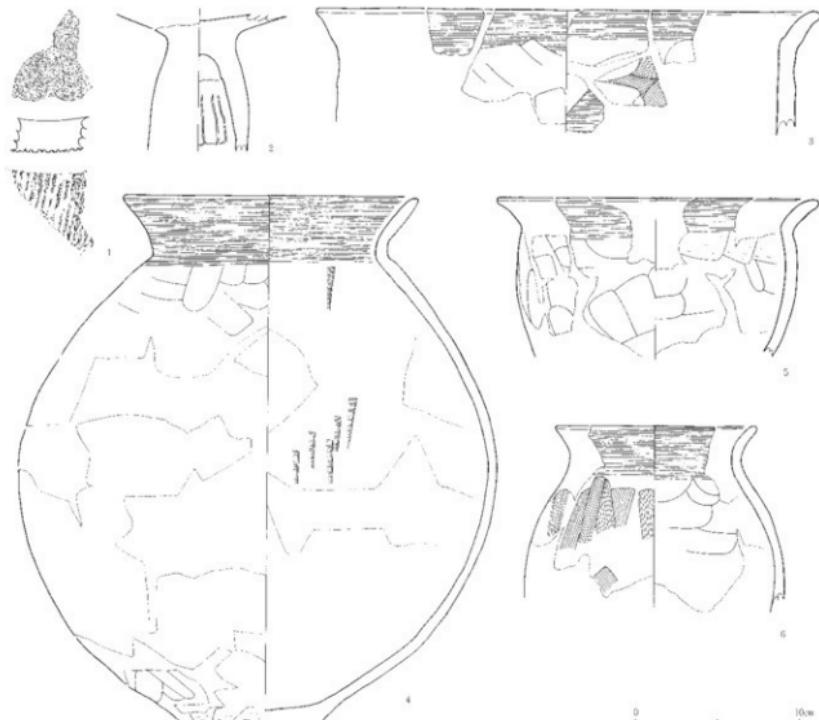


第11図 土坑実測図



第12図 第3次調査土坑出土遺物

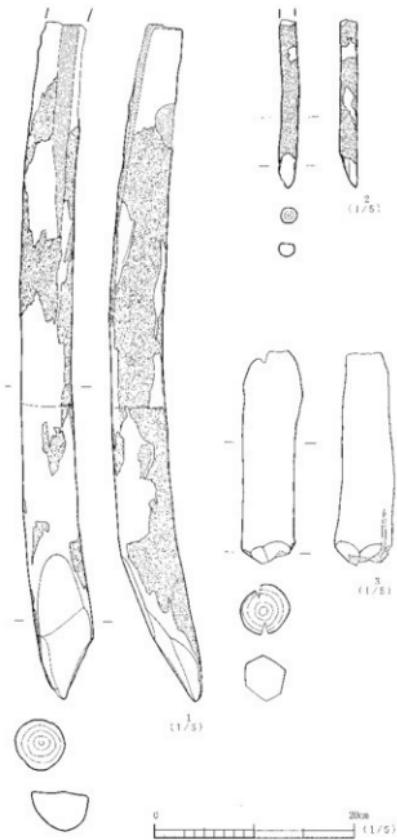
- 9 層 9層対応層は、調査区南部では20cm前後あり、3層に細分された。黒褐色の粘土層を木分解の植物遺体を含む黒色の粘土層が挟むように堆積している。第1次調査における9層の年代については、9層上部は古墳時代後期(佐社式期)頃、9層中～下部は古墳時代中期(南小泉式期)頃に位置付けられている。
- 10 層 9層と比べるとやや明るい粘土層を指標とする。本調査区では黒色の粘土層として比較的広く分布している。層厚は10cm前後である。10・11層は古墳時代中期(南小泉式期)頃に位置付けられている。
- 11 層 黒色の粘土層を指標とするしているが、本調査区では当該層は検出されなかった。
- 12 層 オリーブ色の粘土や、樹木片を初めとする植物遺体を多量に含む層であるが、本調査区では植物遺体や流木を含む黒褐色粘土層として、河川跡南部で部分的に検出されただけである。12・13層は古墳時代前期(埴釜式期)に位置付けられている。



| 層別 | 発見番号 | 出土区 | 基本剖 | 出土遺構 | 着信期 | 出土各分 | 種別 | 器種 | 最高 | 口径 | 底径 | (外)面 | 特 | 發 | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|------|------|-------|--------|--------|-----|--------------|-----------|------|------|------|
| 3 | G-1 | 3次 | SR-1 | 3層 | 瓦 | | | | 2.0 | | | | | | 28-9 |
| 2 | C-10 | 3次 | SR-1 | 9層 | 土器部 | 窓 | 18.7 | - | 6.0 | | | | | | 28-2 |
| 3 | C-9 | 3次 | SR-1 | 9層 | 土器部 | 窓 | (7.5) | (30.4) | - | | | ヨコナデ・ヘラナダ | | 28-6 | |
| 4 | C-11 | 3次 | SR-1 | 9層 | No.2 | 土器部 | 窓 | 32.6 | 18.0 | 8.0 | ヨコナデ・ナデ・ヘラナダ | ヨコナデ・ヘラナダ | 28-4 | | |
| 5 | C-7 | 3次 | SR-1 | 9層 | No.1 | 土器部 | 窓 | (9.7) | (19.6) | - | ヨコナデ・ヘラナダ | ヨコナデ・ヘラナダ | 28-2 | | |
| 6 | C-8 | 3次 | SR-1 | 9層 | No.3 | 土器部 | 窓 | (11.4) | (12.2) | - | ヨコナデ・ハケメ | ヨコナデ・ヘラナダ | 28-3 | | |

第13図 第3次調査区河川跡3層～9層出土遺物

- 13 層 オリーブ黒色を基調とする粘土層であるが、本調査区には分布していない。
- 14 層 砂と樹木片などの植物遺体を多く含む黒色の堆積層を基調とする。本調査区では、砂は含まれていないが、対応すると考えられる黒色の泥炭質粘土層が河川跡の南端付近に部分的に分布する。第1次調査では、14・15層は弥生時代中期中頃（楔形印式期）に位置付けられている。
- 15 層 植物遺体を多量に含むオリーブ黒色の粘土層を基調とするが、本調査区では黒色の粘土層として分布し、16層起源の浅黄色土を含んでいる。



2 主な層の状況と出土遺物

中在家南遺跡第3次調査区の河川跡は、河岸上部の調査であったために、第1次調査における河川跡のように木製品を主とする多くの遺物は出土していない。

① 3層出土遺物

3層からは、ロクロ土師器・非ロクロ土師器・須恵器・瓦などの細片が多数出土している。土師器は焼滅が著しい。遺構の時期と直接関るものではなく、自然堤防部からの流入と耕作による下層からの巻き上げにより同層に混入したものと考えられる。

② 6層出土遺物

6層からは非ロクロ土師器とみられる土器片が1点出土しているだけである。

③ 9層出土遺物

9層では、河岸上部の9c層に相当する部分から、非ロクロ土師器が3点（第13図4・5・6：C-7・8、C-11）潰れた状態で接近して出土した（図版3-2・3）。C-7・8は2個体がまとまって出土した（図版3-3手前）が、保存状態は悪く、体部下半は欠損している。C-11は潰れた状態であるが、ほぼ1個体分の破片が出土している（図版3-2）。

C-7は、体部径より口径の大きな壺で、口縁は厚く、強く外反している。体部内外面はヘラナデ調整、口縁部はヨコナデ調整されている。

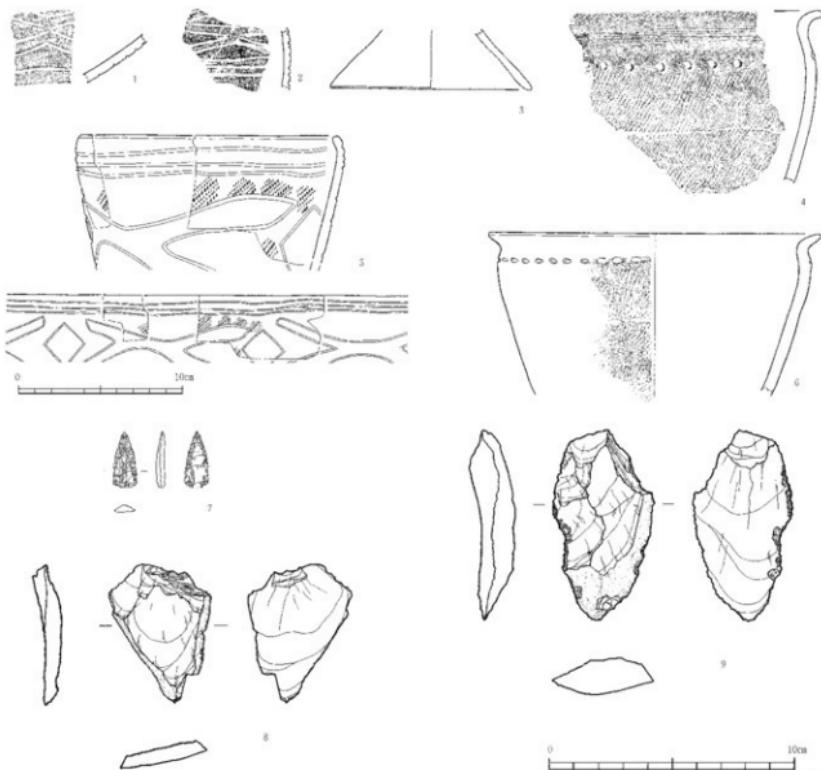
C-8は、体部が球形に近い脛らみを持つ壺で、厚みのある口縁部は、緩やかに外反している。体部は外面がハケメ調整、内面がヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデ調整されている。

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物層 | 取扱番号 | 種別 | 部種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 樹種 | 木取り | 写真図版 |
|----|------|-----|-----|------|-----|------|------|----|------|-----|-----|-----------|---|-----|------|------|
| 1 | L-3 | 3次 | — | SR-1 | 9層 | No.1 | 残・丸底 | 丸底 | 69.0 | 5.8 | 5.8 | 先端加工、2面2段 | 1 | 花狩丸 | 29-7 | |
| 2 | L-1 | 3次 | — | SR-1 | 16層 | No.1 | 残・丸底 | 丸底 | 17.3 | 1.7 | 1.7 | 先端加工、1面1段 | 1 | 芯狩丸 | 29-5 | |
| 3 | L-2 | 3次 | — | SR-1 | 16層 | No.2 | 残・丸底 | 丸底 | 21.8 | 5.9 | 5.8 | 先端加工、6面2段 | 1 | 芯狩丸 | 29-6 | |

第14図 第3次調査区河川跡出土杭

C-11は、体部が均整のとれた球形の壺で、口縁部は外反している。体部は外面が主にナデ調整、内面がヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデ調整されている。

9層からは、このほかに体部が直立気味に立ち、口縁部が短く外傾する壺の破片（第13図3：C-9）や、筒部の中央が膨らむ高杯脚部破片（第13図2：C-10）のほか、多数の上部器と数点の赤土器片が出土している。圓化した土師器については、中在家南遺跡第1次調査の9b・9c層出土土師器の考察結果と同様に、南小泉式期の範囲に位置付けることが可能と思われる。



| 番号 | 登録番号 | 出土地點 | 遺物種類 | 取上番号 | 種別 | 直径 | 器高 | 口径 | 底径 | (外側) | 特 | 縁(内側) | 写真回数 |
|----|------|------|------|------|----|-------|----|--------|------|-------------|-------|-------|------|
| 1 | B-2 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | | | 縦波文・植物茎回転文 | ハラミガキ | | 27-2 |
| 2 | B-5 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | | | 縦波文 | ハラミガキ | | 27-3 |
| 3 | B-4 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | | | 縦波文 | ハラミガキ | | 27-4 |
| 4 | B-6 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | | | 口部縦槽文・列点文 | | | 27-6 |
| 5 | B-3 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | (7.9) | 15.8 | 列点文・質物文・五字文 | | | 27-9 |
| 6 | B-7 | 3次 | SR-1 | 15層 | 筒 | 約17cm | 底坏 | (10.0) | 10.4 | 質物文 | ハラミガキ | | 27-2 |

| 番号 | 登録番号 | 出土地點 | 遺物種類 | 取上番号 | 種別 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 特 | 微 | 写真回数 |
|----|------|------|------|------|-------|-----|-----|-----|------|------|-------|------|
| 7 | K-3 | 3次 | SR-1 | 15層 | 石器・石頭 | 2.3 | 1.0 | 0.4 | 0.7 | 朱灰相、 | 球化凝灰岩 | 29-3 |
| 8 | K-5 | 3次 | SR-1 | 15層 | 石器・石頭 | 5.4 | 4.3 | 0.9 | 16.2 | | 球化凝灰岩 | 29-4 |
| 9 | K-4 | 3次 | SR-1 | 15層 | 石器・石頭 | 7.7 | 4.1 | 1.5 | 38.7 | | 凝灰岩 | 29-2 |

第15図 第3次調査出土遺物

土師器の他には、9層で杭が1点（第6図）検出されている。現存長が69cmの樹皮付の丸杭で、先端は2面から2段の加工がされて、銳角的に尖っている（第14図1：L-3）。打ち込み面は不明である。

④ 10層出土遺物

10層は、土層の分布状態に比較して遺物は少なく、土師器及び弥生土器片が少數出土しているだけである。國化した遺物はない。

⑤ 15層出土遺物

15層からは、弥生土器片と石器が比較的多く出土している（第15図）。弥生土器には、肩部に張りをもち口縁部が強く外反する粗製の甌（B-6・7）、体部から口縁部まで直立ぎみに外傾して立ちあがり、口縁部がわずかに内湾する鉢（B-3）、肩波文（連弧文または連続山形文、赤澤靖章：1996「中在家南遺跡出土の弥生土器について」『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集）の付された小型鉢（B-5）、同じく肩波文の付された高杯の杯部の破片（B-2）、無文の蓋（B-4）などがある。B-2・4・5・6・7については、中在家南遺跡第1次調査のⅦ・Ⅷ区出土の14・15層の弥生土器に類例が求められ、弥生時代中期中葉の舟形圓式に位置付けられる。

B-3の鉢は、鉢としては大きいが、底などの含めると小型の部類に属するにもかかわらず、文様帶の幅は比較的広く、大きな割付によって菱形文とX字文が交互に各2単位描かれている。文様を描く沈線の幅もB-2・5をはじめ第1次調査のⅦ・Ⅷ区出土の舟形圓式土器に比べるとやや広い。このような模様の鉢については、前回の調査資料には類例がなく、他の14・15層出土土器と同様に舟形圓式土器の範疇で考えられるものか、模様の幅が広く単位が大きいこと、沈線がやや太いことなど古相の特徴を持つことから他の土器と区別して考えるべきか検討をする。

石器は、石鎚1点（K-3）、スクレイパー1点（K-4）、微細剥離痕のある剥片（K-5）のほか、剥片が8点出土している。

⑥ 16層上面検出杭

河川跡（堆積土新層）底面にあたる16層上面において、2本の杭（第6図・第14図2・3：L-1・2）が検出された。L-1は直径1.7cm、現存長17.3cmの細い丸杭である。先端には1面から1段の加工がなされて尖っている。L-2は、直径3.8cmの丸杭である。先端には規則的に6方向から各1段の加工が施されているが、先端面は鈍角である。打ち込み層位は不明である。

第3章 中在家南遺跡第4次調査の概要

第1節 発見遺構の概要と基本層位

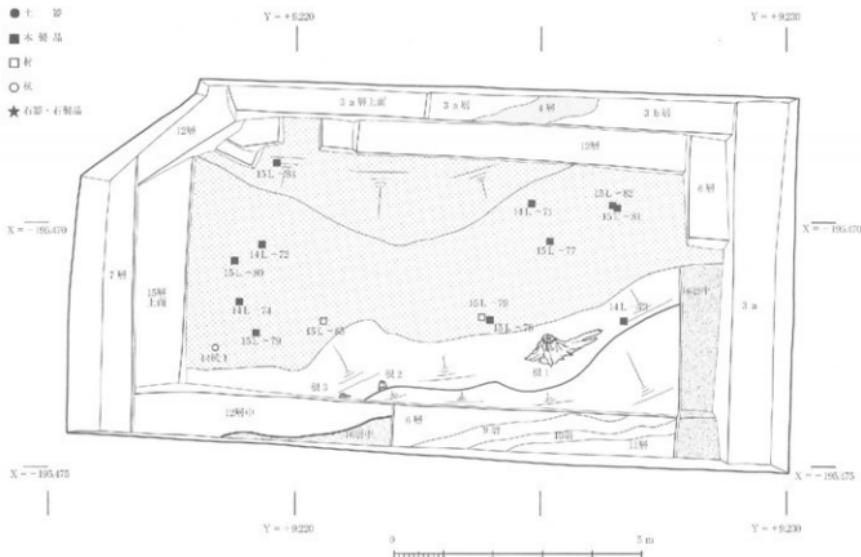
1 第4次調査区の位置

第4次調査区は、中在家南遺跡の中央よりやや東側に位置する。区画整理以前の標高は、4.9m前後で、水田に盛土をして掘とされていた。他の調査区との関係は、第1次調査I区南部の東側、VI区西部の南側にある。また、VI区を挟んで第3次調査区の南側にある。第4次調査区のほぼ全体が、I区・VI区で検出された河川跡の南半部の中に入っている。(第5図)

第1次調査II区・VI区の河川跡においては、2層で近世頃の水田の畦畔痕跡が、3a層で中世の水田跡の畦畔痕跡と杭列を伴う水路跡が検出されている。また3a層以下の河川跡堆積層中から木製品等の多数の遺物が出土している。

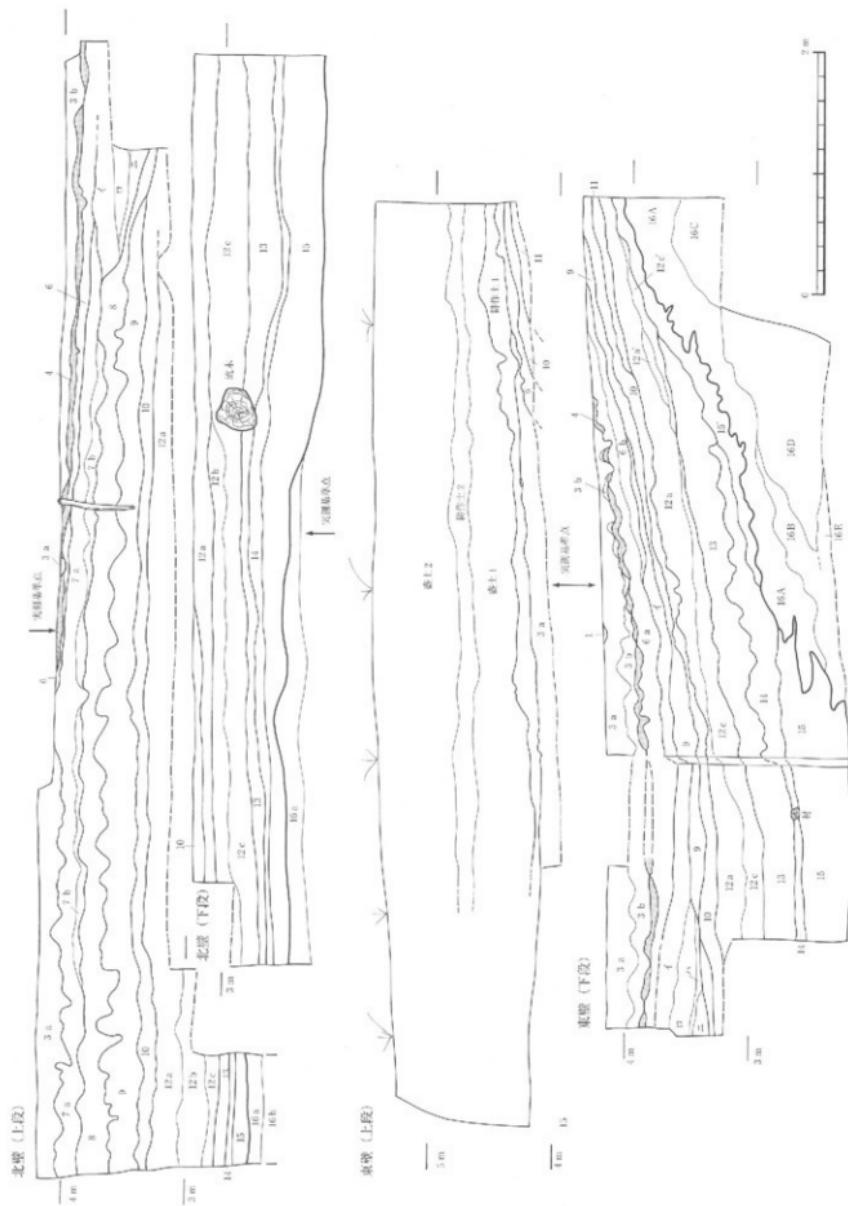
2 発見遺構の概要

前記のとおり、第4次調査区は河川跡(SR-1)内に位置する調査区であり、河川跡の南岸下半部から河川跡底面南半部が検出された。河川跡の堆積土で検出された遺構としては、3a層を耕作土とする水田跡がある。また、杭が何本かあるが、これについては、杭の検出された各河川跡堆積土層の概要と併せて記述する。



第16図 中在家南遺跡第4次調査区平面図及び14層・15層遺物出土位置図

第1節 発見遺構の概要と基本層位



第17図 中在家南道路第4次調査区断面図

第17回土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 箇名 | 上層No. | 上色 | 土質 | 備考 |
|-----|--------------|--------|--------------------------|-------|--------------|--------|-------------------------|
| 底土 | 10YR1/1 黒褐色 | シルト | 5面土・塊を含むブロックを含む、上面に疊合を含む | 11 | 10YR2/1 黑色 | 泥炭質粘土 | 南北岸部にのみ分布 |
| 耕作土 | 10YR4/1 青灰色 | シルト | 底土の後の耕作土（埴土） | 12a | 10YR2/2 灰褐色 | 粘土 | 未分離の植物遺体（草木類）を多く含む |
| 底土 | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 底土のブロックを多く含む、ブロック状の土層 | 12a' | 10YR3/2 黑色 | 泥炭 | |
| 耕作土 | 10YR1/1 黄褐色 | シルト質粘土 | 底土質耕作土 | 12b | 10YR2/2 灰褐色 | 粘土 | 黄褐色土粒を多く含む |
| 3 a | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 底土と同様の土粒を含む | 12c | 10YR2/2 黑色 | 粘土 | 未分離の植物遺体を多く含む |
| 3 b | 10YR2/2 黑褐色 | 泥炭質粘土 | 一部に砂礫の混在を含む | 12c' | 10YR3/2 黑色 | 泥炭 | |
| 4 | 10YR2/2 灰白色 | 火山灰 | いわゆる「灰白色火山灰」（1915年噴下） | 13 | 25Y3/2 灰褐色 | 後成土質粘土 | 粘土・シルト・砂・砂利を含む、砂利・シルト・砂 |
| 6 a | 7.5YB2/2 黑褐色 | 泥炭質粘土 | 黒色の星雲状の構造を含む | 14 | 5Y3/2 灰褐色 | 粘土 | 植物遺体を含む、層の下部に砂を多く含む |
| 6 b | 10YR3/2 黑褐色 | 粘土 | 未分離の植物遺体を多く含む | 15 | 5Y3/2 灰褐色 | 粘土 | 木片を含むに含む |
| 7 a | 5Y3/2 オーバー色 | 粘土 | 黒色土粒・1色土粒を少々含む | 15' | 10Y3/2 オーバー色 | 砂質粘土 | 植物遺体を少少含む |
| 7 b | 3Y3/2 黑褐色 | 粘土 | しまりなく風化弱い | 16 a | 25Y3/2 黑褐色 | 粘土 | 砂を少々含む |
| 8 | 2.5Y3/1 黑褐色 | 泥炭質粘土 | 未分離の植物遺体を多く含む | 16 b | 10G3/1 黑褐色 | 堆砂 | 小粒（粒径：3 cm）を含む、自然石を含む |
| 9 a | 10YR2/2 黑褐色 | 泥炭質粘土 | | 16 A | 25Y3/2 黑褐色 | 砂 | |
| 9 b | 10YR2/2 黑褐色 | 粘土 | 未分離の植物遺体を多く含む | 16 B | 75Y3/1 黑褐色 | 砂 | 同色の粘土をまばらに含む |
| 10 | 10YR1/1 海色 | 粘土 | 南北部は黒色の濃度に変化 | 16 C | 30Y3/1 オーバー色 | 粘土 | 砂を少々含む |
| | 10YR2/2 黑褐色 | 粘土 | 未分離の植物遺体を少々含む | 16 D | 10Y3/2 黑褐色 | 堆砂 | |
| | 10YR2/2 黑褐色 | 粘土 | | 16 E | 5Y3/2 オーバー色 | 粘土 | 風化物質を少少含む |

1) 河川跡の状況

本調査区は、1次調査VI区からVI区にかけて東西方向に流れる、推定幅約25mの河川跡の中央から南岸にあたり、表土を除去した段階で、河川跡の堆積土が検出された。調査は、調査区内外を段階段に掘り下げて、河川跡（河川堆積土新層）の底面を検出するまで行った。（第16図）その結果、調査区の南岸側で河川堆積土占層（河川跡堆積土下部=16層）を壁面とする河川跡の南岸斜面と、河川跡底面の南半部が検出された。河川跡の検出面（3 a 層上面）から底面までの深さは約2 mである。

岸面の上端は、調査区南東角部では、河川跡検出面から約40cm 掘り下げた面で検出された。検出された岸面の上部1/3は12~13°の比較的緩やかな斜面であるが、下部2/3は20°前後のやや急な斜面に変化する。

底面は、小砾を含む粗砂層で、湧水がある。調査区の北側の底面は砂層が十数cm高くなっているが、II区・VI区の調査状況から推察すると、このまま河川跡北岸に立ち上がるのではなく、水流によって形成された河川跡底面の微起伏と判断される。河川跡南岸下端と、北側の底面の盛り上がり部分に挟まれた低地部分は幅が2~4 mある。なお、河川跡南岸斜面の中位に沿って、樹木の幹と根の境付近の遺存体が、生育していた当時の状況のまま検出されている（第16図図1~3）。

2) 3 a 層水田跡

盛上のうえ畠にされる以前の水田耕作土を除去すると、第18図及び図版7-2のような、河川跡の流路方向に一致して東西にのびる土層の帶が検出された。このうち調査区の北側に位置する3 a'1層は、ブロック状の堆積土で、層下部から3 b層及び4層の灰白色火山灰層が良好な保存状態で検出されることから、3 a層水田跡に伴う畦畔の盛り土の一部と考えられる。3 a'1層の幅は、36~73cmである。約10mにわたって検出されている。3 a'1層の両側には、分解度の低い上層（3 a'2層・3 a'3層）が平行して分布している。3 a'2層は、3 a層上部のように十分に擾拌されて均一な耕作土層になっていないことから、上部に畦畔が形成され、継続的に耕作の影響を受けていなかった可能性がある。したがって3 a層水田の畦畔は3 a'1層の幅よりも広く、3 a'2層の幅を含む広さの畦畔であった可能性が考えられる。また、3 a'3層については、第1次調査VI区の3 a層水田跡に伴う水路の延長線上に位置していることから、溝の堆積土の一部である可能性がある。

調査区南側の河岸部は、1層水田の耕作のため3 a層は残存しておらず、4層以下の土層の立ち上がりが平面的に検出された。この下層の分布ライン付近では、畦畔の存在を示す遺構・土層が検出されていない。したがってこのライン上に、3 a層水田の畦畔が存在したかどうかは明らかでない。

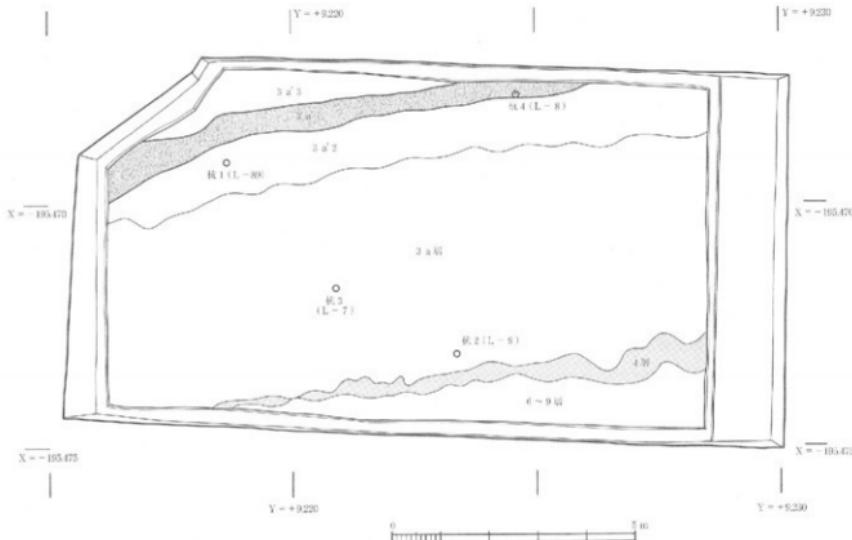
3 a 層上面では、3本の杭が検出されている。(第18図杭 1～3) 各杭は3.5～3mの間隔で直線的に並んでいるが、調査区北側で検出された畦畔痕跡の方向には直交せず、斜めになって分布している。打ち込み面も明らかでなく、3 a 層水田跡との関係も不明である。

3 a 層からは、多量の土器類・頸窓器片が出土しているが、3 a 層水田跡と直接関係すると考えられる遺物としては、無軸陶器の壺片(I-2・3)と施釉陶器の碗の破片(I-4)、及び中国青磁の碗の破片(J-2)がある。

I-2は常滑産の壺の体部片で外面には格子の叩きとナデの痕跡が認められる(第20図6)。I-3は、常滑産の壺口縁部の破片で、口縁端部が上下両方向に短く折れていることから14世紀前半頃のものと考えられる(図版32-10)。I-4は、瀬戸美濃産と考えられるの碗で、灰白色の胎土にわずかに白濁した釉薬が施され、釉薬には買入が認められる(図版32-12)。I-4については16～17世紀頃の製品と考えられる。16～17世紀という年代の遺物は、3 a 層出土遺物としてはこれまで出土した遺物の中では最も新しく、3 a 層水田跡の下限が中世末から近世初め頃になる可能性が考えられる。J-2は外面に蓮弁文の付された碗の破片で、13～14世紀代のものと考えられる(図版32-11)。

木製品は、火鑄臼(第21図2:L-5)の端部破片と、曲物の側板と考えられる薄い杁目板の破片(第21図4:L-9)が出土している。材には、側面に加工のある角材(第21図6:L-6)がある。

3 a 層検出の杭は、杭1が先端に1面多段の加工のある削杭、杭2が先端に5面多段の加工のある芯持ち丸杭、杭3(第21図10:L-7)が先端に3面多段の加工のある大型の角杭で、現存長199.8cm・幅17.3cm・厚さ11.2cmを測る。



| 土層No. | 上色 | 土質 | 備考 | 土層No. | 上色 | 土質 | 備考 |
|--------|-------------|----|--|-------|-------------|-------|------------------------|
| 3 a | 197R2/2 黒褐色 | 粘土 | 1層: 黒色粘土(火打)、2層: グリーン粘土(含む砂混在) | 3 a 2 | 197R17/1 黑色 | 泥炭質粘土 | 3 b 剥起後の基盤のブロックを多く含む |
| 3 a' 1 | 197R2/1 黒色 | 粘土 | 1層: 黑色粘土(火打)、2層: グリーン粘土(含む砂混在)、3層: 黄褐色粘土(火打)、4層: 黄褐色粘土(火打)、5層: 黄褐色粘土(火打) | 3 a 3 | 197R2/1 黑色 | 粘土 | 3 c 1cmの枝や木分析の植樹遺存を少含む |

第18図 河川跡 3層水田跡

第2節 河川跡の堆積土と出土遺物

1 河川跡の基本層位

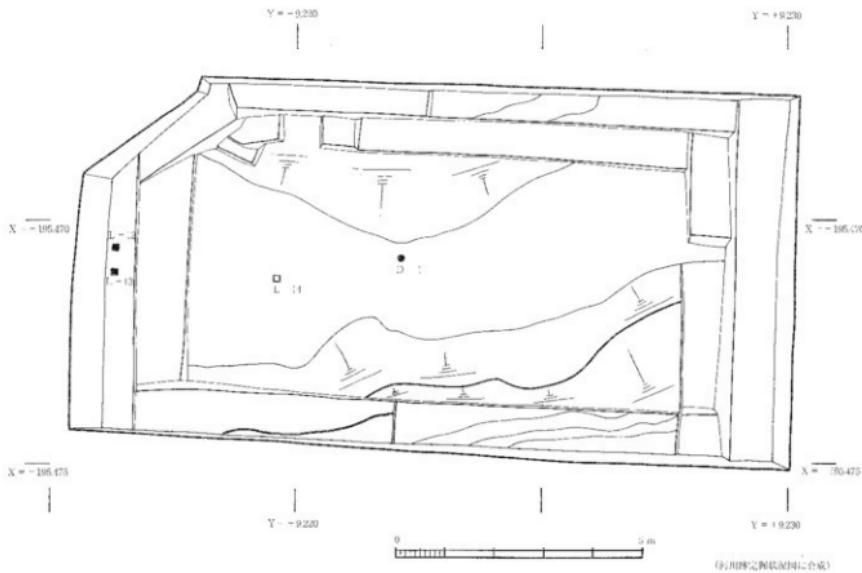
中在家南遺跡第4次調査区において検出された河川跡の、3a層水田耕作土層より下の堆積土（河川堆積土新層）は、前回の調査成果をもとに、3b層・4層・6a層・6b層・7a層・7b層・8層・9層・10層・11層・12a層・12b層・12c層・13層・14層・15層に分けられ、いくつかの層はさらに細分された（第17図）。7層と8層の間には、調査区東半の河川跡中央部分の凹地にだけ分布し、これまでの堆積層と対比できない層（第17図イ～ニ層）も確認された。河川跡の南側では16層（河川堆積土古層）が河岸面となっている。各層と出土遺物の概要は、次ぎのとおりである。

2 各層の堆積状況と出土遺物

1) 3b層と出土遺物

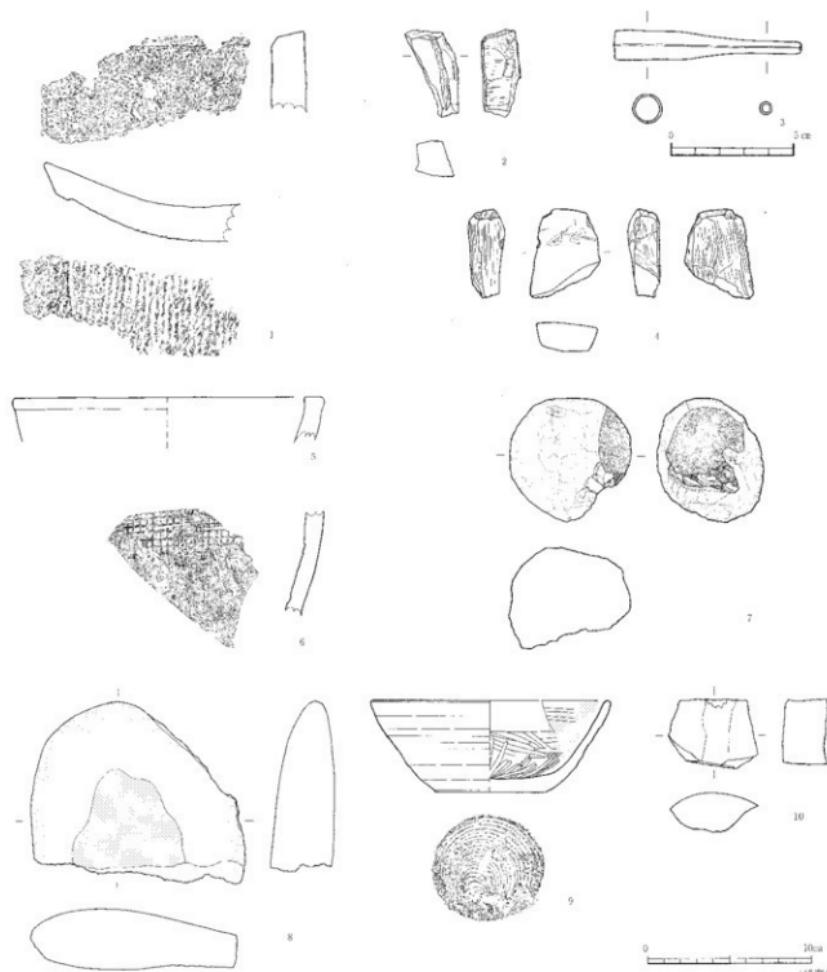
3b層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、部分的に暗褐色の泥炭を含む。層上部は3a層水田の耕作により削平を受けているが、河川跡の中央よりの部分では15cmほどの厚さで残っている。河岸上部に移行するにしたがって3a層水田の耕作の影響によって残存状況が悪くなっている。

出土遺物は、少量の土師器片と古代瓦1点の他、縁辺部が摩滅した板材（第21図3：L-11）などがある。これらの遺物と、3b層の堆積時期との直接の関係は不明である。



第19図 河川跡 6層遺物出土位置図

第2節 河川路の堆積土と出土遺物



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 直横幅 | 取上面形 | 種別・特徴 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 特 | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-----|------|-------|-------|--------|-----|-------|-------------|------|
| 1 | G-2 | 4次 | SR-1 | 1層 | | | 半瓦 | 5.4 | 2.3 | 1.8 | 35.2 | 凹面有り、凸面織印有り | 32-7 |
| 2 | K-7 | 4次 | SR-1 | 1層 | | | 砾石 | 7.6 | 1.2 | 0.8 | 10.3 | | 珪化砂岩 |
| 3 | N-1 | 4次 | SR-1 | 1層 | | | 焼管 | 7.6 | 1.2 | 0.8 | 10.3 | | 33-7 |
| 4 | K-6 | 4次 | SR-1 | 1層 | | | 砾石 | 5.4 | 3.8 | 1.9 | 51.1 | | 珪化砂岩 |
| 5 | I-1 | 4次 | SR-1 | 2層 | | | 陶器 | (2.7) | (18.8) | | | | 瓦質陶器 |
| 6 | I-2 | 4次 | SR-1 | 3a層 | | | 陶器・墨 | | | | | | 常滑灰 |
| 7 | K-10 | 4次 | SR-1 | 3a層 | | | 砂岩・卵石 | 6.5 | 7.5 | 5.7 | 416.3 | | 安山岩 |
| 8 | K-8 | 4次 | SR-1 | 6層 | | | 砾石 | 10.2 | 12.6 | 3.7 | 740 | 磨、面、全面施け、 | 玄武岩 |
| 9 | K-9 | 4次 | SR-1 | 8層 | | | 石器・石斧 | 4.1 | 5.2 | 2.1 | 822 | 光沢あり、 | 珪化砂岩 |
| 10 | | | | | | | | | | | | | 33-4 |

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 直横幅 | 取上面形 | 種別・特徴 | 直高 | 口径 | 底径 | （外）面 | 特 | 直高（内）面 | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|------|--------|-------|------|-----|---------|----------|------|--------|------|
| 9 | D-3 | 4次 | SR-1 | 6層 | No.1 | 「丁字型」環 | 5.7 | 14.6 | 6.6 | 底部断板系切り | 半包埋、ヘマチオ | 32-5 | | |

第20図 第4次調査区河川路1層～8層出土遺物

2) 4 層

4層は、西暦915年に降下したとされる「十和田火火山灰」層である。3a層水田跡の耕作による擾乱を受けて上面に凹凸が生じているが、河川跡のはば全面で検出された。畔壁下部など、保存状態の良好な部分では6~5cmの厚さで堆積している（図版7-4）。

出土遺物はない。

3) 6a層・6b層と出土遺物

6層は、河川跡中央部の、黒褐色泥炭質粘土層からなり、植物が未分解のまま残存している部分（6a層）と、河岸部の黒褐色の粘土層となっている部分（6b層）とに分けられる。6層の大部分は6a層が占めている。その境は明確なものではなく漸移的である。6層の層厚は、調査区東部の河川跡中央部分では18cm前後あるが、西部に移行するにしたがって徐々に薄くなる。調査区西端付近では、薄くなった6層が3a層水田跡の掘削による影響を受けて残存していない部分もある。

遺物は、ロクロ土師器杯（D-3）、砥石（K-8）、木製品（L-12）、材（L-13・14・15）のほか、少量の土師器片と須恵器片が1点出土している。木製品や土師器杯は、河川跡の流路中央よりのところから散在的に出土している（第19図）。土師器杯D-3は、大きな底部から、やや内湾気味に外傾して体部から口縁部にいたる器形で、底部外面は阿軛糸切り無調整である。砥石は、扁平な円錐をそのまま使用している。片側の緩やかな凸面の中央部を砥面としている。中央付近から割れ、全面が焼け焦げている。

木製品L-12（第22図1）は、長方形の孔の開いた扁平な角材と、この孔に挿入された端部が頭状に肥大するよう加工された板材とが組み合わされているもので、挿入された板材にも方形の孔が穿たれている（図版7-6）他の複数の材と組み合わせて使用されたと推定されるが、その用途は不明である。材L-13は、現存長39.7cm・幅4.4cm・厚さ3.0cmの扁平な角材で、幅の広い面に長方形の孔が2箇所に空けられている。建築材の可能性が考えられる。材L-14は、現存長44.5cm・幅8.1cm・厚さ5.9cmの角材で、片側の端部に加工痕がある。材L-15は、現存長14.4cm・残存幅3.9cm・厚さ0.9cmの板目材で、側面に小さな円孔が約8cmの間隔で2カ所に穿たれている。

4) 7a層・7b層と出土遺物

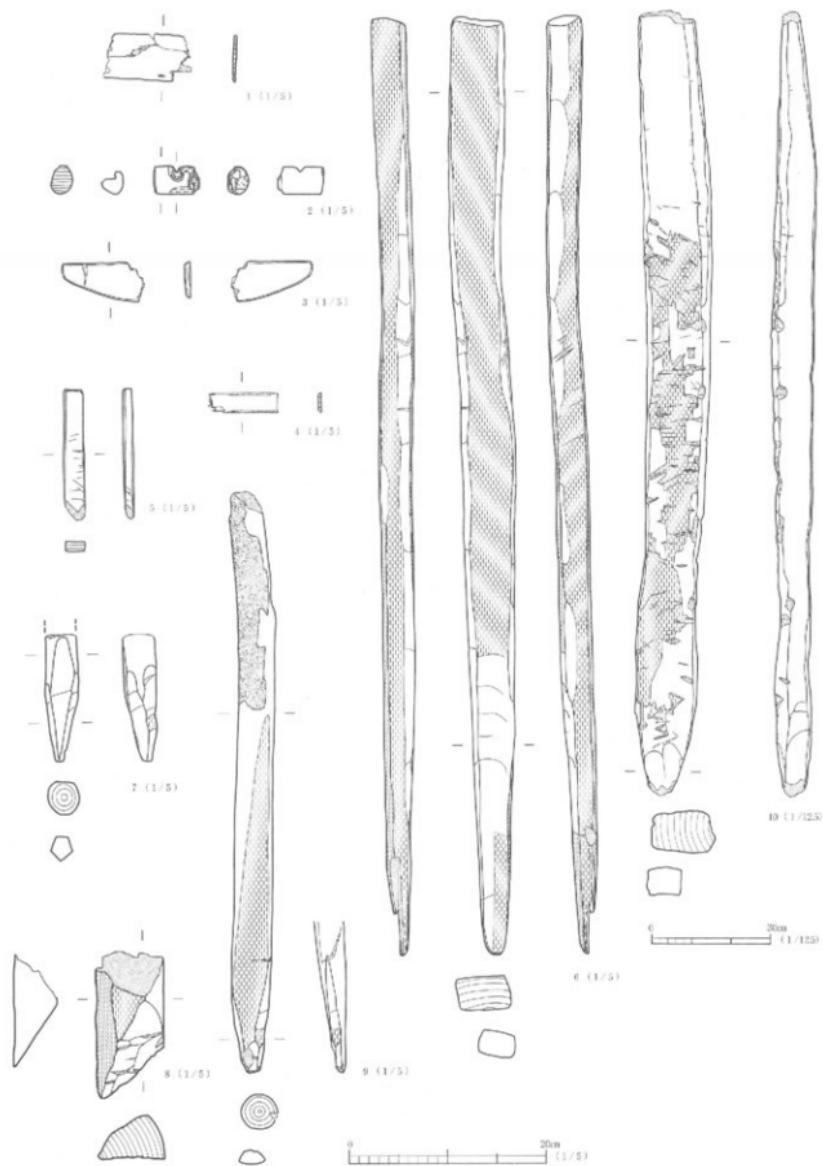
7a層はオリーブ黒色の粘土層、7b層は灰オリーブ色の粘土層で、ともに河川跡の北側（調査区北西側）に分布している（図版8-1）。6層と異なり、未分解の植物遺体は観察されなくなり、泥上の堆積層に変化する。層厚は、7a層が15~20cm前後、7b層が5~10cmである。

遺物は、層厚の割りに少なく、摩滅した土師器片数点と、先端に加工痕のある丸材（L-16）と半裁丸材（L-17）が各1点出土しているだけである。

7層と8層の堆積の間には、この段階の河川の最深部に沿った流路が形成され、この流路の凹地にはイ・ロ・ハ・ニの、基本層とは異なる土層が堆積している。この層には未分解の植物遺体が含まれている。

5) 8層と出土遺物

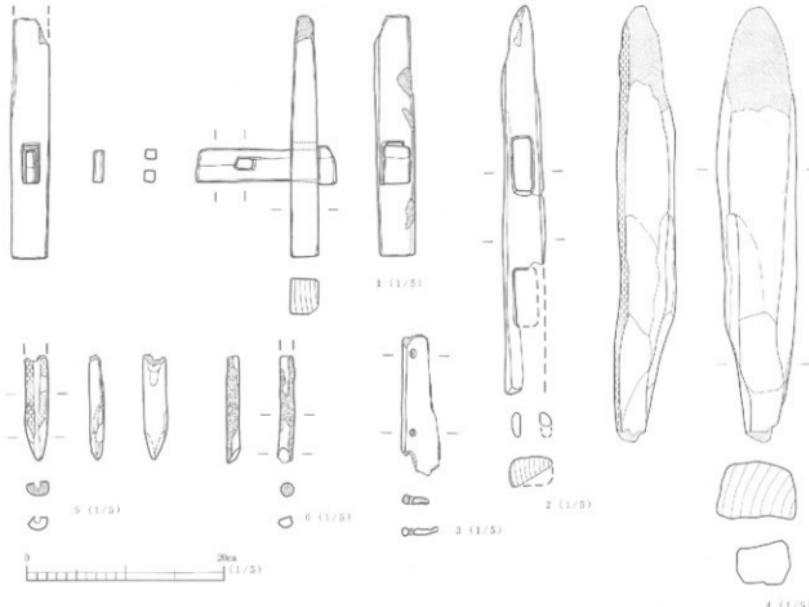
8層はオリーブ黒色の粘土層で、黒色粘土層を斑状に含んでいる。分布範囲は、7層の範囲とはほぼ一致しており、この段階の河川跡流路最低面の北側に限られている（図版8-2）。層厚は15~30cm前後あり、比較的厚く堆積している。層底面には凹凸が著しい。出土遺物は少なく、土師器片1点と石斧の破片（第20図10）及び礫が1点出土しているだけである。



第21図 第4次調査区河川路2層～3b層出土木製品類

第21図 観察表

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 測量層 | 取上番号 | 種別・形種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 形状 | 本取引 | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|-------|-------|-------|------|----------------|----|----|-----------|-------|------|
| 1 | L-4 | 4次 | SR-1 | 2層 | 木・板材 | 4.8 | 9.0 | 0.3 | 曲物削板? | | | 無目 | 34-1 | |
| 2 | L-5 | 4次 | SR-1 | 3 a層 | 木・火鉢臼 | 2.9 | 4.7 | 2.1 | 腹面側に切削有り | | | スギ 芯無丸 | 34-2 | |
| 3 | L-11 | 4次 | SR-1 | 3 b層 | 木・不明 | 4.1 | 8.0 | 0.6 | | | | モミ綿 板目 | 34-4 | |
| 4 | L-9 | 4次 | SR-1 | 3 a層 | 木・板材 | 2.0 | 7.0 | 0.3 | 曲物削板? | | | 無目 | 34-3 | |
| 5 | L-10 | 4次 | SR-1 | 3 a層 | 木・角材 | 13.5 | 2.1 | 1.0 | 片端皆丸 | | | 芯無角 | 34-5 | |
| 6 | L-6 | 4次 | SR-1 | 3 a層 | 木・角材 | 96.0 | 5.7 | 3.6 | 側面に加工有り | | | 芯無角 | 34-6 | |
| 7 | L-90 | 4次 | SR-1 | 3層 | 木・火鉢 | 13.1 | 3.4 | 3.3 | 先端加工、5面多段 | | | 芯無丸 | 34-9 | |
| 8 | L-89 | 4次 | SR-1 | 2 a層 | 木・火鉢 | 15.1 | 7.0 | 4.4 | 先端加工、1面多段 | | | 芯無丸 | 34-10 | |
| 9 | L-8 | 4次 | SR-1 | 2 a層 | 木・火鉢 | 59.5 | 4.0 | 3.6 | 先端加工、3面多段、裏皮付着 | | | 芯無丸 | 34-8 | |
| 10 | L-7 | 4次 | SR-1 | 2 a層 | 木・火鉢 | 199.8 | 17.5 | 11.2 | 先端加工、3面多段 | | | 芯無角 | 34-7 | |



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 測量層 | 取上番号 | 種別・形種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 形状 | 本取引 | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|--------|------|-------|-----|-------------|----|----|-----|------|------|
| 1 | L-12 | 4次 | SR-1 | 6層 | 木・ №1 | 24.8 | | | 組み合せ木製品(2材) | | | 芯無角 | 35-1 | |
| 2 | L-13 | 4次 | SR-1 | 6層 | 木・ №2 | 39.7 | 4.4 | 3.0 | 組立部、方孔2ヶ所 | | | 芯無角 | 35-2 | |
| 3 | L-15 | 4次 | SR-1 | 6層 | 木・板材 | 14.4 | 3.9 | 0.9 | 側面に円孔2ヶ所 | | | 板目 | 35-3 | |
| 4 | L-14 | 4次 | SR-1 | 6層 | 木・ №1 | 44.5 | 8.1 | 5.9 | 片端部に加工有り | | | 芯無角 | 35-4 | |
| 5 | L-17 | 4次 | SR-1 | 7 b層 | 木・手抜丸材 | 10.8 | 2.3 | 1.5 | 先端加工、4面1段 | | | 芯無丸 | 35-5 | |
| 6 | L-16 | 4次 | SR-1 | 7 b層 | 木・丸材 | 11.6 | 1.5 | 1.4 | 先端加工、1面1段 | | | 芯無丸 | 35-6 | |

第22図 第4次調査区河川跡6層～7 b層出土木製品類

6) 9 層

9層は黒色の粘土層で、河川跡の南部ほど未分解の植物遺体の含有量が多くなる。検出された河川跡の河岸部から底面までは全面に分布している。河川跡中央付近では30cm前後の厚さで堆積し、河岸部に寄るにしたがって徐々に薄くなっている。河川跡の南側に位置する第4次調査区では、9層の細分はできなかった。

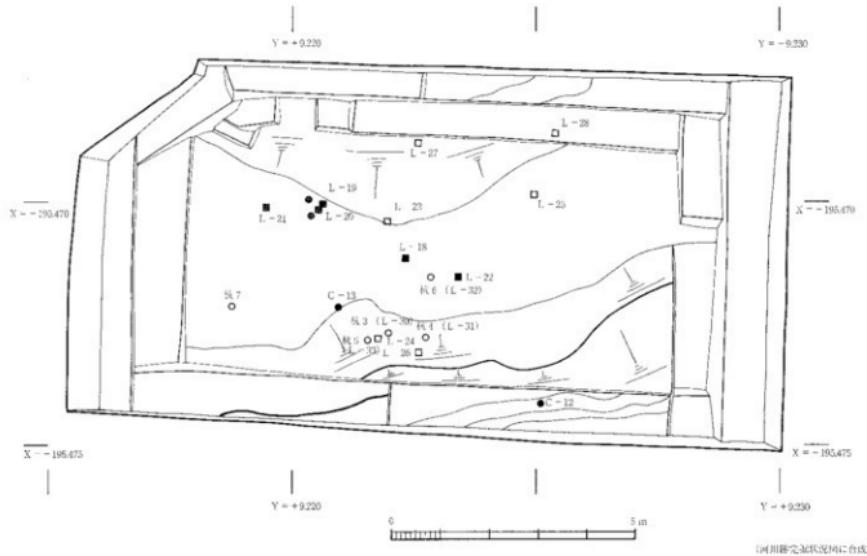
河川跡南岸に位置する本調査区の9層からは、層厚が厚い割りに遺物は出土していない。本調査区と反対側の河川跡北岸に位置する第1次調査区Ⅱ区や、VI区及び第3次調査区の9層から、土師器や石製模造品などの豊富な遺物が出土している状況とは様相を異にしている。

7) 10層と出土遺物

この段階まで下がると河川跡の南岸は、調査区南東部から北西部に向かって緩やかな斜面となっている（図版8-3）。10層は、黒褐色の粘土層で、樹木片を含む未分解の植物遺体を多く含んでいる。河川跡の全面に分布し、層厚は10~15cm前後で、河岸部から河底部まで比較的平均な層厚で堆積している。

10層からは、周辺の第1次調査区Ⅱ区やVI区同様に、土師器・須恵器・木製品・材など多数の遺物が出土している（第23図）。また、この層中から杭が5点検出されているが、相互の関係及び機能は明らかでない。

土師器は、南岸上部で壺が1個体（C-12）と南岸下部から杯（C-13）のほか多数の破片が出土している。壺C-12（第24図1）は、底部から体部下半まで外傾しながら立ち上がり、体部上半は半球形を呈し、頸部がくびれて口縁は外傾する。外面の調整は、体部はハケメのち中央部がケズリ調整、口縁部はハケメ調整のち端部がヨコナデ調整されている。器形と調整を見ると、10層から出土している他の土師器よりも古い特徴が認められ、塩釜式期に所属することが考えられる。古いものの流入か、取上げ層位の誤認の可能性がある。杯C-13（第24図2）は、



第23図 河川跡10層遺物出土位置図

II縁部をわずかに欠損するがほぼ完全な形で残存している。扁平な半球形の杯で、II縁部がわずかに内湾している。調整は、外面体部がヘラケズリ、II縁部がヨコナデ調整され、内面はヨコナデのち放射状にヘラミガキされている。第1次調査II区・VI区出土品にも類似品があり、南小泉式期の範疇に位置付けることができる。

須恵器E-3(第24図3)は、蝶の口縁部破片と考えられるものである。口唇部は平坦で、外方に傾斜している。口唇から少し下がった外面には断面形三角の隆帯が巡っている。

本製品には横鍼2点(L-19・20)・ナスピ型平鍼1点(L-21)・堅杵1点(L-22)・丸棒1点(L-18)がある(第25図)。横鍼L-19は、全長14.5cm・幅約5.1cmあり、後面に流線型の若柄降起が作られ、柄穴は円形である。L-20も横鍼の破片で、若柄降起は剥がれていますが、流線型を呈すると観察され、柄穴は円形である。

ナスピ型平鍼L-21は、身部の上部から若軸の下半部の破片である。軸部から身部上部にかけては八字状に広がり、ナスピのヘタにあたる部分は小さな突起状に造り出されている。身部の後面中軸上には緩やかな稜線が形成されている。

堅杵L-22は、2つの流線型の狭端側を合わせたような形態の製品で、撫き部の片側が出土している。残存長39.2cm・最大径9.0cmを測る。芯去り材を加工して丸く作っている。

丸棒L-18は、残存長28.6cm・最大径2.8cmある。芯去り材を加工して作られたもので、片側は徐々に細くなるよう加工され、他端は折れている。柄の部類の可能性がある。

材には、建築材1点(L-24)・板材2点(L-23・27・29・91)・丸材3点(L-25・26・28)などがある(第26図)。建築材L-24は梯子板で、現存長が132.5cmあり、4段の踏み段が残る。下端部は下段の踏み面から約37cmあり、先端は舌状に円く尖っている。各段の間隔は30~35cmである。残存部の上端は、ここで端部となるのか、さらにはびらのかは、背面が欠損しているので明らかでない。

板材L-23は、幅約4.5cmの板目板で、約8cmの間隔で孔があけられている。板材L-27は、幅広のナメの木取り板材で、4個の孔があけられている。板材L-29は、残存長12.5cm・幅4.8cm・厚さ1.4cmの板目板で、折れた木IIに円孔の痕跡が残っている。L-91は、残存長約10cm・残存幅5.8cm・厚さ0.9cmの板目板で、残存する側面と木II面が鈍角に加工されている。木II近くと側面の近くの2ヵ所に円孔のあけられていた痕跡が残っている。

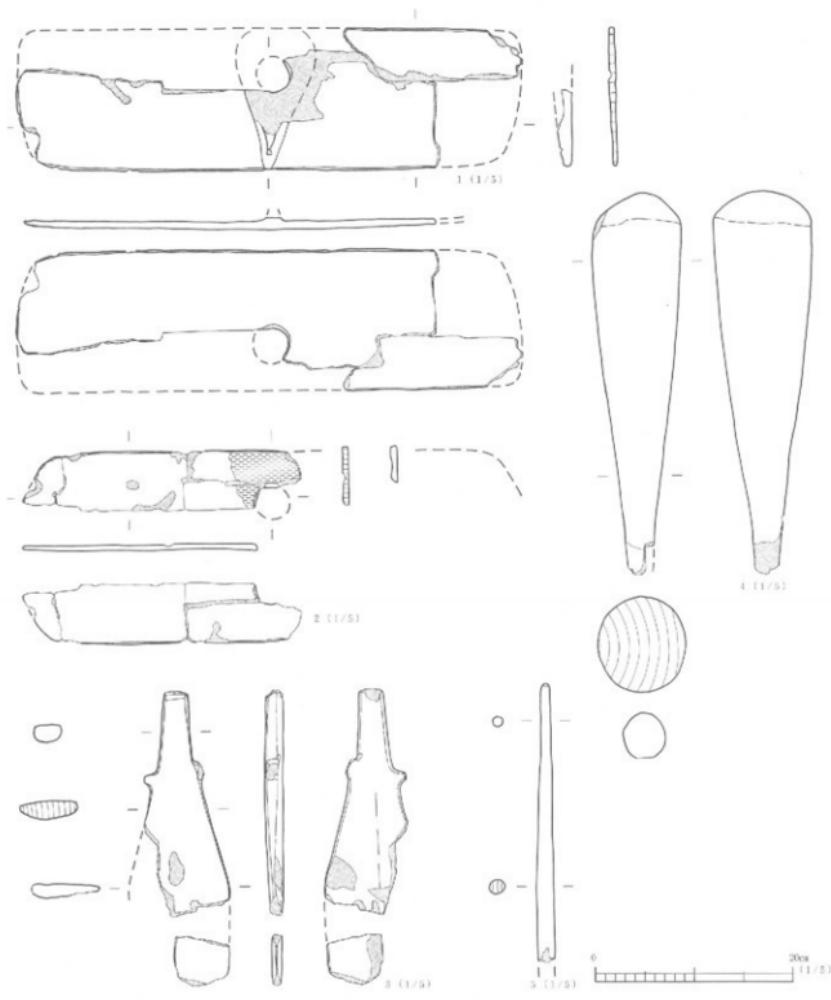
丸材L-25は、直徑5cmの丸木で、片方の端部に1面から斜めの切断痕がある。丸材L-26は、直徑5cm前後の樹皮付きの丸木で、片方の端部に多方向からの加工がなされて尖っている。丸材L-28は、長さ約123cm・直徑約3cmの丸木で、片方の端部がやや肥大している。両方の端部は、加工されたように滑らかに丸くなっている。柄として使用されていた可能性がある。

杭は、調査区中央付近の南岸寄りから5本検出されている(第27図)。相互の関係は不明であるが、比較的大型の杭が多い。

杭-3(L-30)は、芯無しの割杭で、全面に削面があり、先端が部分的に加工されている。杭-4(L-31)は、芯持ちの丸杭で、広端部の全周の3分の2ほどに加工を施し、尖らせている。杭-5(L-33)

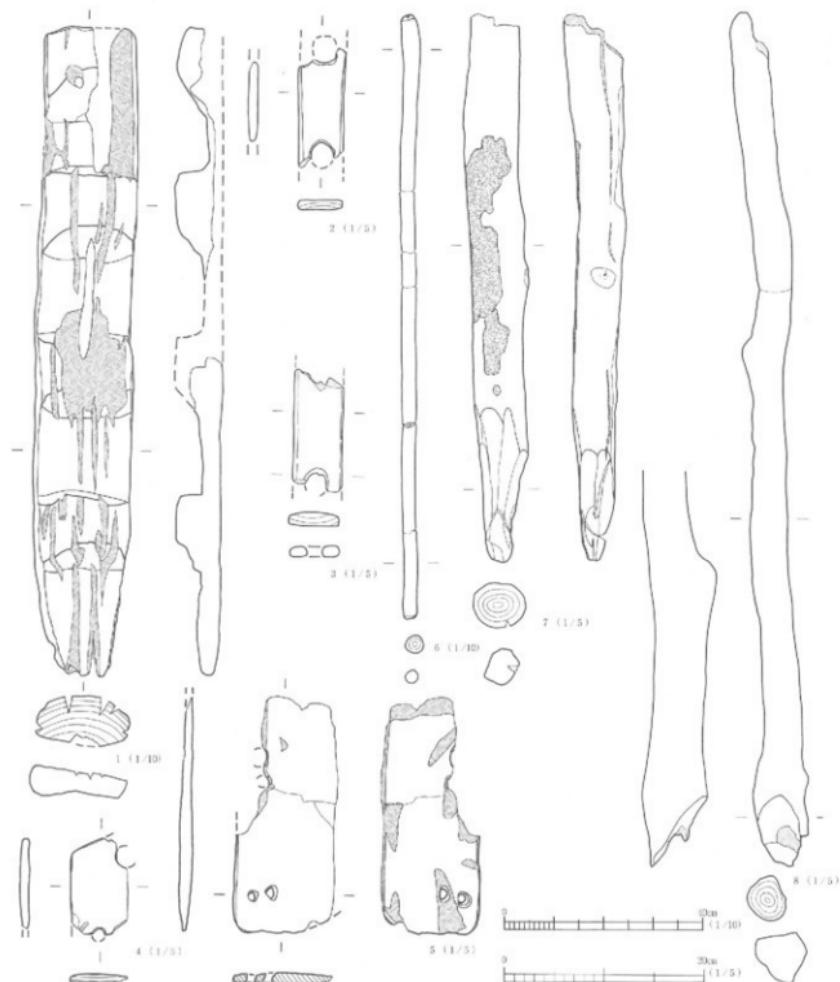


第24図 第4次調査区河川跡10層出土遺物



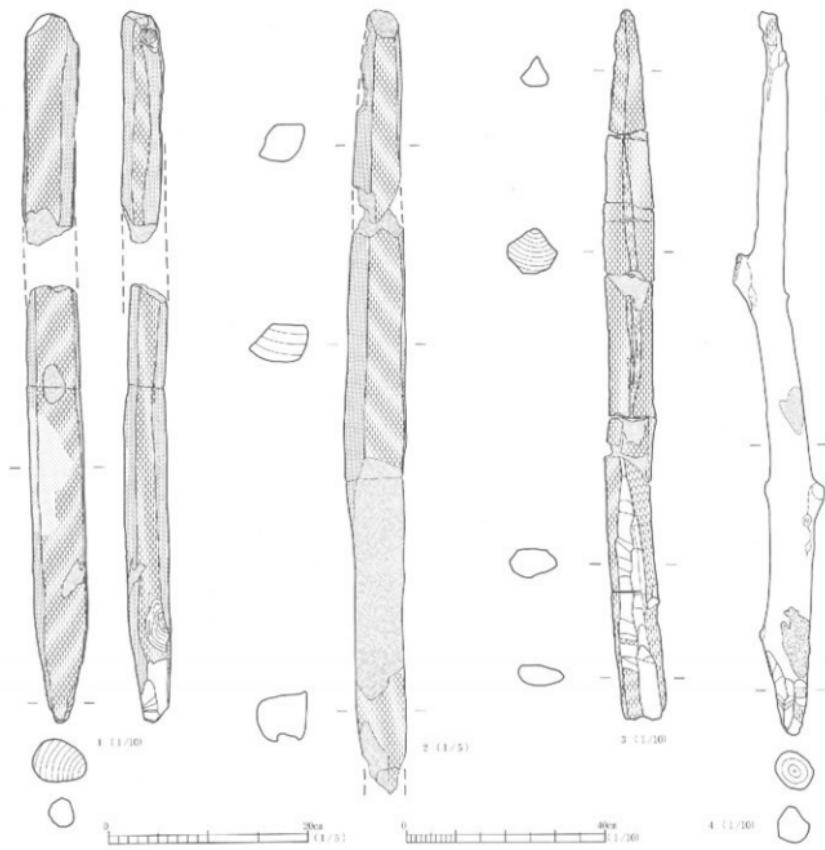
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土層 | 遺物類 | 取上番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 徴 | 樹種 | 本取り | 分量(重版) |
|----|------|-----|-----|------|-----|--------|----------|------|------|-----|--------------|-----|-----|--------|
| 1 | L-19 | 4次 | | SR-1 | 10刷 | 木・No.2 | 木・横板 | 14.5 | 51.5 | 1.4 | 着柄既成複葉形、柄孔円形 | クヌギ | 筆目 | 35-7 |
| 2 | L-20 | 4次 | | SR-1 | 10刷 | 木・No.4 | 木・横板? | 6.1 | 28.4 | 0.6 | 複葉既成 | クヌギ | 筆目 | 36-1 |
| 3 | L-21 | 4次 | | SR-1 | 10刷 | 木・No.6 | 木・子葉既成複葉 | 23.1 | 7.0 | 1.9 | 上下側葉欠損 | クヌギ | 筆目 | 36-2 |
| 4 | L-22 | 4次 | | SR-1 | 10刷 | 木・No.7 | 木・茎葉 | 39.2 | 6.0 | 0.8 | 片側葉欠損 | クヌギ | 芯無丸 | 36-4 |
| 5 | L-18 | 4次 | | SR-1 | 10刷 | 木・No.1 | 木・丸棒 | 28.6 | 直径 | 1.8 | 片端割れ | スギ | 芯無丸 | 36-3 |

第25図 第4次調査区河川跡10層出土木製品類1



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基木列 | 出土遺構 | 遺構別 | 取上番号 | 種別・評価 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 断面 | 板種 | 本取り写真範囲 |
|----|------|-----|---------|------|------|-------|-------|-------|----------|-----|-----------------|----|-----|---------|
| 1 | L-24 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・板子 | 132.5 | 30.0 | 9.0 | 4段残存 | | | クリ | 板目 | 37-1 |
| 2 | L-23 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・板材 | 123 | 47 | 1.0 | 円孔有り | | | | 板目 | 36-6 |
| 3 | L-29 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・板材 | 126 | 49 | 1.4 | 円孔有り、側面丸 | | | | 板目 | 36-7 |
| 4 | L-91 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・板材 | 101 | 59 | 0.9 | 円孔有り | | | | 板目 | 36-8 |
| 5 | L-27 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・板材 | 24.2 | 10.1 | 1.1 | 円孔有り | | | | クヌメ | 36-9 |
| 6 | L-28 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・ | No.13 | 材・丸棒 | 123.5 | 3.6 | 3.5 | 両端削減 | | 記符丸 | 37-2 |
| 7 | L-26 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・ | No.17 | 材・丸材 | 56.2 | 5.8 | 4.5 | 先端削加工、多面1段、側面付着 | | 記符丸 | 37-4 |
| 8 | L-25 | 4次 | S R - 1 | 10崩 | 材・丸材 | No.14 | 材・丸材 | 87.2 | 5.4 | 6.7 | 先端削加工、上面多段 | | 記符丸 | 37-5 |

第26図 第4次調査区河川跡10層出土木製品類2



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺構別 | 取上番号 | 種別・要徴 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 製 | 樹種 | 本取り | 写真回数 |
|----|------|-----|---------|------|--------|------|-------|------|-----|----|----------------|---|------|-----|------|
| 1 | L-30 | 4次 | S R - 1 | 10弱 | 杭・No.3 | 杭・削丸 | 至5.5 | 11.0 | 9.0 | | 先端加工、1面多段 | | 杉無 | 37 | 6 |
| 2 | L-32 | 4次 | S R - 1 | 10弱 | 杭・No.6 | 杭・削丸 | 80.2 | 6.3 | 1.5 | | 先端加工、不明 | | 杉無 | 37 | 7 |
| 3 | L-33 | 4次 | S R - 1 | 10弱 | 杭・No.5 | 杭・削丸 | 144.7 | 10.5 | 9.1 | | 先端加工、不明、側面加工有り | | 杉無 | 37 | 5 |
| 4 | L-31 | 4次 | S R - 1 | 10弱 | 杭・No.4 | 杭・丸杭 | 147.3 | 12.0 | 7.9 | | 先端加工、多面多段、削度付有 | | モガタガ | 37 | 8 |

第27図 第4次調査区河川跡10層出土木製品類3

は、複雑な剖面からなる削丸である。太さは不均一で中央部に比べると両端は細くなっている。下端側に加工痕が存在しているが、先端を尖らせようとしたものか、剖面の調整であるのか不明である。杭-6 (L-32) は、芯無の角杭で、4面は剖面からなる。先端部は欠損しているが、残存部分でも加工は観察されない。杭-7は、取上げ

時に崩壊した。

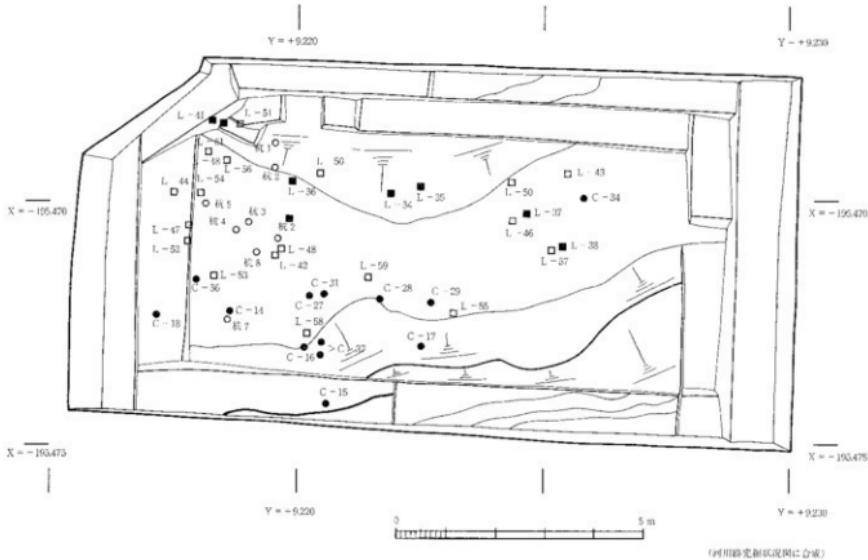
8) 11 層

11層は、黒色の泥炭質粘土層で、河川跡南岸の上部に分布している。河川中央部では確認することができなかつた。層厚は5cm前後である。出土遺物はない。

9) 12a層・12b層・12c層と出土遺物

12層は12a層・12b層・12c層に細別された。12a層は黒褐色の粘土層で、草本類の植物遺体を多く含む。12b層は、同じく黒褐色の粘土層で、黄褐色土粒を多く含んでいる。12c層も黒褐色の粘土層で、未分解の植物遺体を多く含んでいる。12a層と12c層は、河岸上部で泥炭質の土壤に変化する部分があり、それぞれ12a'層と12c'層と命名して区別した。12a層は河川跡のほぼ全域に分布し、層厚は10~25cmである。12b層は、調査区東部で12c層で検出された流木(倒木?)群より西側の河川中央部を中心に分布している。層厚は10~25cmである。12c層は、河川跡のほぼ全面に分布しているが前記の流木(倒木?)群より東側で厚く、凸凹でやや薄く堆積している。層厚は10~15cmである。12層は、各細別層を合わせると、平均して30~50cmの厚さで堆積している。

12層中からは、第28図及び図版9のとおり多量の遺物が、河川跡のほぼ全面から出土している。特に南岸斜面からは、多くの土器が出土している。これらの遺物については、12層の掘り下げ段階で細別層位の確認できた遺物と、区別できないで取上げた遺物がある。ここではこれらの遺物について、一括して12層出土遺物として解説する。出土遺物には土器・石製品・木製品・土製品がある。また、調査区西部の河川跡底面部分からは杭も多数検出されている。杭の相互の関係および機能については不明である。



第28図 河川跡12層出土位置図

土師器には、小型手捏ね上器（C-14・15・24）・鉢（C-19・20・21・25）・器台形（C-16・17・18・22・23）・小型壺（C-26・27・29）・大型壺（C-30・31・32・33）・小型甕（C-35・37・38）・大型甕（C-34・39）。甕または壺の体部下半などをはじめ多くの破片資料が出土している（第29・30図）。小型手捏ね上器には、やや広めの台状の底部から口縁部までやや外傾して立ち上がるもの（C-15）と、小さめの底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部が直立して短く立つもの（C-14・（24））がある。調整は、ナデのみによるものと、ハケメ調整のあるものがある。

鉢は、器高の2分の1くらいの位置に口縁部と体部の境があり、この部分が括れ、口縁部が外傾するものである。口径の割に器高が高く、口縁が直立気味に立つもの（C-19・21）と、口径に比べて器高が低く、口縁部が外反するもの（C-20・（25））がある。後者には口縁部の外面中ほどに軽い段が形成されているものもある。

器台形土器は、外面がヘラミガキ調整された精製品（C-17・22・23）と、ナデ調整の粗製品（C-16・18）がある。精製の脚部は、高さが低く裾部が広がり、三方の透かしが2段あるもの（C-17）と、脚部の高さが前者より高く、中ほどに三方の透かしがあるもの（C-22・23）がある。精製の受け部は、小さなもので、わずかに内湾気味に外傾するものが出土している。粗製の器台は、内面がヨコナデ調整の小さな受け部のもの（C-16）と、脚部の下半部が内湾気味に立ち、脚部中央よりやや上に三方からの透かしがある異形のもの（C-17）がある。後者の受け部は内側に強く折り曲げられ、上端部は皿状ではなく、中央に貫通孔の開いた緩い凸面となっている。

壺は、器高が10cm以下の小型のもの（C-26・27・29）と、それ以上の器高がある大型のもの（C-30・31・32・33）がある。小型のものは、体部の上部に体部最大径があり、口縁部が外傾するもの（C-26・29）と、体部中央に体部最大径があるもの（C-27）がある。前者のうちC-29には、体部の下部に小さな円孔があけられている。大型の壺は、体部が残存しているものは球形を呈し、丁寧にヘラミガキ調整されている。頸部から口縁部にかけては、外反して立ち上がり、口縁部は粘土が折り返しない貼り付けられて帯状に厚くなっている。口縁端部は尖り気味のもの（C-31・32）と、平坦に仕上げられたもの（C-33）がある。

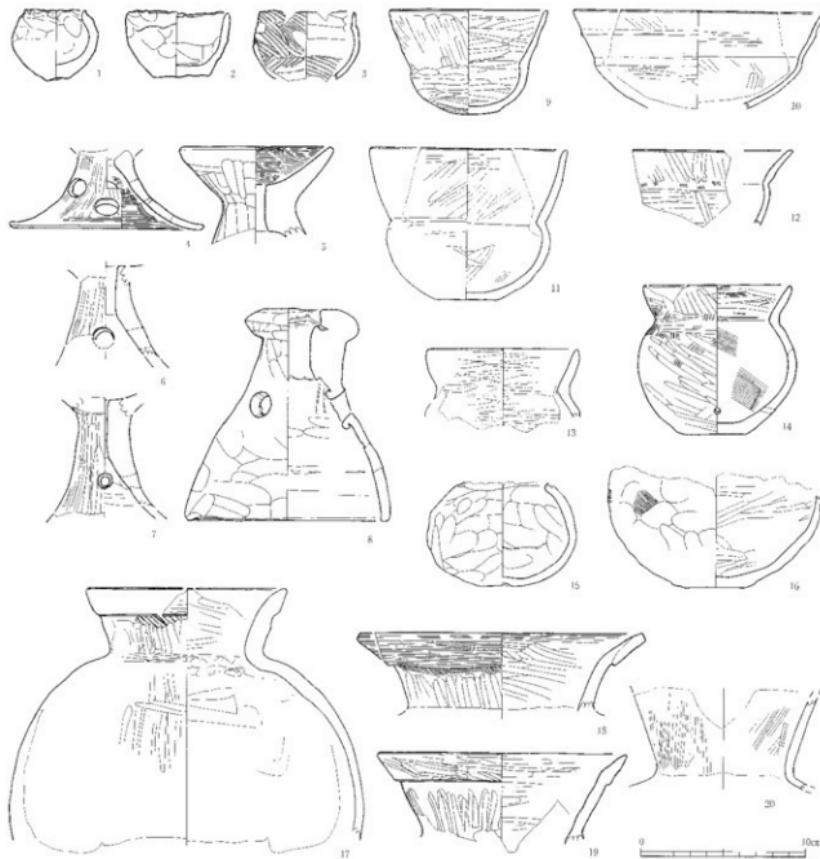
甕は、やや扁平な球形の体部に強く外反する口縁が付くものであるが、器高が17cm以下のやや小型のもの（C-35・37・38）と、20cmを超える大型のもの（C-34・39）がある。小型の甕は、外面の調整がケズリとナデによるもの（C-35）、ハケメとケズリによるもの（C-37）、体部はハケメだけで調整されているが、肩部付近に横方向のハケメ調整の見られるもの（C-38）などがある。大型の甕は、体部調整は間隔の広狭はあるが基本的に斜方向のハケメ調整がなされている。口縁部は、口唇部が平坦で、ハケメ調整によるもの（C-34）と、口唇部が丸く、ヨコナデ調整によるもの（C-39）とがある。

12層出土土器については、細かな時期差はあると思われるが、大きくとらえると第1次調査の成果と同様に、古墳時代前期の埴輪式に位置付けられるものと考えられる。

石製品としては、両方の面に、磨り面と小さな凹みのある略方形の扁平な蝶が1点出土している（第31図）。

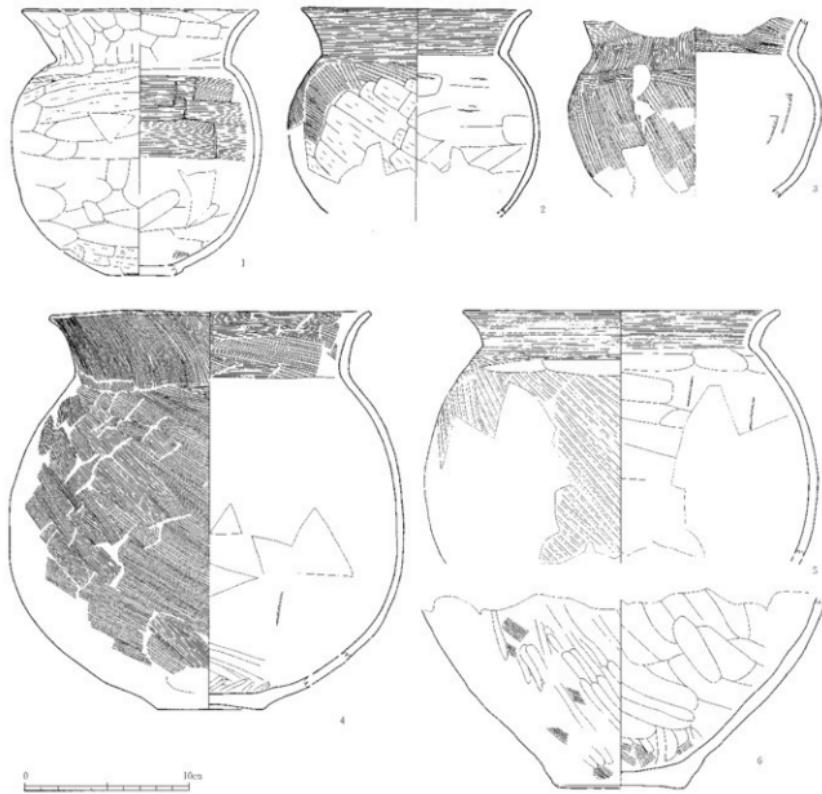
木製品類には農具をはじめとする各種木製品と、材・杭がある。

木製品には、直柄平鋸（L-61）・曲柄二叉鋸（L-38）・鍛錠柄（L-34）・鍵柄（L-40）・四脚盤（L-41）・ヘラ状木製品（L-37）・その他用途不明品4点（L-35・36・39・45）がある（第32・33図）。直柄平鋸（L-61）は、柄が装着された状態で出土した。鍛錠部の全長は31.8cmである。両開面を欠損しているので幅は不明であるが、21cm前後と推定される。残存部の形状から、平面は、将棋の駒の頂部を切り取ったような形態を呈するものと考えられる。刃部先端は僅かに丸みがあるが、ほぼ直線的に作られていたと思われる。頭部には着柄隆起を挟んだ両側に継長の方孔があけられている。後面には、上端から刃部に向かって、全長の1/2強の着柄降起が作り出されている。納孔は、身部長方向がやや長い円形である。柄は、直径2.5～3cmの芯無し削り出し丸材で、基部（握り部）側を欠損しているが、先端から約70cm残存している。鍛木体と柄の装着角度は、約67°である。



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 馬本別 | 出土箇所 | 直横量 | 取上番号 | 種類 | 焼付 | 断面 | 口縁 | 底面 | (側)面 | 特徴 | 微細(内面) | 参考範囲 |
|----|------|-----|------|------|--------|--------|--------|--------|-------------|-------------|-------|-------|--------|--------|-------|
| 1 | C-13 | 4次 | SR-1 | 12層 | No13 | 十脚器 小型 | 4.2 | - | 3.7 | 1.4 | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 30-7 |
| 2 | C-15 | 4次 | SR-1 | 12層 | No15 | 十脚器 小型 | 4.1 | 6.0 | 3.3 | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 30-8 | |
| 3 | C-24 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 小型 | (4.4) | 5.9 | - | ナデ | ハケメ | ハケメ | ナデ | ハケメ・ナデ | 30-9 | |
| 4 | C-17 | 4次 | SR-1 | 12層 | No14 | 十脚器 遊合 | (4.5) | - | 11.8 | R=外清し・ヘラミガキ | ヨコナデ | ヨコナデ | ヨコナデ | 30-14 | |
| 5 | C-16 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 4 | 十脚器 遊合 | (6.0) | 9.4 | - | ヘラミガキ | ヨコナデ | ヨコナデ | ヨコナデ | 31-2 | |
| 6 | C-23 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 遊合 | (5.6) | - | - | 三万透し・ヘラミガキ | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 30-15 | |
| 7 | C-22 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 遊合 | (7.0) | - | - | 三万透し・ヘラミガキ | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 30-13 | |
| 8 | C-18 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 1 | 十脚器 遊合 | 13.1 | - | 12.2 | 三万透し・ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 31-1 |
| 9 | C-19 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 足 | 5.4 | 9.6 | - | ヘラミガキ・ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 30-10 | |
| 10 | C-20 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 9 | 十脚器 筋 | (6.0) | (15.4) | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 30-11 | |
| 11 | C-21 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | 9.4 | (12.0) | 3.6 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 30-12 | |
| 12 | C-25 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | - | - | - | ハケメ・ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-12 | |
| 13 | C-26 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | (5.1) | 9.1 | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-9 | |
| 14 | C-29 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 8 | 十脚器 筋 | 9.2 | 9.0 | 3.7 | ハケメ・ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-6 | |
| 15 | C-27 | 4次 | SR-1 | 12層 | No10 | 十脚器 筋 | 6.4 | - | 1.5 | ナデ | ナデ | ナデ | ナデ | 31-5 | |
| 16 | C-28 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | 7.5 | - | 10 | ハケメ・ナデ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-4 | |
| 17 | C-31 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 6 | 十脚器 筋 | 15.5 | 12.2 | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-7 | |
| 18 | C-33 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | (4.7) | 17.3 | - | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-3 | |
| 19 | C-32 | 4次 | SR-1 | 12層 | 十脚器 筋 | 6.1 | 15.2 | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-8 | |
| 20 | C-30 | 4次 | SR-1 | 12層 | No 3 | 十脚器 筋 | - | - | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 31-10 |

第29図 第4次調査区河川跡12層出土遺物1

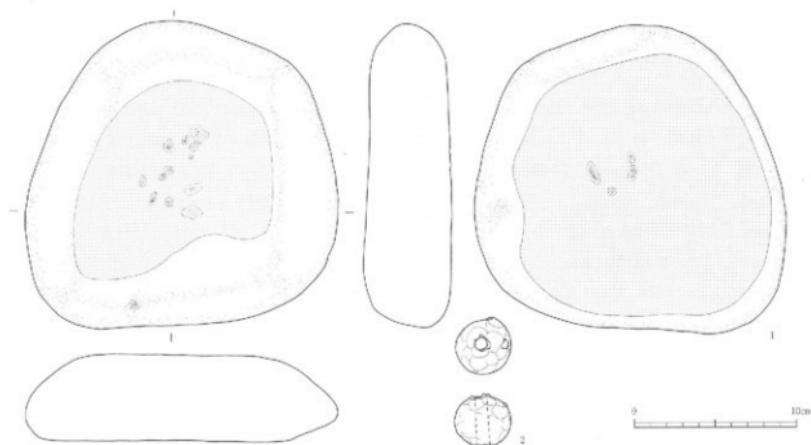


| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基木期 | 出土遺物 | 直角幅 | 取上番号 | 種別 | 型種 | 留迹 | 口径 | 底径 | (外面) 特徴 | | (内面) | (残存値) |
|----|------|-----|--------|------|-------|------|----|--------|------|-----|----|------------|--------------|-------|-------|
| | | | | | | | | | | | | (外面) | (内面) | | |
| 1 | C-35 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | No.7 | 土器部 | 裏 | (16.3) | 14.3 | | | ナデ・ハラケズリ | ナデ・ヘラナデ | 31-10 | |
| 2 | C-37 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | No.3 | 土器部 | 裏 | (12.7) | 14.0 | | | ヨコナデ・ハラケズリ | ヨコナデ・ナデ | 32-3 | |
| 3 | C-38 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | | 土器部 | 裏 | (10.0) | 13.6 | | | ヨコナデ・ハラケズリ | ヨコナデ・ナデ | 32-2 | |
| 4 | C-24 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | No.2 | 土器部 | 裏 | 24.5 | 19.6 | 6.4 | | ハケヌメ | ハケヌメ・ヘラナデ | 31-11 | |
| 5 | G-39 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | | 土器部 | 裏 | (15.5) | 19.3 | | | ヨコナデ・ハケヌメ | ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ | 32-1 | |
| 6 | C-36 | 4次 | S.R. 1 | 12号 | No.11 | 土器部 | 裏 | 12.3 | | 7.0 | | ハケヌメ・ナデ | ハケヌメ・ナデ | 32-4 | |

第30図 第4次調査区河川跡12層出土遺物

L-38は、片側の側面が直線的で、反対側の側面が緩やかな弧状を呈することから、曲柄二又鉢の片方の面部破片と考えられる。現存長38.3cm・幅5.7cm・厚さ2.0cmを測る。両面に加工の痕跡があり、刃先側が薄くなるように削られている。軸部側の残存端部に軸部との切断のためと推察される加工痕がある。厚さや加工痕の状況から未製品の段階のものと推察される。

鉢脚柄L-34は、基部側を欠損する。曲柄鉢との装着面は上端部には加工が認められるが、下端部は割り面のままである。また上端部は、削って形を整えた形跡は認められるが、粗掛の突起が作り出されていないことから、未製品であると理解される。残存長39cm・接合部長19.1cmを測る。



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 測量値 | 取上番号 | 種別・部類 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 新 舊 | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|--------|-------|-------|------|-----|------|--------------|--------|------|
| 1 | K-11 | 4次 | SR-1 | 12号 | 石・No.1 | 石面・磨石 | 18.7 | 19.2 | 5.1 | 3540 | 前面中央に凹みあり、薄片 | 新 | 33-6 |
| 2 | P-1 | 4次 | SR-1 | 12号 | 土鉢 | | 3.1 | 3.4 | 3.1 | 34.1 | 孔径8mm、ナテ浅模 | 舊 | 33-8 |

第31図 第4次調査区河川跡12層出土遺物3

兼柄L-40は、基部（握り部）の破片で、残存長17.9cmを測る。芯無しの材を丸く加工して作られており、握り部分は刃の方向に曲がるように加工され、基礎部は左右に肥厚している。

四脚柄L-41は、幅約74.8cm・奥行き46.5cm・高さ15.1cmの大型の製品で、柾目の厚板を加工して製作している。盤上部の四周には、約2cmの高さで縁が作り出されている。各脚部は、盤の幅の方向に長い長方体状に削り出され、幅方向の内側の下半部が弧状に削りとられている。

ヘラ状木製品L-37は、全長29.2cm・身部幅5.6cmの羽子板状を呈する製品である。柄部と身部の境は八字状になり緩やかな肩部が形成されている。厚さは柄部で8mm・身部で4mmと比較的の薄手の製品である。

用途不明の木製品L-35は、残存長35.8cmのヘラ状の製品で、身部の先端に短い3本の歯状の突起が作られている。基部は欠損しているが、長い柄が付いている。ヘラ状の身部の幅は6.5cmほどあり、身部から柄部にかけては徐々に幅が狭くなり、柄部との境は不明瞭である。L-36は全長約54.3cmの丸く削り出された芯無し材で、片側の端部は一度肥大して太くなっているから先端に向かって槍先状に加工され、反対の端部はバットのグリップエンドのように肥大している。L-39は、全長36.1cm・幅29.7cm・厚さ3.6cmの台形状の板材で、狭端と広端の差は少ない。側面には切断のための加工痕跡が残っている。何らかの未製品と思われる。背面側の中央付近には、直径9cm前後の円形に焦げ跡がある。L-45は、長さ23.4cm・直径3cm前後の芯持ちの丸材で、両端はやや捩れた位置で斜めに切断されている。側面と片側の木口には、約12cmの間隔で、直径1.2~1.5cmの円筒状の穴が同一軸上に並んで存在する。

材には建築材（L-51）・角材9点（L-43・44・47・49・52・53・55・58・70）・柾目板2点（L-42・48）・板目板（L-59）・分割材2点（L-56・60）・半截丸材（L-57）・丸材3点（L-46・50・54）がある（第34~36図）。建築材と考えられる材L-51は、残存長138cm・幅24.5cm・厚さ2.7cm前後の柾目の板材である。残存する片側の木口部は、材の中央部と比べると両側面から狭くなるように加工され、さらに三角形の切り込みを入れることによって、板状の突起部と、この突起から反対側の側面に向かって広がるように加工されている。突起の基部には長さ5.2cm・幅1.5cmの長方形の孔があけられており、他の部材と組み合わされて機能したことを示している。

角材L-43は、現存長128cm・幅5.6cm・厚さ3.4cmのやや扁平な角材で、全面が割り面である。L-44は、現存長42.8cm・幅3.5cm・厚さ2.7cmの材で、片側の端部が焼けている。側面は割り面が大部分を占めているが、角の一部分が面取り状に加工されている。L-47は、残存長10.1cm・幅3.8cm・厚さ3.4cmの材で、断面形は扇丸形を呈する。現存部の大部分が焼焦げているが、焼けていない部分は加工されており、木口部分には加工痕跡が残っている。L-49は、現存長59.0cm・幅5.9cm・厚さ3.5cmの材で、片側の端部付近は焼けている。幅の広い側面の片面には全面に加工痕が残っている。L-52は、現存長84.0cm・幅5.5cm・厚さ5.3cmの材で、3面が割り面・1面が樹皮を剥いた面となっている。L-53は、現存長24.5cm・幅7.2cm・厚さ5.2cmの変則的な形状の材である。側面の一部に加工痕がある。残存する木口には、幅の広い側の両側面からに切斷のための加工が行われている。L-55は、全長20.0cm・幅8.4cm・厚さ6.4cmの短い材である。側面は隣合って加工された2面と割り面のままの2面がある。木口面は両端とも加工されており、片側は側面に対して直角に加工され、他方は狭い方の両側面から加工されて鋭角的に尖っている。L-58は、現存長26.4cm・幅2.5cm・厚さ2.3cmの細い角材で、側面は全面が割り面からなる。L-70は現存長8.5cm・幅5.5cm・厚さ3.5cmの角材の断片で、側面の1面から木口にかけて加工の痕跡がある。

極目板L-42は、全長41.0cm・幅24.5cm・厚さ2.7cmの板材である。両面に割面が残り、厚さも不均一な材で、片方の木口は折れている。L-48は、残存長33.3cm・幅5.0cm・厚さ1.3cmの極目板で、幅・厚さとも均一に加工されている。端部が残存する片側の木口は、弧状に汚曲して加工ないし切斷されている。

板目板L-59は、現存長12.9cm・幅7.7cm・厚さ2.1cmの両面に加工痕跡のある板材である。側面は、割り面のままである。片方の木口は、端部付近が薄くなるように加工され、木口面は切斷の痕跡がある。他方の木口は焼け焦げている。

分割材L-56は、現存長24.3cmの芯無しの分割材で、先端を5面から杭先状に加工してある。他方の木口は焼け焦げている。L-60は、現存長65.7cm・幅8.2・厚さ5.5cmのミカン割状の分割材で、側面は全面が割り面のままである。片側の木口には、切斷痕跡と観察される加工痕が認められる。

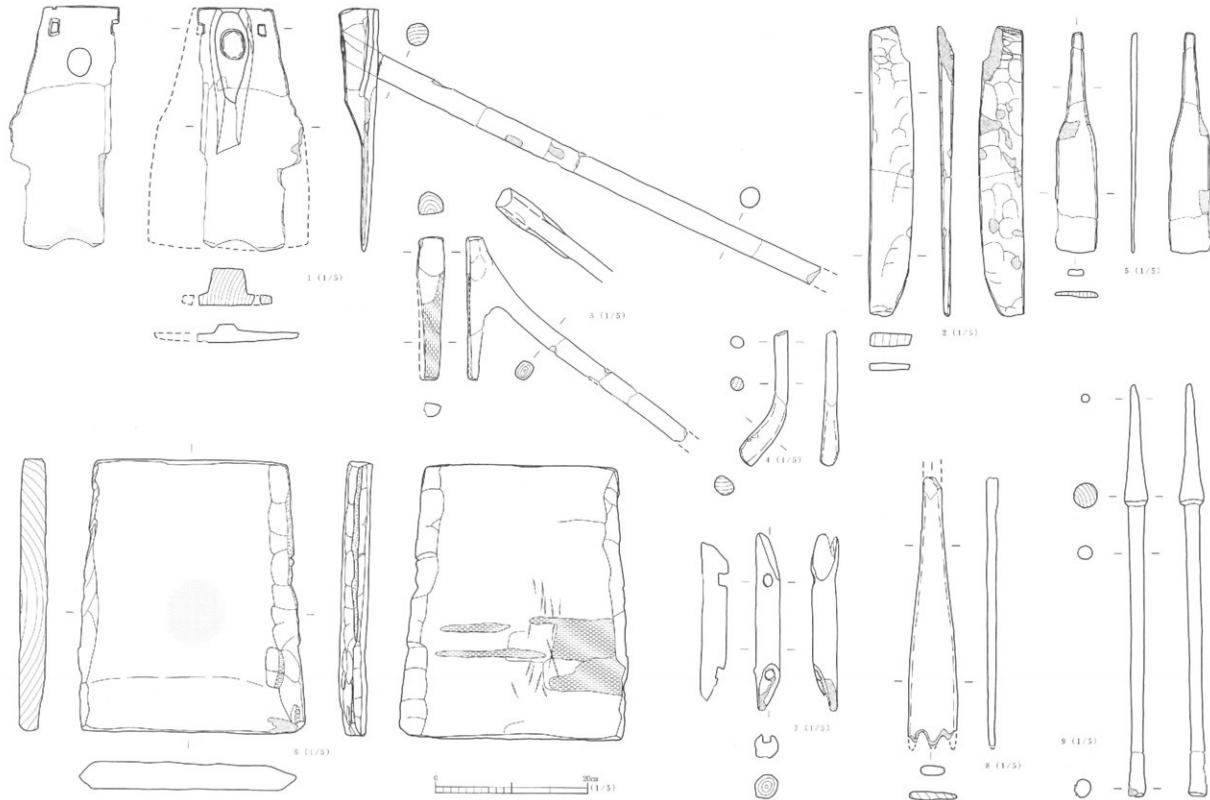
半裁丸材L-57は、全長17.8cm・直径5.7cmほどの丸材を縱に半分に割ったもので、両方の木口には切斷痕跡のほか側面からの粗い加工がある。

丸材L-46は、直径3cm前後、長さ58.6cmの材で、片方の木口に1方向からの切斷痕がある。他方の木口は焼け焦げている。L-50は、直径6cm前後、長さ約160cmの材で、両端に加工がある。片方の木口は、やや鈍い角度で杭先状に加工または切斷されている。他方の端部は、直径の半分ほどを、長さ13.5cmに渡って欠き取って段差を作り出している。L-54は、直径4.5~5cm・長さ31.8cmの丸材で、片方の端部は鋭角的な杭先状の加工が施され、他方は丸みを持った鈍角に切斷または加工されている。側面は焼け焦げが顕著である。

杭には、角杭4点（L-63・67・68・69）と丸杭4点（L-62・64・65・66）がある（第36・37図）。

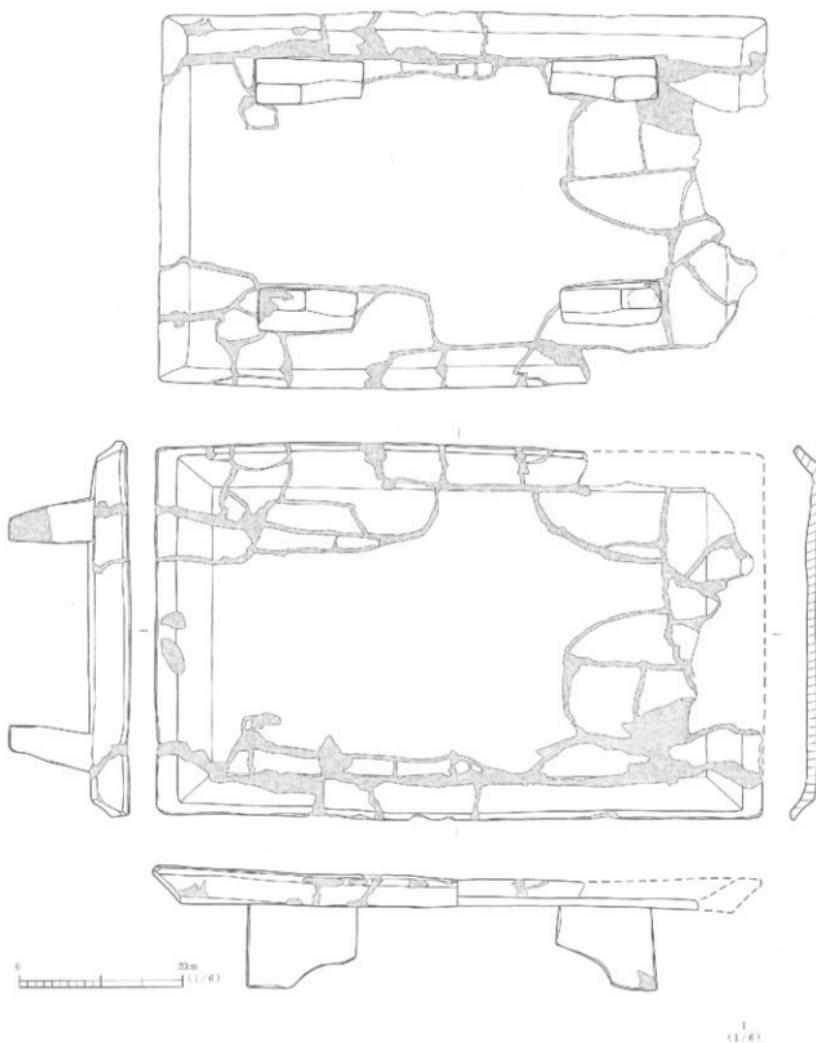
角杭L-63は、現存長80.6cm・最大幅7.5cmの四角柱状の杭で、側面は全面が割り面である。先端は取り上げの際に崩壊したために欠損している。L-67は、現存長96.9cm・最大幅11.7cmの角材で、上下両端を欠損している。残存部の4面は、全てが割り面となっている。L-68は、現存長85.6cm・最大幅が10.7cmの角材を杭としている。側面は4面とも割面のままである。L-69は、長さ111.3cm以上・最大幅8cmの角柱状の杭である。上部側は次第に薄くなって、板状を呈している。側面は全面が割り面である。先端は欠損している。

丸杭L-62は、現存長19.3cm・直径4cm前後の杭材で、先端に1方向からの切斷痕跡がある。杭上部は欠損している。L-64は、現存長23.8cm・直径4~5.5cmの枝打ち痕のある杭材で、上部および中程を欠損している。焼け焦げて細くなった部分を先端としている。L-65は、全長85.7cm以上の直径5cm前後の杭材である。先端は多面から削られているが、削りの角度および深さが浅いため、鋭角的な杭先とはならず、本体よりやや細くなっている程度である。L-66は、直径4.5cm前後の杭で、98cmの長さで残存している。先端は前後2方向から鈍角に加工されて



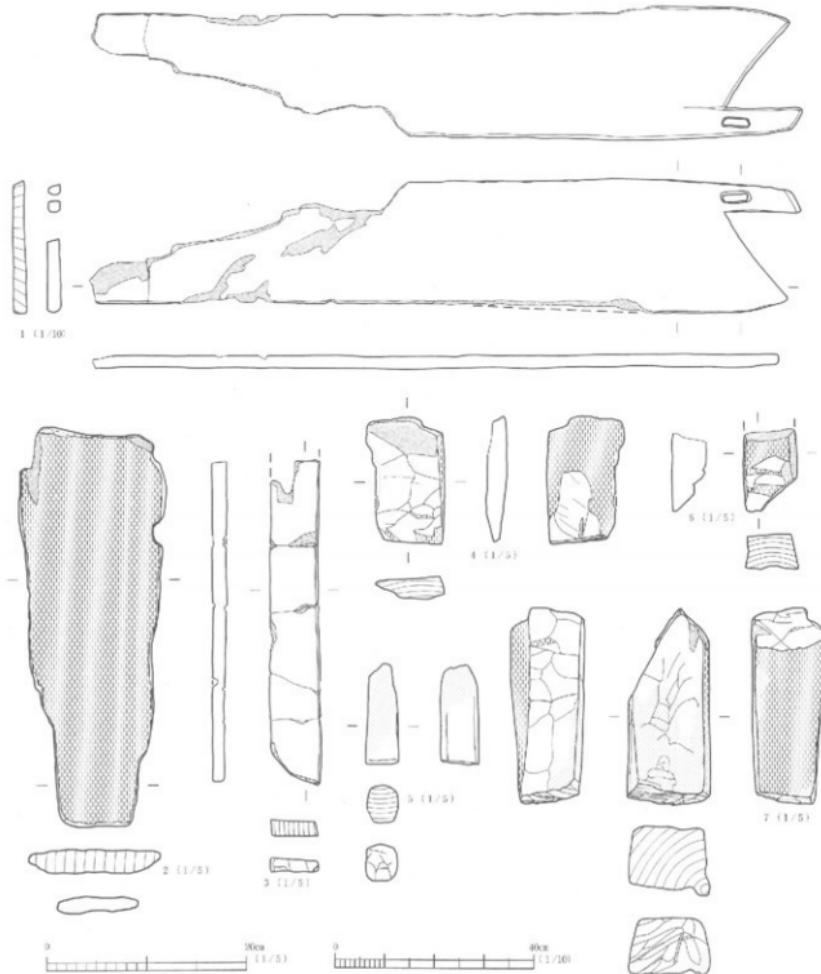
| 参考文献出土地点 基本層出土遺物 清掃解剖番号 種類 製造 全長 厚さ 特徴 | | | | | | | | | | 参考文献出土地点 基本層出土遺物 清掃解剖番号 種類 製造 全長 厚さ 特徴 | | | | | | | | | |
|--|------|----|---------|-----|---------|------|---------|--------|--------|--|-----|-------|------|------|-----|-------|----|----|------|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | L-61 | 4次 | S R - 1 | 12層 | 木・木製平裏 | 31.8 | 木製大刀形刀身 | 木・木製刀身 | 木・木製刀身 | 27.5±0.5 | 1.5 | 厚さ1mm | 38.1 | 29.7 | 3.6 | 板状未製品 | クリ | 板目 | 40-4 |
| 2 | L-38 | 4次 | S R - 1 | 12層 | 木・木製二叉器 | 38.3 | 5.7 | 2.0 | 木製鐵鉗 | 木製鐵鉗 | 3.0 | 不明 | 23.4 | 3.0 | 3.1 | 円錐加工 | クリ | 板目 | 40-3 |
| 3 | L-34 | 4次 | S R - 1 | 12層 | 木・木製・漆柄 | 39.1 | 木製刀身 | 木製刀身 | 木製刀身 | 29.0±0.5 | 2.0 | 厚さ1mm | 35.8 | 6.4 | 1.5 | 刀頭三本筋 | クリ | 板目 | 40-2 |
| 4 | L-40 | 4次 | S R - 1 | 12層 | 木・漆柄 | 17.9 | 木製刀身 | 木製刀身 | 木製刀身 | 20.5±0.5 | 1.5 | 厚さ1mm | 34.4 | 3.2 | 3.0 | 丸錐孔先端 | クリ | 漆無 | 40-1 |
| 5 | L-37 | 4次 | S R - 1 | 12層 | 木・木製 | 29.2 | 5.6 | 0.8 | 木製刀身 | 木製刀身 | 2.5 | 不明 | 38.2 | | | | | | |

第32図 第4次調査区河川跡12層出土製品類1



第33図 第4次調査河川跡12層出土木製品類2

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物種 | 取上番号 | 移別・当種 | 全長 | 最大幅 | 高さ | 特 | 數 | 樹種 | 木取り写真図版 |
|----|------|-----|-----|------|-----|--------|-------|------|------|------|-------------|---|-----|---------|
| 1 | L-41 | 4次 | | SR-1 | 12層 | 木・No.8 | 木・四脚盆 | 74.8 | 46.5 | 15.1 | 脚先端の内側に欠き取り | 1 | ケヤキ | 板目 39-1 |



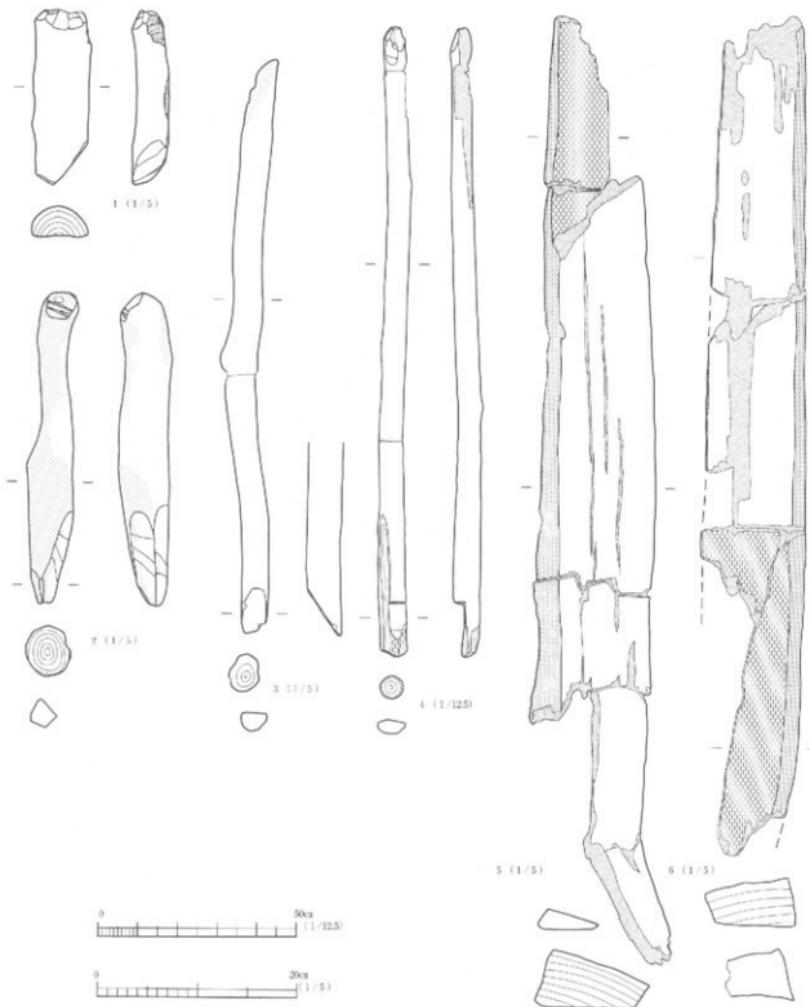
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本型 | 出土遺物 | 測量値 | 取上番号 | 種類・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 標種 | 本取り | 写真図版 | | | |
|----|------|-----|------|------|---------|--------|-------|------|-----|--------|-----|------|----|------|-------|-----|------|------|
| 1 | L-51 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.36 | 材・建築材? | 138.0 | 24.5 | 2.7 | 11.5 | 1.5 | 12#筋 | 柱脚 | 柱脚有り | 柱脚孔有り | 柱脚 | 柱目 | 41-1 |
| 2 | L-42 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.10 | 材・板材 | 41.0 | 14.8 | 1.4 | | | | | | | | 板目 | 40-5 |
| 3 | L-48 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.29 | 材・板材 | 33.3 | 5.0 | 1.3 | 片端加工 | | | | | | 板目 | 41-2 | |
| 4 | L-59 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.51 | 材・板材 | 12.9 | 7.7 | 2.1 | ケズリ加工 | | | | | | 板目 | 41-3 | |
| 5 | L-47 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.26 | 材・角材 | 10.1 | 3.8 | 3.4 | 片面削丸方形 | | | | | | 芯脚角 | 41-5 | |
| 6 | L-70 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.27 | 材・角材 | 8.5 | 5.5 | 3.5 | 頭部削丸有り | | | | | | 芯脚角 | 41-4 | |
| 7 | L-55 | 4次 | SR-1 | 12#筋 | 材・No.27 | 材・角材 | 20.0 | 8.4 | 6.4 | 両端削丸 | | | | | | 芯脚角 | 41-6 | |

第34図 第4次調査区河川路12層出土木製品類3



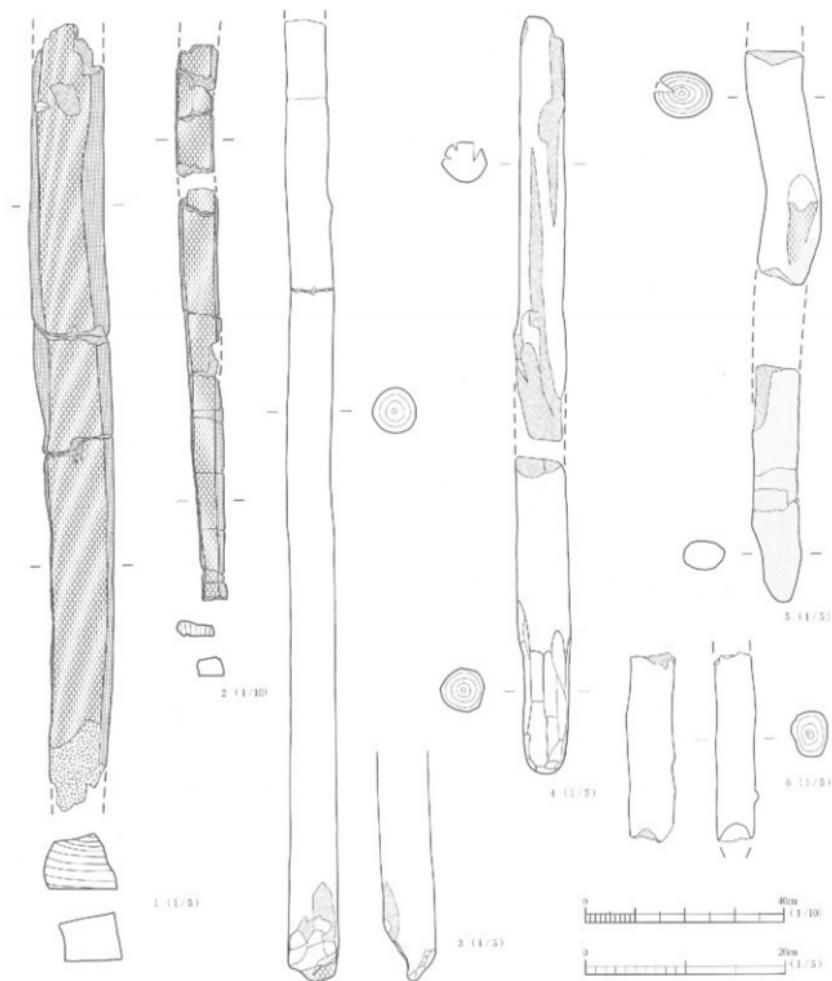
| 番号 | 登録番号 | 出土箇所 | 基本構成 | 出土遺物(遺物名) | 取上番号 | 種別 | 器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 級 | 樹種 | 木取り写真図版 |
|----|------|------|-------|-----------|-------|-------|-----|-----|----------------|----|----|-----|------|---------|
| 1 | L-53 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na18 | 材・角材 | 245 | 7.2 | 5.2 | 非工有り | | | | 芯無角 | 41-7 |
| 2 | L-49 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na50 | 材・角材 | 59.0 | 5.9 | 3.5 | 背面に加工有り、片端焼痕 | | | | 芯無角 | 42-1 |
| 3 | L-44 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na16 | 材・角材 | 42.8 | 3.5 | 2.7 | | | | 芯無角 | 42-5 | |
| 4 | L-58 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na30 | 材・角材 | 26.4 | 2.5 | 2.3 | タスリ加工 | | | | 芯無角 | |
| 5 | L-43 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na7 | 材・角材 | 128.0 | 5.6 | 3.4 | | | | 芯無角 | 42-6 | |
| 6 | L-52 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na38 | 材・角材 | 84.0 | 5.5 | 5.3 | 3面焼 | | | | 芯無角 | 42-2 |
| 7 | L-60 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na55 | 材・分断材 | 65.7 | 8.2 | 5.5 | 片端切削痕 | | | | 芯無 | 42-7 |
| 8 | L-56 | 4次 | S.R-1 | 12軒材・Na31 | 材・分断材 | 24.3 | 4.0 | 3.7 | 先端加工、多面一段、片端焼痕 | | | | 芯無 | 42-3 |

第35図 第4次調査区河川跡12層出土木製品類4



| 番号 | 登録番号 | 川上区 | 断面層 | 出土遺物 | 遺物名 | 取上番号 | 地頭・面種 | 全長 | 幅大幅 | 厚さ | 特 徴 | 製 法 | 樹種 | 木取り 方式 |
|----|------|-----|---------|------|--------|--------|-------|------|-----|-----------------|--------|--------|-----|-----------|
| 1 | L-57 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 材・No52 | 材・平裁丸材 | 17.8 | 5.7 | 3.0 | 片筋1面多段、片端多面1段 | | 杉 | 平裁丸 | 42-4 |
| 2 | L-54 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 材・No23 | 材・丸材 | 31.8 | 5.0 | 4.7 | 先筋加工、多面多段、横筋有り | | 杉 | 平裁丸 | 42-8 |
| 3 | L-46 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 材・No21 | 材・丸材 | 58.6 | 3.7 | 3.3 | 先筋加工、上面1段?、片端焼削 | | 杉 | 平裁丸 | 42-9 |
| 4 | L-50 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 材・No14 | 材・丸材 | 159.9 | 7.0 | 6.8 | 先筋加工、多面多段、削皮有り | | 杉 | 平裁丸 | 42-10 |
| 5 | L-67 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 板・No31 | 板・角板 | 96.9 | 11.7 | 5.8 | 先筋加工、無し | | 杉 | 角 | 43-1 |
| 6 | L-68 | 4次 | S R - 1 | 12周 | 板・No31 | 板・角板 | 85.6 | 10.7 | 5.0 | 先筋加工不明 | | 杉 | 角 | 43-2 |

第36図 第4次調査区河川跡12層出土木製品類5



| 番号 | 登録番号 | 出土地名 | 出土層 | 遺物種類 | 形状 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | | 材種 | 木政引 | 写真図版 |
|----|------|------|-------|------|--------|------|--------|-----|------|-----------|-----|------|------|
| | | | | | | | | | 横・角枝 | 手彫加工 | | | |
| 1 | L-63 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.7 | 枝・角枝 | 80.6 | 7.5 | 5.8 | 手彫加工不明 | 芯持丸 | 43-3 | |
| 2 | L-69 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.4 | 枝・角枝 | 80.0 | 8.0 | 3.9 | 手彫加工不明 | 芯持丸 | 43-4 | |
| 3 | L-66 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.6 | 枝・丸枝 | 98.1 | 5.2 | 4.9 | 手彫加工、2面多段 | 芯持丸 | 43-5 | |
| 4 | L-65 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.2 | 枝・丸枝 | 85.7以上 | 5.2 | 4.5 | 手彫加工、多面多段 | 芯持丸 | 43-6 | |
| 5 | L-64 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.8 | 枝・丸枝 | 90.0以上 | 6.0 | 4.7 | 手彫加工 | 芯持丸 | 43-7 | |
| 6 | L-62 | 4次 | S.R-I | 12層 | 枝・No.1 | 枝・丸枝 | 19.3 | 4.6 | 3.8 | 手彫加工、1面? | 芯持丸 | 43-8 | |

第37図 第4次調査区河川跡12層出土木製品類 6

いる。

土製品としては、土鍤（P-1：第31図2）が1点出土している。P-1は、直径3.5cmほどのやや扁平な球形の土鍤である。表面はナデによって簡単に調整され、中央に径7～8mmの円孔があけられている。

10) 13層

13層は、河川跡堆積土の下半部の全体に分布している。調査部分での土質は、黒褐色の砂質粘土層で、ドングリやクルミの実を多量に含んでいる。北壁東部の北岸寄りでは、オリーブ黒色土と黒色土が交互に縦状に堆積している。層厚は、12c層で検出された流木（倒木）の東側と西側で差があり、12c層とは反対に東側で25cm前後と厚く、西側で10cm前後と薄くなっている。

13層は、上述のように層厚も厚く、堅果類などの自然遺物は多量に出土しているが、人骨遺物は少なく、土器器片13点と弥生土器片2点が出土しているだけである。

11) 14層と出土遺物

14層は、植物遺体を多く含む黒色粘土層で、層下部と15層の境には砂を多く含んでいる。河岸面の中程より下位に堆積している。層厚は、河岸面で厚く15～25cm、河川底面では薄くなり5～10cm程度である。

14層からの出土遺物は少ないが、弥生土器（第38図1）、木製品類（第39図）が出土している。

弥生土器B-8は、細い弦線により層波文（連弧文または連續山形文）の描かれた小型の鉢である。これ以外には甕または壺の破片が8点出土している。これらの弥生土器は、舟形團式期に位置付けられると考えられる。

木製品としては、泥除（L-74）・打棒（L-73）・豎杵（L-71）・斧直柄状木製品（L-72）が出土している。L-74は、残存長9.9cm・残存幅13.0cm・厚さ1.0cmの枠材を横木取りした製品である。割れた後、火を受けて焼け焦げている。残存する角部は、木口側が直線的で腹面側は丸みをもって広がっている。また板全体が腹面側に緩やかに湾曲している。この製品については、素材と木取りおよび形態から、泥除の下端部の破片と考えられる。

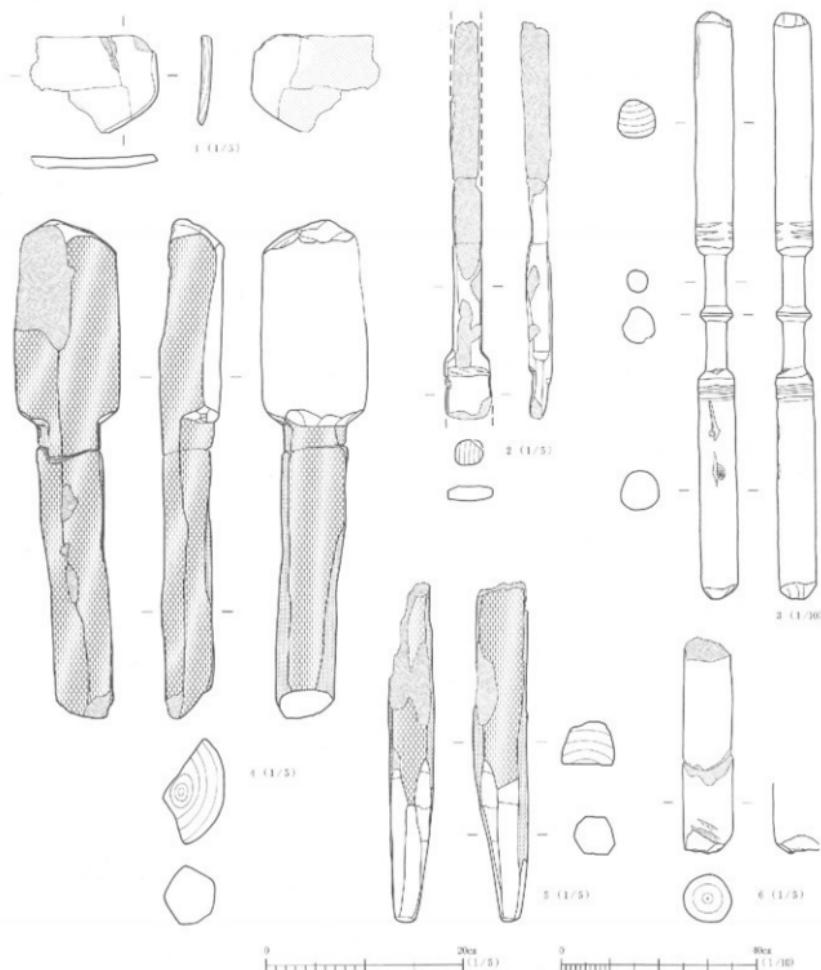
打棒L-73は、身部の上端から柄部の中ほどとの破片で現存長は40.5cmである。柄の基部と身部のほとんどを欠損している。残存部も腐蝕が著しい。柄と身部の境は、肥大化していないが、両側面に明瞭な肩部が形成されて身部側の幅が広くなる。身部は上面側から削り込まれて薄くなっている。

豎杵L-71は、ほぼ完全な状態で残っている。全長は118.7cmあり、撫き部の直径は7.5cm前後である。撫き部と握り部とは明瞭な段差が形成されており、握り部の中央には撫き部径より一回り小さな算盤玉状の隆脊が巡る。撫き部の長さは約46cmと49cmで、両方の握り部側の端部付近には、低い隆脊が2条巡っている。両先端は良く使い込まれてつるつるになっている。

斧直柄状木製品は、第1次調査で出土した石斧の直柄を細くしたような形態の漆塗り木製品（第1次調査II区河川跡15層出土L-266）に付けた名称で、第1次調査ではこのような形態の木製品の未製品（L-955・956・1091）

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物層 | 取上番号 | 科別 | 型種 | 器高 | 口径 | 底径 | (外)面 | 特 | 製(内)面 | 写真箇数 |
|----|------|-----|--------|------|-----|------|-----|----|-----|-----|-----|---------|--------|-------|------|
| 1 | B-8 | 4次 | S.R.-1 | 14層 | | | 有土器 | 鉢 | 4.2 | 3.7 | 1.4 | 層波文 | | | 30-1 |
| 2 | B-9 | 4次 | S.R.-1 | 15層 | | | 有土器 | 甕 | 4.3 | 6.0 | 3.3 | 列弧文 | 植物茎回転文 | ヘラミガキ | 30-2 |
| 3 | B-10 | 4次 | S.R.-1 | 15層 | | | 有土器 | 壺 | 4.4 | 5.9 | | 層波文 | | ナゾ | 30-3 |
| 4 | B-11 | 4次 | S.R.-1 | 15層 | | | 有土器 | 壺 | | | | 肩落ヘラミガキ | 枝文(Ⅱ) | ヘラミガキ | 30-4 |

第38図 第4次調査区河川跡14層～15層出土遺物



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺構別 | 取上番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 劣化種 | 木取り | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-------|--------|------------------------|-----|--------------------|-----|-----|------|-----|------|
| 1 | L-74 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・Na4 | 木・泥炭 | 9.9 13.0 | 1.0 | 先端破片、後端有り | クリ | 板目 | 44-1 | | |
| 2 | L-73 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・Na3 | 木・打込み | 40.5 34.0 | 1.0 | 先端破片、後端有り | クヌギ | 無目 | 44-4 | | |
| 3 | L-71 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・Na1 | 木・製作 | 118.7 72.0×72.7×7.7 | 2.5 | 先端破片、後端有り | クヌギ | 無目 | 44-3 | | |
| 4 | L-72 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・Na2 | 木・削り紙状 | 51.0 36.8 | 0.5 | 先端破片、後端有り | クヌギ | 芯持 | 44-2 | | |
| 5 | L-75 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・Na1 | 木・角丸 | 34.6 5.5 | 4.5 | 先端加工、多面多段、上層からの打込み | クヌギ | 芯無角 | 44-6 | | |
| 6 | L-76 | 4次 | SR-1 | 14層 | 木・丸丸 | 木・丸丸 | 22.1 5.1 | 4.9 | 先端加工、多面1段 | クヌギ | 丸丸 | 44-3 | | |

第39図 第4次調査区河川跡14層出土木製品類

も出土している。斧直柄状木製品と斧直柄とは、形態の相違とともに素材の選択も異なり、斧直柄はクヌギ館が選択的に使用されているのに対して、斧直柄状木製品にはイヌガヤなど他の素材が使われている。L-72は、前回の調査で出土した斧直柄状木製品・未製品のさらには前段階の工程と考えられるものである。全長は51.0cmを測る。芯持ちの丸材を半割りし、さらに半割りによってできた角の片側の一部を割り取って断面形が菱形なるように加工している。さらにその後、柄となる部分を割り取って細くした段階のものである。柄部と頭部の境には、割りの進行が頭部に至るのを止めるための加工痕が残っている。

14層では杭は角杭1点（L-75）と丸杭1点（L-76）検出されている。杭L-75は芯無しの角杭で、側面全体が割面であるが、先端部は多面から加工されて尖っている。現存長は34.6cmある。先端の加工痕跡は、角度が浅く平均的な長い面が多いことから、金属製の刃物で加工された可能性が高い。従ってこの杭は上層で打ち込まれたものが、この層で検出されたものと理解される。杭L-76は現存長22.1cmの芯持ちの丸杭で、先端が數カ所から加工されている。切断の角度は鈍角で、加工面は滑らかで、刃が途中で止まることによるハガレの痕跡が認められないことから、金属器による可能性がある。従ってこの杭も14層に伴うものではなく、所属時期は不明である。

12) 15層・15'層と出土遺物

15層は、樹枝片をはじめとする植物遺体を多量に含むオリーブ黒色の粘土層で、河川跡の底面部に堆積する。層厚は10~40cmあり、16層上面の高低により差が生じ、16層上面の高い部分では薄く、低い部分では厚く堆積している。河岸面上部付近では、オリーブ黒色砂質粘土からなる15'層が、10~15cmの厚さで堆積している。15'層は、15層と河岸面の16層などが交じり合って形成されたと考えられる。15'層と16層の境界は、凹凸が著しく不明瞭である。

河岸面上部付近では、オリーブ黒色砂質粘土からなる15'層が、10~15cmの厚さで堆積している。15'層は、15層と河岸面の16層などが交じり合って形成されたと考えられる。15'層と16層の境界は、凹凸が著しく不明瞭である。

15層からの出土遺物としては、弥生土器と木製品類があり、主に河岸底面の15層上部から出土している。

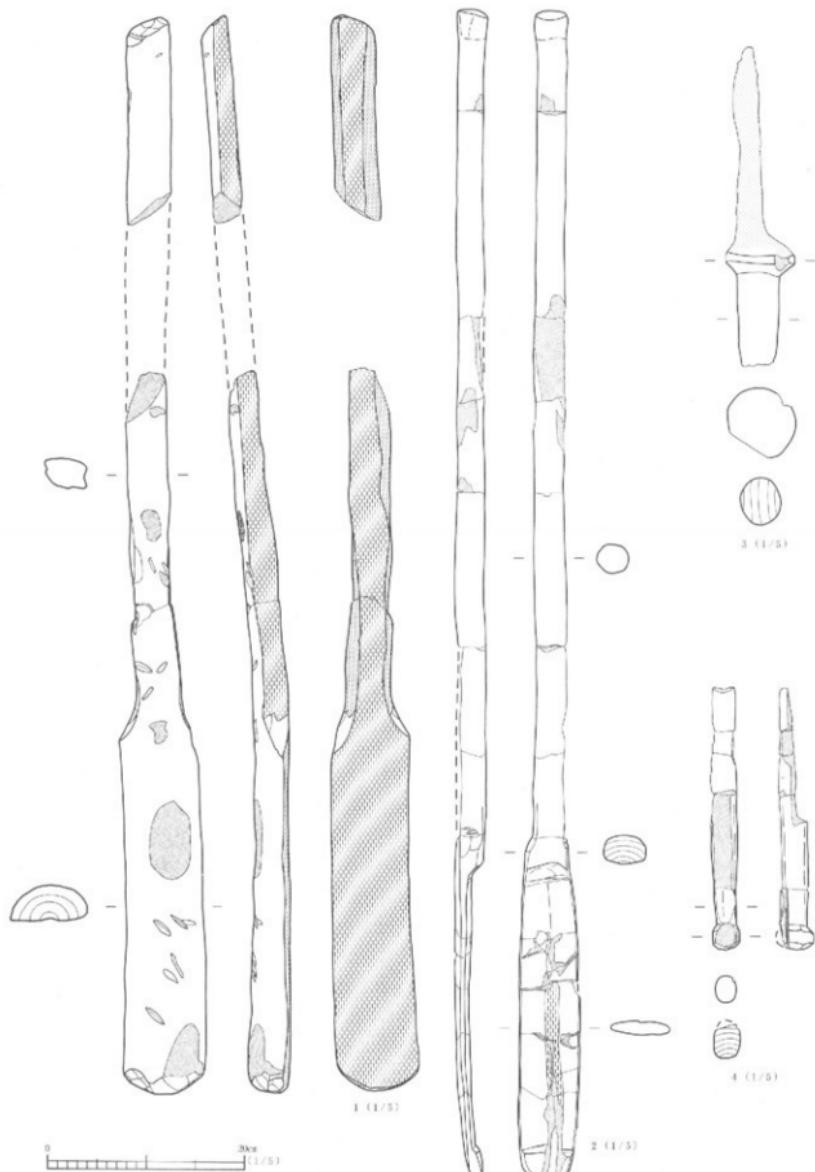
弥生土器は、第38図の3点（B-9・10・11）のほか、斐または壺の破片が11点出土している。B-9は壺の口縁部付近の破片で、頸部に列点文があり、体部と口唇部には植物茎回転文が施されている。B-10は、内部調整がナデのみによることから、高杯の脚部と考えられる破片で、磨り消し手法によって眉波文（波状文）が描かれている。B-11は、壺の肩部から体部上端の破片で、肩部はヘラミガキ調整、体部はL R 純文が地紋として施されている。

木製品類には農具をはじめとする各種木製品と材がある（第40~42）。

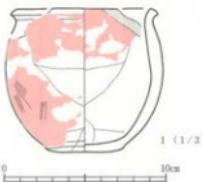
木製品には、打棒2点（L-77・L-84）、堅杵（L-79）、斧直柄（L-81）、斧直柄状木製品（L-80）、ヘラ状木製品（L-82）、漆器鉢（L-78）がある。打棒L-77は、折れているがほぼ完全な状態で出土した。全長119.5cm・柄部長84.5cm・身部長35.0cm・身部幅6.2cmを計る。柄の基部はバットのグリップエンド状に肥大している。柄と身部の境目は、特に肥厚していないが、身部幅との同一方向に広がって、肩部が形成されている。身部の平面形は長楕円形を呈し、下面側に凸面がくるようになっている。身部は上面側から削られて柄の様よりも薄くなっている。身部の先端は、上面側に肥厚するように削り残されている。L-84は、打棒の未製品で、柄部の途中は側溝を掘削した際に失われた。直径8.5cm前後の丸太材を縱に半割にした素材の、柄部と身部の境に削止めの刻みをいれ、柄

第40図 調査表

| 番号 | 登録番号 | 出土地 | 基本形 | 出土遺物 | 遺構編 | 取上番号 | 種別・断面 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | | 成 | 側 | 木取り | 木片 | | |
|----|------|-----|-------|------|--------|-------|-------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| | | | | | | | | | | | 年月日 | 年月日 | 年月日 | 年月日 | 年月日 | 年月日 | | |
| 1 | L-84 | 4次 | S.R-1 | 15層 | 木・No.4 | 木・打棒 | 94.6 | 38.0 | 8.3 | 3.6 | 36.2 | 1. | 4.5 | 3.0 | 木製品 | クヌギ | 半軽丸 | 45-1 |
| 2 | L-77 | 4次 | S.R-1 | 15層 | 木・No.1 | 木・打棒 | 119.5 | 50.0 | 6.2 | 4.1 | 84.5 | 32 | 3.0 | 5.1 | 1.7 | クヌギ | 木片 | 45-2 |
| 3 | L-79 | 4次 | S.R-1 | 15層 | 木・No.3 | 木・堅杵 | 32.6 | 4.8 | 4.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | クヌギ | 芯無 | 45-4 |
| 4 | L-81 | 4次 | S.R-1 | 15層 | 木・No.6 | 木・斧直柄 | 26.9 | 26.9 | 2.7 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | 1.4 | クヌギ | 芯無 | 45-3 |



第40図 第4次調査区河川路15層出土木製品類1



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基木柄 | 出土遺構 | 直横刷 | 取上番号 | 種別・器種 | 器高 | 口径 | 底径 | 特徴 | 樹種 | 木取り | 写真図版 |
|----|------|-----|-----|-------|-----|--------|-------|-----|-----|-----|--------|----|-----|------|
| 1 | L-78 | 4次 | | S R-1 | 15層 | 木・No.2 | 木・鉢 | 8.9 | 9.0 | 4.8 | 内外面塗塗り | トチ | 横 | 45-6 |

第41図 第4次調査区河川跡15層出土木製品類2

部の両側面から削を入れて原形を作った段階のものである。両方の木口には切断段階の鈍角の加工痕がある。また背側の表面には樹皮を剥いた際の石器によるものと推察される工具痕跡が観察される。

堅杵L-79は、握り部の長さ約32.6cmほどの破片で、直径約4cmの握り部の中央付近には直径約7cmの算盤玉状の隆帯が作り出されている。隆帯を挟んで片側の握り部は、焼け焦げて細く痩せている。

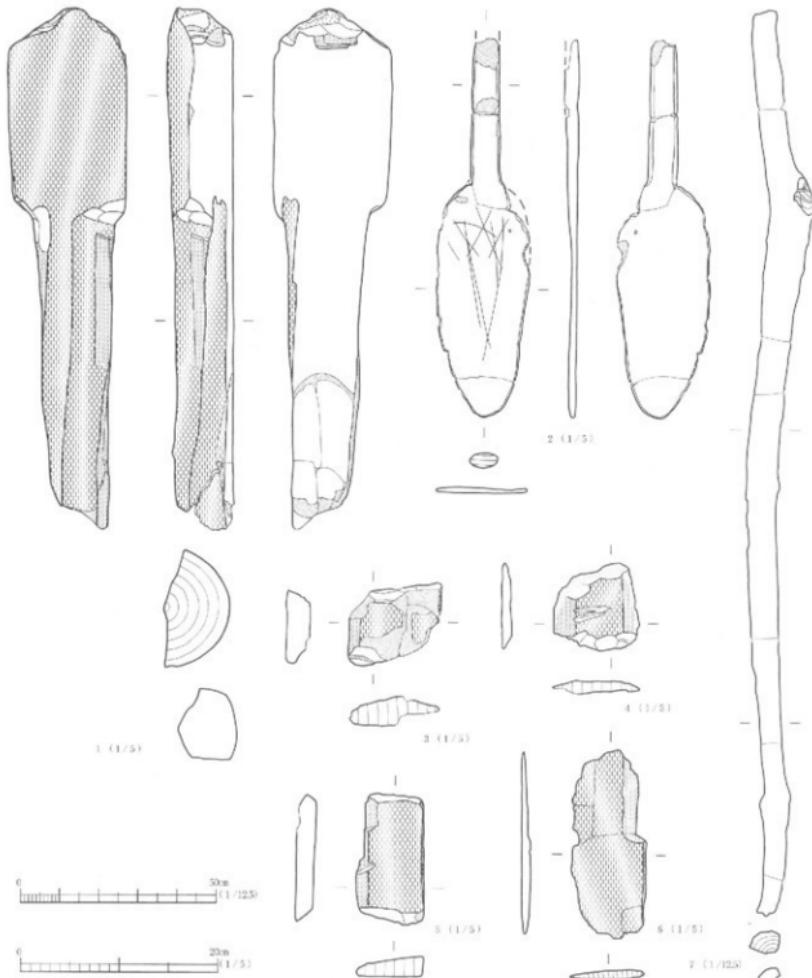
斧直柄L-81は、柄の基部の破片で、破損が著しい。基端部分はバットのグリップエンド状に肥大している。断面形は握り部分・基端部分とも梢円形を呈しており、握り部分で長径2.8cm・短径2.2cmを計る。

斧直柄木製品L-80は、14層出土の斧直柄木製品L-72と類似している原形段階の未製品で、芯持ちの丸材を半割し、さらに半割によってできた角の両側の一部を削取り、さらに柄となる部分を削取って細くした段階のものである。柄部と頭部の境には、削を止めるための加工痕が残っている。頭部側の木口には、切断の際の石斧によるものと思われる加工面の曲彎した加工痕が残っている。反対側の柄部の基端部分は欠損しているが、現存長は53.3cmである。

ヘラ状木製品L-82は、現存長が38.8cmあり、長さ約24cm・幅約9.5cmの木葉形の身部に、扁平な梢円形の柄がついている製品である。身部の縦断面を見ると、中央部分が上下両側よりやや薄く作られている。上下・左右方向に特に反りは認められない。木取りは板目で樹種はトチである。比較的柔らかい樹種で作られていることから、掘削具とは考えにくいので、櫂など別な用途の製品と推察される。なお、この製品の実測図左面（腹面側）には、細い沈線による線刻がある。線刻は、×形を長軸にそって左右対称に組み合わせたものに、弧線を1条足したようなものである。身部側面に沿って刻まれた左右の長い×線と、身部上側中央の×線の組み合わせだけをみると菱形呈し、舟の上面観を連想させる。この菱形は、身部上端側が広くなっているので舟の種側と解釈すると、前記した2つの×線の交点付近から、左右両側の後方に交差する線は、櫂を示したとの理解も可能である。解釈が適当であるかどうかは別として、この線刻には規則性を認めることが出来るので、その性格の解釈については今後の課題である。

漆器鉢L-78は、器高8.7cm・口径12.7cmを計り、全体の1/3程度が残存する。器形は、丸みのある台状の底部から腰部が内湾気味に立ち上がり、体部は縦長の球形を呈する。口縁部は短く外反する。内外面ともに漆と見られる樹脂が塗られている。樹脂は、現在赤褐色を呈す。塗装された部分には、朱色の微細な物質が極く稀に点状に確認できる。

材としては、板材4点（L-83・86・87・88）と半裁丸材1点（L-85）が出土している。板材の4点は、すべて柱目材である。L-83は、長さ19.3cm・幅7.5cm・厚さ0.9cmの両面とも割り面だけの材で、製品加工の際の断片と推定される。L-86は長さ13.5cm・幅7.0cm・厚さ2.0cmの両面が割り面で、両木口面と側面の一部に加工のある材である。L-87は、長さ8.5cm・幅9.2cm・厚さ2.7cmの幅の割に短い材で、両木口面に加工の跡が残っている。両面は割り面である。L-88も、長さ8.7cm・幅8.8cm・厚さ1.3cmのL-87に類似した形態の材で、片側の面には石斧の刃



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基点 | 出土測量 | 測量基点 | 取上番号 | 種別・部種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 記 | 樹種 | 木取り写真回数 |
|----|------|-----|------|------|------|----------|-------|------|------|---------|------|-------------|------------|
| 1 | L-80 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・ナラ板木張合 | 53.3 | 36.8 | 厚2.5 | 表面の斜面有り | 木製品 | ミズキ 芯無 | 45-5 |
| 2 | L-82 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・ハク淡木器品 | 38.8 | 24.0 | 0.5 | 9.5 | 44.8 | 2.6×1.4 | 楓目 46-1 |
| 3 | L-87 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・板材 | 8.5 | 9.2 | 2.7 | 加工痕有り | | 桂目 46-2 | |
| 4 | L-88 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・板材 | 8.7 | 8.8 | 1.9 | 加工痕有り | | 桂目 46-3 | |
| 5 | L-86 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・板材 | 12.5 | 7.0 | 2.0 | 端面加工有り | | 桂目 46-4 | |
| 6 | L-83 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・板材 | 19.3 | 7.5 | 0.9 | 両面削り面 | | 桂目 46-5 | |
| 7 | L-85 | 4次 | SR-1 | 15層 | 木 | 木・半乾丸丸材 | 293.0 | 11.5 | 5.5 | 枝打ち痕有り | | 半乾丸 46-6 | |

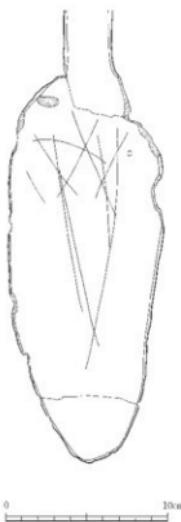
第42図 第4次調査区河川路15層出土木製品類3

形もある。

半裁丸材L-85は、長さ約293cm・最大幅11.5cmの材で、ほぼ中央から2分割されている。両方の木口に切断痕は残っていないが、枝打ちの加工痕跡がある。

13) 16 層

本調査区における16層は、河川跡底面では小礫を含む粗砂層である。河川跡底面の16層上面は水流の浸蝕によるものと理解される凹凸があり、南岸下端寄りの部分が、やや蛇行しながら僅かに低くなっている。河川跡壁面の16層は、灰色系の粘土ないし砂層からなっている。



第43図 ヘラ状木製品L-82線刻実測図

第4章 押口遺跡第3次調査北区の概要

第1節 発見遺構の概要と基本層位

1 北区の位置

第3次調査の北区と南区は、押口遺跡の中央西部に位置する。区画整理前の標高は、水田となっていた南区で4.2m前後、畑地及び道路となっていた北区で4.7m前後である。両区とも第1次調査において検出された河川跡と重複するところにあたる。

押口遺跡で検出された河川跡（S R - 1）は、北西方向から南方向へさらに南西方向へと緩やかに蛇行している。北区は、蛇行部分の攻撃斜面側となる北東側の岸部から河川跡中央近くにかかる調査区である。したがって、調査区内では、西側で河川跡が、東側の河岸部で各種遺構が検出された。

2 基本層位

第3次調査の北区と南区は、区画整理の際の盛土が40~120cmあり、その下に区画整理以前の耕作土層（1a ~ 1d層）が厚いところで約70cm存在する。耕作土層の最下層は、水田耕作上層（1d層）であるが、その後盛土を何度も行って畑地に改変してきたようである。（第46図）

旧耕作土である1層の下は、河岸部分と河川跡部分（河川跡堆積土上部層）では基本層の状況が異なり、河岸部分では河川跡堆積土下部層群（16層）と基盤層（Ⅲ層）が現れ、この面で各種の遺構が検出されている。河川跡部分では、2層以下の黒色系の泥炭質土壤を主体とする堆積土層が検出されている。

調査区北端際の深掘調査区での、河川跡堆積土下部層群（16層）と基盤層（Ⅲ層）の観察によると、16層は、砂質ないし粘土質土壤を主体とし、河川跡寄りでは、150cm前後の厚さで、河川跡堆積土上部層（2~15層）とはほぼ同じように傾斜して堆積している。ただし河岸上部付近では水平に近い傾斜となっている。基盤層であるⅢ層は、灰色系の粘土層・シルト質粘土層・砂層などがほぼ水平に堆積している。基盤層と16層との境界部分では、基盤層が20~30cmの厚さで、ブロック状に何回かにわたって崩落しているのが観察された（Ⅲ層・Ⅲ"層）。

3 発見遺構の概要

1) 溝 跡

溝跡は、調査区の東側で3条検出されている。

S D - 1溝跡 調査区の東端で検出された。検出部の全長は4.5mで、方向はN-28°-Eである。上幅は90cm、深さは28cmである。断面形は舟底状を呈する。底面のレベルは北東部が南西部より10cm高くなっている。堆積土はにぶい黄褐色砂・黒褐色粘土・灰黃褐色粘土の3層に分けられる。堆積土中にビニールが含まれていることから最近埋まったものと考えられる。また、この溝に架かる部分の簡易水道管が鉄パイプの中を通されていることや、溝跡の位置が、区画整理前の道路の側溝と一致していることから、区画整理以前の用水路跡と考えられる。遺物は、水管（雁首N-1）、古銭（寛永通宝N-2）、指抜（N-3）が各1点（第49図）と、須恵器片1点、土師器片8点が出土している。

S D - 2溝跡 調査区の中央部で検出された。検出部の全長は142cmで、方向はN-21°-Wである。上幅は18cm、深さは3cmである。断面形は舟底形を呈する。堆積土はオリーブ灰色細砂。出土遺物はない。

S D - 3溝跡 調査区の中央部で検出された。検出部の全長は72cmで、方向はN-8°-Wである。上幅は26cmで、

深さは4cmである。断面形は舟底形を呈する。堆積土は緑灰色細砂。出土遺物はない。

2) 土 坑

土坑は、調査区東側の河岸部で8基検出されている。

S K - 1 土坑 調査区の中央北端で検出された。擾乱坑により北半分を切られ、S X - 1 を切る。現状の平面形は東西軸155cm の半円形である。深さは40cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土はオリーブ黒色ないし黒色の粘土を主体とし、地山および黒色粘土のブロックを含む。堆積土の状況から人為的に埋められたと考えられる。後述する新しい時期の遺構と推定される S X - 1 を切っていることから、この遺構も新しい時期のものと考えられる。出土遺物はない。

S K - 2 土坑 調査区中央部で検出された。平面形は南北長軸68cm、東西短軸57cm の楕円形である。深さは17cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は黒褐色シルト1層である。遺物は上師器片が1点出土している。

S K - 3 土坑 調査区中央部で検出された。平面形は南北長軸51cm、東西短軸44cm の略円形である。深さは9cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色粘土1層である。出土遺物はない。

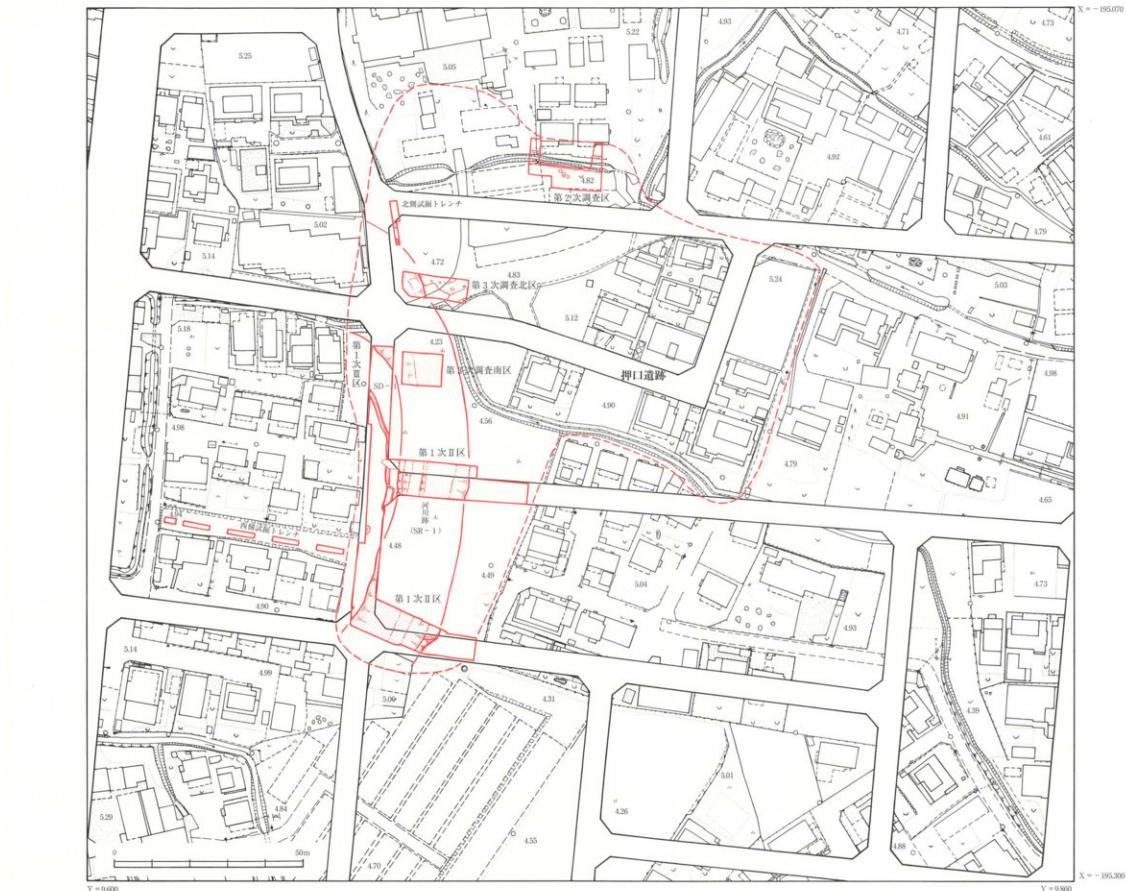
S K - 4 土坑 調査区の東部で検出された。平面形は南北長軸65cm、東西短軸60cm の略円形である。深さは30cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色ないし灰黃褐色のシルト、灰色シルト質粘土の3層に分けられる。遺物は土師器片が10点出土している。

S K - 5 土坑 溝査区の東部で検出された。平面形は東西長軸104cm、南北短軸72cm の隅丸方形である。深さは20cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は暗オリーブ色ないしオリーブ黒色の砂質シルト、暗緑灰色細砂に分けられる。1層は黒褐色シルトのブロックを含むことから人為的な堆積土と考えられる。2層は水の影響と観察される縞状の堆積が認められることから、自然堆積層と考えられる。遺物は上師器の甕が1個体と土師器片が20点出土している。土師器甕(C-1)は壊れてはいるが正立の状態で、土坑の中央から北西側にややよった位置の3層上面より出土した。破片の一部は個体内部及び3層上面付近に落下していた。C-1(第49図5)は、球形の体部に外反する口縁がつき、底部は台状である。外面は口縁部がハケメ後ヨコナデ、体部がハケメ調整。内面は底部がハケメ、体部がヘラナデ、「口部がハケメ後ヨコナデ調整されている。器形や調整の特徴から塩釜式窯のものと考えられる。外面体部には炭化物が付着している。

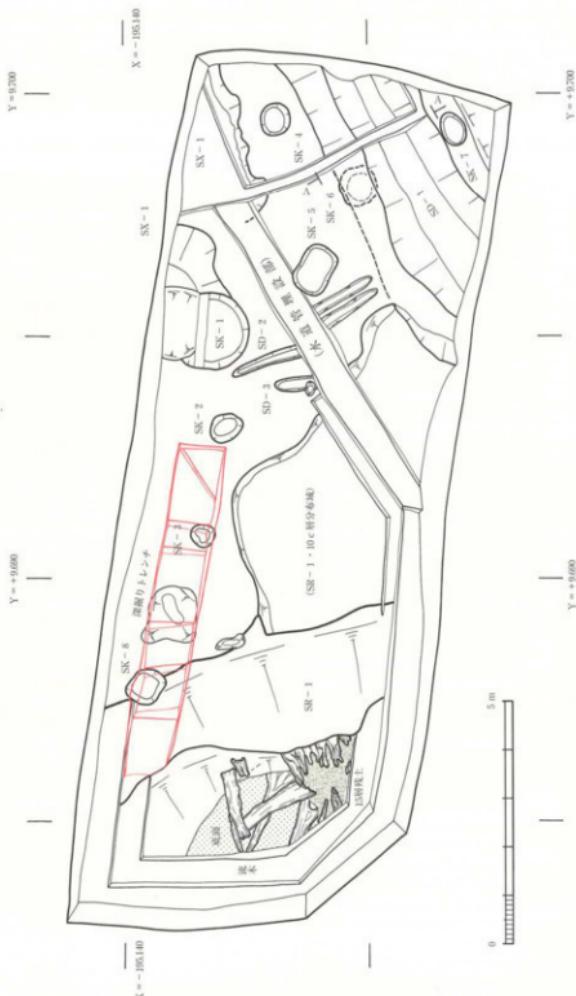
S K - 6 土坑 調査区の東部で検出された。南側の上部をS D - 1 に切られている。平面形は東西長軸79cm、南北短軸75cm の不整円形である。深さは33cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は灰白色火山灰、黒色粘土質シルト、黒褐色粘土、黒褐色シルト質粘土の4層に分けられる。遺物は上師器片5点、ロクロ土師器片1点が出土している。

S K - 7 土坑 調査区の東端で検出され、北側の上部をS D - 1 に切られている。平面形は東西長軸68cm、南北短軸52cm の楕円形である。深さは17cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトの1層である。遺物は上師器片が5点出土している。

S K - 8 土坑 河川跡を12層上面まで掘り下けた段階で河岸斜面上端から河岸面にかけてのところで検出された。平面形は東西長軸87cm、南北短軸65cm の不整形である。深さは51cmで、断面形は不整な逆台形を呈する。堆積土は黒色ないし黒褐色のシルトを主体とし、にぶい黄褐色粘土のブロックを多く含む。人為的な埋土と考えられる。遺物は土師器鉢(C-2: 第49図4)が1個体と土師器片が3点出土している。C-2は口縁の一部を欠損するがほぼ完形である。口縁部が南方を向いて倒れた状態で、土坑の中央より北西側にややよった位置から出土した。3層上面付近より出土したが意図的に埋められたものが埋土中に混入したものか判断できない。口縁部と体部の境がくびれ、口縁は外傾して大きく広がる。底部は台状となっている。外面は体部から口縁までハケメ調整。内面は体



第44図 押口道路第3次調査北区の概要



第45図 押口遺跡第3次調査北区平面図

部がヘラナデ、口縁部がヨコナデ調整されている。外面には炭化物が付着している。全体にやや粗雑な作りではあるが、器形の特徴から塩釜式期のものと考えられる。

3) その他の遺構

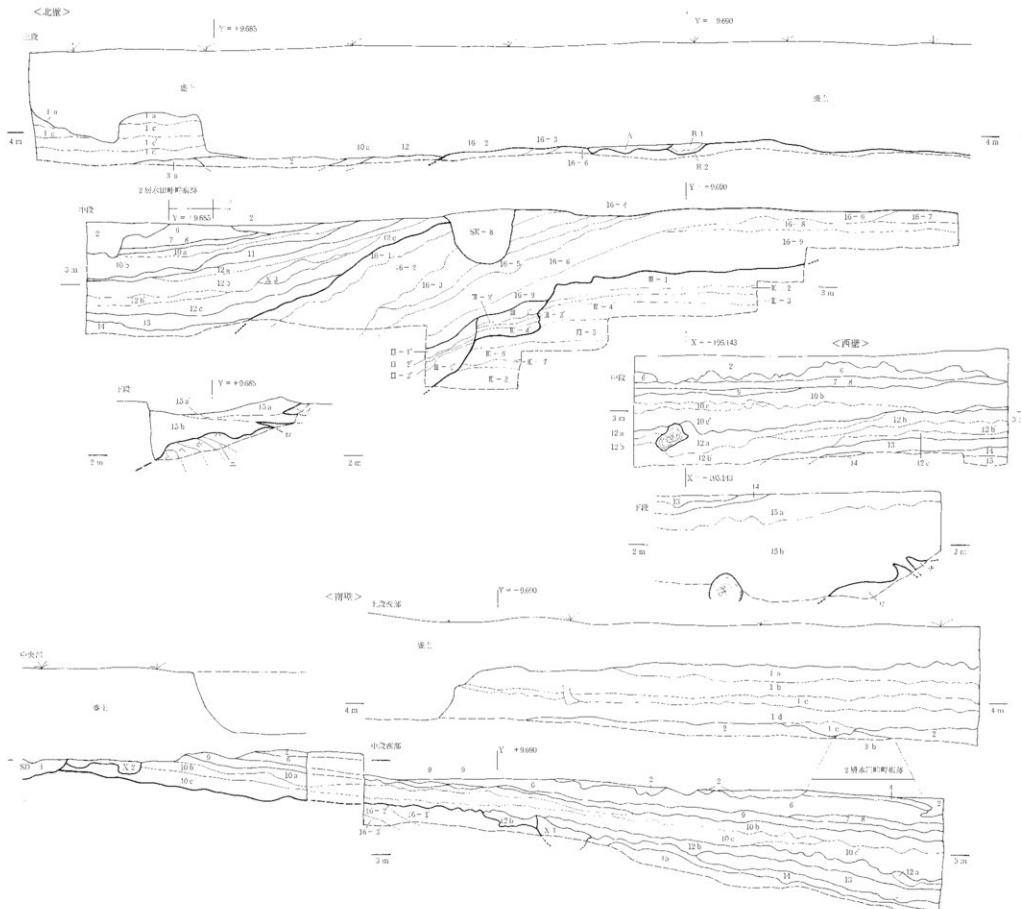
SX-1遺構 調査区東部の北端で検出され、北東部は調査区の外にのびている。東部は北東方向に延びる水道管

第46回土層注記

| 上層No | 土 色 | 土 質 | 備 考 |
|-------|------------------|-------|----------------------------------|
| 1 a | 10YR2/2 黒褐色 | 砂質シルト | 区画整理事業に伴う地盤 |
| 1 b | 10YR3/2 黒褐色 | シルト | 層中央に褐色粘土、下部に黒褐色粘土を帯状に含む |
| 1 c | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 褐色土粒・緑灰色土粒をまばらに含む。耕作土(細) |
| 1 c' | 10YR2/3 にほい・黄褐色 | 粘土 | 褐色粘土上のブロックを含む |
| 1 d | 10YR4/1 黒褐色 | 粘土 | 無機物を網陣状に含む。ゴム片を含む。水田耕作土 |
| 1 e | 10YR4/1 黒褐色 | 粘土 | 黒褐色土のブロックを含む |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 1層(底面)及び6層(浅底)のブロックを多く含む。木田耕作土 |
| 3 a | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 3 6層、4 初、6 層のブロックを多く含む。木田耕作土 |
| 3 b | 10YR1/7 田色 | 泥炭質粘土 | 未分離の植物遺体を多く含む |
| 4 | 2.5YS/2 灰白色 | 火山灰 | 「灰白色火山灰」915年降下 |
| 6 | 7.5VR2/2 黒褐色 | 泥炭質粘土 | 未分離の植物遺体が極めて多量に堆積 |
| 7 - 8 | 7.5YR3/1 黒褐色 | 粘土 | 未分解の植物遺体を多く含む |
| 9 | 10YR2/1 黒色 | 粘土 | 未分離の植物遺体を多く含み、場所によっては泥炭質粘土化 |
| 10 a | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 北岸側では砂の混入が多くなり、砂質土塊に変化 |
| 10 b | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質砂 | 土塊化が多く含む。河岸部に広く分布し、中央部にモリーフ土を含む |
| 10 c | 5G4Y3/1 暗オリーブ灰色 | 砂 | 土塊化を多く含む。河岸部に広く分布し、モリーフ土のブロックを含む |
| 10 c' | 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 | 砂 | 土塊化を多く含む。河岸部に広く分布し、モリーフ土のブロックを含む |
| 11 | 7.5YR2/1 黒色 | 泥炭質粘土 | 河岸部に分布。河岸部では粘土に変化 |
| 12 a | 7.5YR3/1 黒褐色 | 泥炭質粘土 | 河岸部では粘土から砂質シルトへ変化 |
| 12 b | 2.5Y4/2 明灰褐色 | 粘土 | 成層粘土を提供する多量に含む。未分解の植物遺体を多く含む |
| 12 b' | 10YR2/2 黒褐色 | 粘土 | 未分解の植物遺体を多く含む。褐色粘土を複数・複数に含む |
| 12 c | 10YR2/2 黒褐色 | 泥炭質粘土 | 河岸部には暗褐色粘土を輪状に含む |
| 13 | 2.5Y3/2 黑褐色 | 粘土 | 未分解の植物遺体を多く含む |
| 14 | 10YR2/1 黑褐色 | 泥炭質粘土 | 部分的に層下部に砂を粘土に含む |
| 15 a | 7.5YR3/2 オリーブ灰色 | 粘土 | 未分解の植物遺体を多く含む |
| 15 a' | 2.5Y4/2 緑灰黑色 | 泥炭質粘土 | |
| 15 b | 5Y4/2 暗オリーブ色 | 粘土 | 植物遺体(樹木の樹幹を含む)を多く含む |

| 下層No | 上 色 | 下 色 | 土 質 | 備 考 |
|----------|---------------|--------|------------------------|-----|
| 16 - 1 | 暗褐色3.5m高さ範囲 | 粘土 | | |
| 16 - 2 | 2.5Y3/2 暗灰褐色 | 粘土 | 下部はオリーブ灰色に変化 | |
| 16 - 3 | 2.5Y3/1 黑褐色 | 粘土 | 下部はオリーブ灰色の砂質粘土に変化 | |
| 16 - 4 | 2.5Y3/1 暗褐色 | 粘土質砂 | 灰化物質を含む | |
| 16 - 5 | 10YR1/2 暗灰褐色 | 粘土 | 砂を含む。下部はオリーブ灰色に変化 | |
| 16 - 6 | 2.5Y3/1 暗褐色 | 砂 | 粘土を構成に部分的に含む | |
| 16 - 7 | 2.5Y3/1 暗褐色 | 砂質粘土 | | |
| 16 - 8 | 2.5Y3/1 暗褐色 | 砂質粘土 | 灰化物をまばらに含む | |
| 16 - 9 | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 砂 | 砂を層状に筋の形で含む。灰化物を部分的に含む | |
| 16 - 1 | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土 | 上部に暗緑色粘土が分布 | |
| 16 - 2 | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土 | | |
| 16 - 3 | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土質砂 | | |
| III - 1 | 10Y4/1 灰色 | 粘土 | | |
| III - 2 | 7.5GY3/1 黒褐色 | シルト質粘土 | | |
| III - 3 | 7.5Y4/1 黑色 | シルト質粘土 | | |
| III - 4 | 10Y3/1 灰色 | 砂 | | |
| III - 5 | 7.5GY4/1 暗褐色 | シルト質粘土 | | |
| III - 6 | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土 | | |
| III - 7 | 7.5Y4/1 暗褐色 | 粘土 | | |
| III - 8 | 10Y3/1 灰色 | 砂質粘土 | | |
| III - 1 | | | | |
| III - 2 | | | | |
| III - 3 | | | | |
| III - 4 | | | | |
| III - 1* | | | | |
| III - 2* | | | | |
| III - 3* | | | | |
| III - 4* | | | | |

| 下層No | 土 色 | 下 色 | 備 考 |
|-------|---------------|------|--------------------|
| X1 | 2GY3/1 黑色 | 粘土 | モリーフ黒色土のブロックを少々含む |
| X2 | 2GY3/1 黑褐色 | 粘土 | |
| X3 | 7.5GY3/1 黑色 | 砂 | 調査区北部の河岸部にのみ分布 |
| A | 10YR4/1 暗褐色 | 粘土 | にほい黄褐色土のブロックを多量に含む |
| B - 1 | 10YR2/1 黄色 | 粘土 | |
| B - 2 | 10YR4/1 暗褐色 | 粘土 | にほい黄褐色土のブロックを少々含む |
| E | 2GY3/1 暗褐色 | 粘土 | |
| F | 10Y3/1 灰色 | 粘土 | |
| G | 10Y4/1 灰色 | 粘土 | |
| H | | | |
| I | SG15 1 暗オリーブ色 | 砂質粘土 | |
| J | 2GY3/1 黑褐色 | 砂質粘土 | 植物遺体を多量に含む |
| K | 2GY3/1 暗褐色 | 粘土 | 植物遺体を含む |
| L | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土 | 植物遺体を含む |
| M | 2GY3/1 暗オリーブ色 | 粘土 | 植物遺体を含む |
| N | 10Y3/1 暗褐色 | 粘土 | 植物遺体を含む |

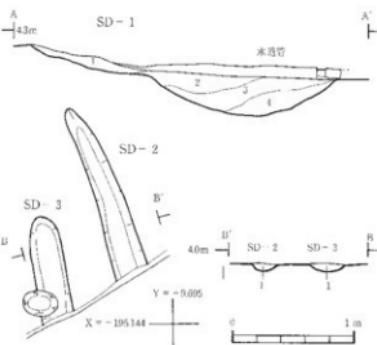


第46図 押口遺跡第3次調査北区土層断面図

と北西方向に延びる簡易水道管の埋設により、西部は搅乱土とSK-1土坑により削平されている。検出部の全長は4.6m。深さは西部で80cm、東部では30cmあり壁面は緩やかに上がっている。堆積土は黒褐色ないし黒色のシルトと灰色と黒褐色の粘土に大別される。北壁断面では、堆積土が標高4.4m付近まで立ち上がり他の遺構に比べて浅い所から掘り込まれていることや、堆積土が1層に類似すること、堆積土の下部に未分解の初穀が含まれていることなどから、新しい時期の遺構の可能性が高い。

遺物は須恵器片1点、土師器片が20点出土している。

| 層番号 | 土色 | 土質 | 側面 | 参考 |
|--------|-------------------|-------|-----------------------|----|
| SD-1-1 | 2.5Y3/1 黒褐色 | シルト粘土 | 水道管より方塊め上 | |
| SD-1-2 | 10Y3/4-15Y3/6 黒褐色 | 砂 | 瓦窯場砂を含む、ラン・ジン・ビニールを含む | |
| SD-1-3 | 10Y2/2 黑褐色 | 粘土 | に含む、黄褐色の砂をまぶらに含む | |
| SD-1-4 | 10Y4/2-3灰黒褐色 | 粘土 | | |
| SD-1-5 | 10Y3/2-1-7灰白 | 細砂 | 黄褐色砂を霜降状に含む | |
| SD-1-6 | 7.5G7/5-1灰褐色 | 細砂 | 黄褐色砂を霜降状に含む | |



第47図 溝跡実測図

第2節 河川跡の堆積土と出土遺物

1 河川跡の基本層位

押口遺跡3次調査北区では、調査区の西部で河川跡の北東岸上部から北東側の河川底面が検出された。幅約25mと推定される河川跡のうち、調査したのは北東側の岸から幅約4.5mの範囲である。底面が検出されたのは、河川跡の極一部で、調査の大部分は河岸斜面の堆積土層である。(第45図)

押口遺跡3次調査北区河川跡の基本層位は、中在家南遺跡第1・4次調査で検出された部分や、押口遺跡の1次調査で検出された河川跡の堆積土層の層序と基本的に一致し、2~15層に分けられる。ただし、次項で詳述するように、7層と8層に対応する層序にある堆積層の場合は、両者を区別することができなかった。また、10層に対応する堆積土は、この地区では他の地区に比べて砂を含む土砂の堆積が著しく、層がいくつかに細分された。

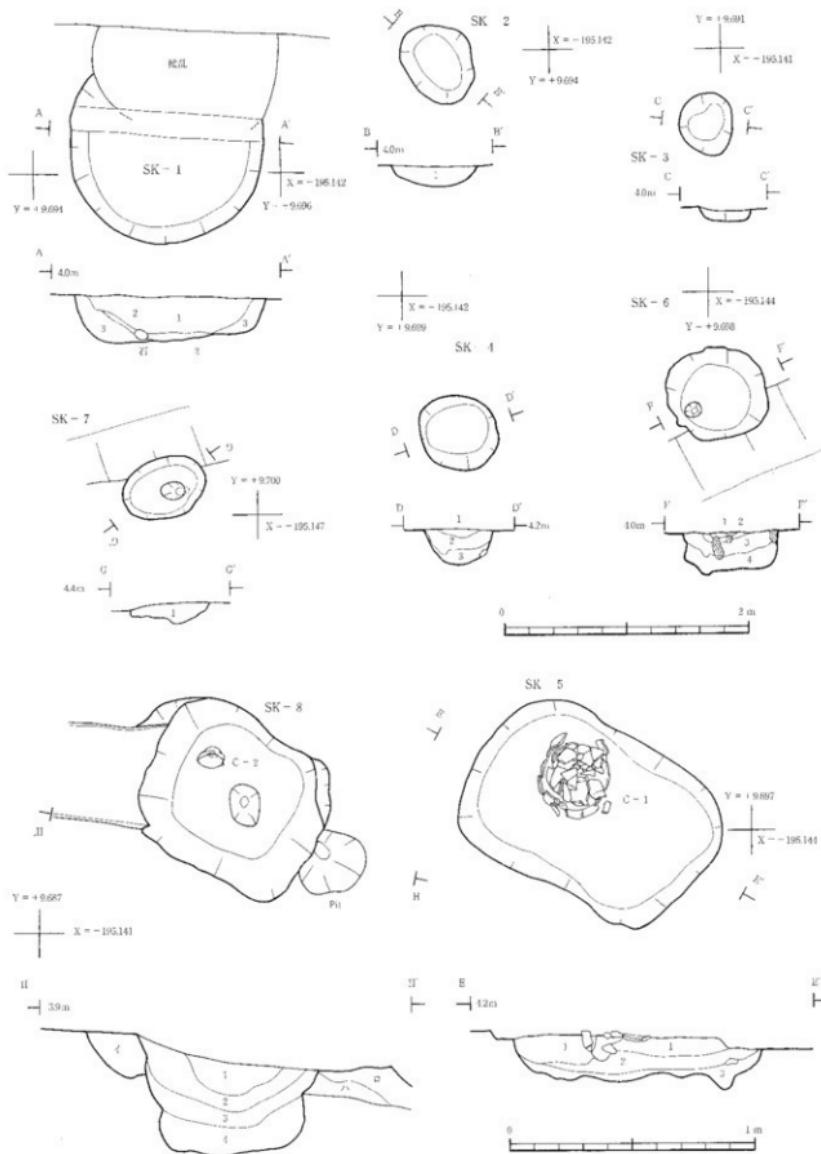
河川跡堆積土下部層(16層)については、先に記したように、150cm前後の厚さで、河川跡堆積土上部層(2~15層)とはほぼ同じような傾斜で堆積している。16層は、粘土層を主体としているが、砂または砂質土壌も存在する。層中には砂や粘土の薄層を層の傾斜方向に織状に含んでいる。褐色ないし灰色系の土層からなり、黒色系の土層からなる河川堆積土上部層(2~15層)とは明瞭な差がある。(巻頭写真III-3)

2 各層の堆積状況と出土遺物

1) 2層と出土遺物

2層は、黒褐色の粘土からなる水田耕作土層で、層下部には4層(灰白色火山灰)及び黒色ないし黒褐色の泥炭のブロックを含んでいる。2層が河川跡の検出面となっている。2層上面では、検出部分の中央で河川の方向に一致して北西から南東方向にのびる2層水田跡に伴う畦畔痕跡が確認された。畦畔痕跡は、3b層・4層・6層の混合層からなり、検出面では幅が60~95cmある。検出された畦畔痕跡の南部には、水口が切られており、水口にも2層が堆積している。水口部分の2層を除去すると、西側の畦畔斜面部分に背面が弧状で先端がやや尖った形態の工具による掘削痕跡が明瞭に残っていた(図版16-3)。畦畔痕跡の両側は10~15cmの深さで2層が堆積している。

第2図 沢川跡の堆积土と出土遺物



第48図 土坑実測図

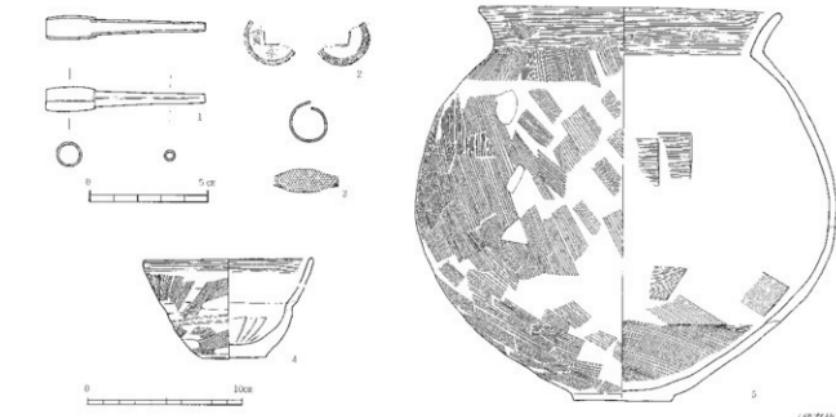
| SK-1 | | | | | SK-6 | | | | |
|------|-------------|------|--------------------|--|------|-------------|---------|----------------------|--|
| 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | | 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | |
| 1 | N2Y1-1 黄褐色 | 粘土 | 赤色鉄及び黑色粘土のブロックを含む | | 1 | S7Y2-2 水白色 | 火成岩 | 炭化木類(樹皮等)、黒褐色シルト多く含む | |
| 2 | N2Y1-2 黄色 | 砂・粘土 | ブロック状の所持 | | 2 | S7Y2-2 黄褐色 | 粘土質シルト | 未分解の植物遺体を少含む | |
| 3 | DY3-1 ブラウン色 | 粘土 | 灰褐色(地山)のブロックを多量に含む | | 3 | S7Y2-2 黑褐色 | 粘土 | | |
| | | | | | 4 | 10YR2-2 黄褐色 | シルト・砂粘土 | 植物遺体をわずかに含む | |

| SK-2 | | | | | SK-7 | | | | |
|------|------------|-----|-------------------|--|------|-------------|-------|----------------------------|--|
| 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | | 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | |
| 1 | 25Y3-1 出砂色 | シルト | 黑色粘土及び灰褐色粘土を混じて含む | | 1 | 10YR3-1 黑褐色 | 砂質シルト | オーリーブ色粘土のブロックを含む。ビニール袋を含む。 | |

| SK-3 | | | | | SK-8 | | | | |
|------|------------|----|------------------|--|------|-------------|-----|----|--|
| 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | | 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | |
| 1 | 25Y5-1 黑褐色 | 粘土 | 黒褐色鉄及び灰褐色鉄を斑状に含む | | 1 | 10YR2-2 黑褐色 | シルト | | |

| SK-4 | | | | | SK-9 | | | | |
|------|-------------|-----|--------------------|--|------|-------------|--------|------------------------|--|
| 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | | 土質No | 土色 | 土質 | 備考 | |
| 1 | 75Y3-1 黑褐色 | シルト | にぶい黄色鉄を離陸状に含む | | 1 | 10YR2-2 黑褐色 | シルト | 暗褐色の鉄質シルトのブロックを多く含む | |
| 2 | 30YR4-2 深褐色 | シルト | 黒褐色粘土及び灰褐色粘土を混じて含む | | 2 | 10YR2-1 黑褐色 | 砂質シルト | にぶい暗褐色粘土のブロックを含む。表面に含む | |
| 3 | 5Y5-1 黑色 | シルト | 黒褐色粘土及び灰褐色粘土を混じて含む | | 3 | 10YR2-1 黑褐色 | 砂質シルト | にぶい暗褐色粘土のブロックを含む | |
| | | | | | 4 | 10YR2-1 黑褐色 | 粘土質シルト | 河川堆積土。河川堆積土上に発見。Pn層付近 | |
| | | | | | 5 | 10YR2-1 黑色 | 粘土質シルト | 河川堆積土上に発見。Pn層付近 | |
| | | | | | 6 | 10YR2-1 黑褐色 | 砂質シルト | 河川堆積土上に発見。Pn層付近 | |

第48図 土層記



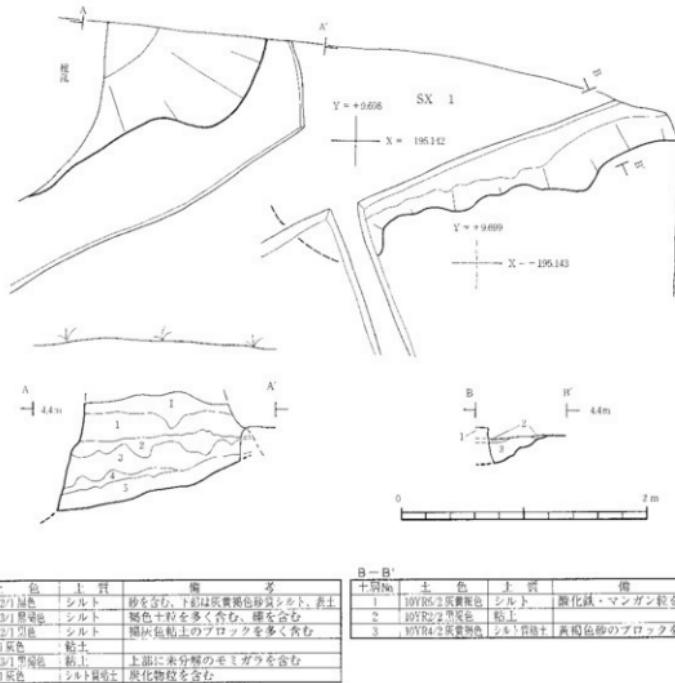
| (残存値) | | | | | | | | | |
|-------|------|-----|-------|------|----|------|----|------|----|
| 番号 | 登錄番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 造形 | 取上番号 | 種別 | 断面 | 特徴 |
| 1 | N-1 | 北 | S.D-1 | | 壺 | | 壺 | 6.8 | 口 |
| 2 | N-2 | 北 | S.D-1 | | 壺 | | 壺 | 1.9 | 水口 |
| 3 | N-3 | 北 | S.D-1 | | | | | 1.3 | |
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 造形 | 取上番号 | 種別 | 断面 | 特徴 |
| 4 | C-2 | 北 | SK-8 | | 壺 | No.1 | 壺 | 6.5 | 口 |
| 5 | C-1 | 北 | SK-5 | | 壺 | No.2 | 壺 | 25.7 | 口 |

第49図 北区溝跡・土坑出土遺物

2層水田跡の掘削深度は、大部分は6層の中・下部に達しており、深いところでは10層にまで影響を及ぼしている。

2層からの出土遺物としては、土師器・須恵器・陶器・磁器・木製品が出土している。土師器・須恵器は多数出土しているが、いずれも埋蔵した小破片である。須恵器の破片の中には、壺の体部下半に「永?富」の墨書き横位の位置にある破片（第53図2：E-1）が存在する。

陶器には、粗馬鹿と考えられる碗の小破片などが数点ある。磁器としては、彫り絵の碗の小片破片（J-1）が



第50図 その他の遺構実測図

1点突出している（図版49-16）。

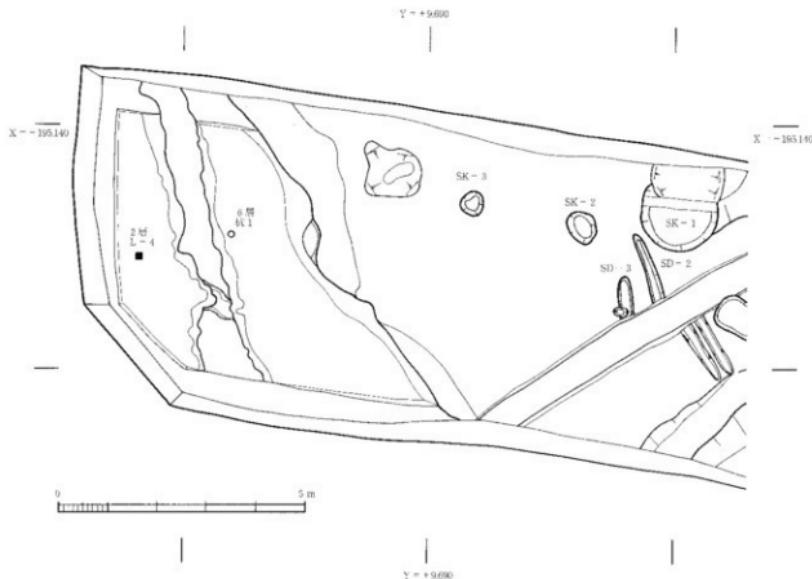
木製品類としては、ヘラ（L-3）・下駄（L-4）・角材（L-2）が出土している（第54図2～4）。本製品のヘラL-3は、幅12cmほどの竹材の先端を舌状に尖らせたものである。反対側の端部は欠損する。下駄L-4は、台部の平面形が隅丸長方形の差歎下駄で、台部の断面形は縦・横とも略台形を呈する。緒孔は前後とも円形で、前緒孔は台表から見て前方に傾斜してあけられている。前緒孔の位置は、台表からみて約5mmほど左側に寄っている。後緒孔の間の台裏には溝状の彫り込みがあり、鼻緒を結節していたと考えられる。歯の横断面形は上面と下面の差の少ない台形を呈し、下端が僅かに広くなっている。厚さは6mm前後である。

角材L-2は、一端が鈍角的に尖る楔状の材で、ほぼ全面が加工されている。断面形はほぼ方形である。尖った側の端部は磨れて光沢を帯びている。

2層の年代については、摺り絵の甌が出土したことから、下限が19世紀後半以降まで下がることが考えられ、これまで近世の中に位置付けてきた2層の年代を、明治期まで広げる必要があるものと考えられる。

2) 3a層・3b層・4層・5層

3a層・3b層・4層は、2層の水田耕作に伴う掘削によりほとんどが失われ、2層水田の畦畔痕跡の部分にわ



第51圖 河川跡 2層換出群群體跡

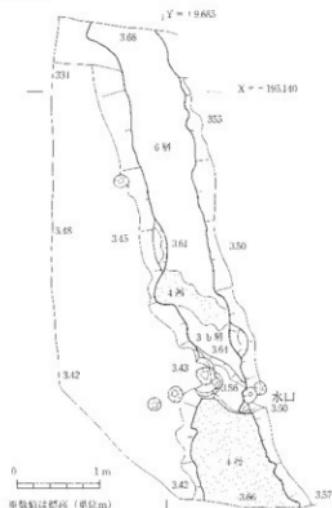
すかに残っているだけである。残存部での 3 a 層は、調査区北壁で観察したもので、黒色の粘土層からなり、3 b 層・4 層・6 層をブロック状に含む水田耕作上層である。3 b 層は、黒色の泥炭質粘土層で未分解の植物遺体を多く含んでいる。4 層は、灰白色の水山層で 5 cm 前後に堆積している。

本調査区では、5層と6層を区別することはできなかった。

3) 6層と出土遺物

北区の6層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、木分解の植物遺体が薄い縞状重なって堆積している。河川跡検出部の河岸部寄りの部分を除いて、全体的に検出されたが、2層水田跡の耕作に伴う掘削によって、上部がかなり失われている(3a層水田耕作段階に、すでに削平を受けていた可能性もある)。2層水田跡の柱畔のドコマツ林は、柱の倒伏によって倒木化しているために、保存状態の良好な部分では20cm前後の厚さがある。

遺物は、土師器、須恵器と石製模造品が出土したほか、杭が1本検出されている。土師器はロクロ使用前のものとロクロ使用後的小破片が混在している。須恵器は底部から口縁部にかけて丸み



第52図 2層水田畦畔痕跡測定図(2層耕作土除去後)



第53図 北区河川跡 1層～6層出土遺物

をもって立ち上がる壺の破片がある。器形の特徴から回転系切り底の可能性が高い。石製模造品K - 1は、2孔のあけられた円盤形の製品で、一部を欠損している。縁辺は磨かれているが角が残り、両面も平らな部分は研磨されているが、剥離面がそのまま残っている部分も多い。この製品については、類似品が多数出土している10層から浮いていた可能性が考えられる。

6層の杭L - 5は、河岸斜面で検出されたものである。長さ92.5cmの半歳丸杭で、先端には4面からの加工がある。

4) 7 - 8層

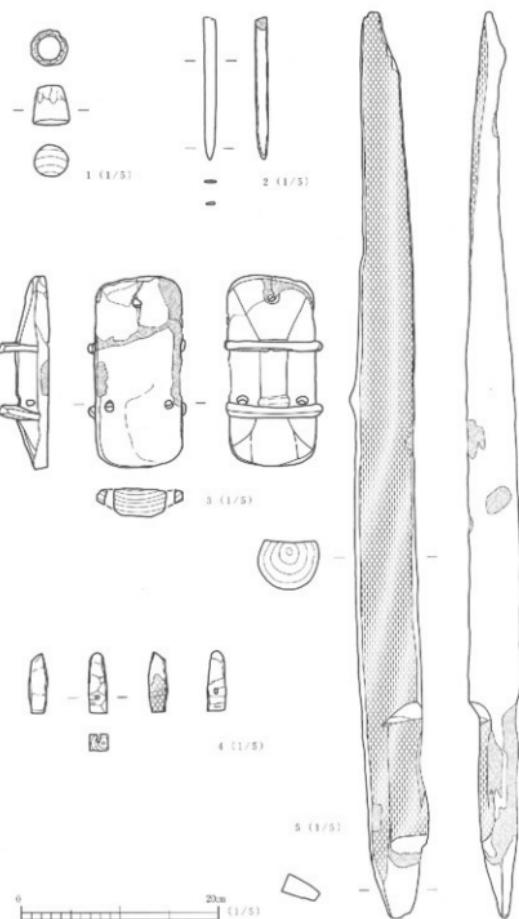
本調査区で、泥炭質土壠の6層と、黒色粘土を基準とする9層に挟まれた状態で分別された土層について、他調査区の7層および8層の堆積時期に堆積した地層と位置付けられると判断し、「7 - 8層」と呼んで調査を行った。7 - 8層は、未分解の植物遺体を含む黒褐色の粘土層で、河川跡の中央寄りに分布し、層厚は5~10cmほどである。他地域でも7層・8層からの出土遺物は少ないが、本調査区でも、7 - 8層として取り上げられた遺物はない。

5) 9 層

9層は、植物遺体を多く含む黒色粘土層で、調査区北部では河川跡の中央部にのみ分布しているが、南部に移行するにしたがって分布範囲が広がり、調査区の南壁側では河岸上面付近まで分布している。層厚は5~10cmほどである。9層から10層への変化は漸移的でどちらの層に所属するか明確に出来なかった遺物(K - 2)や、それぞれ9層と10層として取り上げた土器器片が接合したもの(C - 4・5・6・7)がある。これら、10層と区別できなかった遺物と、両層の遺物が接合したものについては、10層の項で説明を行う。

6) 10層と出土遺物

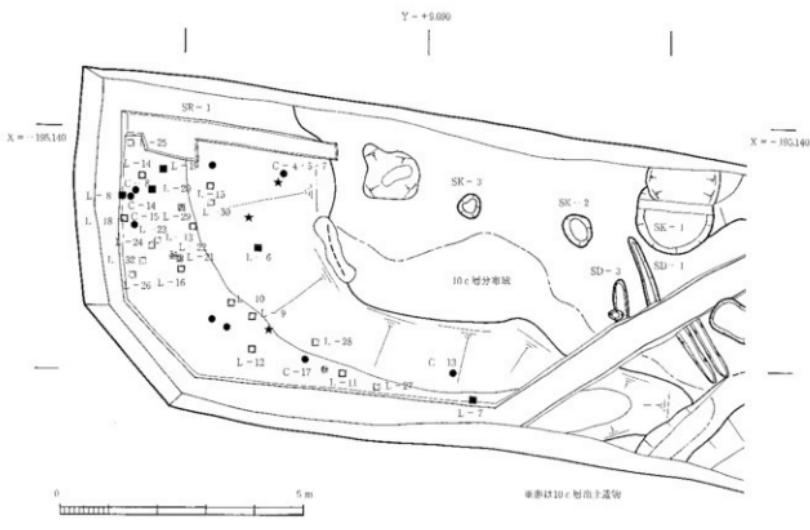
押口遺跡第3次調査北区の10層は、押口遺跡から中在家南遺跡にかけて検出された河川跡における10層対応層にあって、これまでの調査区と異なる堆積状況を呈している。他調査区の10層は、中在家南遺跡第1次調査Ⅸ・Ⅹ区で、黒褐色の上部の粘土層と下部の泥炭質の粘土層に分けられた以外は、ほぼ同質の、黒色粘土層(押口遺跡第1次調査I・II区)・黒色シルト質粘土層(中在家南遺跡第1次調査II区)・黒褐色の粘土質泥炭層(中在家南遺跡第1次調査VI区)であり、総じて植物遺体を含む粘土質土壤が基本となっていた。これに対して、本調査区では、10層対応層の上部層には、黒褐色の砂質の粘土層からなる10c層・10b層(遺物取り上げ時の層位「10層」)が堆積し、その下部には暗オリーブ灰色の純粋な砂層からなる10c'層・10c''層(遺物取り上げ時の層位「10c層」)が堆積しており、土質の違いが顕著である。このような相違の背景には、第55図の10c層分布範囲に示したとおり、10c層の堆積時期に、北区南部に河川跡に流れ込む小規模で浅い谷地形が形成され、この谷の上部から砂の供給があ



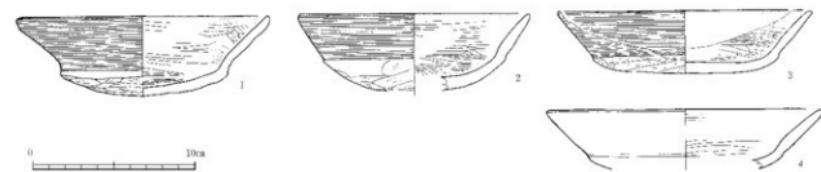
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 断面層 | 出土遺物 | 遺構層 | 取上番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 状態 | 本取り写真版 |
|----|------|-----|------|------|-------|-------|-------|-----|-----|------|------|------------------------|----------|
| 1 | L-1 | 北区 | | | 1層 | | 木・棒 | 40 | 3.7 | 2.1 | | | 芯丸 51-1 |
| 2 | L-3 | 北区 | SR-1 | 2層 | | 木・ヘラ | 14.6 | 1.2 | 0.3 | 竹製 | | | 51-3 |
| 3 | L-4 | 北区 | SR-1 | 2層 | 木No.1 | 木・下駄 | 19.6 | 5.3 | 2.5 | 4.1 | 0.6 | 差し歛下駄 木造アラ E7-A4 | 板目 51-4 |
| 4 | L-2 | 北区 | SR-1 | 2層 | | 材・角材 | 6.2 | 1.8 | 1.4 | 全面加工 | 粒? | | 毛利角 51-2 |
| 5 | L-5 | 北区 | SR-1 | 6層 | 木No.1 | 木・子鉢丸 | 92.5 | 6.2 | 4.9 | 先端加工 | 4面多段 | | 半丸 51-5 |

第54図 北区河川路1層～6層出土木製品類

り、10c層が形成されたと考えられる。その後砂の供給の減少があるにせよ、10a層・10b層堆積段階まで砂が流入したと考えられる。なお、北区に隣接している南区の10層には砂が含まれていないので、砂層の堆積範囲が狭かつ



第55図 河川跡10c層・10c層遺物出土位置



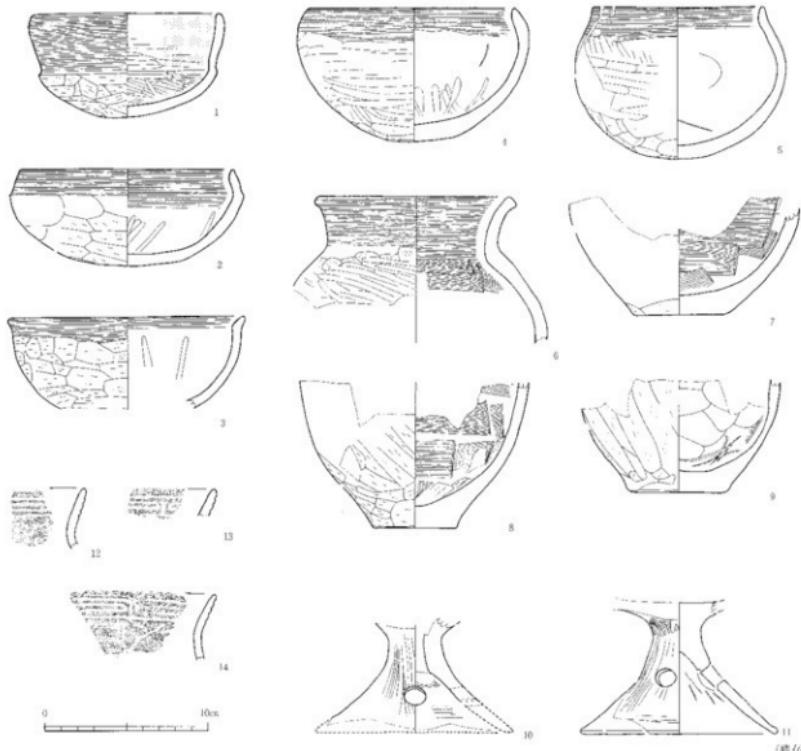
| 番号 | 発見場所 | 出土区分 | 出土状況 | 直径 | 厚さ | 形別 | 形種 | 最高 | 上部 | 底径 | (外面) 筋 | | | (内面) | (残存像) |
|---------|------|------|-------|--------|-----|----|-------|------|------|------------|------------|-----|--|------|-------|
| | | | | | | | | | | | (左) | (右) | | | |
| 1 C-4 北 | SR-1 | S.R. | 9、10層 | (No.5) | 十脚器 | 环 | 4.9 | 15.6 | 10.3 | ヨコナダ・ヘラケズリ | 黑色處理・ヘラミガキ | | | 47-5 | |
| 2 C-5 北 | SR-1 | S.R. | 9、10層 | (No.5) | 十脚器 | 环 | (4.7) | 14.2 | 11.2 | ヨコナダ・ヘラケズリ | 黑色處理・ヘラミガキ | | | 47-7 | |
| 3 C-6 北 | SR-1 | S.R. | 9、10層 | | 十脚器 | 环 | 3.8 | 15.6 | 11.3 | ヨコナダ・ヘラケズリ | 黑色處理・ヘラミガキ | | | 47-6 | |
| 4 C-7 北 | SR-1 | S.R. | 9、10層 | (No.5) | 十脚器 | 环 | (3.6) | 17.0 | 11.8 | ? | 黑色處理・ヘラミガキ | | | 47-8 | |

第56図 北区河川跡9層～10層出土遺物

たが、河川の流れの方向が北に向かっていたことが推察される。

10層から出土した遺物には、土師器・石製品・木製品類があり、特に土師器は多量の破片が出土した。9層から10c層にかけて出土した土師器は、出土層位によって上位から下位に分けると、先に記したように、A群=9層と10a・b層が接合したもの（第56図）、B群=10a・b層（遺物取り上げ時の層位「10層」）から出土したもの（第57図）、C群=10a・b層（遺物取り上げ時の層位「10層」）と10c層が接合したもの（第58図）、D群=10c層から出土したもの（第59図）がある。

A群の図化した4点の土師器環（C-4・5・6・7）は、丸底で底部と口縁部の境の内外面に明瞭な段がつい



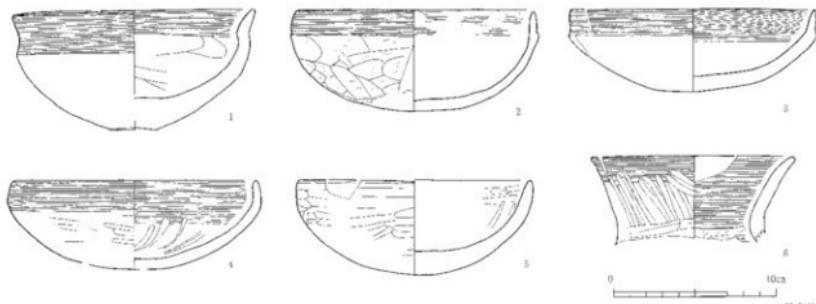
| 番号 | 登録番号 | 出土場所 | 出土遺物 | 直横断面 | 取上番号 | 種別 | 縁様 | 高さ | 口径 | 底径 | (外)面 | (内)面 | 質 | 文 |
|----|------|------|------|------|------|------|-----|-------|-------|------|----------------|------------|-------|------|
| 1 | C-3 | 北 | SR-1 | 10柄 | | 上師器 | 环 | 6.4 | 11.5 | | 「ヨコナデ・ハラミガキ」 | 黒色處理 | ヘラミガキ | 47-9 |
| 2 | C-10 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 上師器 | 环 | 6.0 | 13.0 | | 「ヨコナデ・ナ・ヘラケズリ」 | ヨコナデ・ハラミガキ | 47-10 | |
| 3 | C-11 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 上師器 | 环 | (5.7) | 14.4 | | 「ヨコナデ・ナ・ヘラケズリ」 | ヨコナデ・ヘラミガキ | 47-11 | |
| 4 | C-8 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.1 | 上師器 | 环 | 8.2 | 12.5 | 「ヨコナデ・ハラミガキ」 | ヨコナデ・ヘラミガキ | 47-12 | |
| 5 | C-9 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 上師器 | 环 | 9.3 | 10.4 | | 「ヨコナデ・ハラミガキ」 | ヨコナデ・ヘラミガキ | 47-13 | |
| 6 | C-14 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.2 | 上師器 | 束 | 9.0 | 11.5 | 「ヨコナデ・ハラミガキ」 | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヘラナダ | 48-6 |
| 7 | C-16 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 上師器 | 束 | 7.3 | - | 5.4 | 「ナデ・ヘラケズリ」 | ヘラナダ | | |
| 8 | C-17 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.7 | 土師器 | 束 | (9.0) | | 「ヘラケズリ」 | ヘラナダ・ヘラケズリ | | 48-8 |
| 9 | C-15 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.3 | 上師器 | 束 | 7.0 | | 「ヘラケズリ」 | ヘラナダ・ナダ | | 48-7 |
| 10 | C-13 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.6 | 上師器 | 束 | (6.4) | | 「三方通し・ハラミガキ」 | ヨコナデ | | 49-9 |
| 11 | C-12 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | No.1 | 上師器 | 束 | (7.2) | 12.0 | 「ハメテ・ヘラミガキ」 | ヘラナダ・ナダ | | 49-7 |
| 12 | B-2 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 盆 | 引 | 盆 | | | 「口縁・沈側文」 | 白模・沈側文 | | 47-2 |
| 13 | B-1 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 盆 | 引 | 盆 | | | 「口縁・沈側文」 | 白模・沈側文 | | 47-1 |
| 14 | B-3 | 北 | - | SR-1 | 10柄 | 盆 | 引 | 盆 | | | 「口縁・沈側文」 | 白模・沈側文 | | 47-3 |

第57図 北区河川跡10層出土遺物

て強く屈曲し、口縁部は幅が広く外反している。外反する口縁の立ち上がりの角度は比較的急である。内面は全面がヘラミガキされた上で黒色処理されている。各個体とも丁寧な造りである。これら4点の壺は、仙台市果造跡の10号住居跡（仙台市文化財調査報告書第14集・第43集）の壺と共に共通する特徴が認められ、住社式期に属するものと考えられる。

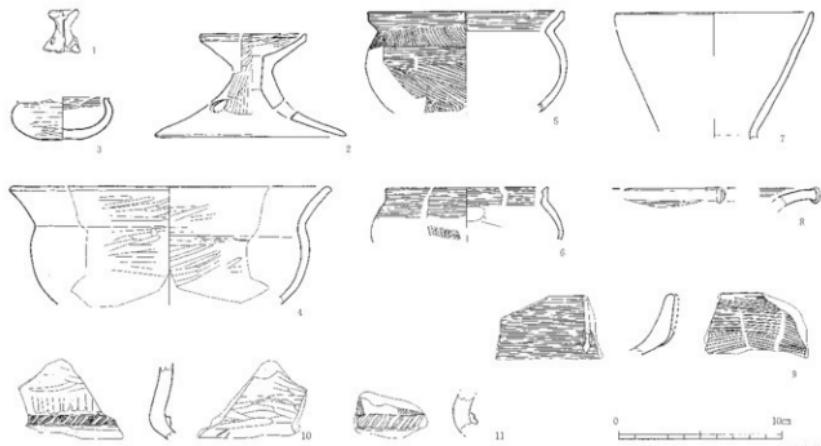
B群の土師器は、器種としては杯類と壺類がある。壺類は、いずれも丸底ないし丸底風平底である。内面は、黒色処理されたものと黒色処理されていないものがある。C-3は黒色処理された壺で、器高の1/2ほどの位置に底

第2節 河川跡の堆積土と出土遺物



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基準層 | 出土遺物 | 遺構層 | 取上番号 | 使用 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | (外面) | 特徴 | 色(内面) | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-----|------|-----|----|-----|-----|----|----------------|------------|-------|------|
| 1 | C-22 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 7.3 | 116 | 28 | ヨコナデ・ナデ | ヨコナデ | 48-1 | |
| 2 | C-18 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 6.2 | 144 | - | ヨコナデ・ヘラグズリ | ヨコナデ | 48-4 | |
| 3 | C-20 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 5.1 | 150 | - | ヨコナデ | ヨコナデ | 48-2 | |
| 4 | C-21 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 5.5 | 147 | - | ヨコナデ・ハサギ・ヘラグズリ | ヨコナデ・ヘラミガキ | 48-5 | |
| 5 | C-19 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 5.8 | 142 | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 48-3 | |
| 6 | C-25 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | 5.4 | 124 | - | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヨコナデ | 48-9 | |

第58図 北区河川跡10層・10c層出土遺物



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基準層 | 出土遺物 | 遺構層 | 取上番号 | 種別 | 器種 | 器高 | 口径 | 底径 | (外面) | 特徴 | 色(内面) | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-----|------|-----|-----|-------|--------|--------|-------------|-----------|-------|------|
| 1 | C-34 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 灰 | (2.7) | 19 | - | 静台形、ナデ | ヘラミガキ | 49-8 | |
| 2 | C-23 | 北 | SR-1 | 10層 | | | 土師器 | 白 | 6.3 | (6.4) | (11.6) | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヨコナデ・ナデ | 49-10 | |
| 3 | C-33 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | No 1 | 土師器 | 小型鉢 | (2.6) | - | 2.5 | ヘラミガキ | ヨコナデ・ヘラナデ | 49-2 | |
| 4 | C-27 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 鉢 | (7.4) | (19.1) | - | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 49-1 | |
| 5 | C-26 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 鉢 | (6.2) | 12.0 | - | ヨコナデ・ヘラナデ | ヨコナデ・ハケメ | 48-11 | |
| 6 | C-28 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 鉢 | (3.5) | 9.7 | - | ヨコナデ・ハケメ | ヨコナデ・ヘラナデ | 48-10 | |
| 7 | C-24 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 鉢 | (7.7) | 11.9 | - | 不明 | ヘラミガキ? | 49-3 | |
| 8 | C-32 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 鉢 | - | - | - | ヨコナデ・口脇付文 | ヨコナデ | 49-4 | |
| 9 | C-29 | 北 | SR-1 | 10層 | | | 土師器 | 壺 | - | - | - | ヨコナデ・円錐形付文 | ハケメ | - | |
| 10 | C-30 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 壺 | - | - | - | ヘラミガキ・通じ縁付文 | ヘラミガキ | 49-6 | |
| 11 | C-31 | 北 | SR-1 | 10c | 層 | | 土師器 | 壺 | - | - | - | ハケメ・頭部附文 | ヘラナデ | 49-5 | |

第59図 北区河川跡10c層出土遺物

部とII線部の境があり、内外面に段ないし屈曲がある。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部が僅かに内湾している。器形および調整の特徴から住社式期に属するものと考えられる。A群の坏C-4・5・6・7とは同期または

同型式にあっては古い段階の可能性がある。B群の黒色処理されていない杯類（C-8・9・10・11）は、口縁部にいくつかの形態がある。C-10は、半球形の底部から体部と口縁部との境の外面に僅かな段がつき、短い口縁部は内傾している。C-11は、半球形の底部から体部にかけて半球形に立ち上がり、短い口縁部が外傾して体部との境目の内面に強い稜を形成する。C-8は、半球形の底部から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、口縁部は軽く内傾する。C-9は、底部から体部にかけて球形に近く内済しながら立ち上がり、体部上端がすぼまって、口縁部は直立する。これらの、非黒色処理の杯類は、いずれも中在家南遺跡第1次調査における10層・11層出土土師器群に類例が求められ、広義の南小泉式期に位置付けられる（工藤哲司：1996「仙台市文化財調査報告書第213集中在家南遺跡他」第2分冊第8部6章）。壺類は、器形全体の復元できるものはない。C-14は、球形に近い体部に外反する厚手で幅広の口縁が付き、口縁端部は肥大している。C-15・16・17は体部下半の破片である。C-17は、長削化した壺と観察される。これら3点の壺については、南小泉式の範疇として理解できる。

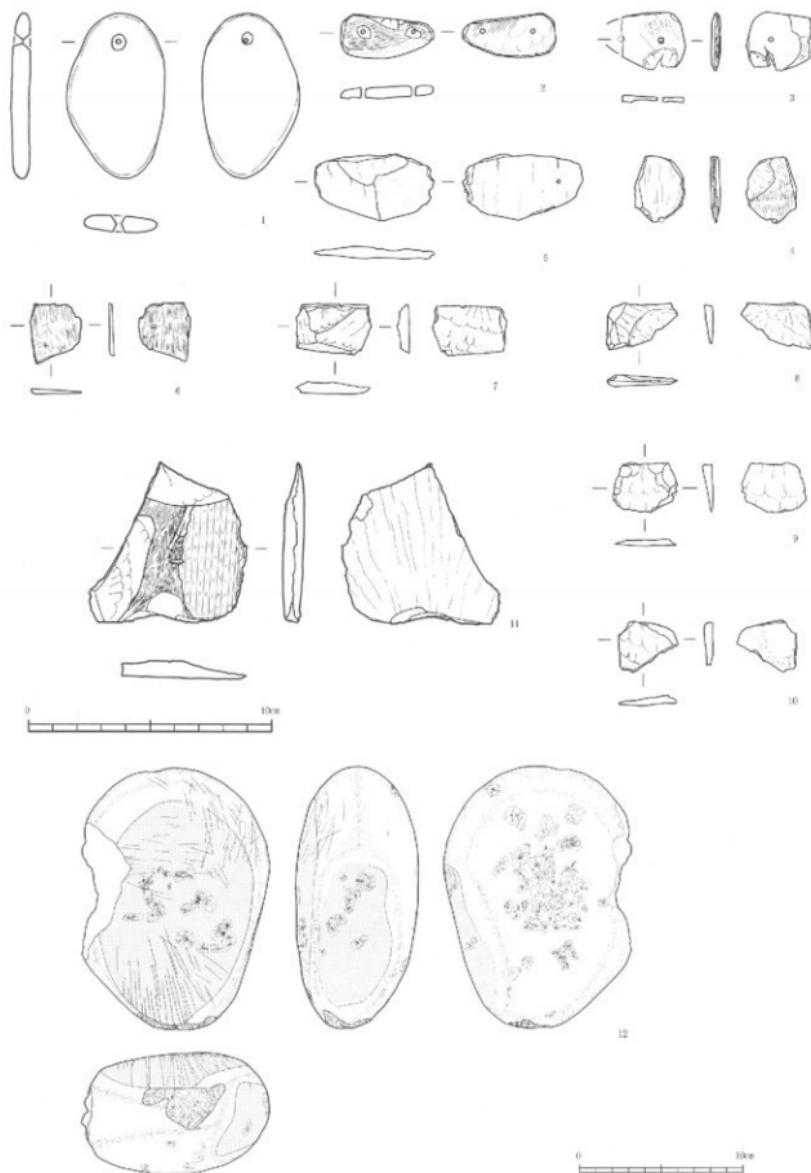
B群の土師器には、この他3方に透かし孔のある器台（C-13）と高杯（C-12）があり、この2点は塩釜式期のものと考えられる。また、樹形圓式期の弥生土器（B-1・2・3）も出土している。

C群の土器には土師器の壺（C-18・19・20・21・22）と壺（C-25）がある。壺は丸底ないし平底風丸底で、底部から体部にかけては半球形を呈し、短い口縁部が外傾して体部と口縁部の境の内面に稜が形成されるもの（C-22）、短い口縁部と体部の境の外面に段が形成されて口縁部が直立するもの（C-18・20）、短い口縁部と体部の境の外面に段が形成されず口縁部が直立するもの（C-21）、底部から口縁部まで半球形に立ち上がるもの（C-19）がある。これらの壺はB群壺の黒色処理されていないものや、中在家南遺跡第1次調査における10層・11層出土土師器群に類例が求められ、南小泉式期に位置付けられる。壺C-25は、南小泉式または塩釜式に相当するものと考えられる。

D群の土師器には、器台のミニチュア土器（C-34）・鉢（C-27・33）・器台（C-23）・小型壺（C-26・28）・壺（C-29・30・31・32）の器種がある。ミニチュア土器C-34は、器台を模したもので、脚部には3方向からの透かしがあり、受け部から脚部に透る孔もあけられている。鉢C-27は、扁平な半球形の体部に強く外反する口縁がつく。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。鉢C-33は、扁平な球形の体部で、口縁部（頸部）との境目ですぼまり、外反する口縁または頸部にいたる。体部外面は、丁寧にヘラミガキ調整されている。器台C-23は、小型の器台で、脚部は裾部がやや広がる円錐形を呈し、三方透かし孔がある。受け部は小さく浅い皿形を呈し、端部は短く直立している。壺C-28は、体部の上部がすぼまって口縁部となり、口縁は略S字状に屈曲し、体部と口縁部との境の内面に明瞭な稜線が形成される。壺C-26は、口縁部が不明瞭ながらS字状に屈曲する扁平な壺で、体部外面は斜位にハケメ調整されているが肩部には横位のハケメ調整が巡っている。C-30・31は、壺の体部から頸部にかけての付近の破片で、壺には隆帯が巡り、隆帯の上面には斜位の刻みが連続している。C-29・32は壺の口縁部の破片で、C-29には直立気味に立つ幅広の口縁部に、縦に長い棒状の浮文が貼付けられている。C-32は、強く外反する口縁部で、半らで側方をむく口縫部には、浮文が貼付けられている。

D群土師器については、器種や器形の特徴から、塩釜式期のものと考えられる。特に、頸部に装飾文のある壺の破片は、塩釜式期でも古い段階に位置付けられている仙台市ノ内遺跡の方形周溝墓出土土師器壺などに類例が求められる（辻：1994・1995。丹羽：1985）。

上記のように北区の9層から10c層にかけては、9層から10層=住社式土師器・10層=住社式土師器と南小泉式土師器・10層から10c層=南小泉式土師器と塩釜式土師器・10c層=塩釜式土師器というように、土器型式の新旧と層位の前後とが符合して出土している。10層（10a層・10b層）から9層への堆積層の変化の時期が、広義の南小泉式から住社式への変化の時期にあたり、壺の形態もバラエティーに富んだ丸底非内黒の短い口縁のものから、内黒の幅広口縁のものに変化している。また内黒の幅広口縁の壺は、口縁部の立ち上がりが急で直立に近いものか



第60図 北区河川跡 9層～10c層出土石器・石製品

第60回観察表

| 番号 | 立派番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 測定 | 取扱番号 | 種別・等種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 特徴 | 写真版 | |
|----|------|-----|---------|-------|----|------|-------|------|------|-----|------|-----------------------|--------|-------|
| 1 | K-3 | 北 | S R - 1 | 10層 | | | 有孔縫製品 | 6.7 | 4.0 | 0.7 | 32.4 | 1孔・ | デイサイト | 50-10 |
| 2 | K-5 | 北 | S R - 1 | 10層 | | | 有縫製品 | 1.8 | 3.8 | 0.4 | 4.4 | 有孔円錐・ | 黒色スレート | 50-2 |
| 3 | K-2 | 北 | S R - 1 | 9・10層 | | | 石縫製品 | 2.3 | 2.5 | 0.4 | 2.1 | 有孔円錐・ | 黒色スレート | 50-3 |
| 4 | K-8 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石縫製品 | 2.7 | 2.0 | 0.4 | 2.7 | 円錐・ | 黒色スレート | 50-4 |
| 5 | K-6 | 北 | S R - 1 | 10層 | | | 石縫製品 | 2.6 | 4.9 | 0.5 | 7.2 | 未製品、空心ようした形状あり・通穴スレート | 50-5 | |
| 6 | K-12 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石縫製品 | 2.4 | 2.0 | 0.1 | 1.6 | | 黒色スレート | 50-6 |
| 7 | K-9 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石縫製品 | 2.0 | 3.1 | 0.5 | 4.3 | | 黒色スレート | 50-7 |
| 8 | K-10 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石縫製品 | 1.8 | 2.8 | 0.3 | 2.0 | | 黒色スレート | 50-8 |
| 9 | K-11 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石縫製品 | 2.0 | 2.6 | 0.4 | 2.0 | | 黒色スレート | 50-9 |
| 10 | K-13 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | No.3 | 有孔縫製品 | 2.9 | 2.4 | 0.4 | 1.9 | | 黒色スレート | 50-10 |
| 11 | K-4 | 北 | S R - 1 | 10層 | | | 石器・不明 | 6.3 | 6.1 | 0.9 | 32.3 | 削り面・ | 黒色スレート | 50-11 |
| 12 | K-7 | 北 | S R - 1 | 10c層 | | | 石器・凹面 | 16.0 | 11.3 | 7.5 | 2040 | 削り面・削り面・削り面 | 黒色スレート | 50-12 |

ら、立ち上がりのやや弱いものへの移行が窺われる。

しかし、10c層の中からもC群のように南小泉式の土師器が出土しており、10層の下部については明確に出土土器の年代と堆積時期が一致するものではないものと考えられる。10c層から10a層の堆積上は、基本的に南小泉式期に堆積したものであるが、その砂層の供給源に塙釜式期の遺構または包含層があったために、塙釜式期の土師器が混在して堆積したものと理解される。このことは、10c層出土の当該期の土師器がいずれも小破片が多く、完全なものはミニチュアの器台だけであることや、次に記したとおり石製模造品が、10c層から出土していることもこのことを裏付けている。

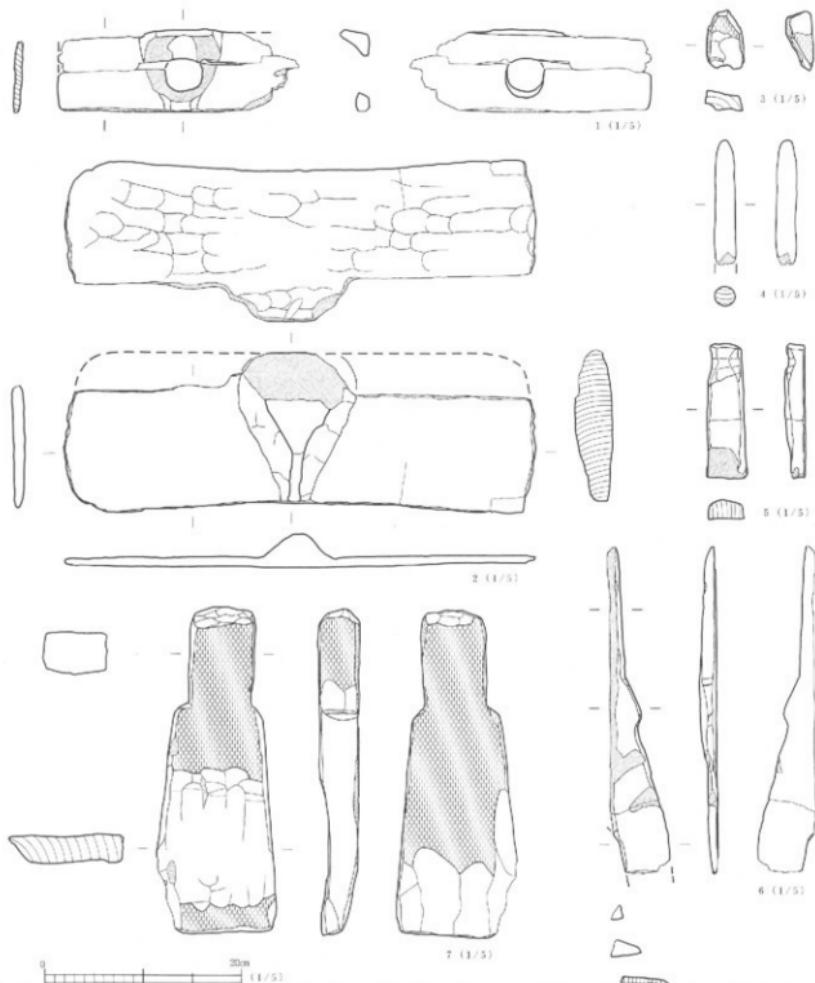
石製品としては、有孔縫製品（K-3）・石縫製品（K-2・3・6・8・13）・蝶石器（K-7）・不明石製品（K-4）があり、土師器と同様に10層の細分各層から出土している（第60回）。有孔縫製品K-3は、長軸6.7cmの扁平な楕円形の自然縫に、両面から加工して円孔をあけたものである。孔の位置は、片端に寄っている。

石縫製品と考えられる石は、加工の状態および破片の状態によっていくつかに分けられる。K-5は、2孔の楕円盤である。両面や縁辺に擦痕が認められ、完成品と考えられるが、両面に自然面や剥離の痕跡をそのまま残している。K-2は、不正な楕円形を呈するもので、側辺に円孔が半分残っていることから完成後に壊れたものである。K-8は、側辺に円孔の痕跡があることから、完成後または製作中に壊れものを再加工したと考えられる。K-2・8とも一部に剥離面をそのまま残している。K-6は、両面とも剥離面のままであるが、片面の片端に寄った位置に穿孔を試みた痕がある。未製品または途中で廃棄された遺物と考えられる。K-12は、両面に擦痕の観察される破片である。縁辺に磨り面が認められないことから、未製品ではなく、完成品の破片の可能性が高い。K-9・10・11・13の4点は、両面が剥離面および一部自然面からなる剥片である。大きさから見て素材となる剥片ではなく、石縫製品の製作過程で生じた剥片と考えられる。

蝶石器K-7は、やや扁平な楕円形の縫を素材とする石器で、片面が凹面と磨り面で反対面に凹面が広がる。側面にも凹面と磨り面があり、やや尖ったほうの側面は叩石としても使用されている。

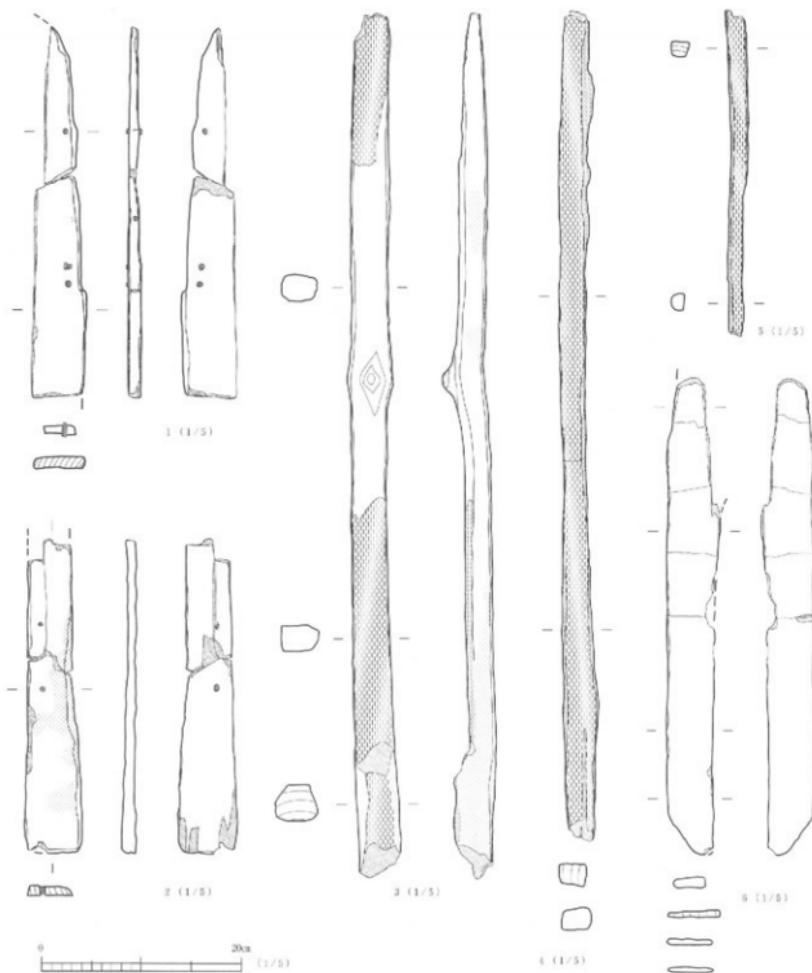
不明石製品K-4は、石縫製品と同一素材の大型の剥片である。片面の高い部分が研磨されているが、用途は不明である。

木製品類は、農耕具などの製品のほかに材類も多く出土している。木製品としては、横鋸2点（L-7・21）・ナスピ型二叉鍬（L-8）・曲柄鍬（L-6）・梢円板（L-29）・丸棒（L-22）・その他不明品3点（L-19・20・23）がある（第61・62回）。横鋸L-7は、腐蝕が進み保存状態の悪い製品である。上端部は着柄隆起部分だけが残り、刃先にある下面は欠損している。木口面が圓面となり、後面から見て左側は大部分が残っているが、右側は欠落部分が多い。着柄隆起は基部を除いて欠落しているが、残存部から平面形は角が取れた逆二等辺三角形を呈するものと推定される。柄孔は略円形で、柄の角度は50°前後である。残存する側面と柄孔の中心の長さが約13cmあ



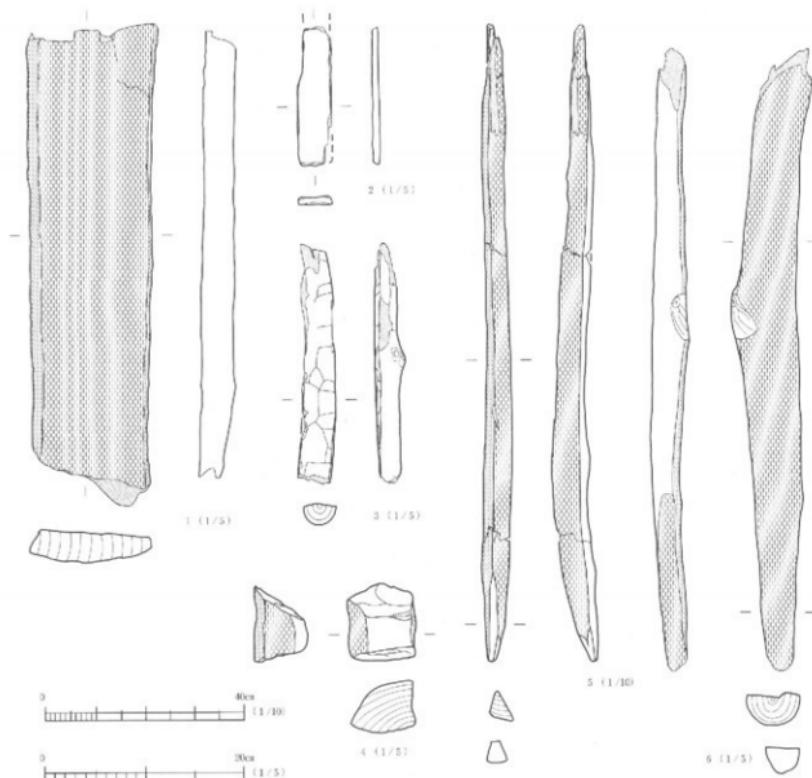
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺構番 | 取上番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 樹種 | 木取り写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-----|-------|---------|------|------|-----|-------------------|---|-----|----------|
| 1 | L-7 | 北区 | SR-1 | 10層 | 木 | No.3 | 木・椎歯 | 8.0 | 24.7 | 0.8 | 柄孔圓形 木孔×木孔 | 1 | クヌギ | 柾目 51-7 |
| 2 | L-21 | 北区 | SR-1 | 10c層 | 木 | No.1 | 木・椎歯 | 15.5 | 48.2 | 1.1 | 柄孔穿孔前 | 1 | クヌギ | 柾目 52-1 |
| 3 | L-19 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材 | No.22 | 木・不明 | 6.0 | 38 | 1.8 | | 1 | アサガ | 柾目 52-2 |
| 4 | L-22 | 北区 | SR-1 | 10c層 | 木 | No.2 | 木・丸棒 | 12.3 | 21 | 1.9 | 端部尖頭 | 1 | モミ | 芯無丸 51-6 |
| 5 | L-6 | 北区 | SR-1 | 10層 | 木 | No.2 | 木・曲柄歯 | 13.7 | 41 | 1.9 | 彎部細 | 1 | クヌギ | 柾目 52-3 |
| 6 | L-8 | 北区 | SR-1 | 10層 | 木 | No.5 | 木+2段二重層 | 33.3 | 15.2 | 0.8 | 表面凹凸有致、裏面滑らか、側面斜面 | 1 | クヌギ | 柾目 52-4 |
| 7 | L-20 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材 | No.24 | 木・不明 | 33.4 | 12.0 | 4.0 | | 1 | キハダ | 柾目 52-5 |

第61図 北区河川跡10層出土木製品類1



| 番号 | 登記番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物層 | 取上番号 | 種別 | 部種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 製 | 樹種 | 木取り | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|---------|--------|------|-----|-----|-----------|----------------|-----|------|------|-----|------|
| 1 | L-29 | 北区 | SR-1 | 10c層 | 材・No.11 | 材・精因板? | 37.8 | 5.4 | 1.3 | 細孔 0.4 | 内孔3ヶ所(薄皮製縫縫有り) | 七ミ綱 | ナナメ | 53-1 | | |
| 2 | L-23 | 北区 | SR-1 | 10c層 | 材・No.2 | 木・不明 | 32.2 | 6.0 | 1.5 | 3孔有り、2孔に楔 | 七ミ綱 | 極目 | 53-2 | | | |
| 3 | L-13 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材・No.3 | 材・角材 | 88.4 | 4.3 | 3.7 | 施帆有り | | | 芯無角 | 53-3 | | |
| 4 | L-10 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材・No.4 | 材・角材 | 84.6 | 3.2 | 2.3 | | | | 芯無角 | 53-4 | | |
| 5 | L-11 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材・No.7 | 材・角材 | 33.3 | 2.0 | 1.7 | | | | 芯無角 | 53-5 | | |
| 6 | L-9 | 北区 | SR-1 | 10層 | 材・No.5 | 材・板材 | 48.7 | 5.2 | 1.1 | 二又脚、刃部? | クヌギ | 極目 | 53-6 | | | |

第62図 北区河川跡10層出土木製品類 2



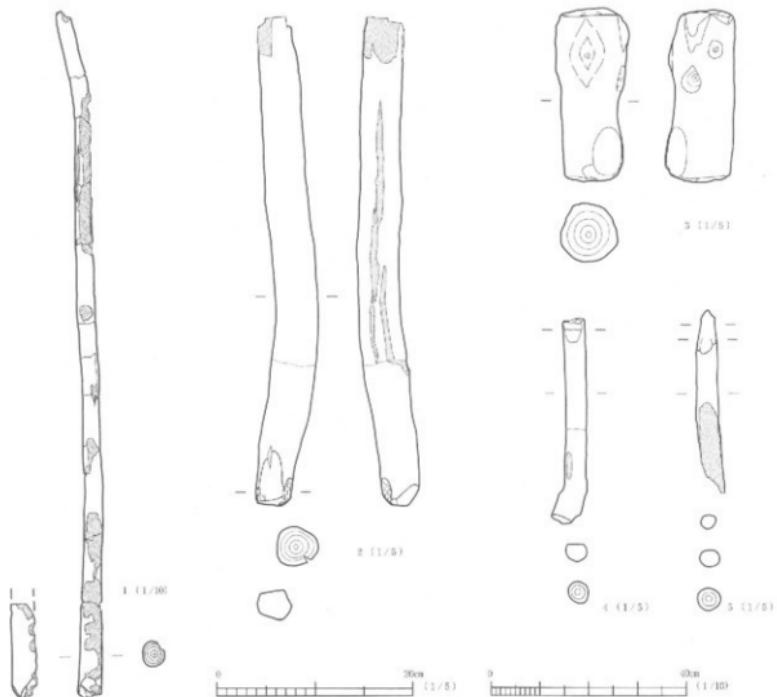
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基木房 | 出土遺物 | 遺物層別 | 取工手 | 類別 | 木材 | 全長 | 幅大幅 | 厚さ | 特 | 類 | 樹種 | 本取り方 | 回数 |
|----|------|-----|---------|---------|-------|-------|------|-----|------------|-----|----|---|-----|----|------|----|
| 1 | L-27 | 北区 | S R - 1 | 10c 10f | 材・板材 | 49.0 | 13.0 | 3.5 | | | | | 特 | 原木 | 53-7 | |
| 2 | L-21 | 北区 | S R - 1 | 10c 10f | 材・板材 | 14.2 | 3.5 | 0.8 | 片側面に加工 | | | | 板目 | 概目 | 54-1 | |
| 3 | L-12 | 北区 | S R - 1 | 10f | 材・半丸材 | 24.5 | 3.5 | 2.1 | 半丸面加工 | | | | 半丸 | 概目 | 54-2 | |
| 4 | L-28 | 北区 | S R - 1 | 10c 9f | 材・半削材 | 8.0 | 6.6 | 4.9 | 両端切削 | | | | 毫無 | 概目 | 54-5 | |
| 5 | L-16 | 北区 | S R - 1 | 10f | 材・半丸材 | 130.0 | 3.7 | 5.5 | 先端加工、多面多段？ | | | | 毫無 | 概目 | 54-3 | |
| 6 | L-14 | 北区 | S R - 1 | 10f | 材・半丸材 | 63.4 | 3.0 | 3.0 | 先端加工、一面？ | | | | 半丸丸 | 概目 | 54-1 | |

第63図 北区河川路10層出土木製品類3

ることから、横鍬の幅は約26cmほどと推定され、横鍬としては幅が狭い。

横鍬L-21は、完成品に近い調整段階の未製品である。前面側には木目方向に沿った加工痕跡が観察できる。着柄隆起部分を除いて、上端部を欠損する。着柄隆起は隅丸の逆二辺三角形を呈し、隆起上面は平らになっている。柄孔はあけられていない。幅は48.2cmである。

ナスピ型二又鍬L-8は、中央から縱半分に割れた片側の破片で、歯部のほとんどと軸部の上端も欠損している。ナスピのヘタにあたる軸部側面の突起は、上部から八字状に広がるが、下端部は鈍角の斜面となっている。歯部の



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物名 | 種別 | 器種 | 全長 | 高さ(幅) | 厚さ | 特徴 | 樹種 | 木取り | 写真回数 |
|----|------|-----|----------|-----------|------|-------|------|-----|------------|----|-----|-------|-----|------|
| 1 | L-26 | 北区 | S.R. - 1 | 10c 屋村・丸村 | 材・丸村 | 140.8 | 5.0 | 4.8 | 先端加工・2面2段 | | 志村丸 | 54-6 | | |
| 2 | L-30 | 北区 | S.R. - 1 | 10c 屋村・丸村 | 材・丸村 | 49.9 | 4.5 | 2.9 | 先端加工・多面 | | 志村丸 | 54-8 | | |
| 3 | L-15 | 北区 | S.R. - 1 | 10d | 材・丸村 | 175 | 7.5 | 6.0 | 両端加工 | | 志村丸 | 54-7 | | |
| 4 | L-18 | 北区 | S.R. - 1 | 10d | 材・丸村 | 20.8 | 2.2 | 2.0 | 両端加工・1面多段 | | 志村丸 | 54-9 | | |
| 5 | L-17 | 北区 | S.R. - 1 | 10d | 材・丸村 | 186.1 | 22.1 | 2.0 | 先端加工・多面1段? | | 志村丸 | 54-10 | | |

第64図 北区河川跡10層出土木製品類

幅は上端部分で4.7cmである。

曲柄鍤L-6は、軸部上半部分の破片である。断面形はカマボコ形を呈し、上端付近の凸面には浅い縦掛かりの溝が彫られている。

楕円板L-29は、大型楕円板の側邊部分の破片である。残存長は37.8cmあるが、全長はこの倍以上あったものと推定される。側面近くには、3ヶ所に縦じ紐の残存する縦じ紐用の孔があけられている。孔に通された紐は、幅4mm前後の樹皮製と観察され、孔が埋まるように複数回通されている。孔は接近した2ヶ所と離れて1ヶ所ある。接近してあけられた2孔の近くの側面には、高低差が4mmほどの段が形成されている。この段については、楕円板に取りつけられる側板の重複部分にあたり、楕円盤と側板が密着して隙間が生じないようにするためのものと推察される。2ヶ所と1ヶ所の縦じ紐用の孔の中ほどの側面には、木釘が打たれている。この木釘についても、側板の重

複部の外側端部を留めるために打たれたものと考えられる。

丸棒L-22は、残存長12.3cm・直径2.0cmの芯無し削り出しの丸棒である。残存する片方の端部は、丸みを持って尖っている。

不明品L-19は、平面形が将棋の駒のような形態の破片で、何らかの製品あるいは木製品の破片と考えられる。側面の割れは、加工に伴うものと観察されるが、上下両面の割れは破損の痕跡の可能性が高い。不明品L-20は、羽子板状の平面形を呈する未製品で、厚さ4cm前後の柾目板を素材とする。両面には広く割り面が残り、部分的に削り加工が施された段階のものである。柄状部と身状部とに分かれ、頭部には肩部が形成される。身状部は先端側が幅広となっており、片面の中央部分が削られて済んでいる。反対面は先端側が削られて、床んだ難に反り上がりしている。掏い具またはヘラ状の製品の未製品と考えられる。不明品L-23は、幅6.0cm・厚さ1.5cm・残存長32.2cmの板材で、片側の側縁に寄って3ヶ所に孔があげられており、そのうち中央寄りの2ヶ所には樹皮製の綴じ紐が残っている。孔の並びと反対側の側面は、広い範囲が焼け焦げている。

材は、角材3点(L-10・11・13)・柾目板2点(L-9・27)・板目板1点(L-24)・分割材2点(L-16・28)半裁丸材2点(L-12・14)・丸材5点(L-15・17・18・26・30)がある(第62~64図)。角材L-10・11・13は、大きさの別はあるが、いずれも芯無しの角材で、側面は割り面ないし樹皮を剥いだだけの自然面である。木口部分は欠損または折れている。

柾目板L-9は、残存長48.7cm・幅4.5~5.2cmの材で、片側の先端は片方の側面から斜めに切られて刃の刃先状に尖っている。反対の木口は欠損している。側面はほぼ平行しているが、欠損木口近くには緩やかな屈曲があり、片側が僅かに狭くなっている。厚さは、欠損木口側から残存木口側に向かって徐々に薄くなるように加工されている。形態的には二叉鋸の歯と類似しており、その破片の可能性がある。柾目板L-27は、長さ49cm・幅13.0cmの柾目材で両木口は埋れている。内面および両側面は割り面のままである。

板目板L-24は、残存長14.2cm・幅3.5cm・厚さ8mmほどの板である。板の幅は、片側の側面からの削り込みがあるために、片側が狭くなっている。

分割材L-16は、全長約130cmのミカン割り材である。断面形は三角形を呈し、1面は自然面、他の2面は割り面となっている。片方の木口には杭先状の加工が施されて尖っている。他方の木口は、特に加工はないが、分割の結果細くなり、尖っている。分割材L-28は、両端に加工(切断)痕跡のある小さな材である。1/4程度に分割された後、表面に近い部分がさらに削られている。

半裁丸材L-12は、直径約3.5cmの芯持ち丸材を縦に半裁し、その割り面を丁寧に削っている。両端は欠損している。L-14は、直径5cm前後の芯持ち丸材を縦に半裁している。片側の端部には半裁面の側面にさらに削りを入れている。

丸材L-15は、長さ17.5cm・直径6~7.5cmの円筒形の芯持ち丸材で、両木口面は平坦になるように加工されている。L-17は、直徑2cm前後の細い芯持ち丸材の先端を多面から加工して杭先状に尖らせている。L-18は、直徑2cm前後の芯持ち丸木で、片方の木口に1面からの加工(切断)痕跡がある。L-26は、残存長140.8cm・直徑約5cmの芯持ち丸木で、片方の木口に前後2面からの加工(切断)痕跡がある。L-30は、残存長49.9cm・直徑4.5cm前後の芯持ち丸木で、片方の木口に多面からの加工痕跡がある。先端部分は、平らになるように加工されている。

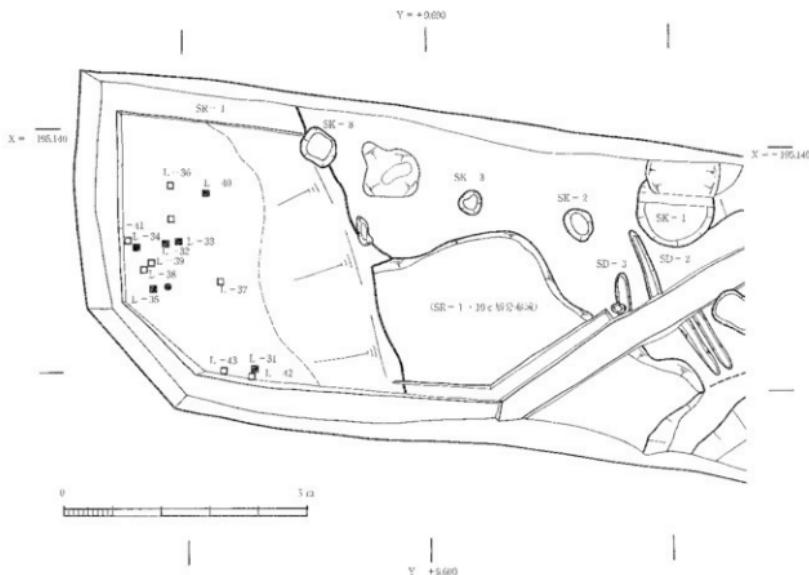
7) 11層と出土遺物

11層は、黒色の泥炭質粘土層で、調査区北側にのみ分布する。分布範囲にあっては、河岸斜面の上部では15cmほどの厚さがあるが、斜面の下に移行するにしたがって薄くなる。11層の分布範囲の限定性と層厚の変化については、10c層の砂層堆積時に11層が流出したことが原因と推定される。

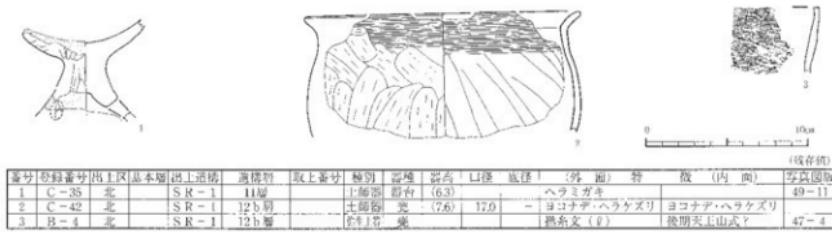
11層からの出土遺物は少なく、上部器片が11点出土しただけである。このため図化した遺物は1点だけである（第66図1）。上部器C-35は器台の脚上部から受け部にかけての破片である。脚部は八字状に広がり3方に透かし孔があく。受け部は小さく、受け部から脚部への貫通孔はない。

8) 12層と出土遺物

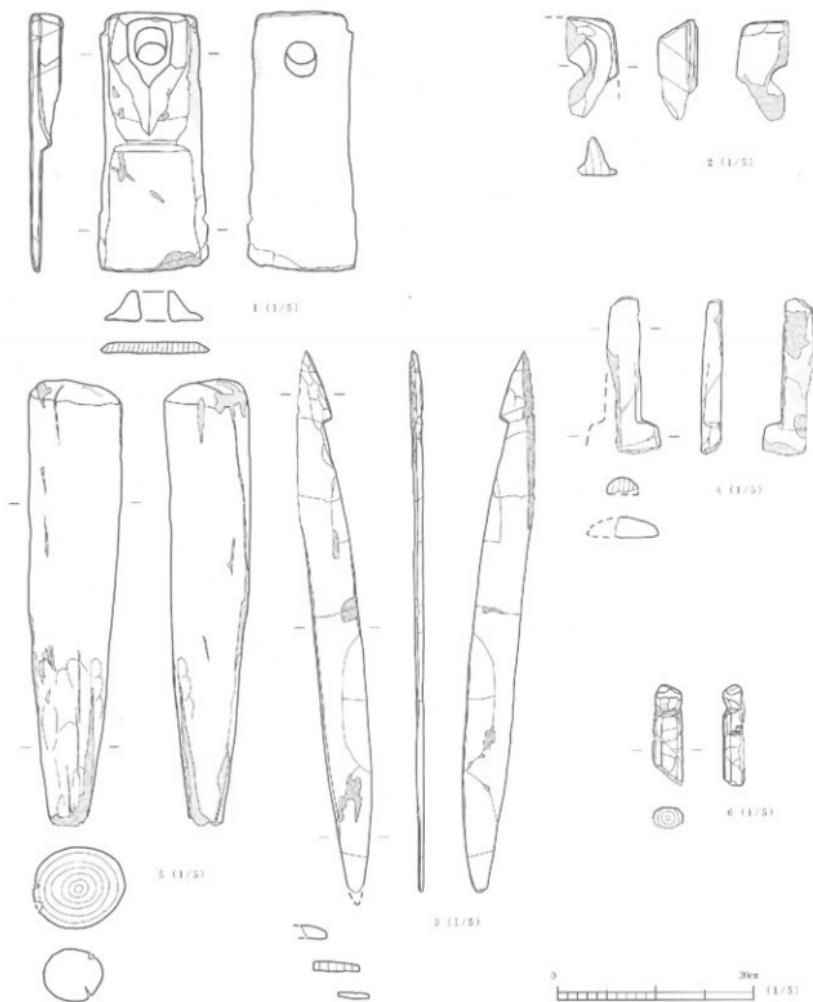
北区の12層は、黒褐色の粘土を基調とするが、上色・上質の差異によって12a層・12b層・12b'層・12c層の4層に細分された。12a層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、河岸斜面上部から底面まで分布しているが、河川跡南部の河岸斜面上部では検出されなかった。層厚は10~20cmである。河川跡南部では、11層と同様に10c層の流入の際に



第65図 河川跡12層遺物出土位置図



第66図 北区河川跡11層～12層出土遺物



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 施不規 | 出土遺物 | 遺構類 | 取上番号 | 種別 | 器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 器種 | 本取り写真図版 |
|----|------|-----|-----|------------|--------|----------|--------|-----------------|--------------|-------------------|-------------------|-----------|------|---------|
| 1 | L-35 | 北区 | | SR-1 12a 層 | 木・直柄平鍬 | No.5 | 木・直柄平鍬 | コナラ | 26.5 14.1 | 10.0 | 1.26 2.33×2.31 | 斜孔円形、直柄斜刃 | 楕円 | 55-1 |
| 2 | L-34 | 北区 | | SR-1 12a 層 | 木・No.4 | 木・直柄平鍬 | クヌギ | 10.2 5.1 | 3.9 | 1.02 2.31×2.31 | 斜孔片、斜孔円形 | 楕円 | 55-2 | |
| 3 | L-33 | 北区 | | SR-1 12a 層 | 木・No.3 | 木+2.25二段 | クヌギ | 55.5 27.5 | 10.0 | 1.00 2.31×2.31 | 直柄斜刃、斜刃片 | 楕円 | 55-4 | |
| 4 | L-32 | 北区 | | SR-1 12a 層 | 木・No.2 | 木・直柄鍬 | クヌギ | 16.0 8.5 | 6.0 | 1.00 2.31×2.31 | 直柄斜刃、斜刃片 | 楕円 | 56-1 | |
| 5 | L-31 | 北区 | | SR-1 12層 | 木・No.1 | 木・堅持 | カエデ | 45.5 9.5×8.2 | 10.0 | 2.0 | 1.00 2.31×2.31 | 直柄斜刃 | 志持丸 | 55-3 |
| 6 | L-40 | 北区 | | SR-1 12b 層 | 木・No.6 | 木・有茎木鍬 | セマツ | 10.3 6.5 | 3.0 | 2.1 | 八角柱 | 志持角 | 56-2 | |

第67図 北区河川跡12層出土木製品類1

12a層が流された可能性がある。12b層は、浅黄色粘土を斑状に含む暗灰黄色の粘土層で、河川跡のほぼ全域に分布している。層厚は15cm前後である。12b'層は、褐色粘土を含む黒褐色の粘土層で、12層堆積段階の河川底面部分に堆積している。層厚は10~20cmである。12c層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、河川跡北側の河岸斜面上位から底面近くまで分布している。層厚は10~15cmほどである。

12層からの出土遺物は、弥生土器及び土師器と木製品類がある。弥生土器は、3点出土しており、1点は鉢の体部の破片で、平行する2条の沈線の下に繩文が施されている。1点は壺の体部破片で、繩文(LR)が施されている。他の1点は、反りのない口縁部の破片である(B-4:第66図3)。口縁部は平坦で、口縁全体は僅かに波打つようになると観察される。内面は細なナデ調整で、外面は粗い捺糸文(I)が施されている。これに類似する土器は、富沢遺跡から出土しており、弥生時代後期の天王山式に位置付けられている(太田:「1988仙台市文化財調査報告書第113集」p.241~248・工藤:「1999仙台市文化財調査報告書第235集」p.35~36)。

土師器は破片が數十点出土しているがいずれも小破片で、器形全体のわかるものではなく、図化したのは1点だけである。12層出土土師器C-42(第66図2)は、体部が扁平な球形を呈する壺で、口縁部はやや短く、強く外反する。器壁は薄く作られている。口縁部と体部の境の内面には明瞭な稜がつく。調整は体部外側が最終調整としてヘラケズリ調整されている。器形の特徴から、塙釜式期に属するものと考えられる。

木製品類は、土師器の出土量からすると多く、製品や材類が多数出土している。

木製品としては、直柄平鋤2点(L-34・35)・ナスビ型二叉鋤(L-33)・藤柄鋤(L-32)・堅杵(L-31)・有頭木製品(L-40)がある(第67図)。L-34は、直柄平鋤の頭部の破片で、後面から見て右側の破片である。頭端部は半らである。側面は、刃先方向に移行するにしたがって僅かに広がっている。着柄隆起も残っており、残存部の状況から流線形ないし環丸の逆三角形を呈すると推定される。柄孔は円形である。着柄隆起下端と頭部上面および側面との間は、5mm前後と狭く作られている。直柄平鋤L-35は、平面形が、刃先側の幅が僅かに広い長方形を呈す。着柄隆起は、ホームベース形の5角形を呈し、頂点が下方にのびる。隆起上端は、鍔の上端に接し、全長の約1/2の長さがある。隆起の先端には、鍔の後面中央を横断する隆脊が作り出されている。身部は全体的に1cm前後と厚い造りである。刃先は僅かに湾曲して中央部が張り出している。側面は、再加工されており、着柄隆起部を含めてもとの幅より狭く作り直されている。後面から見て左側面の上端には段差ある。この段差については、再加工以前に、中在家南遺跡第1次調査区河川跡12層出土直柄平鋤L-911(本書P.132附図2)や第4次調査河川跡12層出土直柄平鋤L-61のように、鍔頭部の着柄隆起の両側にあけられた方形の孔の痕跡であると考えられる。

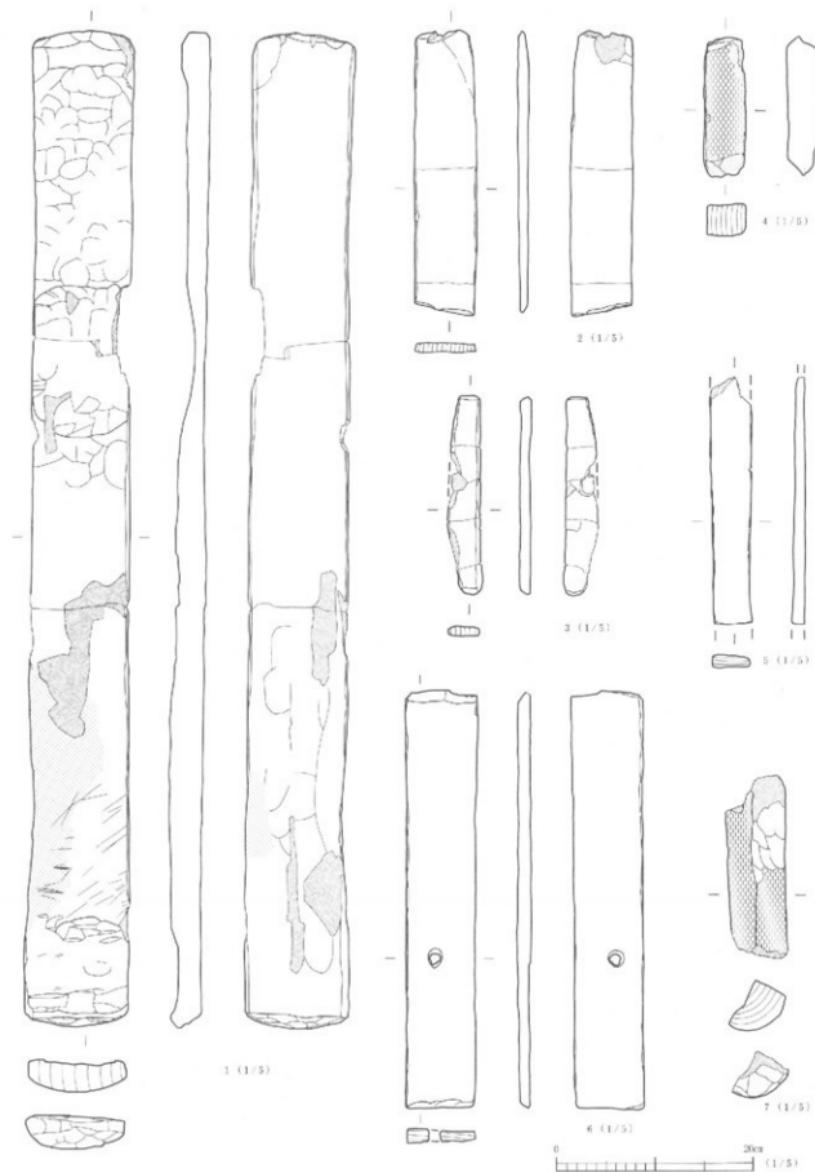
ナスビ型二叉鋤L-33は、壺に半分に割れた破片で、軸部はなく、ナスビのヘタにあたる突起部から下が残っている。ヘタの部分は、突起状に削り出されたものではなく、弧状に湾曲する側面の上部を「形に削ってクランク状の段差を形成している。歯部の幅は5cm弱で、長さは段差から約49.5cm、又の部分から約38cmある。

藤柄鋤L-32は、軸部から身部上端にかけての破片である。軸部上端は欠損している。軸部の断面形はカマボコ形を呈する。軸部と身部の境は階段状となり、幅2cmほどの肩部が形成されている。

堅杵L-31は、握り部から半分ほどに折れた破片である。芯持ちの丸材が素材となっている。残存部の長さは45.5cmで、握き部先端の直径は9.5cm前後である。握き部の先端は扁平な球形を呈している。握き部と握り部との境は不明瞭で、握き部から握り部にかけて徐々に細くなっている。握り部付近には加工痕が残っている。

有頭木製品L-40は、幅3.0cm・厚さ2.1cmの芯持ちの素材で、残存する一方の端部に、扁平な略球状の頭部が作り出されている。頭部以外の棒状の部分は、断面形が扁平な8角形に面取りの加工がなされている。

材は、角材1点(L-42)、柵目板3点(L-36・39・41)、板目板2点(L-37・38)、分割材1点(L-43)などがある(第68図)。角材L-42は、長さ14.2cmの短い角材で、側面は削り面と焦げ面である。両面口面は、切断痕跡と観察される加工がある。



第68図 北区河川跡12層出土木製品類2

第68回観察表

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土標識 | 地質層 | 取上番号 | 種別・品種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 木取り寸 | 直頭版 |
|----|------|-----|------|-------|-------|-------|-------|---------|---------|-------------|-----|------|-----|
| 1 | L-39 | 北区 | SR-1 | 12a 砂 | 材・Na4 | 材・板材 | 102.3 | 10.7 | 3.4 | 片面に溝み状の加工有り | 板目 | 56-7 | |
| 2 | L-36 | 北区 | SR-1 | 12a 砂 | 材・Na1 | 材・板材 | 29.2 | 6.4 | 0.8-1.2 | 端部に削り | 板目 | 56-3 | |
| 3 | L-41 | 北区 | SR-1 | 12b 砂 | 材・Na6 | 材・板材 | 20.3 | 3.2 | 1.1 | 両端加工? 板材? | 板目 | 56-6 | |
| 4 | L-42 | 北区 | SR-1 | 12b 砂 | 材・Na7 | 材・角材 | 14.3 | 4.2 | 3.3 | 両端加工 | 芯無角 | 56-4 | |
| 5 | L-38 | 北区 | SR-1 | 12a 砂 | 材・Na3 | 材・板材 | 25.3 | 4.2 | 1.0 | | 板目 | 56-5 | |
| 6 | L-37 | 北区 | SR-1 | 12a 砂 | 材・Na5 | 材・板材 | 42.8 | 7.0-7.5 | 1.0-1.5 | 両端加工、内孔有り | 板目 | 56-6 | |
| 7 | L-43 | 北区 | SR-1 | 12b 砂 | 材・Na8 | 材・分割材 | 18.8 | 6.2 | 5.2 | 両端加工 | 芯無 | | |

柱目板L-36は、幅6.4cm・厚さ8~12mmに加工された板である。両端には切断痕があり、長さは28.9cmである。柱目板L-39は、長さ102.3cm・幅10cm前後に整形されたやや厚みのある板材で、断面形は扁平なカマボコ形を呈する。両面にはまだ粗い加工痕が残っている。断面が平坦な面の両端部は、木口面に沿って削り残されて帯状に高くなっている。また、全長の上から1/3くらいの部分と下端に近い部分は、浅く凹状に削り込まれている。何らかの製品を複数個連結して同時に加工した木製品の未製品、または部材の未製品と考えられる。柱目板L-41は、長さが20.3cmで、片方の側面が張り出しており、平面形が台状の6角形を呈している。また、実測図左側の面が右側より狭くなるように両側面および両木口面が加工されている。

板目板L-37は、全長42.8cm・幅約7~7.5cm・厚さ1~1.5cmの板で、両端には切断の加工痕がある。全長の三分の二くらいの位置に、中央よりやや片方の側面に寄って孔があけられている。板目板L-38は、幅4cm前後・厚さ約1cmの板材である。

分割材L-43は、片方の木口だけが残る材で、残存長は18.8cmである。断面形は扇形を呈し、芯はない。残存する木口には切断痕が残るほか、片側の削り面にも加工痕が観察される。

9) 13 層

13層は、未分解の植物遺体を多く含む黒褐色の粘土層で、河川跡の下半部に分布している。層厚は10~20cmと比較的厚く堆積している。層厚が厚い割には、遺物は出土していない。

10) 14 層

14層は、黒色の泥炭質粘土層で、層下部に砂の薄層を含む部分がある。層厚は10cm前後で、河岸斜面全体に分布する部分と、底面付近にだけ分布する部分がある。14層からも遺物は出土していない。

11) 15 層

15層は、オリーブ黒色ないし灰オリーブ色の粘土層を基調とする。15a層・15a'層・15b層に細分され、15a'層は、泥炭質粘土層である。3層合わせた層厚は110cm以上ある。壁面は16層と互い違いに楔状に重なって堆積している。河川跡15層の南半部では、16層中から15層中にのびる倒木(流木)が多数検出されている(図版20-4)。調査を実施した部分の15層からの出土遺物はない。

第5章 押口遺跡第3次調査南区の概要

第1節 発見遺構の概要と基本層位

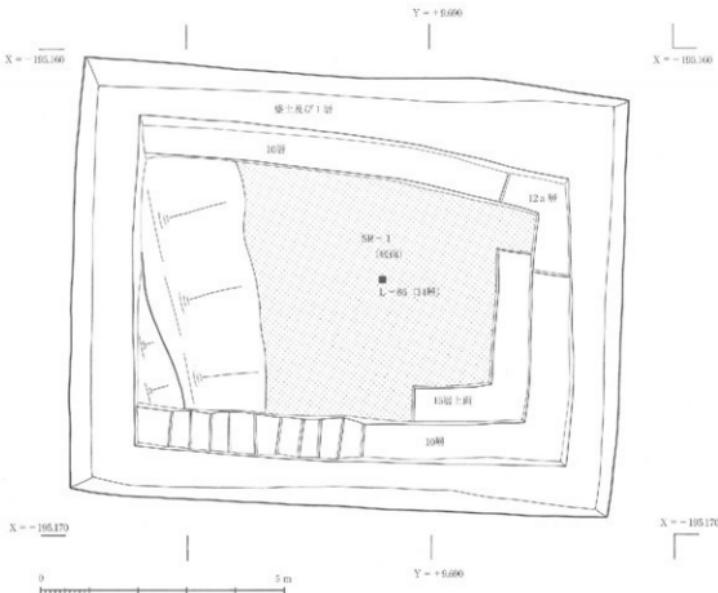
1 南区の位置

第3次調査南区は、土地区画整理事業実施以前には水田として土地利用されていた。南区は、北区の約15m南側にあたる。第1次調査のⅢ区北端部とは2m離れているだけである。調査区は、押口遺跡第1次調査と、その際の試掘調査によって発見された河川跡（S R - 1）の推定流路のほぼ中央に位置する（第44図）。推定された流路は、押口遺跡付近で大きく蛇行しており、本調査区の東側が河川の攻撃斜面、西側が堆積斜面となっている。

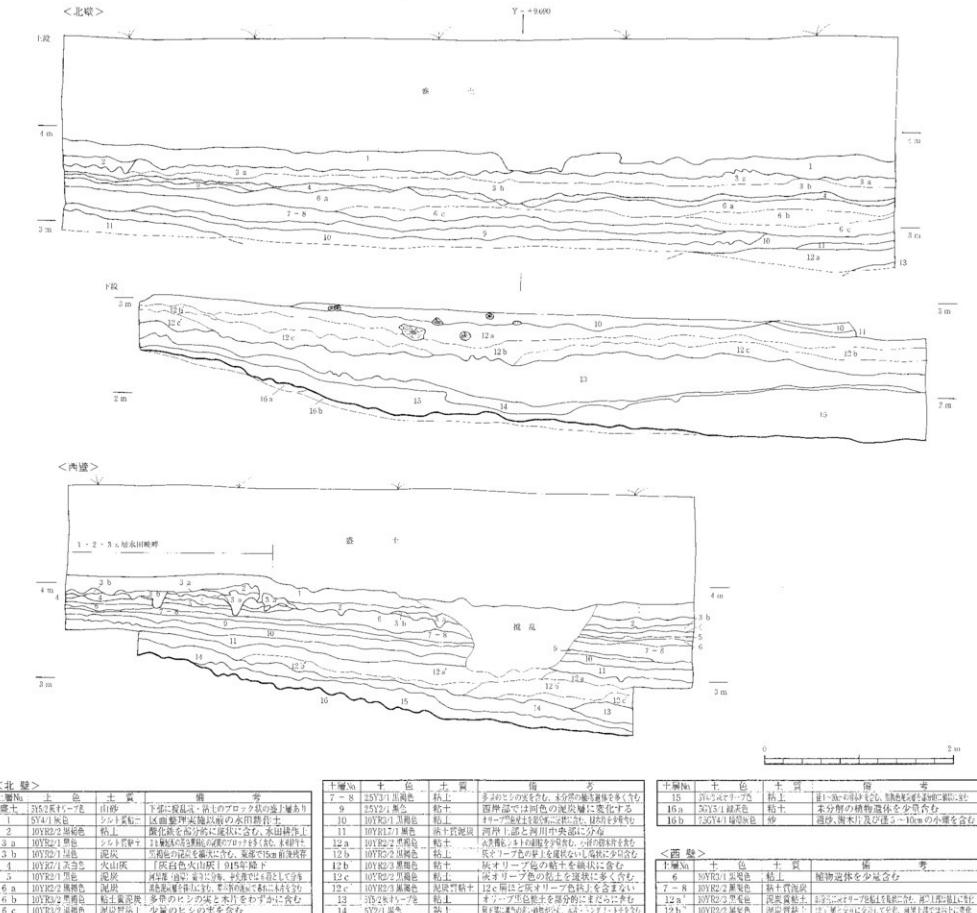
調査区は、東西約11m・南北9mの大きさで設定した。盛土が120cm前後と厚いために、実際に調査を行ったのは東西約9m・南北約7mの範囲である。

2 発見遺構の概要

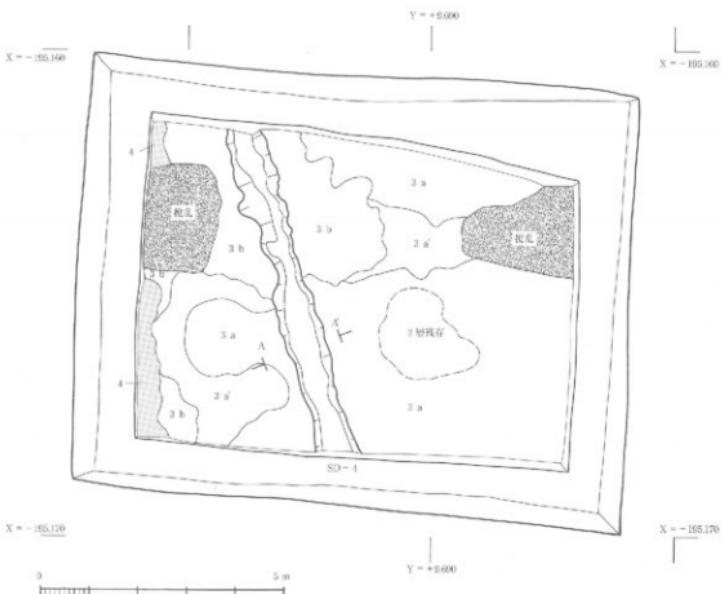
南区は先に記したように、河川跡の中央に設定された調査区であることから、盛土層と層厚が20~25cm旧水田耕作土の1層、および近世から近代にかけての水田耕作土層である2層までを、重機を使用して除去した。この段階で、河川跡の自然堆積上層（3 b層・4層）と、河川堆積土を水田耕作土層とする人為的堆積層（3 a層・3 a'層）が混在する面が検出された（第71図）。この面では、溝跡1条（S D - 4溝跡）が発見された。また、大きな挖



第69図 押口遺跡第3次調査南区平面図



第70図 押口遺跡第3次調査南区断面図

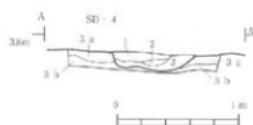


第71図 3層検出状況

乱坑が、調査区北側の西壁と東壁にかかる2ヶ所で検出された。向撋乱坑は、1層の水田耕作土上面から掘られている。

SD-4溝跡 調査区の西寄りの3a層上面で検出された。方向はN-16°-Wで、上面幅は80cm前後、深さは15cm前後である。断面形は浅いU字形を呈す。堆積土は実測位置で3層に分けられた。1層は黒

色のシルト質粘土で、2・3層は黒褐色の粘土層である。2層には未分解の植物遺体が含まれる。1・3層は均一な土壤で、水成堆積層と観察された。遺物は出土していない。この溝跡の時期については、遺構の検出された面は3a層上面であるが、溝跡堆積土の3層の土質が河川跡堆積土の2層の水田耕作層に類似していることから、2層水田の時期の遺構である可能性が高いと推察される。



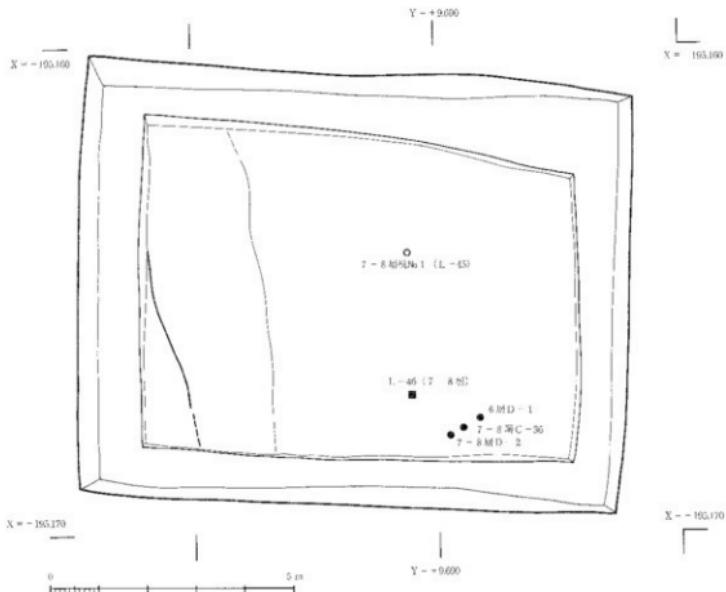
第72図 SD-4溝跡断面図

| 上層No | 七 色 | 土 質 | 備 考 |
|------|------------|--------|---------|
| 1 | 19TR21 黒色 | シルト質粘土 | |
| 2 | 19TR31 黒褐色 | 粘土 | 未分解植物含む |
| 3 | 19TR22 黒褐色 | 粘土 | |

第2節 河川跡の堆積土と出土遺物

1 河川跡の基本層位

第3次調査南区の基本層位は、押口遺跡の他調査区の河川跡や中在家南遺跡の河川跡と同様に、15層に大別して層序を把握することができた。また、3層については、他調査区と同様に水田耕作土となっている3a層と、3a



第73図 河川跡6層・7-8層遺物出土位置

層の主な母材となっている自然堆積層の3b層に分けられた。また、7層と8層は区分できず、両層に対応する層順の土層については、北区と同様に7-8層と呼称して調査を行った。

6層および12層については細分が可能で、6層は6a・6b・6c層の3層に分けられ、12層は12a・12a'・12b・12b'・12b''・12c・12c'層の7層に細分された。河川跡堆積層の状況については次項で記述する。

河川跡(河川跡堆積土上部)の河岸面および底面は、河川跡堆積土下部堆積土層(16層群)からなる。16層は、掘り下げを実施しなかったが、河川跡の底面から壁面にかけては、大きく上下2層に分かれることが観察された。上層は、河岸面中位より上に堆積している土層で、緑灰色から褐色の粘土質の土塊(16a層)からなる。下層は、河岸面の下位から底面にかけての堆積層で、暗緑灰色の砂層(16b層)を主体としている。

2 各層の状況と出土遺物

1) 2 層

黒褐色の粘土からなる水田耕作土層で、近世から近代にかけて形成された土層である。1層の区画整理以前の水田耕作による削平を受けて西壁際など部分的に残存するだけである。残存部分の層厚は5~10cmである。遺物は、土師器・須恵器の細片が少量出土しているだけである。

2) 3 a 層

3 a 層（第71図3 a'層を含む）は、黒色のシルト質粘土からなる水田耕作土層で、3 b 層が起源と考えられる泥炭質土壤のブロックを多く含んでいる。3 a 層は、2 層または1 層の耕作による削平を受けており、調査区の西壁際と北西部には残存していない。層厚は、北壁付近で10~15cm 前後である。層の傾斜はほとんどなくほぼ水平に堆積している。遺物は、土師器・須恵器片が多数出土している。

3) 3 b 層

3 b 層は、黒褐色の自然堆積の泥炭質土壤である。調査区の西壁際を除いて、調査区のほぼ全面で検出された。上面が3 a 層水田による削平を受けているが、全体的に層厚は3~15cmほど残り、部分的には20cm以上も残存しているところもある。遺物は土師器片が数点出土しているだけである。

4) 4 層

4 層は灰白色火山灰（十和田a 火山灰）層で、調査区のほぼ全域に分布している。層厚は5cm 前後である。層の傾斜は、僅かに西側より東側に下がっている。出土遺物はない。

4 層は、3 a 層上面で調査区西壁際に南北方向の帶状にのびて検出されているが、この部分では1 層が盛り上がりしている。また、2 層および3 a 層の水田耕作土層下面のレベルを延長した場合、4 層は削平を受ける可能性の高い位置にありながら、4 層が帶状に残存しているということは、3 a 層水田・2 層水田・1 層水田に共通する畦畔がこの位置に存在したことを示していると考えられる。

5) 5 層

5 層は、中在家南遺跡および押口遺跡で共通する基本層で、4 層直下の黒色泥炭質土壤を指標とする。本調査区では、調査区西部の河岸斜面上部に分布する。層厚は5cm 前後である。

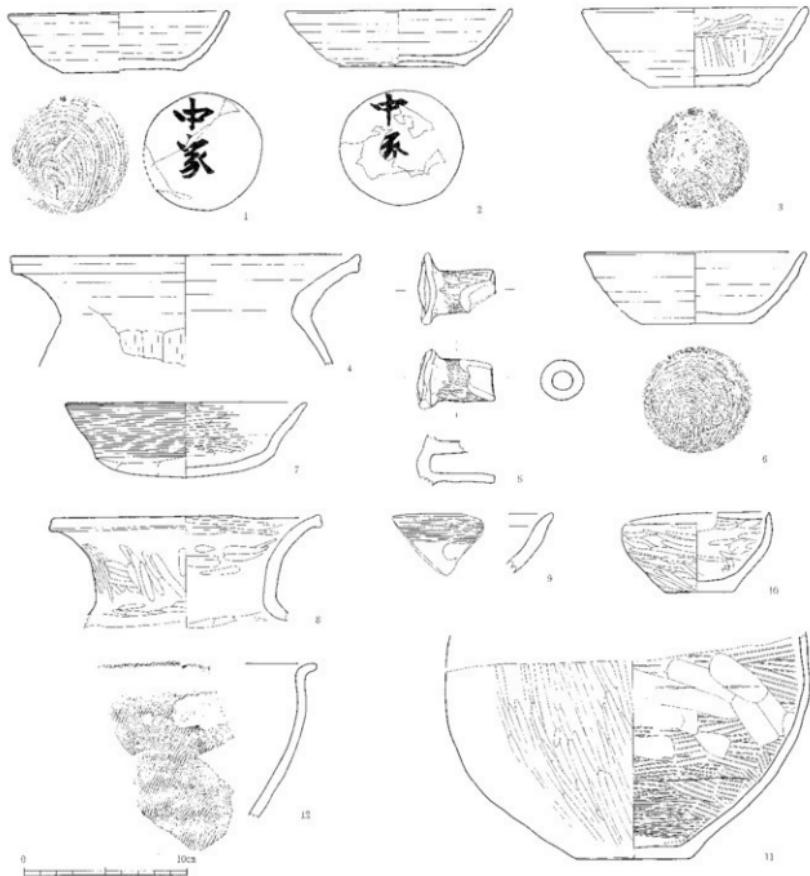
6) 6 層と出土遺物

6 層は、黒褐色の泥炭層（6 a 層）を基本としているが、層下部には黒褐色の粘土質泥炭層（6 b 層）や黒褐色の泥炭質粘土層（6 c 層）が分布している。また、調査区西壁寄りの河岸斜面上部では黒褐色の粘土層に漸移的に変化する。6 b 層・6 c 層にはヒシの実が含まれている。3層を合わせた層厚は一定せず、場所によって10~30cm 程度の変化がある。

出土遺物としては、土師器・須恵器・木製品類の材がある。土師器は、実測可能なものは1点だけである。D-1（第74図3）は、ロクロを使用した壺で、底部の切り離しは回転糸切りによる。内面は黒色処理されている。

須恵器は、多数の破片が出土し、実測した遺物は3点ある（第74図1・2・4）。E-2は壺の肩部から口縁部にかけての破片である。体部上端にもヘラケズリが行われている。頸部から口縁部にかけては外反し、口縁端部は上方につまみ出されて受け口状になっている。色調は褐色を呈し、焼きはやや軟質である。E-3・E-4は、類似した器形の壺で、ともに口径の割りの器高が低く、底径はやや大きい。色調も両側体とも褐色を呈し、須恵器E-2と類似している。また、両個体の底部外面には「中家」の墨書きがある。

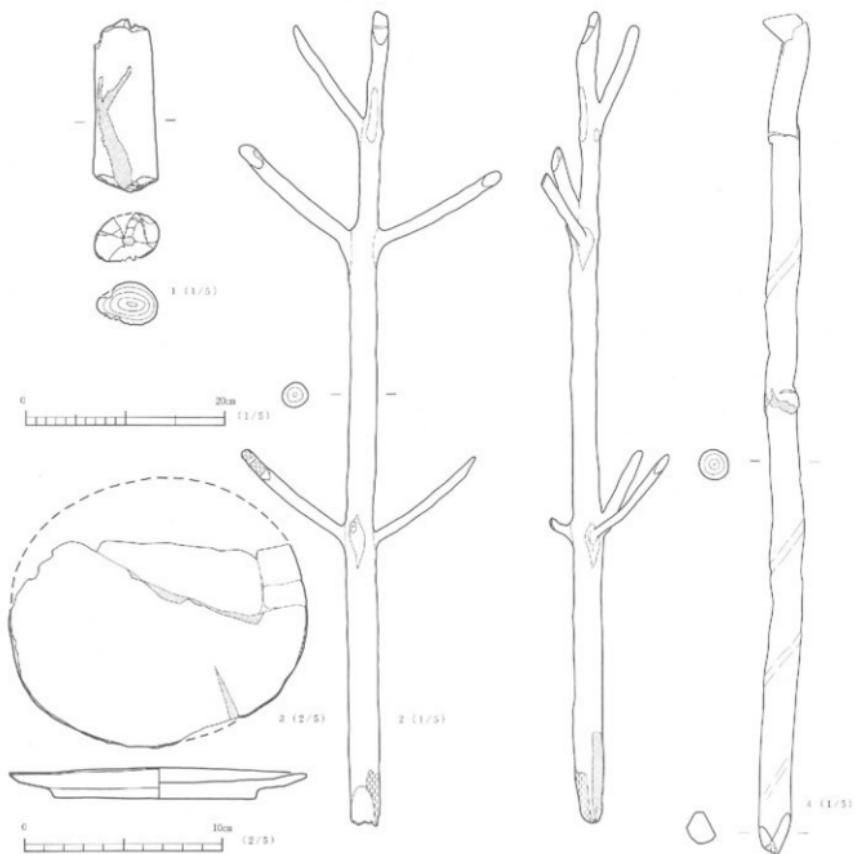
材は、全長83.3cm の丸材（L-87：第75図2）で、3段に12~15cm ほどの長さだけ枝を残して切り出している。幹の基端部および先端にも切断痕がある。幹には、下段部分のように長さ3cm ほどに短く切られた枝や、上段部分のように、完全に打ちちされた痕跡も残存している。



(絞り図版)

| 番号 | 監理番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 通積層 | 取上番号 | 種別 | 面積 | 断面 | 1口径 | 底深 | (外)面 | 特 | 文 | (内)面 | 写真図版 |
|----|------|-----|------|--------|------|------|-------|--------|---------|---------|-------------|----------|------|---|------|-------|
| 1 | E-3 | 南 | SR-1 | 6層上部 | 須恵器 | 16 | 3.7 | 13.5 | 7.3 | 底深約10mm | 等高(印鑑) | ロクヨウ | | | | 57-10 |
| 2 | E-4 | 南 | SR-1 | 6層 | 須恵器 | 15 | 3.5 | 13.9 | 7.6 | 底深約10mm | 等高(印鑑) | ロクヨウ | | | | 57-11 |
| 3 | D-1 | 南 | SR-1 | 6層 | No.1 | 土師器 | 14 | 4.8 | 13.6 | 6.2 | 底深約10mm | 等高(印鑑) | ロクヨウ | | | 57-8 |
| 4 | E-2 | 南 | SR-1 | 6層 | 須恵器 | 乗 | (6.8) | 21.1 | 底部へラケズリ | | ロクヨウ | | | | | |
| 5 | C-36 | 南 | SR-1 | 7~8層 | No.2 | 土師器 | ? | | | | ヘラミガキ | (内)面照(色) | | | | 57-2 |
| 6 | D-2 | 南 | SR-1 | 7~8層 | No.1 | 土師器 | 环 | 4.4 | 13.6 | 6.6 | 水浸十景、瓦片剥離あり | ロクヨウ | | | | 57-9 |
| 7 | C-37 | 南 | SR-1 | 9層、10層 | 環、環 | 土師器 | 环 | 4.6 | 14.6 | | ヨコナデ・ヘラケズリ | ヘラミガキ | | | | 57-3 |
| 8 | C-39 | 南 | SR-1 | 10層 | | 土師器 | 盒 | (6.5) | 16.2 | | ヨコナデ・ハラケズリ | ハラミガキ | | | | 57-5 |
| 9 | C-38 | 南 | SR-1 | 10層 | | 土師器 | 环 | | | | ヨコナデ・ヘラケズリ | 裏面の為、不明 | | | | 57-4 |
| 10 | C-41 | 湖 | SR-1 | 12層 | No.2 | 土師器 | 环 | 4.9 | 8.9 | 4.2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | | | | 57-6 |
| 11 | C-40 | 南 | SR-1 | 12層 | No.3 | 土師器 | 蓋 | (13.9) | - | 7.1 | ヘラミガキ | ヘラナデ・ハケメ | | | | 57-7 |
| 12 | B-5 | 南 | SR-1 | 14~15層 | 瓦 | 瓦 | 多 | 多 | | | 純文(1.R) | | | | | 57-8 |

第74図 南区河川跡6層~15層出土遺物



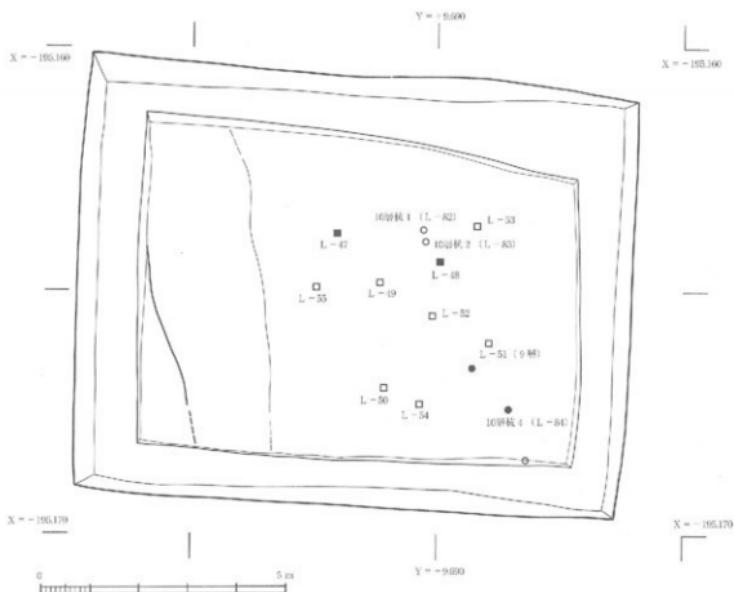
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 記述 | 遺物種 | 取土番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 樹種 | 木製品類 |
|----|------|-----|------|------|------|------|-------|-----|------------|----|---|---|-----|------|
| 1 | L-44 | 南区 | SR-1 | | 材・木材 | 17.7 | 6.0 | 4.4 | 両端加工・出土層不明 | | | | 芯持丸 | 58-1 |
| 2 | L-87 | 南区 | SR-1 | 6層 | 材・丸材 | 83.2 | 27 | 2.5 | 枝付・枝先切断痕 | | | | 芯持丸 | 58-2 |
| 3 | L-46 | 南区 | SR-1 | 7-8層 | 木・脂 | 116 | 84 | 16 | 白木 | | | | ケヤキ | 58-4 |
| 4 | L-45 | 南区 | SR-1 | 7-8層 | 木・脂 | 85.6 | 31 | 3.0 | 先端加工・2面1段 | | | | 芯持丸 | 58-3 |

第754図 南区河川跡1層～7～8層出土木製品類

7) 7-8層

黒褐色の粘土質泥炭ないし粘土層で、多量のヒシの実や植物遺体を含む。河岸斜面から河川底面に向けて緩やかに傾斜して堆積している。層厚は5~20cmほどで、河川底面側が厚く、河岸斜面の上部に移行するにしたがって薄く堆積する傾向がある。

出土遺物には、土師器と木製品類がある。土師器C-36(第74図5)は、内外面とも黒色処理された土師器の突



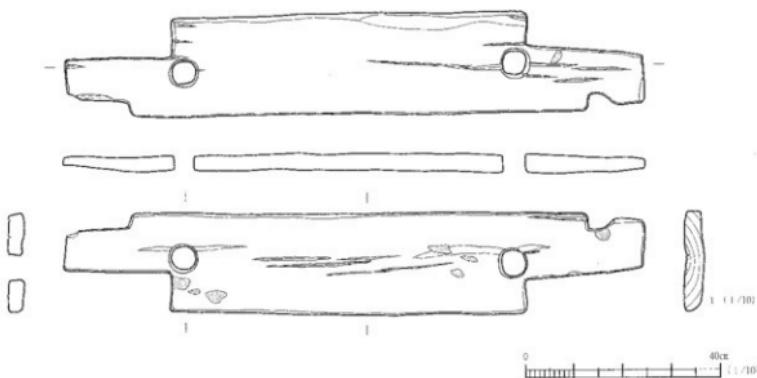
第76図 河川跡9層・10層遺物出土位置

起部分の破片である。突起部分は中空の円筒形で、外面は丁寧にヘラミガキ調整が行われている。器種は不明であるが、何らかの取っ手部分と考えられる。D-2（第74図6）は、ロクロを使用した壺で、底部の切り離しは回転糸切りによる。内面は黒褐色を呈するが、黒色処理がされたと認められる状態ではない。ヘラミガキ調整もなされておらず、いわゆる赤焼け上器の部類に含められる土師器である。このほか土師器の細片が数点出土している。

木製品類は木皿（L-46）と杭（L-45）がある（第75図3・4）。木皿L-46は、直径が15cmほどの白木の浅い皿である。高台部は、高さはないが口径に比べて径が大きい。台の縁辺部分に削り出しあではなく底面全体が平らに作られている。杭L-45は、残存長86.5cm・直径3cm前後の芯持ち丸杭で、先端には2方向からの加工痕跡がある。

8) 9層と出土遺物

河川跡の中央部分では、黒色の粘土層として堆積しているが、西壁際の河岸部分では泥炭層となっている。層厚は中央部分で10~15cm、河岸部分で5cm前後である。出土遺物には、土師器・須恵器・木製品類がある。土師器は壺C-37のほか非ロクロ土師器の破片が数点出土している。壺C-37（第74図7）は、9層中からと10層上面から出土した破片が接合したものである。やや扁平な丸底で、底部と口縁部の境は内外面に明瞭な段がついて強く屈曲する。口縁部は、幅が広く外反し、立ち上がりの角度は比較的急である。内面は全面がヘラミガキのうえ黒色処理されている。また、内面には直径が1~5mm程度の窪みが無数にあり、焼け爆ぜと考えられる。この土師器については、押口遺跡第3次調査北区の10層出土土師器のA群（9層と10層が接合したもの）と特徴が共通し、古墳時



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 出土層 | 出土遺物 | 基盤材 | 取上番号 | 種別・記述 | 個数 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 樹種 | 木取り | 季節(回版) |
|----|------|-----|------|------|-------|-------|---|-----|--------------------------------------|-----|--------|----|----|------|--------|
| 1 | L-51 | 南区 | SR-1 | 9層 | 材・N28 | 材・駆放し | 118.5 20.6 30~35 円柱孔 内側 約68cm 約61cm | 206 | 30~35 円柱孔 内側 約68cm 約61cm | 8cm | 袖受け・二孔 | クリ | 板目 | 38 5 | |

第77図 南区河川跡9層出土木製品類

代後期住社式に属するものと考えられる。

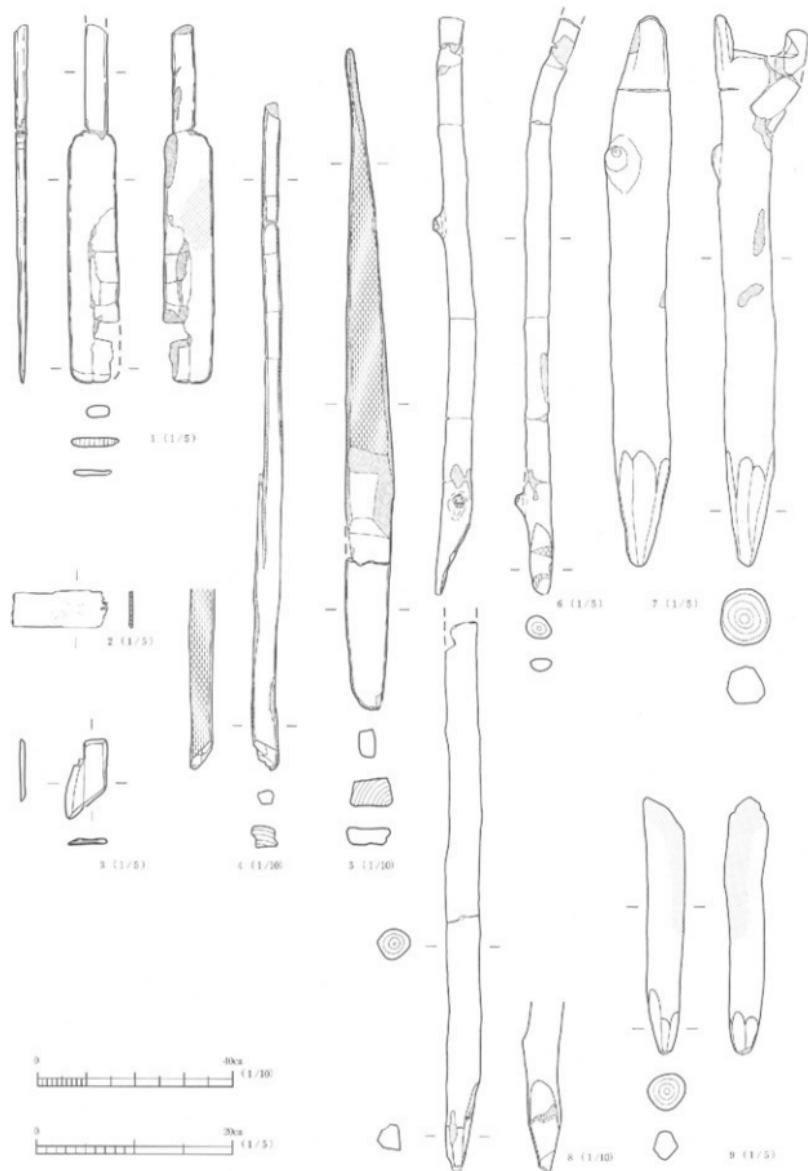
須恵器は壺の体部小破片が1点出土しているだけである。

本製品は材が1点（L-51：第77図1）出土している。L-51は、全長118.5cm・最大幅20.6cm・厚さ3~3.5cmの板目板を素材とし、横に木取りしている。側面の片側は、両木口から22~24cmの長さが、8cm前後の幅でU形に大きく切り取られている。反対側面の端部付近もU字形に切り取られている。大きく切り取られた部分の角の近くには、材の中軸線上に直径約5cmの円孔がそれぞれにあけられている。孔の中心間の長さは約68cm・内側の長さは約61cmである。このような形態の板材については、2枚扉の両開き扉からなる出入口の下部を構成する「駆放し」と呼ばれる建築材と考えられる。この駆放しは、側面端部の大きな切り取りの角と扉軸穴との間隔が、1.5~2cmと接近しているが、これは扉板と迎付または柱を接近させ、その間の隙間を極力あけないようにし、方立を必要としないための工作と推察される。

9) 10層と出土遺物

10層は黒褐色の粘土層で、オリーブ黒色の粘土粒を部分的に含む。層厚は河川跡中央部で20cm前後あるが、河岸部に移行するにしたがって徐々に薄くなる。北区のような砂の混入または砂層の形成はない。遺物は、土師器と木製品類および弥生土器と考えられる縄文の焼成された土器片などが出土しているが、北区と比べると出土量は少ない。

土師器は、団化した2点（C-38・39：第74図8・9）のほか、破片が数十点出土している。C-38は、半球形の底部から体部に外反する口縁部が付いて、内面の口縁部と体部の境には、緩やかな稜を形成する壺である。他地区の河川跡10層から出土した資料に類似品があり、古墳時代中期の南小泉式期に位置付けられる。C-39は、壺の肩部から口縁部にかけての破片で、頸部から口縁部はほぼ全体が残存する。頸部は直立気味に外傾して立ちあがつたのち、口縁部にかけて強く外反する。口縁部は平らになだらかである。調整は内外面とも細かなハケメ調整の後に粗いヘラミガキ調整が行われている。この土師器については、名取市清水遺跡の塗釜式期の壺に類似がある（丹



第78図 南区河川跡10層出土木製品類1

第78図観察表

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物(遺物別) | 取上番号 | 種別・部種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 測定 | 樹種 | 本取り | 写真回数 |
|----|------|-----|------|-----------|--------|--------|-------|------|-----|-----------------|-------|-----|------|------|
| 1 | L-47 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na6 | 木・振り棒? | 36.7 | 3.5 | 5.0 | 10 | △△△△△ | 柳 | クヌギ | 58-6 |
| 2 | L-48 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na7 | 木・板材 | 9.8 | 3.8 | 0.3 | | | | 楓 | 58-7 |
| 3 | L-56 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na8 | 木・板材 | 8.1 | 4.0 | 0.6 | 縁邊無孔 | | 楓 | 楓 | |
| 4 | L-52 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na34 | 木・角材 | 136.2 | 5.0 | 5.0 | 端部加工有り | | 芯無角 | 59-1 | |
| 5 | L-53 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na32 | 木・角材 | 135.0 | 10.0 | 5.5 | 加工有り | | 芯無角 | 59-2 | |
| 6 | L-54 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na30 | 木・丸材 | 58.0 | 2.5 | 2.3 | 先端加工、1面多段 | | 芯持丸 | 59-3 | |
| 7 | L-49 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na26 | 木・丸材 | 56.4 | 5.5 | 4.9 | 先端加工、片端多面多段 | | 芯持丸 | 59-4 | |
| 8 | L-50 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na29 | 木・丸材 | 113.0 | 6.5 | 6.1 | 先端加工、多面多段 | | 芯持丸 | 59-6 | |
| 9 | L-55 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na31 | 木・丸材 | 26.3 | 3.8 | 3.6 | 先端加工、多面段不明、片端滑擦 | | 芯持丸 | 59-5 | |

羽 茂・小野寺洋一郎・阿部博志: 1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』V宮城県文化財調査報告書第77集)。したがって、出土層とは別に、古墳時代前期のものが流入したと考えられる。

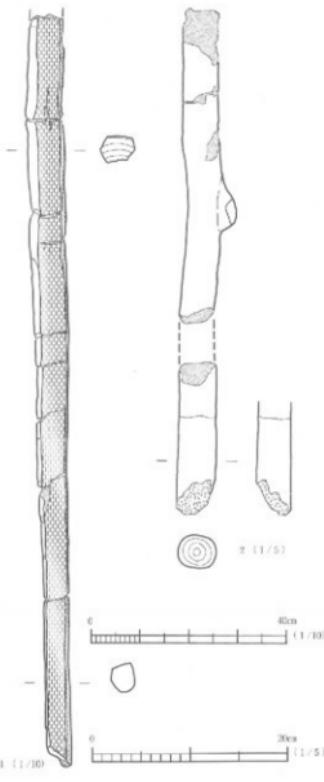
木製品類には製品と材・杭がある。木製品には振り棒(L-47: 第78図1)がある。振り棒L-47は、柄の基部側を欠損する。残存長は36.7cmである。身部は隅丸長方形呈し、長さ約25.5cm・幅5cm前後を測る。厚さは柄との接続部で1cm前後あり、先端に向かって徐々に薄くなり、先は尖っている。残存する柄部は扁平で、基部に向かって厚くなっている。

材は、角材2点(L-52・53)、板目板(L-48)、板目板(L-56)、丸材4点(L-49・50・54・55)がある(第78図2~9)。角材L-52は、全長136.2cm・最大幅と厚さが約5cmある。側面は、1面は樹皮を剥いた面で、他の3面は削面からなる。木口の一方は残存しているが、片側は破損している。残存する側の木口は樹皮側からの切断痕跡と考えられる加工が観察される。角材L-53は、全長135cm・最大幅10cm・厚さ5.5cmあり、両端が狹くなっている。幅が広い側の端部近くが加工されて3cm前後の厚さになっている。

板目板L-48は、残存長9.8cm・残存幅3.8cm・厚さ3mmの薄板で、部分的に焼痕が認められる。曲物の側板の破片と考えられる。

板目板L-56は、全長8.1cm・幅4cm・厚さ6mmほどの不整形の板で、側面と木口面が背面側に傾斜面ができるよう加工されている。

丸材L-49は、全長56.4cm・直径5.5cm前後の芯持ちの丸材である。片方の木口部分は枝の張り出し部を利用して凹形に加工されている。他方の木口部は多方向から加工して鋭く尖らせている。これと類似する丸材は、中在家南遺跡第1次調査VI区10層からも出土している。(工藤哲司: 1996「中在家南遺跡他」第1分冊本文編 仙台市



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物(遺物別) | 取上番号 | 種別・部種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特徴 | 測定 | 樹種 | 本取り | 写真回数 |
|----|------|-----|------|-----------|-------|-------|-------|-----|-----|-------|----|-----|------|------|
| 1 | L-81 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na4 | 木・板目 | 145.0 | 7.6 | 5.0 | 先端折れ曲 | | 芯無角 | 59-8 | |
| 2 | L-83 | 南区 | SR-1 | 10層 | 木・Na2 | 木・丸材 | 473.0 | 3.9 | 3.5 | 先端折れ曲 | | 芯持丸 | 59-5 | |

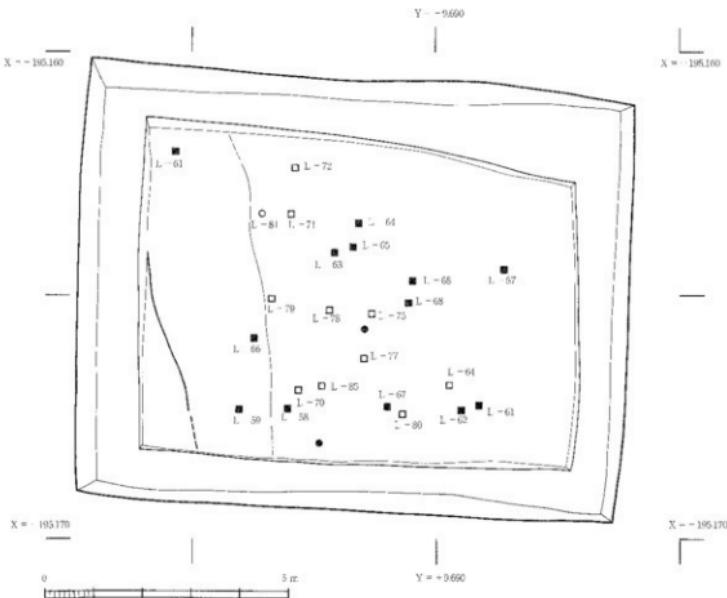
第79図 南区河川跡10層出土木製品類

文化財調査報告書第213集)。丸材L-50は、残存長113cm・直径約6.5cmの芯持ち丸材で、片方の木口部は多面から数段の加工が行われて尖っている。丸材L-54は、現存長約59cm・直径2.5cm前後の芯持ち丸材で、片側の木口は1方向3段の加工がされて尖っている。丸材L-55は、現存長26.3cm・直径4cm前後の芯持ち丸材で、片方の木口は多方向から1段の加工がなされて尖っており、他方の木口は焼焦げている。

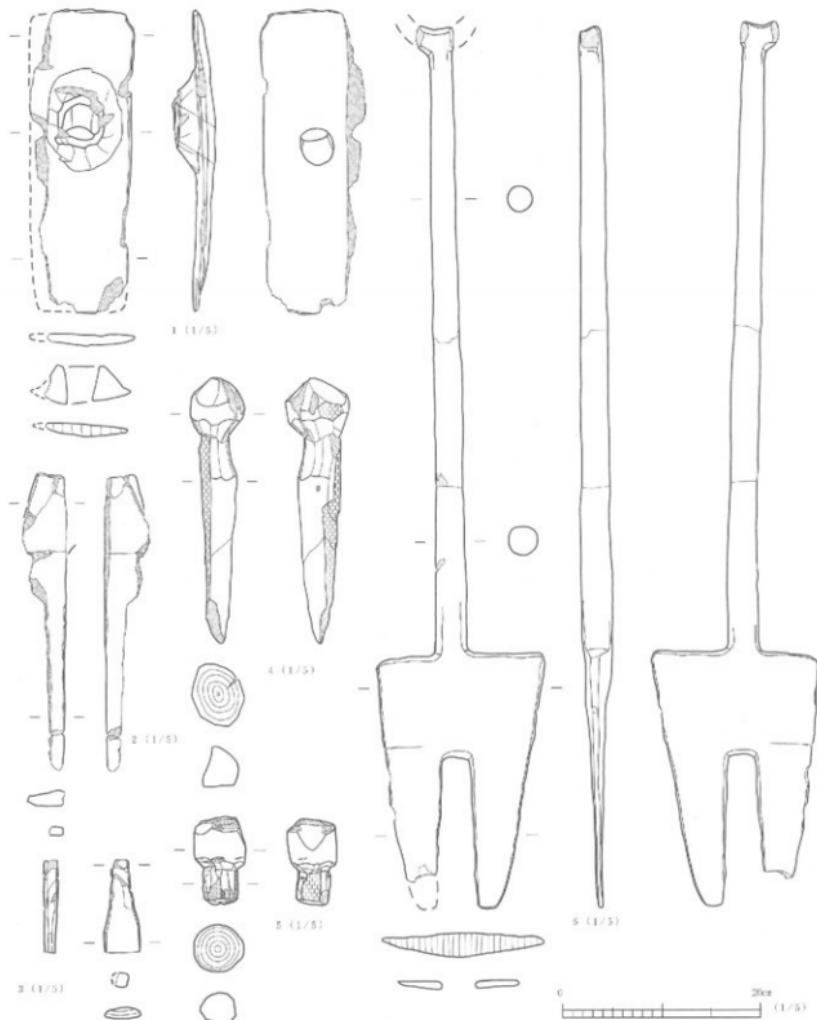
10層検出の杭は、3点あるが相互の関係は不明である。杭材は、角杭1点(L-84)と丸杭2点(L-82・83)がある(第79図)。角杭L-84は、現存長約145cm・最大幅7.6cm・厚さ5cm前後の杭で、断面形は6角形を呈し、側面は5面が割り面、1面が削り加工面となっている。先端は、1面からの加工があり、鈍角的な先端角となっているが、この加工については、切断痕の残存と考えられる。丸杭L-82は、芯持ちの丸杭で、先端の加工は不明である。取り上げの際に崩壊した。丸杭L-83は、全長が47cm以上・直径3.5cm前後の芯持ちの丸杭で、先端は折れ面となっている。

10) 11 層

11層は、黒色の粘土質泥炭層で、河川中央部と河岸上部に分布している。層厚は5~15cmほどである。出土遺物はない。

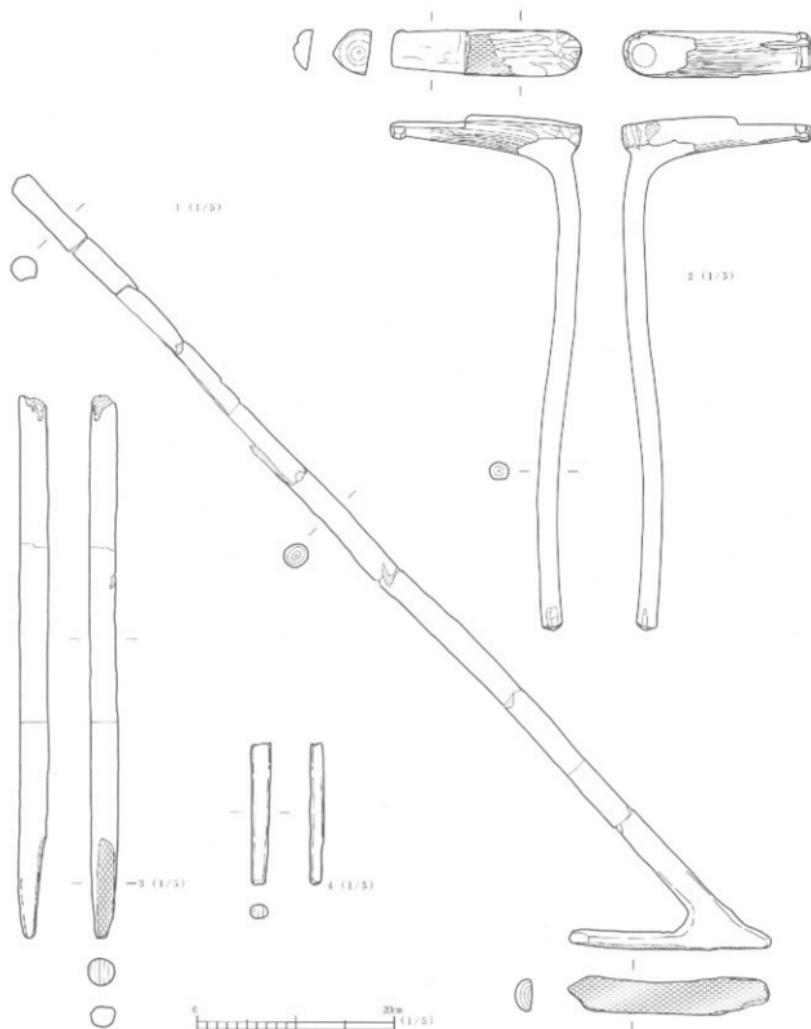


第80図 河川跡12層遺物出土位置



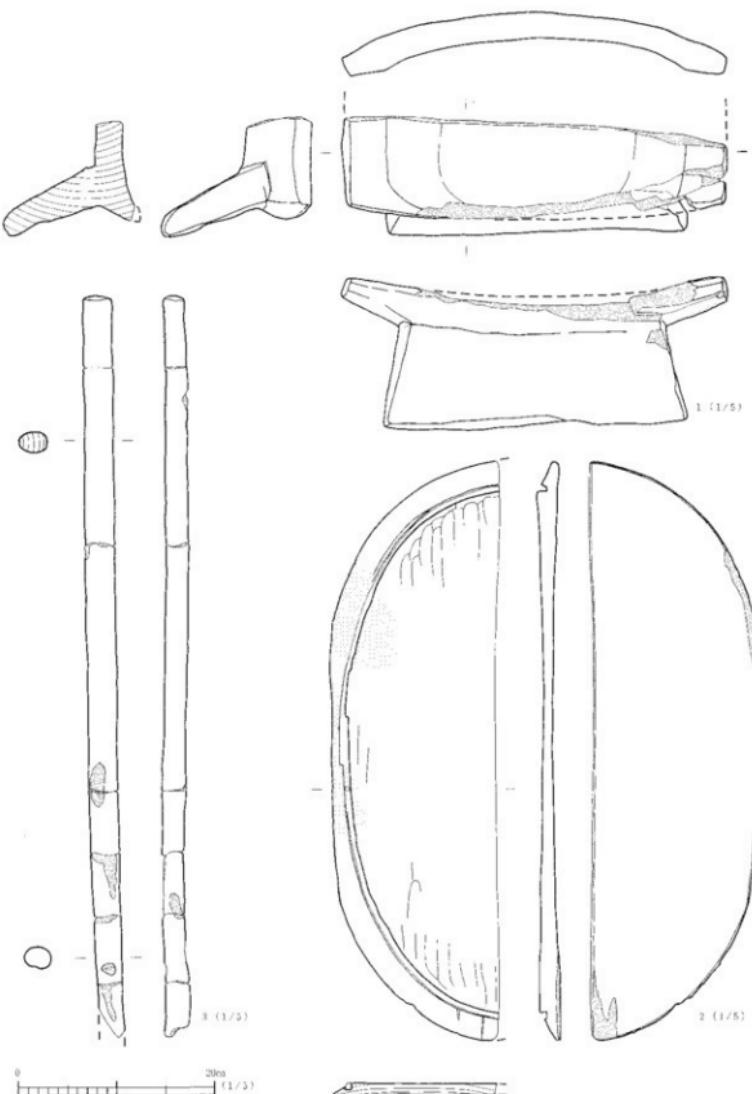
| 番号 | 登記番号 | 出土区 | 基本形 | 馬上遺物 | 遺物別 | 取上番号 | 種別 | 施縫 | 全長 | 最大 diam. | 厚さ | 特徴 | 種類 | 木取り写真図版 |
|----|------|-----|---------|--------|----------|---------|------|-------|-------|----------|----------|----------|----------|---------|
| 1 | L-59 | 南区 | S R - 1 | 12 b 扇 | 木・Na10 | 木・直納平張 | 31.4 | 10.5 | 穿孔(?) | 2.2mm | 38.1(?) | 除起溝・柄孔円形 | クヌギ属 | 狂目 60-1 |
| 2 | L-66 | 南区 | S R - 1 | 12 b 扇 | 木・Na17 | 木・直納二叉脚 | 30.5 | 4.5 | 穿孔(?) | 1.6 | 38.1(?) | クヌギ属 | 狂目 60-3 | |
| 3 | L-60 | 南区 | S R - 1 | 12 a 扇 | 木・ヘラ状木製品 | 9.5 | 身部穿孔 | 穿孔(?) | 3.7 | 11.1 | 13.7x1.1 | クヌギ属 | 板目 60-4 | |
| 4 | L-67 | 南区 | S R - 1 | 12 b 扇 | 木・Na18 | 木・有腹木製品 | 27.2 | 6.0 | 穿孔(?) | 3.6 | 4.2 | クヌギ属 | 芯持丸 60-6 | |
| 5 | L-69 | 南区 | S R - 1 | 12 a 扇 | 木・Na12 | 木・有腹木製品 | 8.9 | 5.0 | 穿孔(?) | 3.5 | 3.4 | ニワトコ属 | 芯持丸 60-5 | |
| 6 | L-57 | 南区 | S R - 1 | 12 扇 | 木・Na7 | 木・木二叉脚 | 90.4 | 24.6 | 穿孔(?) | 2.0 | 51.0 | コナラ属 | 狂目 60-2 | |

第81図 南区河川跡12層出土木製品類



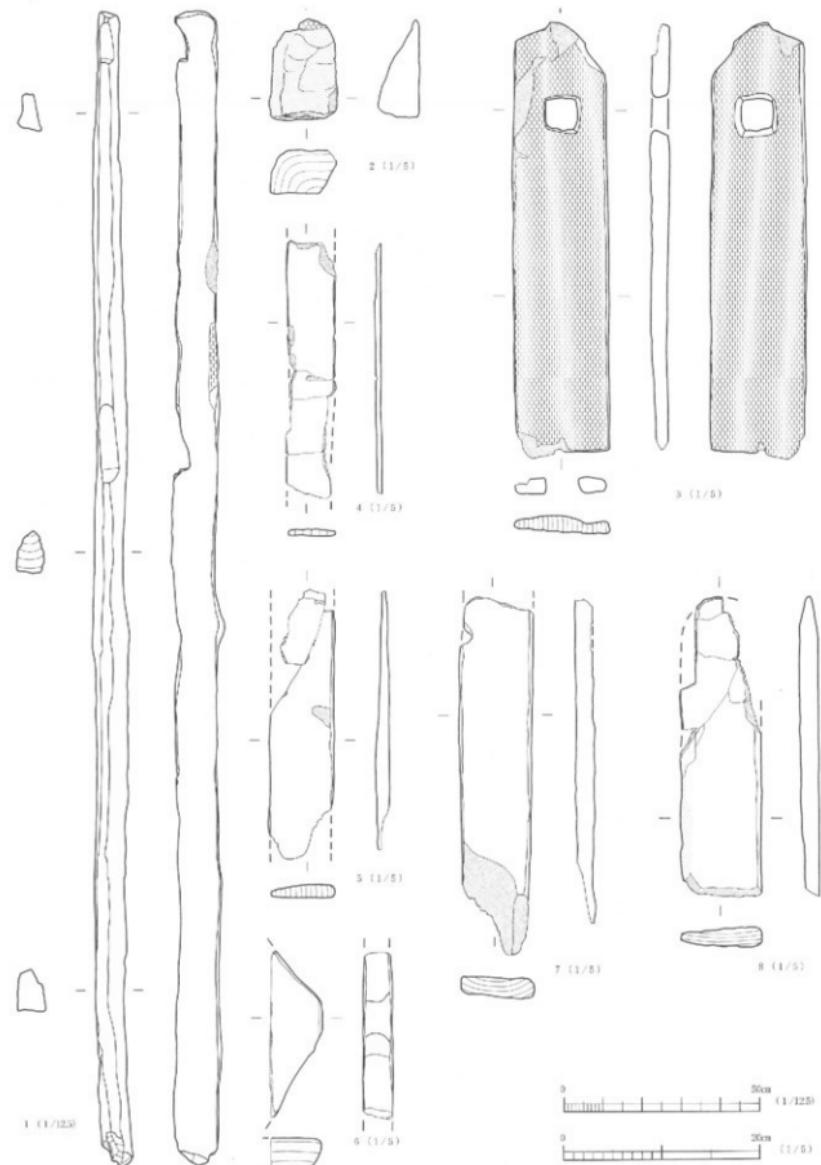
| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本層 | 出土遺物 | 遺物層 | 取上番号 | 種別・器種 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 数 | 樹種 | 本取り | 写真図版 |
|----|------|-----|---------|------|-----|-------|-------|-------|------|-----|-------------|----|------------|---------------|------|
| 1 | L-65 | 南区 | S R - 1 | 12b層 | 木・ | No.16 | 木・楓櫛柄 | 109.3 | 38.0 | 1.7 | 木口側切削面 | 1 | 未製品 | クタリ | 61-2 |
| 2 | L-61 | 南区 | S R - 1 | 12b層 | 木・ | No.8 | 木・斧櫛柄 | 54.0 | 43.2 | 4.9 | 36.0-36.5mm | 15 | 2.2-10.9mm | 木口側切削面 斧櫛柄 | 61-3 |
| 3 | L-62 | 南区 | S R - 1 | 12b層 | 木・ | No.13 | 木・丸櫛 | 55.7 | 28.0 | 2.7 | 片端刃剥・片端削れ | 1 | キハダ | 此無丸 | 61-1 |
| 4 | L-63 | 南区 | S R - 1 | 12b層 | 木・ | No.14 | 木・丸櫛 | 14.4 | 20.0 | 1.4 | ヘラ状木製品の棘部か? | 1 | クスガヨ | 此無丸 | |

第82図 南区河川跡12層出土木製品類2



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基層不層 | 南区 | 泥被 | 油膜層 | 取上番号 | 特徴 | 種類 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 種 | 樹種 | 木取引 | 写真回数 |
|----|------|-----|------|----|-----|-----|------|-----|-------|------|------|-----|------|------|----------|---------|------|
| 1 | L-64 | 南区 | | | S R | 1 | 12b | 木・板 | 木・板 | 120 | 30.5 | 5.4 | 27.1 | 33.1 | 半折れ、焼痕有り | サクラ属 | 62-1 |
| 2 | L-58 | 南区 | | | S R | - | 12a | 木・板 | 木・板内板 | 58.8 | 16.8 | 1.2 | 18.4 | 24.4 | 側面一部残存、板 | ガシラ属 | 61-4 |
| 3 | L-68 | 南区 | | | S R | - | 12b | 木・板 | 木・丸棒 | 75.7 | 30.1 | 2.0 | 20.1 | 26.4 | 圓柱形？ | セイヨウヒバ属 | 61-2 |

第83図 南区河川跡12層出土木製品類3



第84図 南区河川跡12層出土木製品類4

第84回観察表

| 番号 | 遺跡番号 | 出土区 | 基木層 | 出土造構 | 造作層 | 出土番号 | 種別・特徴 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 特 | 種 | 樹種 | 本取り | 写真回数 |
|----|------|-----|------|------|----------|--------|-------|------|---------|-----------|-------|-------|------|------|------|
| 1 | L-85 | 南区 | SR-1 | 12b | 木材・No.7 | 材・建築材? | 294.2 | 14.0 | 7.0 | 欠き込み2ヶ所有り | 柱 | 27.7m | 杉 | 62-4 | |
| 2 | L-76 | 南区 | SR-1 | 12b | 木材・No.15 | 材・角材 | 103.3 | 6.9 | 4.5 | 両端切削 | 柱 | 27.7m | 杉 | 62-2 | |
| 3 | L-72 | 南区 | SR-1 | 12a | 木材・No.26 | 材・板材 | 44.7 | 9.9 | 1.3 | 35.5-37.1 | 丸柱 | 方孔有り | 楓 | 62-7 | |
| 4 | L-89 | 南区 | SR-1 | 12b | 木材・No.23 | 材・板材 | 26.1 | 5.0 | 0.5-0.6 | 斜面無板? | 柱 | 27.7m | 杉 | 62-6 | |
| 5 | L-75 | 南区 | SR-1 | 12b | 木材・No.12 | 材・板材 | 27.6 | 6.6 | 0.5-1.3 | 柱 | 27.7m | 楓 | 62-5 | | |
| 6 | L-79 | 南区 | SR-1 | 12b | 木材・No.19 | 材・板材 | 17.0 | 5.3 | 3.0 | 建築材? | 柱 | 27.7m | 楓 | 62-3 | |
| 7 | L-73 | 南区 | SR-1 | 12a | 木材・No.9 | 材・板材 | 36.5 | 7.5 | 2.0 | | 柱 | | 楓 | 62-1 | |
| 8 | L-74 | 南区 | SR-1 | 12a | 木材・No.1 | 材・板材 | 30.5 | 8.3 | 2.0 | | 柱 | | 楓 | 63-1 | |

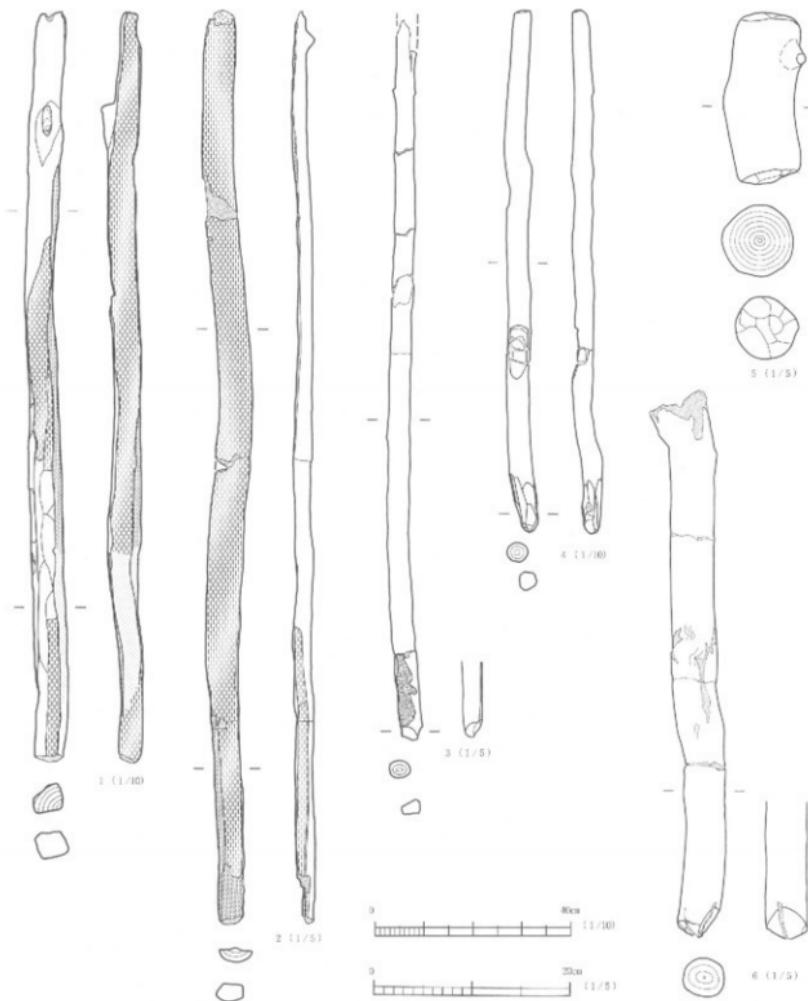
11) 12層と出土遺物

南区の12層は、灰オリーブ粘土の混入の状態によって、3層に分けられた。12層上層(12a層)は、灰オリーブ粘土の細粒を少量含む黒褐色の粘土層で、骨片などの植物遺体を多く含む。中層(12b層)は、灰オリーブ粘土を斑状ないし縞状に少量含む黒褐色の粘土層である。下層(12c層)は、灰オリーブ粘土を斑状に多く含む黒褐色の粘土層である。各層の厚さは5~20cm前後で、3層を合わせた層厚は30~40cmほどで、岸面上部に移行するにしたがって薄くなる。また、12a層・12b層・12c層の各細分層に堆積時期が対応すると考えられるが、土色や土質などが異なる層(12a'層・12b'層・12b"層・12c'層)が部分的に存在する(第70図)。

12層からの出土遺物は、一部を除き細分3層に分けて取り上げているが、これまでの調査成果で12層各層は古墳時代前期に位置付けられており、今回の調査でもこれを否定する資料が出土していないので、ここではほぼ同一時期の資料として一括して報告することとした。出土遺物の種別としては、土器器と木製品類がある。

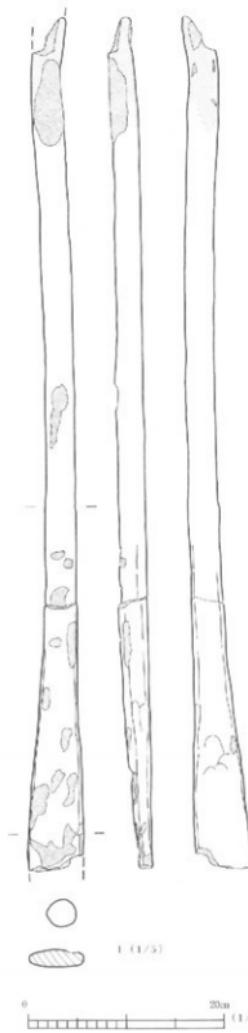
土器器は、実測したものには12a層から出土した壺(C-40)と12b層から出土した壺(C-41)がある(第74図10-11)。C-40は底部から体部上半にかけての破片である。底部と体部との境は不明瞭で、体部はやや扁平な球形を呈している。体部の造りは比較的薄い。外面は、丁寧にヘラミガキ調整されており、このことから器種を壺と判断した。C-41は、底部は台状で、口縁部まで内溝して半球形に立ち上がる。器種としては壺として分類したが、鉢として分類したほうが適当かもしれない。口唇部の内側は、面取りされたように半円内傾面が形成されている。内外面は丁寧にヘラミガキ調整されている。2点の土器器の類例は、C-40については押田遺跡第1次調査1区12層検出S-X-1造構出土の一括資料のC-21に、C-41については中在家南遺跡第1次調査VI区12c層出土C-134に類似があり、ともに古墳時代前期壇式期の他の土器器と共に伴して出土している(工藤哲司:1996「中在家南遺跡他」第1分冊本文編 仙台市文化財調査報告書第213集)ことから、これら2点の土器器も同期のものと考えられる。他の破片資料としては、堺ないし壺の破片が多数出土している。壺は一般的に薄手で、外面には細かいハケ調整された体部の破片である。壺は外面が丁寧にヘラミガキ調整された体部の破片である。これらの破片についても、当該期として矛盾のあるものではない。

木製品類としては、農工具をはじめとする多種多様な木製品と材類、杭がある。木製品には、直柄平鍬(L-59)・膝柄二叉鍬(L-66)・一本二叉鍬(L-57)・鍬膝柄(L-65)・斧膝柄(L-61)・ヘラ状木製品(L-60)・指円板(L-58)・腰掛(L-64)・丸棒3点(L-62・63・68)・有頭木製品2点(L-67・69)がある(第81~83図)。直柄平鍬L-59は、全長31.4cm・幅10.5cm前後あり、平面形は隅丸長方形を呈する製品で、側面を部分的に欠損している。幅は頭部側より刃先側がわずかに狭くなっている。身部の縦断面形は直直ぐではなく、着柄隆起側が四面となるようにわずかに湾曲している。着柄隆起は、やや縱に長い円形である。柄孔も円形で、孔径は着柄隆起側が径に大きい。身部の横断面形は、縦断面の凹面側は直直ぐで、凸面側はやはり膨らんで凸面となるように仕



| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基木類 | 出土量 | 断面形状 | 取上番号 | 種別 | 型態 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 性 | 質 | 樹種 | 木取引写真図版 |
|----|------|-----|---------|-----|-------|-------|--------|-------|-----|-----|-----------------|---|---|-----|---------|
| 1 | L-88 | 南区 | S R - 1 | 12b | 刷材・丸材 | No.20 | 材・削材 | 152.6 | 6.5 | 6.0 | | | | 志野丸 | 63-2 |
| 2 | L-77 | 南区 | S R - 1 | 12b | 刷材・丸材 | No.16 | 材・平裁丸材 | 93.6 | 3.0 | 1.6 | 側面に加工有り | | | 平裁丸 | 63-3 |
| 3 | L-78 | 南区 | S R - 1 | 12b | 刷材・丸材 | No.18 | 材・丸材 | 73.7 | 2.0 | 1.8 | 先端加工、3面1段、削皮刃有り | | | 志持丸 | 63-5 |
| 4 | L-70 | 南区 | S R - 1 | 12b | 刷材・丸材 | No.21 | 材・丸材 | 106.7 | 4.5 | 3.9 | 先端加工、欠き込み有り | | | 花持丸 | 63-4 |
| 5 | L-71 | 南区 | S R - 1 | 12c | 刷材・丸材 | No.24 | 材・丸材 | 17.5 | 7.2 | 7.2 | 両端加工 | | | 志持丸 | 63-6 |
| 6 | L-81 | 南区 | S R - 1 | 12c | 刷材・丸材 | No.1 | 材・丸材 | 56.1 | 4.3 | 3.9 | 先端加工、多面1段 | | | 志持丸 | 63-7 |

第85図 南区河川跡12層出土木製品類



上げられている。

L-66は、膝柄二又鋸の片側の身部が縦に割れた破片と考えられる柾目の木製品の断片である。残存長は30.5cm・残存幅4.5cmである。肩部付近と身部の内側の側面部が本来の形状を残している。

一本二又鋸L-57は、握り部と片側の刃部の先端を欠損しているが、比較的の保存状況は良好である。大きさは、現存長は90.4cm・身部長26.2cm・身部幅17.1cm・身部と握り部間約61cmを測る。身部は全体として逆台形を呈し、二又の身部の間隔は2.5~4cmで、先端側が広くなっている。身部の肩幅は、柄との境から6cmと7.5cmとなっており、柄部の中軸線に対して左右対称に造られてはいない。

鍔膝柄L-65は、全長が109.3cmあり、柄部が細かく削れていますが、全体が残っています。柄部の直径は2.5cm前後である。鍔との接合部分の長さは20.4cm・幅3.8cmである。柄部と接合部分の角度は約46°である。鍔との接合面が削面のままであること、接合部分上部に組掛の段差(突起)が形成されていないことなどから、本品は未製品の状態であると判断される。

斧膝柄L-61は、全長は約54cmである。柄部は、直径2cm・長さ約48.5cmで、基部端が丸く加工されているだけで、あとの部分は樹皮を剥いだだけで特に切削を伴う加工はない。ただし、側面から見ると、通常の樹枝のような単純な弓なりの湾曲ではなく、緩やかなS字状の湾曲を呈しているので、反りをもたせるための加工が施されている可能性がある。頭部は、長さ19.3cm・幅4.5cm前後で、断面形は蓄鉢形を呈する。一部削面や自然面が残っているが、全体的に丁寧に細かく加工されている。頭部後面側は先端から7.5cmほどが、一段低く加工され、段差は約7mmである。段差部分が平坦に加工されていることから、板状鉄斧が装着されたと考えられる。頭部前面側の先端は、幅約1.5cmで帯状の突起が作り出されている。また頭部前面側の中央よりやや右に寄った部分には、先端から長さ約5cmに渡って溝状の浅い握り込みがある。このような溝は、中在家南遺跡第1次調査II区15層出土の弥生時代中期の斧膝柄(L-419)にも存在することが確認されている。溝の機能としては、鉄斧と斧柄を紐で緊縛した後に、この溝にそって楔状のものを差し込んで、結束具合を強化したものと理解される。

ヘラ状木製品L-60は、残存長9.5cm・身部幅3.7cm・柄部幅1.7cmの木製品で、現存部分は彫形を呈する。ヘラ状の木製品または握り棒の一部と考えられる。

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 基本形 | 出土遺物 | 遺物名 | 出土番号 | 種別・名稱 | 全長 | 最大幅 | 厚さ | 軽 | 機 | 肩幅 | 本取り | 写真図版 |
|----|------|-----|------|------|-------|-------|-------|------------------|------------------------|--------|-----|----|------|-----|------|
| 1 | L-86 | 南区 | SR-1 | 14層 | 木・No1 | 木・握り棒 | 87.3 | 身部幅 身部厚 肩幅 | 57 17~26 3.0~2.8 | 身部先端欠損 | クヌギ | 径目 | 63~8 | | |

第86図 南区河川跡14層出土木製品類

楕円板L-58は、残存部長58.8cm・残存幅16.8cmを測る板目板で、楕円形の板材が二分の一程度に割れたものと観察される。片面は半坦に加工され、反対面は縁辺部がやや高くなるように加工されている。さらに側辺から2.5cm前後内側には、幅5~7mm程度の溝が掘り込まれている。溝は現存側面の中央部分が、長さ5cmに渡って幅が1cmほどに広く彫られており、溝の内側と外側に角がついている。溝の中には、一部分に材が残っていることから、この溝については側板を嵌め込むための加工と考えられる。先の溝の広がる部分については、側板の重なる部分と理解される。溝より内側の表面部分には、木目に沿って幅1.5cm前後の加工痕跡が観察される。

腰掛L-64は、幅39.5cm・最大高15.4cmで、奥行の二分の一程度のところから縱に割れており、台の部分を含む現存の実高は12cmである。座部の平面形は扁平な梯形を呈し、中央部分が窪んでいる。台は下駄の歯状に奥行の前後に2つ並ぶと考えられる。現存の台は、台形を呈し、下面の幅は約31cmで、下端の外側は座部よりも外側に張り出している。

丸棒L-62は、残存長55.7cm・直径27cmの削り出しの芯無し丸材である。残存する片方の木口は僅かに細くなりやや尖っている。丸棒L-63は、残存長14.4cm・幅2.9cm・厚さ1.4cmのやや扁平な削り出しの芯無し丸材である。残存する片方の木口の幅がやや細くなっている。丸棒L-68は、残存長75.7cm・直径3cm・短径2cm前後の削り出しの丸材である。残存する片方の木口は丸く加工されている。農具の可能性を考えられる。

有頭木製品L-67は、コケシ状に球形の頭部が作り出された、芯持ちの丸材を素材とする木製品である。現存長は27.2cmで、頭部の直径は6cm前後である。有頭木製品L-69は、全長8.9cm・頭部径5cm・軸部径3.5cm前後のボルト形の木製品である。両端の木口には加工痕跡が残り、軸部には加工と共に伴う削れ面が観察される。

材は、建築材（L-85）、角材（L-76）、柱目板3点（L-72・75・80）、板目板3点（L-73・74・79）、分割材（L-88）、半裁丸材（L-77）、丸材3点（L-70・71・78）、など多種多様な材が出土している（第84~85図）。建築材L-85は、全長291.2cm・幅11cm前後・厚さ7cm前後で断面形が台形の分割材を素材とするものである。片方の木口近くと中央付近にU形の抉り込みの加工が施されている。他方の木口は切断に伴うと考えられる加工痕跡が観察される。

角材L-76は、長さ10.3cm・幅6.9cm・厚さ4.5cmで楔状に片側の木口が尖っている材である。広い側の木口は、木目の方向に対してほぼ直角に切断されている。

柱目板L-72は、現存長44.7cm・幅9.9cm・厚さ1.5cm前後の板材で、両面及び両側面は剖面のままである。残存部の片方の木口に寄った位置の中央には、1辺が3.5cm前後の方形の孔があけられている。柱目板L-75は、現存長27.6cm・幅6.6cm・厚さ1.3~0.5cm前後の板材で、片側の木口に向かって薄く加工されている。柱目板L-80は、現存長26.1cm・幅5.0cm・厚さ0.5~0.6cmの薄い板材である。曲物の側板の可能性を考えられる。

板目板L-73は、残存長36.5cm・幅7.5cm・厚さ2cm前後に整形された板である。板目板L-74は、残存長30.5cm・幅8.3cm・厚さ2cm前後の板で、片側の木口の一部が残っている。残存する木口1部分は、丸く渋曲しており、さらに先端から3~4cmのところから先の両面を削って尖らせている。板目板L-79、残存長17.0cm・残存幅5.3cm・厚さ3cm前後の比較的厚い板で、残存部の平面形は台形を呈している。木製品または建築材の破片の可能性がある。

分割材L-88は、現存長152.6cm・幅6.5cm・厚さ6cm前後ある四分の一分割材で、断面形は扇形を呈する。全長の二分の一程度は部分的に方形の断面形に加工されている。

半裁丸材L-77は、現存長が93.6cmあり、直径3cm前後の芯持ち丸材を縦に半裁したと考えられるものである。削り面以外特に加工の痕跡はない。

丸材L-70は、現存長106.7cm・直径4.5cm前後の芯持ち丸材で、残存する片方の木口は多面から多段の加工が施されて尖っている。丸材L-71は、長さ17.5cm、直径7cm前後の円筒状の芯持ち丸材である。両木口には加工痕跡が顕著に残存し、木口面は比較的平らになっている。丸材L-78は、残存長73.7cm・直径2cm前後の芯持ち丸材で、

残存する片方の木口は3面から1段の加工が施されて尖っている。

杭は、河川西岸の下端付近から杭（L-81）が1点検出されている（第85図6）。杭L-81は、芯持ちの丸杭で、先端に多面1段の加工が存在する。

12) 13 層

13層は、灰オリーブ色の粘土層で、オリーブ黒色粘土を部分的に斑状に含んでいる。河川中央部に分布し、河岸斜面上部には分布していない。層厚は厚いところでは50cmほどあり、平均でも30cm前後と厚く堆積している。層厚が厚いのにもかかわらず、出土遺物はない。

13) 14層と出土遺物

14層は、黒色の粘土層で、樹枝片・ドングリ・クルミ・トチノミ等の植物遺体を多く含んでいる。層下面には同色の砂層が薄く分布している。層厚は、2~10cm程度である。河川跡の中央部分は、14層が15層を抉るような状況で溝状に窪んで堆積しており、この部分に一段低い流路が形成されていたことが伺われる。（図版26-3）

14層からの出土遺物には弥生土器と木製品がある。弥生土器B-5（第74図12）は、壺の体部上半から口縁部にかけての破片で、15層から出土した破片と接合している。体部中程から上部にかけて直線的に開き、体部上端は僅かに内済し、口縁部は強く外反している。体部外面及び口縁部は縄文（LR）が施されている。弥生土器は、このほかに口縁部に縄文の施された壺の口縁部片が1点あるだけである。

木製品は、掘り棒の破片と考えられる製品（L-86：第86図1）が、溝状の窪みから1点出土している。L-86は、残存長が87.3cmで、身部の先半部分と柄部の基端付近を欠損している。身部と柄部の境は無く、平面は柄部から身部にかけて徐々に幅が広がり、側面は柄部から身部にかけて徐々に薄くなっている。

14) 15 層

15層は、黒褐色の泥炭質粘土を部分的に縞状に含む灰オリーブ色の粘土層で、大小の樹木片を多く含んでいる。層厚は、河川跡中央部で50cm前後あり、河岸部に移行するにしたがって薄くなる。層厚の割りには遺物は少なく、14層出土の弥生土器と接合関係にある弥生土器片のほか、細かな縄文（LR）の施された壺または壺の体部破片が3点出土しているに過ぎない。

15) 16 層

本調査区における16層は、標高2m前後を境として大きくわけられる。標高2mより上部は、緑灰色からにぶい黄褐色の粘土層、下部は小窪を含む暗緑灰色の粗砂層となっている。砂層からは湧水がある。

第6章 自然科学的分析

第1節 仙台市中在家南遺跡・押口遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男（東北大・理・植物園）・能城修・（森林総合研究所）

仙台市の中在家遺跡群の中在家南遺跡および押口遺跡から出土した弥生時代中期から中世～近世の木製品69点の樹種をしらべた。時期別内訳は弥生時代が17点、古墳時代が44点、平安時代が4点、それに中世（～近世）が4点である。中在家遺跡群の遺跡からは弥生時代中期を中心として農具など多数の木製品が出土し、それらの樹種が調べられている（仙台市教育委員会1996）。今回の結果はこれらの既知の結果に新たなデータを付加することができた。

出土した木材には MYG-4158～4195、4500～4520、4536～4545の樹種用試料番号を付し木材から剥り刀を用いて横断面(C)、接線断面(T)、放射断面(R)の切片を作成し、光学顕微鏡で観察同定した。同定に用いたプレパラートは東北大学大学院理学研究科付属植物園に収蔵されている。

同定された樹種

1 カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

顕微鏡写真 図版1 a - c (MYG-4185)

保存性のよい出土材で、硬く、年輪がほとんど目立たない針葉樹材である。輪方向要素は仮道管のみからなり、仮道管の内壁には2-3本がまとまった顯著ならせん肥厚がある。放射組織は単列で1-8細胞高と背はあまり高くなく、柔組織のみからなり、細胞内に黒褐色の樹脂様物質の蓄積が認められない。分野には小型でスギ型の間孔部を持つ壁孔が2-4個ある。以上の形質からカヤの材と同定した。

カヤは宮城、山形県以南の本州、四国、九州の暖地に広く分布し、幹直径1m、樹高30mに達する。材は木理が通直で、硬く強韌で、しかも加工が容易で保存性に優れているので建築材、柄物などの器具材、彫刻材（仏像）などに良く使われる。本遺跡出土材は押口遺跡の古墳前期の斧の膝柄1点で、材質にかなった用材といえる。

2 モミ属 *Abies* マツ科

顕微鏡写真 図版2 a - c (MYG-4169)

黒褐色を呈してスギによく似た針葉樹材で、年輪がよく目立つ。年輪は幅広く、早材部が広く、晩材部はやや狭いか狭い。早材から晩材への移行はやや急。放射組織は柔細胞のみからなり、単列でしばしば背がかなり高くなる。柔細胞の水平、垂直壁は厚く、多数の单壁孔を備えるモミ型壁孔となる。分野壁孔は小型のスギ型で1分野当たり2個ある。以上の形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には本州の東北中部以南の温帯～暖帯に広く分布するモミ、太平洋側の温帯に分布するウラジロモミ、奥高麗山帯に分布するシラベ、アオモリトドマツ、北海道にのみ分布するトドマツがあり、これらの個々の種類を材構造で識別するのは困難である。しかし、モミが平野部および近傍の丘陵部に普通に多産することから、本遺跡出土材はすべてモミであると考えられる。モミ *Abies firma* Siebold et Zuccariniは、岩手県および能登半島以南西の本州、四国、九州の暖帶上部から中部にかけて広く分布する常緑高木で、幹直径1m、樹高30m以上になる。木理通直で肌は粗く保存性低く軽軟であるが、加工が容易であり、また、かつては本州の平野部や丘陵部に大量に存在していたことから、良く利用されてきている。本遺跡出土材は押口遺跡の古墳中期の丸く削りだした棒、用途不明品

の木製品、曲物の底板と看做される楕円形の板、中在家南遺跡の平安時代の用途不明品の木製品の合計4点である。曲物底板への利用はヒノキあるいはスギの代用と見なせる。

3 スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

顕微鏡写真 図版3 a - c (MYG-4504)

黒褐色を呈する針葉樹材で、年輪は一般に広く、広い早材部とやや広いか狭い晩材部からなり、年輪界は極めて明瞭である。早材部仮道管は断面が放射方向に長い長方形あるいは方形で直径が大きく薄壁であり、晩材部仮道管は接線方向に扁平な長方形で壁が大変厚く、早材から晩材への移行は緩やかか、樹齢を経た部分では年輪幅が狭いとともに移行がかなり急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在し、黒褐色の樹脂様物質があり、水平壁はほぼ平滑である。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、背はかなり高くなる。分野壁孔は大型で水平方向に長軸を持つ楕円形で、開孔部も大きいスギ型で、1分野当たり2個ある。以上の形質によりスギと同定した。

スギは青森県、岩手県以南の本州、四国、九州の温帯に分布する常緑高木で、最も良く植林、植栽される。材は辺材は白く、心材は奇麗な赤みを帯び、木理通直、肌は粗く、軽軟強靭で割削性、加工性がよい。心材には独特の香がある。建築材、器具材、土木用材等ありとあらゆる用途がある。中在家南遺跡から弥生中期の削りだし丸棒と中世の火鑄臼の2点が出土している。これらの用材は他の遺跡同様である。

4 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. ヒノキ科

顕微鏡写真 図版4 a - c (MYG-4181)

年輪は一般に狭く、晩材部は極端に狭い針葉樹材で、出土材の内部構造の保存は余りよくない。早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞内にはスギ同様、黒褐色の樹脂様物質が含まれ、スギとは異なり、水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で背は低く、柔細胞のみからなる。分野壁孔は中型で輪郭丸く、開孔部は狭いトウヒ型—それより広いヒノキ型で開孔部の長軸は斜目であり、1分野当たり通常2個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東以西の本州、四国、九州の主に温帯に分布する常緑高木で、幹直径1m、樹高30m以上になる。材は辺材淡黄白色、心材淡黄褐色で香があり、木理通直で肌目細かく、木目美しい。緻密でほど良い硬さを持ち強靭で、加工性、保存性に優れ、日本産の針葉樹材ではコウヤマキに次いで良質の材であり、建築材、各種器具材、彫刻材を始め、ありとあらゆる用途がある。遺跡出土材では特に巨大建築の柱、建具材、曲げ物、木簡などで出土例が多い。押口遺跡から古墳時代前期の曲物の底板と思われる楕円形の板が1点出土している。当時はヒノキは仙台市付近には生育していなかったことが考えられ、関東地方以西からの流通の可能性が考えられる。

5 ハンノキ属ヤシャブシ節 *Alnus* sect. *Alnobetula* カバノキ科

顕微鏡写真 図版5 a - c (MYG-4191)

薄壁で多角形～楕円形の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管はほとんどが放射方向に2-5個程度複合し、道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、側壁の穿孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在し、特に晩材部で接線方向に短く並んで分布する。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。ハンノキやヤマハンノキなどのハンノキ節の材とは集合放射組織を欠くことで区別される。

東北地方ではヤシャブシ節の樹木は、福島県以南にヤシャブシ *Alnus firma* Sieb. et Zucc.、日本海側にヒメヤシャブシ *Alnus pendula* Matsumura、奥羽山脈などの亜高山帯、高山帯にミヤマハンノキ *Alnus maximowiczii* Carr. が

あるが、いずれも木材としてはあまり用いられず、むしろクンニンの原料植物として知られる。押口遺跡から古墳時代前期の削りだしの有頭棒が1点出ている。

6 アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科

顕微鏡写真 図版6 a - c (MYG-4520)

単独あるいは数個が放射方向に複合した梢円形の道管が均一に分布する散孔材で、道管は年輪の前半で大きく又密度が高い傾向がある、單細胞輪の本部柔組織が接線方向に並んで晚材部でよく目立つ。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に並び、内壁には微細ならせん肥厚がある。放射組織は1-3細胞輪の同性で、スマートな筋錐形をしており、時に單列の翼部が高くなる。これらの形質からアサダの材と同定した。

アサダは広く全国の温帯から暖帯上部にかけて分布する落葉高木で、山間の沢沿い斜面に多い。材は堅く、割裂、加工性は難しいが、きめが細かく、仕上がりが美しい。各種柄類、軸木、船の柾などに用いられる。中在家南遺跡からは古墳前期の平歛の直柄が、押口遺跡からは古墳中期の木材片が出土している。材は堅く割りがあるので直柄への利用は材質にかなっているといえる。

7 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

顕微鏡写真 図版7 a - c (MYG-4512)

年輪のはじめに円～梢円形、卵形の大道管が一列に並び、そこから順次径を減じ、晚材部では薄壁多角形の小道管が道管状仮道管、周囲状仮道管、本部柔組織とともに火炎状の紋をなす環孔材で心材部は漆黒となり保存性が極めてよい。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状、やや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。本部柔組織は周囲状及び單細胞輪の独立帶状で晚材部で目立つ。放射組織は單列同性で背は低い。道管-放射組織間壁孔は不定形の梢円形で大振り、横状にきちんと並ぶことはない。以上の形質からクリの材と同定した。

クリは北海道南部から本州、四国、九州の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹直径1m、樹高20mほどとなる。材は柔らかいが心材はやや堅く、割裂が容易で耐久力、保存性は大変よく、特に水濡に強い。大型建物から一般の家の柱や土台回り、屋根葺き材、その他あらゆる部分に用いられるほか、家具、農具などあらゆる部分に用いられ、また土木用材、鉄道枕木、下駄、薪炭材などの特用があった。押口遺跡からは古墳前期の銀の腰柄と鍔放の板材の2点、中在家南遺跡からは弥生中期の銀の泥除けと梯子が各1点、古墳前期の銀の腰柄、槍先状の木製品が各1点、それに用途不明の木製品が3点、合計9点である。泥除けへのクリ材の使用はこれまで中在家遺跡群で既に認められていたもので、仙台平野の弥生～古墳時代の木材利用の大きな特徴となっている。

8 ブナ属 *Fagus* ブナ科

顕微鏡写真 図版8 a - c (MYG-4160)

保存性の悪い出土材で、軟化により切片の作成が容易でない。材は薄壁で多角形の道管が衛に均一に分布する散孔材で、年輪のはじめの道管は比較的太く、年輪界に向かって順次小さくなる。道管の穿孔は單一のものと横棒が2-10本くらいと数の少ない階段状が混ざっており、道管内壁にらせん肥厚はない。本部柔組織は散在状及び短接線状で晚材部で目立つ。放射組織は1-数細胞輪の狭くて背の低いものから10細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまで連続したサイズのものがあり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの温帯に広く分布するブナ *Fagus crenata* Blume と本州、四国、九

州の温帯下部から暖帶上部の太平洋側に分布するイヌブナ *Fagus japonica* Maxim. がある。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木であるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。仙台市付近では丘陵地帯にイヌブナとブナが分布し、山地に入るとブナのみが分布する。ブナの材は堅暖緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられるが、漆器挽の本地などの特用がある。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途がある。押口遺跡からは中世～近世の下駄の歯が2点出土している。中世以降の付け歎式の下駄にはブナが大量に使われており、これもその例となる。

9 コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

顕微鏡写真 図版9 a - c (MYG-4505)

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、若い年輪の晩材部では中～小型で丸く壁の厚い道管が放射方向あるいは散在状に配列する環孔材で、出土材はしばしば茶褐色を帯びる。道管の穿孔は單一、道管内壁にらせん肥厚はない。本部柔組織は周囲状、散在状及び独立帶状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管・放射組織間壁孔は縱長の楕円形で横状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には岩手県以南の暖帯の、特に二次林や農家周辺、低湿地に広く分布するクヌギ *Quercus acutissima* Carr. と関東以西、特に西日本の暖帯の山地丘陵の農家周辺や二次林に分布するアベマキ *Quercus variabilis* Blume の2種類があるが、材構造での区別は困難である。しかし、仙台市付近にはクヌギは普通にあるもののアベマキは分布しておらず、当遺跡出土材はクヌギであると判断される。クヌギは成長がよく幹が直通な落葉高木で、幹径50cm、樹高15mくらいになる。材質はやや堅く、木理通直で割裂性、特にミカン割りが容易であり、柾目の板を容易にとることができる。現在ではあまり用途ではなく、柄類、桶類、車軸、下駄、薪炭材などで、椎茸のほだ木によく用いられる。

押口、中在家南の両遺跡から弥生中期～古墳中期の木材が14点ずつと最も多く出土している。横鉄、ナスピ型二叉鉄、半鋸などの鉄類が15点、へら状の木器、堅杵、打棒がそれぞれ3点などとなっており、その用材は既報告(1996)とよく一致している。

10 コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

顕微鏡写真 図版10 a - c (MYG-4180)

クリおよびクヌギ節によく似た環孔材だが、クヌギ節からは晩材部の道管が薄壁多角形で細く、クリ同様に周囲状板道管、道管状板道管などとともに火炎状の紋をなすことで区別され、クリからは巨大な複合放射組織を持つことで区別されることから、コナラ節の材と同定した。

コナラ節はいわゆるナラ類で、この仲間には北海道南部から九州までの温帯下部から暖帯の二次林に広く分布するコナラ *Quercus serrata* Thunb.、北海道から九州までの温帯から暖帯上部に広く分布するミズナラ *Quercus Crispula* Blume.、東北地方以南の温帯から暖帯に稀に分布するナラガシワ *Quercus aliena* Blume.、北海道から九州の温帯、暖帯に分布するカシワ *Quercus dentata* Thunb.などがあるが、材構造での区別は困難である。仙台市付近の平野丘陵にはコナラが普通に分布し、丘陵から山地にかけてはミズナラが普通に分布している。コナラは幹径50cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材、椎茸栽培のほだ木に用いられる。ミズナラは幹径1m、樹高30mになる落葉大高木で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。押口遺跡からは古墳前期の鉄が2点と建築材と思われるもの1点、

中在家南遺跡からは平安時代の不明木製品が2点出土した。ナラ類の鐵への使用はクスギの代用と考えられる。

11 ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

顕微鏡写真 図版11a - c (MYG-4177)

赤褐色～黒褐色を呈する遺跡出土材で、年輪はじめに道管が通常1列に並び、孔圈外には薄壁多角形の小道管が固まりとなって斜上した紋をなす環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の穿孔はやや大振りの多角形で交互状に密にあり、小道管には顯著ならせん肥厚がある。放射組織の上下辺のには時々大きな細胞が混じり中に大きな結晶を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州から九州の温帯下部から暖帯に広く分布する落葉高木で、しばしば幹径2m、樹高30mを超える。また農家の屋敷林、寺社境内によく植えられ日本が多い。成長が早く、幹は直通で大材が得易く、材質は木理通直で光沢があって美しく、やや堅くて弾力があり、割裂容易で加工しやすく、極めて優秀である。寺院などの大型建造物の建築材、一般家屋の大黒柱、大板材、など建築のあらゆる部分を始め、家具調度品、ありとあらゆる器具、特に農具、臼、杵、太鼓、容器類、漆器木地など大変よく用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の平安時代のⅢ1点である。

12 ヤマグワ *Morus bombycina* Koidz. クワ科

顕微鏡写真 図版12a - c (MYG-4176)

しばしば鮮やかな赤褐色を呈する遺跡出土材で、やや大型で梢円形の道管が年輪はじめに1-3層くらい並び、そこから徑を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊状となったものが散在環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の穿孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に分布し、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状、放射組織は異性で3-5細胞幅、時に単列の翼部がのびる。これらの形質からヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは広く全国の温帯から暖帯にかけての沢沿いなどの適潤地に生える落葉高木で、成長が早く、材はやや堅く、韌性があり、光沢あって工作が容易な優秀な材である。耐水性に優れ、建築材、器具材などに用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の平安時代の有頭木製品1点である。

13 サクラ属 *Prunus* バラ科

顕微鏡写真 図版13a - c (MYG-4188)

濃い赤褐色に着色して保存性のよい出土材で、道管内にはしばしば黒褐色の充填物がある。梢円形の小道管が單独あるいは2個複合して均一に分布する散孔材で、年輪界付近のものはやや小さくなる。道管の穿孔は單一、側壁の穿孔は小孔紋で交互状、内壁には顯著ならせん肥厚がある。木部柔組織は散在状、放射組織は1-4細胞幅くらいの背の高い紡錘形で、同性にやや近い異性である。これらの形質からサクラ属の材と同定した。

仙台市付近にはサクラ属のヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz.、カスミザクラ *Prunus verecunda* (Koidz.) Koehne、ウワミズザクラ *Prunus grayana* Maxim.などが普通に分布しているが出土材がこれらのいずれの種であるかは区別が困難である。ヤマザクラは宮城県以南の暖帯に普通に生える落葉高木で、幹径60cm、樹高15mくらいになる。材はやや緻密堅硬で割裂容易で耐久、保存性が高く、加工性もよい。建築材、家具、各種器具材、小細工ものなど、広い用途に用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の古墳時代前期の腰掛け1点である。

14 キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科

顕微鏡写真 図版14a - c (MYG-4186)

赤褐色状を呈して保存性がよい遺跡出土材で、道管内に黒褐色の物質が蓄積している。大きな梢円形の道管が年輪はじめに単独あるいは2個複合して配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状でやや間隔をあけて分布し、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまりめだたない。放射組織は2-5細胞幅くらいの同性で、背は低く、輪郭が綺麗な紡錘形となる。これらの形質からキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工性も容易な優秀な材である。建築物の装飾的部分、家具、各種器具材などに用いられる。樹皮の内側部分がベルベリンを含んで黄色い「黄鞣」で、薬用、染料とされる。押口遺跡から古墳時代前期の櫛棒状丸棒と中期の用途不明品の木製品が出土している。

15 カエデ属 *Acer* カエデ科

顕微鏡写真 図版15a - c (MYG-4171)

丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは2ないし数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で年輪界は目立たない。道管密度は低く繊維組織の部分が多い。繊維組織は薄壁でやや直径の太い繊維の集まりと壁がやや厚く直径わずかに小さい横縞の集まった部分とがモザイク状になって雲紋状の文様を作る。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密にあり、顯著ならせん肥厚がある。木部柔組織は目立たないが年輪界にあるものはしばしば結晶を持つ。放射組織は1-5細胞幅くらいの同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には多数の種があり、材構造は互いに似ていて区別は困難である。多くは温帯から暖帯に分布している落葉小高木-高木である。材は多くは坚硬で強硬であり、各種器具材、建築材などに用いられ、こけし材などの特用がある。押口遺跡からは古墳時代前期の堅忤と削りだしの丸棒が出土しており、後者が柄物だとすると両方とも材質に見合った用材といえる。

16 トチノキ *Aesculus trabinata* Blume トチノキ科

顕微鏡写真 図版16a - c (MYG-4544)

薄壁で梢円形の小道管が単独あるいは放射方向に2-5個複合して均一に密に分布する散孔材で、年輪前半では道管の占める部分が大きいが後半では道管は小さくなり、繊維組織が目立つ。道管の穿孔は單一で、側壁の壁孔はやや大きめの丸い小孔紋で交互状で密に分布し、内壁にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性でほとんどが10細胞高以下と低く、多くは層階状に並ぶ。これらの形質からトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉大高木で、沢沿いの水湿地に多い。成長が早く、幹径1m以上、樹高20mになり、枝を大きく広げた樹形となる。材は柔らかく肌目が緻密で木理美しく加工がしやすいが、乾燥により狂いやすい。建築材、家具材を始め様々な用途があるが、特に漆器木地と大型の剣物に重用される。中在家南遺跡から弥生中期のへら状木製品1点が出土した。

17 ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科

顕微鏡写真 図版17a - c (MYG-4516)

大型で厚壁のまるい道管が、単独あるいは2-3個放射方向に複合して年輪界にそって1-3列配列し、晩材部では壁が厚く、外形は角張っているが内腔は丸い小道管が単独あるいはおもに放射方向に2-数個複合してまばら

に散在する環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁には微細な孔紋が交互状に密に分布し、らせん肥厚はない。本部柔組織は周囲状で、晚材では翼状-連合翼状となる。放射組織は異性で1-5細胞幅の紡錘形で、1-3細胞高の單列部をもつ。これらの形質からケンボナシ属の材と同定した。

ケンボナシ属には北海道南部から九州までの温帯および暖帯に分布するケンボナシ *Hovenia dulcis* Thunb. と主に西日本に分布するケケンボナシ *Hovenia tormentella* (Makino) Nakai があるが材構造での区別は困難である。しかし分布から見て本遺跡出土材はケンボナシと見なせるだろう。ケンボナシは幹直径40cm、樹高15mになる落葉高木で、実が熟すると果柄の部分が肥大化して多肉となり、甘く梨に似た味となり食べられる。材は肌目は粗いが木理が美しく加工容易で、建築材・家具などの器具材に用いられる。中在家南遺跡から古墳時代前期の鎌の柄が1点出土した。

18 ミズキ *Swida controversa* (Hemsl.) Soják ミズキ科

顕微鏡写真 図版18 a - c (MYG-4542)

丸みを帯びた薄壁の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪の後半では直径はさらに小さくなる。道管の穿孔は横棒が20本以上ある階段状で、側壁の穿孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。本部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1-5細胞幅くらいの典型的な異性放射組織で、両端のとがった紡錘形をしており、單列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは全国の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径50cm、樹高15mくらいになる。材はやや軽軟で肌目は緻密であり、農具の柄、把手類など各種器具材に用いられるが、「水木」の名にちなんで梁に用い、防火のモニュメントとする特用がある。中在家南遺跡から弥生中期の農具の柄が2点出土しており、材質に見合った木材利用といえる。

19 キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ノウゼンカズラ科

顕微鏡写真 図版19 a - c (MYG-4158)

薄壁でしばしばゆがんだ梢円形の大道管が年輪はじめに1-3層並び、順次径を減じて晚材部では単独あるいは2個複合した薄壁多角形の小道管がまばらに分布する環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の穿孔は交互状、らせん肥厚はない。本部柔組織の量が多く、材の大きな部分を占め、周囲状で、晚材部では翼状となる。放射組織は1-3細胞幅で背の低い同性で小さく、輪郭は小整である。これらの形質からキリの材と同定した。

キリは成長の早い落葉小高木で、幹径40cm、樹高10mくらいになる。本州中部以西に分布するとされているが古くから東北地方でも植栽されており、天然分布は明らかでない。材は極めて軽軟で木口は非常に美しく加工性がよく、防音、防湿、断熱効果に優れている優秀な木材で、建築材、器具材、特に下駄、箱ものなどに広く用いられる。押口遺跡から中世-近世の下駄1点が出土している。この下駄は組み合わせ式で、本体がキリで、前および後ろの歯はいずれもブナ属である。肌に触れる部分はキリを使って歯にはより硬くて減りの少ないブナを用いた経済的な下駄といえる。

20 ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara スイカズラ科

顕微鏡写真 図版20 a - c (MYG-4193)

薄壁多角形-梢円形の小道管が複合して波状の紋をなす散孔材で、特に晚材部で接線方向によくつながった文様を作る。道管の穿孔は單一で、側壁の穿孔はやや大振りの小孔紋で交互状である。放射組織は幅広く背がたいへん高く、ほぼ同性、構成細胞は大振りで組織が粗雑である。これらの形質からニワトコの材と同定した。

ニワトコは全国の温帯、暖帯に広く分布する落葉小高木で、幹径20cm、樹高8mくらいになる。材は堅軟で肌目は緻密だが脆い。小細工もの、寄せ木細工などに用いられる。押口遺跡から古墳時代前期の有頭棒1点が出土した。

中在家遺跡群の利用木材の樹種組成

樹種が調べられた68点のうち、17点が弥生時代、44点が古墳時代、4点が平安時代、4点が中世（～近世）のものであった（表2）。20の樹種が同定されたが、弥生時代ではクスギ節が11点を占め、残りはクリ、ミズキ、スギ、トチノキである。クスギ節のはほとんどが歯、堅杵などの農具類であることは中在家遺跡群からの出土木材の既往の結果（仙台市教育委員会1996）とよく一致する。

古墳時代の44点の内訳は、やはりクスギ節が一番多く17点で、これは弥生時代同様農具を中心である。ついでクリが7点あり、ほかにコナラ節、モミ属（以上3点）、アサダ、カエデ属、キハダ（2点）のほか、カヤなど7樹種があり、調べられた資料の数に比して樹種組成が多彩であるといえる。これは農具の柄および柄の可能性も考えられる棒、それに有頭の棒状木製品などに難多な樹種が使われていることによる。

一方、1996年の報告では歯および歯への使用樹種はほとんどクスギ節に集中し、クスギ節以外ではアサダの歯が1点出土したのみであった。今回の出土品のうち、古墳時代前期の直柄平歯と二又歯の2点がコナラ節であり、前回調査された資料数に比べて今回の総資料数がわずかな数にも関わらず目立った結果となっている。クスギ節の樹種がクスギ、コナラ節がコナラだと見なして材質からこの違いを考えると、クスギではミカン削りにすることにより鋤歯の原材となる大きな板が容易にとれるのに対し、コナラでは幹がそれほど太くはならず（50センチを越えることは少ない）、もしも太い幹のものがあったとしても太枝が幹の下方からでていたりして直通的な大材を得るのは困難であることが考えられる。もっともこのコナラ節がミズナラである場合には大きな板が得るのはクスギ同様容易とも考えられる。ただ、中在家遺跡群が沖積平野の海岸にむしろ近い方にあり、ミズナラが生えていたと考えられる山地丘陵とは距離があることから該当しないといえる。いずれにしても類例が少ないのでつきりしたことは言えない。

表1 仙台市中在家南遺跡・押口遺跡から平成12年度に出土した木製品の樹種

| 標本番号 | 樹種 | 木番号 | 製品名 | 木取り | 時期 | 遺跡名 |
|----------|------|------|-------------|--------|--------|-----|
| MYG-4158 | キリ | L-4 | 下駄（本体） | 板目 | 中世～近世 | 押口 |
| MYG-4159 | ブナ属 | L-4 | 下駄（前歯） | 板目 | 中世～近世 | 押口 |
| MYG-4160 | ブナ属 | L-4 | 下駄（後歯） | 板目 | 中世～近世 | 押口 |
| MYG-4161 | クスギ節 | L-6 | 曲柄歯 | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4162 | クスギ節 | L-7 | 横歯 | 柾目、横木取 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4163 | クスギ節 | L-8 | ナスピ型二又歯 | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4164 | クスギ節 | L-9 | 板材（二又歯） | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4165 | アサダ | L-19 | 木製品（木材片-不明） | | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4166 | キハダ | L-20 | 木製品-不明 | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4167 | クスギ節 | L-21 | 横歯 | 柾目、横木取 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4168 | モミ属 | L-22 | 丸棒 | 削り出し | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4169 | モミ属 | L-23 | 木製品-不明 | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4170 | モミ属 | L-29 | 楕円板？曲物-底板 | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4171 | カエデ属 | L-31 | 堅杵 | 芯持 | 古墳時代前期 | 押口 |

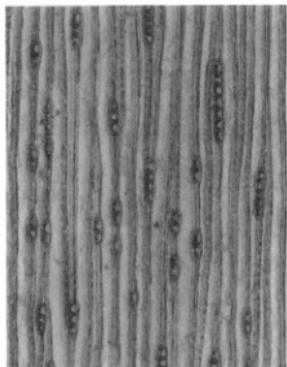
| 標本番号 | 樹種 | 木番号 | 製品名 | 木取り | 時期 | 遺跡名 |
|----------|--------|------|---------|------|--------|------|
| MYG-4172 | クヌギ節 | L-32 | 膝柄鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4173 | クヌギ節 | L-33 | ナスビ型二又鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4174 | クヌギ節 | L-34 | 直柄平鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4175 | コナラ節 | L-35 | 直柄平鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4176 | ヤマグワ | L-40 | 有頭木製品 | 芯持 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4177 | ケヤキ | L-46 | 厘 | 柾目 | 平安時代 | 押口 |
| MYG-4178 | クヌギ節 | L-47 | 掘り棒?へら | 柾目 | 古墳時代中期 | 押口 |
| MYG-4179 | クリ | L-51 | 蹴放し | 板目 | 古墳時代後期 | 押口 |
| MYG-4180 | コナラ節 | L-57 | 二又鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4181 | ヒノキ | L-58 | 梢円板(底板) | 板目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4182 | 樹皮 | L-58 | 梢円板(側板) | | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4183 | クヌギ節 | L-59 | 直柄平鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4184 | クヌギ節 | L-60 | へら状木製品 | 板目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4185 | カヤ | L-61 | 斧脛柄 | | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4186 | キハダ | L-62 | 掘り棒状丸棒 | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4187 | クヌギ節 | L-63 | 丸棒 | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4188 | サクラ属 | L-64 | 腰掛け | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4189 | クリ | L-65 | 鉤脛柄 | | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4190 | クヌギ節 | L-66 | 膝柄二又鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4191 | ヤシャブシ節 | L-67 | 有頭木製品 | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4192 | カエデ属 | L-68 | 丸棒 | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4193 | ニワトコ | L-69 | 有頭木製品 | 削り出し | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4194 | コナラ節 | L-85 | 建築材? | みかん削 | 古墳時代前期 | 押口 |
| MYG-4195 | クヌギ節 | L-86 | 掘り棒 | 削り出し | 弥生時代中期 | 押口 |
| MYG-4500 | スギ | L-5 | 火鑓臼 | 削り出し | 中世 | 中在家南 |
| MYG-4501 | モミ属 | L-11 | 木製品·不明 | 板目 | 平安時代 | 中在家南 |
| MYG-4502 | コナラ節 | L-12 | 木製品·不明 | 削材 | 平安時代 | 中在家南 |
| MYG-4503 | コナラ節 | L-12 | 木製品·不明 | 削材 | 平安時代 | 中在家南 |
| MYG-4504 | スギ | L-18 | 丸棒 | 削り出し | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4505 | クヌギ節 | L-20 | 横鉗? | 柾目 | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4506 | クヌギ節 | L-19 | 横鉗 | 柾目 | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4507 | クヌギ節 | L-21 | ナスビ型平鉗 | 柾目 | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4508 | クヌギ節 | L-22 | 堅杵 | 削り出し | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4509 | クリ | L-24 | 梯子 | | 古墳時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4510 | クリ | L-31 | 鍼膝柄 | 丸木 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4511 | クリ | L-35 | 木製品·不明 | 柾目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4512 | クリ | L-36 | 鎌先状木製品 | 削り出し | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4513 | クヌギ節 | L-37 | へら状木製品 | 柾目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4514 | クヌギ節 | L-38 | 曲柄二又鉗 | 柾目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |

| 標本番号 | 樹種 | 木番号 | 製品名 | 木取り | 時期 | 遺跡名 |
|----------|--------|------|---------|------|--------|------|
| MYG-4515 | クリ | L-39 | 木製品・不明 | 柾目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4516 | ケンボナシ属 | L-40 | 鍔柄 | 削り出し | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4517 | クリ | L-45 | 木製品・不明 | 丸木 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4518 | クヌギ節 | L-51 | 建築材? | 板目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4519 | クヌギ節 | L-61 | 直柄平鉗(刃) | 柾目 | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4520 | アサダ | L-61 | 直柄平鉗(柄) | 削り出し | 古墳時代前期 | 中在家南 |
| MYG-4536 | クヌギ節 | L-71 | 堅杵 | 削り出し | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4537 | ミズキ | L-72 | 斧直柄状木製品 | 丸木 | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4538 | クヌギ節 | L-73 | 打棒 | 柾目 | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4539 | クリ | L-74 | 泥除 | 板目 | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4540 | クヌギ節 | L-77 | 打棒 | 削り出し | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4541 | クヌギ節 | L-79 | 堅杵 | 削り出し | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4542 | ミズキ | L-80 | 斧直柄状木製品 | 丸木 | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4543 | クヌギ節 | L-81 | 斧直柄 | 削り出し | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4544 | トチノキ | L-82 | へら状木製品 | 板目 | 弥生時代中期 | 中在家南 |
| MYG-4545 | クヌギ節 | L-84 | 打棒 | | 弥生時代中期 | 中在家南 |

表2 中在家・押口遺跡出土木材の時代別樹種組成

| 樹種 | 時期 | | | | 総計 |
|--------|----|----|----|-----|----|
| | 弥生 | 古墳 | 平安 | 中世~ | |
| クヌギ節 | 7 | 21 | | | 28 |
| クリ | 1 | 8 | | | 9 |
| ミズキ | 2 | | | | 2 |
| スギ | | 1 | | 1 | 2 |
| トチノキ | 1 | | | | 1 |
| コナラ節 | | 3 | 2 | | 5 |
| モミ属 | | 3 | 1 | | 4 |
| アサダ | | 2 | | | 2 |
| カエデ属 | | 2 | | | 2 |
| キハダ | | 2 | | | 2 |
| カヤ | | 1 | | | 1 |
| ケンボナシ属 | | 1 | | | 1 |
| サクラ属 | | 1 | | | 1 |
| ニワトコ | | 1 | | | 1 |
| ヒノキ | | 1 | | | 1 |
| ヤシヤブシ節 | | 1 | | | 1 |
| ヤマグワ | | 1 | | | 1 |
| ケヤキ | | | 1 | | 1 |
| ブナ属 | | | | 2 | 2 |
| キリ | | | | 1 | 1 |
| 樹皮 | | 1 | | | 1 |
| 総計 | 11 | 50 | 4 | 4 | 69 |

第1節 仙台市中在家南道路・押口遺跡出土木製品の復元

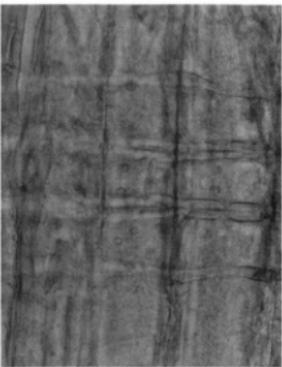


1 a. カヤ

MYG- 4185 T X100

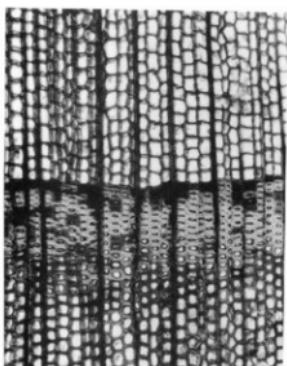


1 b. 同



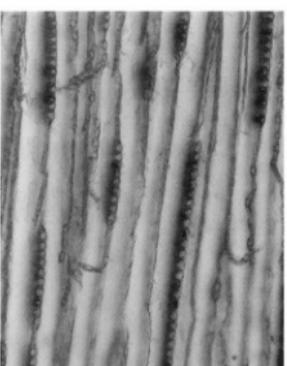
1 c. 同

R X500.

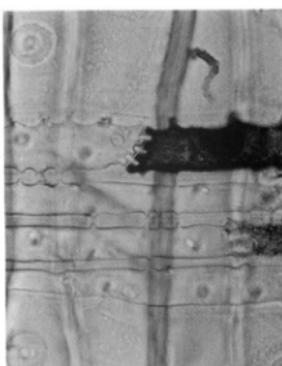


2 a. モミ属

MYG- 4169 C X50.

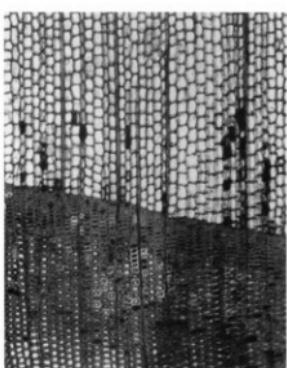


2 b. 同



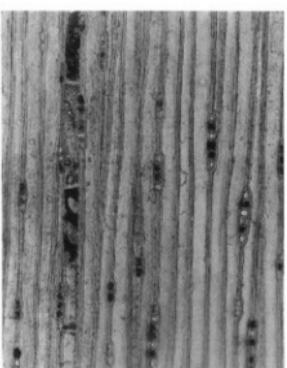
2 c. 同

R X500.

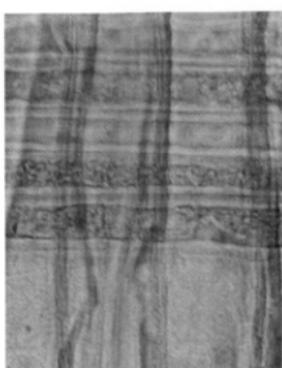


3 a. スギ

MYG- 4504 C X50.

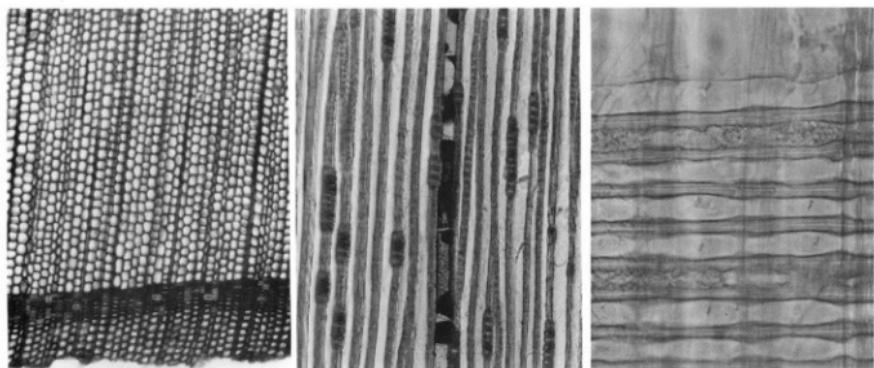


3 b. 同



3 c. 同

R X500.



4 a. ヒノキ

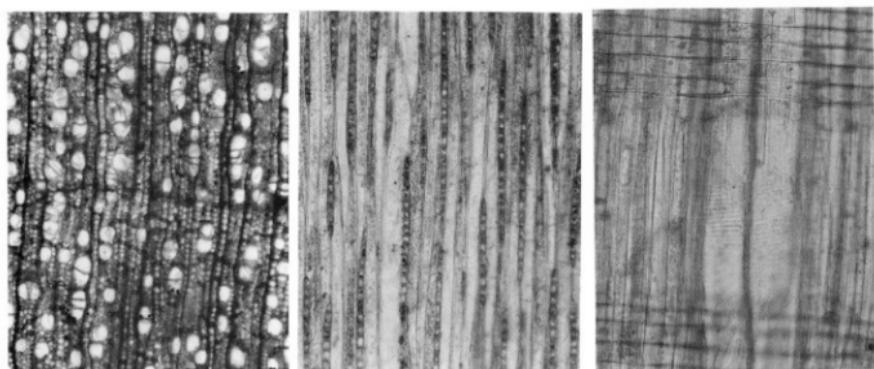
MYG- 4181 C×50.

4 b. 同

T×100.

4 c. 同

R×500.



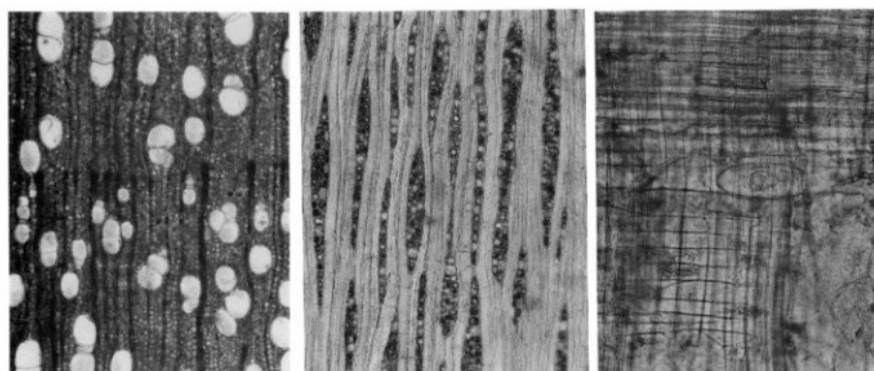
5 a. ヤシャブシ筋 MYG- 4191 C×50.

5 b. 同

T×100.

5 c. 同

R×200.



6 a. アサダ

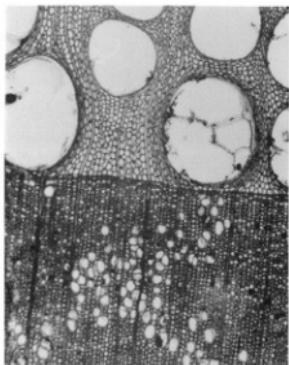
MYG- 4520 C×50.

6 b. 同

T×100.

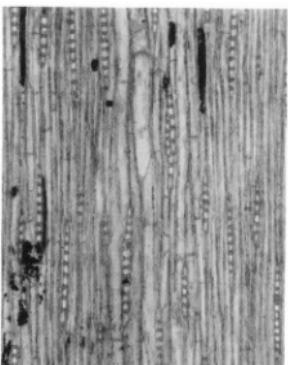
6 c. 同

R×200.



7 a. クリ

MYG- 4112 C X50.

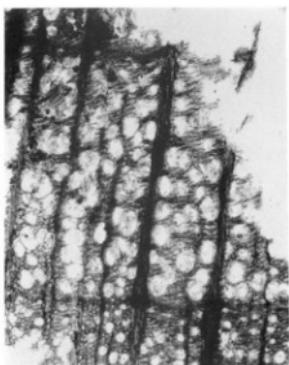


7 b. 同



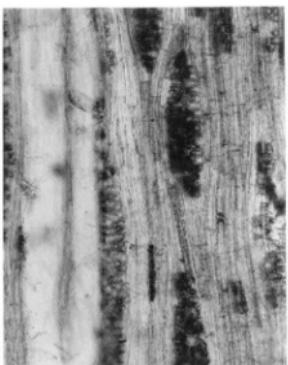
7 c. 同

R X200.



8 a. ブナ属

MYG- 4160 C X50.

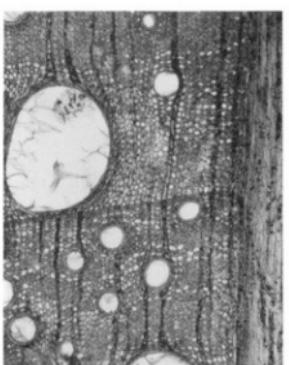


8 b. 同



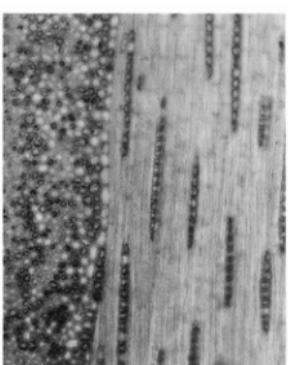
8 c. 同

R X200.



9 a. クヌギ属

MYG- 4505 C X50.

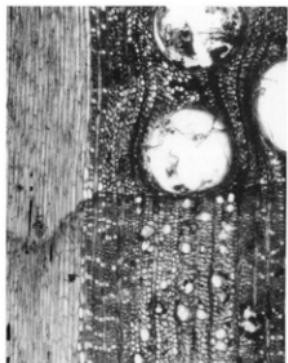


9 b. 同

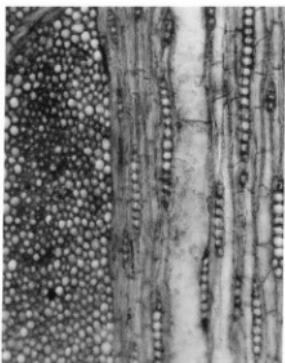


9 c. 同

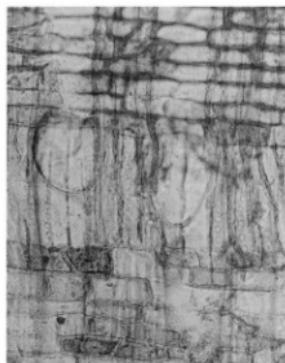
R X200.



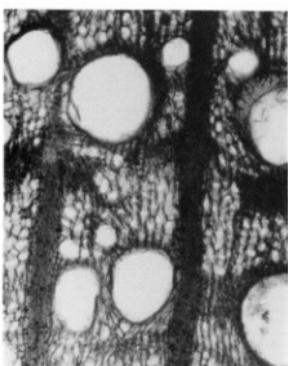
10 a. コナラ節
MYG- 4180 C X50.



10 b. 同
T X100.



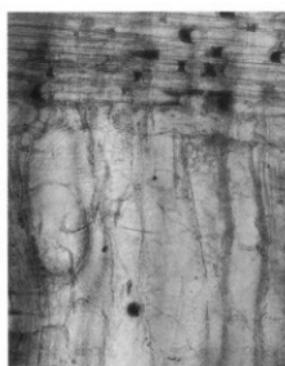
10 c. 同
R X200.



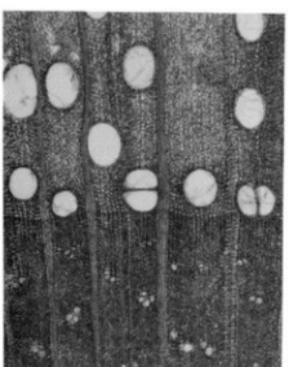
11 a. ケヤキ
MYG- 4177 C X50.



11 b. 同
T X100.



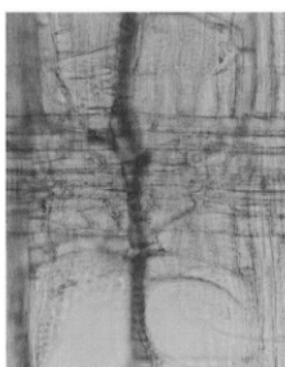
11 c. 同
R X200.



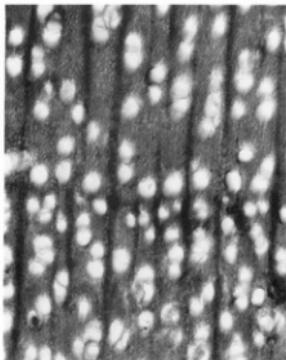
12 a. ヤマグワ
MYG- 4176 C X50.



12 b. 同
T X100.



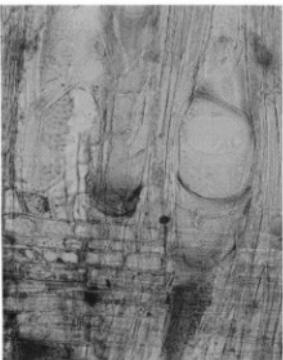
12 c. 同
R X200.



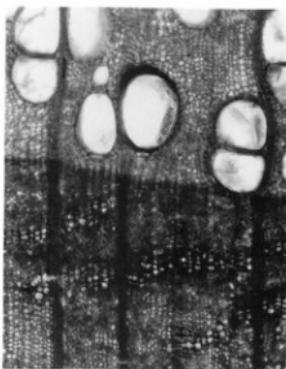
13 a. サクラ属
MYG- 4188 C \times 50.



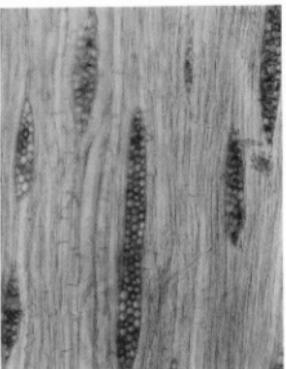
13 b. 同
T \times 100.



13 c. 同
R \times 200.



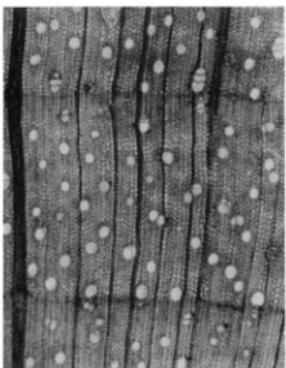
14 a. キハダ
MYG- 4186 C \times 50.



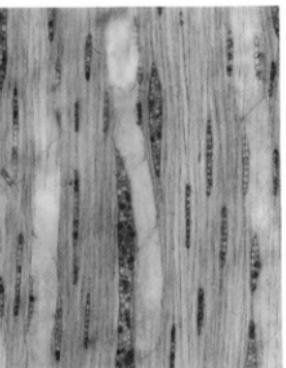
14 b. 同
T \times 100.



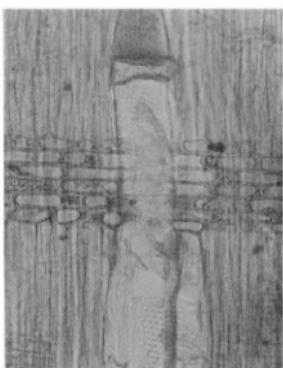
14 c. 同
R \times 200.



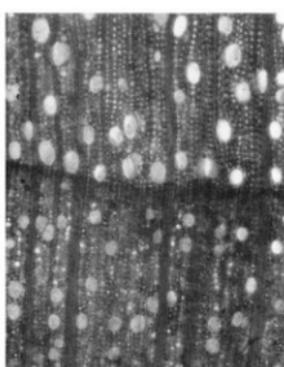
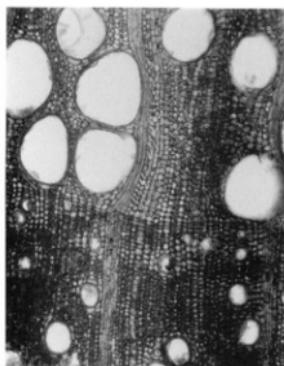
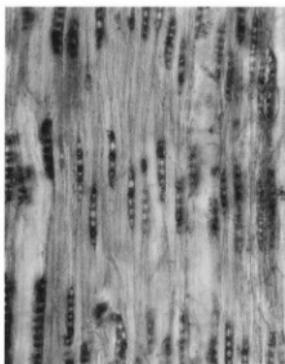
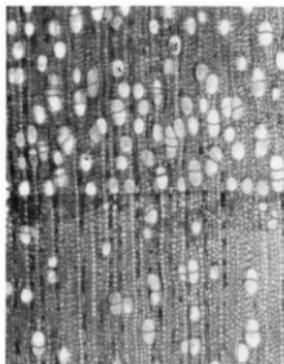
15 a. カエデ属
MYG- 4171 C \times 50.

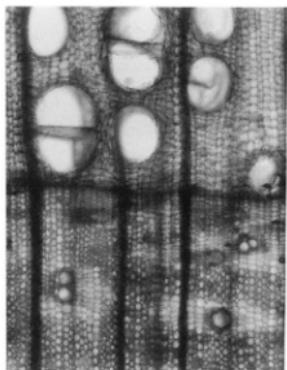


15 b. 同
T \times 100.



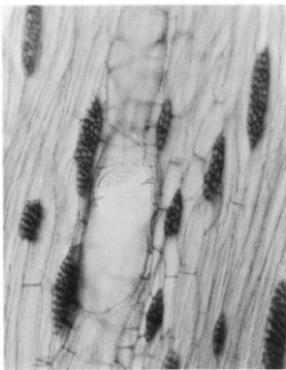
15 c. 同
R \times 200.





19 a. キリ

MYG- 4158 C X50.



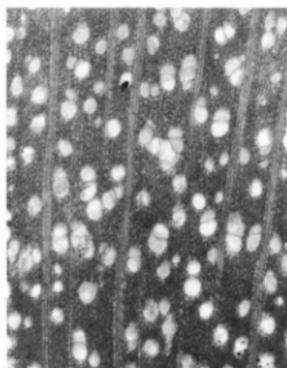
19 b. 同

T X100.



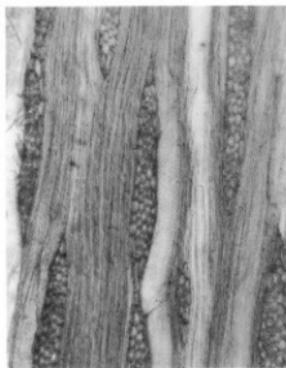
19 c. 同

R X200.



20 a. ニワトコ

MYG- 4193 C X50.



20 b. 同

T X100.



20 c. 同

R X200.

第2節 弥生時代中期の漆器鉢の漆断面

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試 料

試料は、中在家南遺跡出土の弥生時代中期の漆塗り鉢（L-78）で、内側と外側の両面に漆塗膜が観察される。

2 方 法

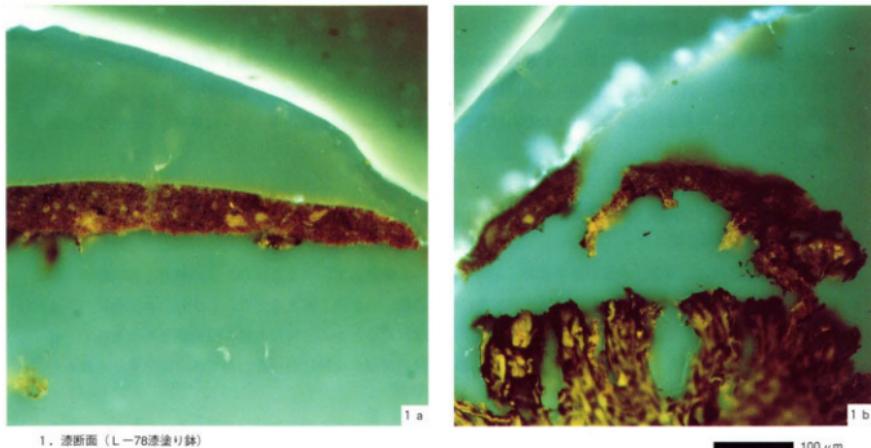
薄片を樹脂で包埋し、固化させる。ダイヤモンドカッターで、樹脂ごと漆片を切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着したのち、もう一方についても切断・研磨してプレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡、偏光顕微鏡、落射蛍光顕微鏡などを用いて観察する。

漆の観察には、岡田（1995）を参考にした。

3 結 果

漆塗り鉢は、外側が黒色を呈し、一部に光沢も見られる。漆膜の断面の特徴は、内側・外側とも一致する。粘土鉱物を大量に混ぜ、ほとんど漆の見られない層が木地の上に塗布されているのみで、漆層は認められない。粘土鉱物の他、赤鉄鉱と考えられる赤色粒子が散在するが、これが赤色顔料の混入によるものか否かは不明である。

図版 中在家南遺跡（第4次）の漆断面



1. 漆断面 (L-78漆塗り鉢)

a : 内側、b : 外側

第7章 調査成果のまとめ

1 中在家南遺跡・押口遺跡の調査遺構

1) 中在家南遺跡第3次調査区発見遺構

① 自然堤防上の遺構

- ・第3次調査区は、古代の堅穴住居跡が検出された第1次調査I・II区の東、III区の西側の自然堤防上に位置する。
- ・第3次調査区では、掘立柱建物跡1基・溝跡3条・土坑4基・ピット11個が検出された。
- ・発見された遺構のうち、古代の遺構と考えられるのは、非クロロ土師器の甕が潰れた状態で出土したSK-4土坑だけであった。この遺構の年代は、出土土師器から古墳時代と位置付けられる。
- ・本調査区でSD-2溝跡が検出されたことにより、〔第1次調査I区SD-11〕→〔第3次調査区SD-2〕→〔第1次調査III区SD-25〕→〔第1次調査試掘区SD-K・C・I・H〕→〔第1次調査IV区SD-29〕溝跡と連続していることを推定することが可能となった(附図1)。第1次調査の際には、III区SD-25溝跡の年代を出土遺物から「平安時代以降」とし、III区SD-25溝跡とIV区SD-29溝跡が連続することを推定したが、今回の調査で本文中に述べたように、第1次調査I区SD-11溝跡から缶詰缶が出土していることから、第1次調査I区SD-11から第1次調査IV区SD-29に連続する溝跡は近・現代のものであることが確認された。

② 河川跡

- ・第3次調査区では、第1次調査II区からVI区にのびる河川跡の北岸の上部が検出された。
- ・第1次調査II区とVI区の河岸上部では、河川に関わる祭祀に関連すると考えられる古墳時代中期の土師器及び石製模造品が検出されたが、その中間に位置する本調査区の河岸部でも、II区・IV区の土師器と同期と考えられる土師器の甕が潰れた状態で出土した。

③ 河川跡新旧堆積土層の境界

- ・自然堤防の断面及び平面の調査によって、現河川跡河岸上端線から約11mの自然堤防上で自然堤防を形成する主体となる基盤層と、河川跡堆積土古層(河川堆積土下部=16層群)の境界を確認することができた。
- ・このことにより、中在家南遺跡で確認された河川跡は、北側の自然堤防から南方に徐々に移動していたことが再確認された。

2) 中在家南遺跡第4次調査区の河川跡

① 流路幅の認識の変更

- ・第1次調査IV区では、溝査区南側の西半部が、北側に向かって傾斜していたことから、この部分を河川跡の南岸斜面の下端と位置付け、第1次調査II区に比べて急に河川の底面幅が狭まると考えた。しかし、本調査区で、II区検出の河川跡南岸から連続する南岸斜面の下端線が検出されたことから、河川の底面幅が狭まることなく、VI区東端に統くことが明らかになった。VI区西側の斜面は、河川底面の流路に沿った凹凸であったと考えられる。

② 南北両河岸面の状況

- ・中在家南遺跡検出の河川跡は、第1次調査II・IV区からVI区に至るまで東西方向にのびており、これまでの調査では、北岸の上端から南岸の下端部までが調査され、南岸部はほとんど調査されていなかった。今回第4次調査において、南岸斜面をはじめて調査した。
- ・その結果、河川跡南側からも、弥生時代中期から古墳時代中期までを中心、多くの遺物の出土を確認できた。出土遺物の量は、弥生時代(14・15層)についてみると、第1次調査II区・VI区と大差はない。しかし、古墳時

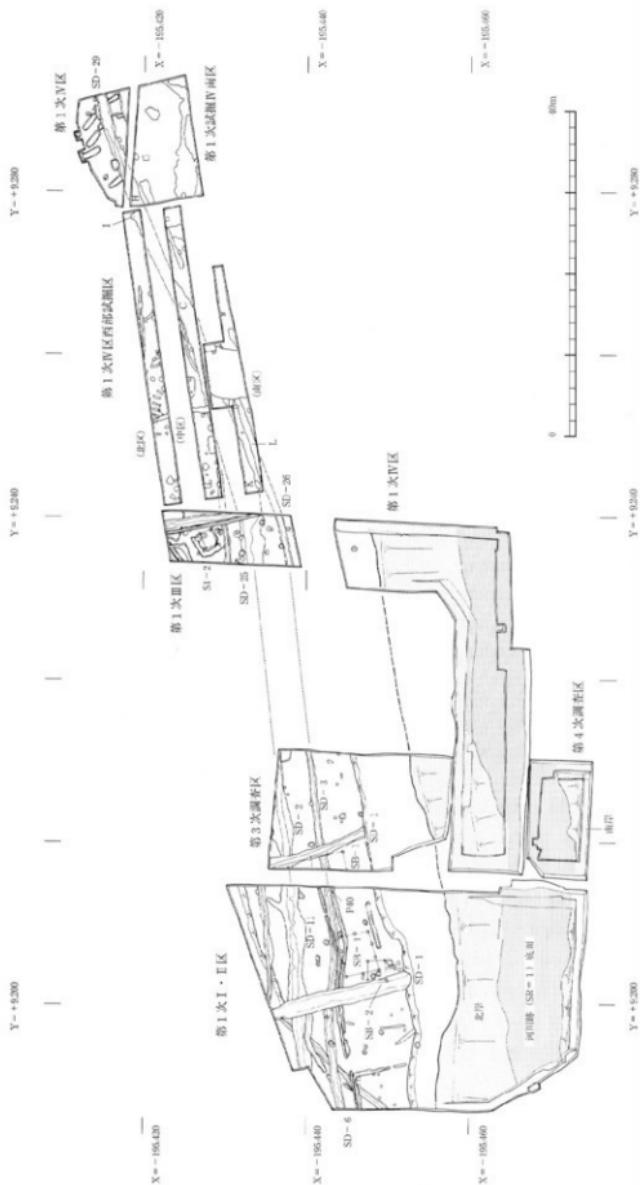


図1 中在家南通防一東半部調査区配置図

代前期（12層）についてみると、実測資料はそれほど多くないが、破片の出土量は非常に多く、古墳時代前期の集落が河川跡南側の自然堤防上に形成された可能性が高いと考えられる。反対に、古墳時代中期（10層）の資料は、木製品はいくらか出土しているが、上器類の出土は12層及び第1次調査VI区の河川跡北岸側と比較すると少なくなる。

これまでの中在家南遺跡の調査状況を総合すると、弥生時代中期には、自然堤防の西側に遺物包含層が確認され、その南側の河川跡に食物残滓を含む多量の遺物が発見されていることから、西部自然堤防上に集落が存在し、東側の自然堤防上に土壙墓と土器棺墓が発見されていることから、東部自然堤防上に墓地が形成されていたと考えられる。古墳時代前期には、河川跡の南側の自然堤防に集落が形成され、北側の自然堤防の西半部で4基の方形周溝墓が発見されていることから、方形周溝墓群から成る墓地が形成されていたと考えられる。古墳時代中期は、集落も墓地も確定できないが、河川跡北側の自然堤防中央から東側にかけて当該期の遺物が多数出土していることや、第1次調査II区・VI区及び第3次調査区において、河川跡北岸上部から祭祀に関係する土師器や石製模造品が出土していることから、河川跡北側自然堤防上の東部に集落が存在した可能性が考えられる。

3) 押口遺跡第3次調査区発見遺構

① 自然堤防上の遺構

・押口遺跡第3次調査区では、北区の自然堤防で溝跡3条・土坑8基・その他の遺構1基と、南区の河川跡3a層上面で溝跡1条が検出された。このうち、北区の隅丸方形ないし隅丸長方形を呈する2基の土坑（SK-5・8）からは古墳時代前期の壺と鉢がそれぞれ出土しており、当該期の何らかの遺構と考えられる。他の遺構群については、SD-1溝跡が最近の用水路であることが分ったこと以外は詳細な時期と性格については不明である。

② 河川跡

・中在家南遺跡から連続すると考えられている河川跡が、第1次調査I・II区の北側で検出され、北区ではその東岸部分が、南区では西岸斜面から河川跡中央部分が検出された。

・河川跡からは、古墳時代前期（12層）と古墳時代中期（10層）を主体としての多数の遺物が出土した。弥生時代中期（14・15層）の遺物は、集落の形成されていたと考えられる中在家南遺跡から500mほど離れているためか、第1次調査I・II区同様に少なく、保存状態も悪いものであった。

2 中在家南遺跡・押口遺跡の出土遺物

1) 土 师 器

① 中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層の土師器

・中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層から、古墳時代前期の上器器が多量に出土したことは前述したが、この中には、第30図3の壺（C-38）のように肩部に横方向のハケメ調整（他に押口遺跡北区10c層出土壺C-26; 第59図5など）が認められ、東海地方の壺の調整技法からの影響の可能性が考えられる。

・また、第29図8の器台形上器（C-18）は、本文で述べたように脚部が内湾し、受け部が内側に折れ曲がり、頂部が孔のあいた凸面となる異形の製品である。このような土師器は、県内では仙台市南小泉遺跡（2点）・古川市青塚古墳（1点）・追町佐沼城跡（1点）から出土しており、最近では、仙台市沼向遺跡の古墳時代前期の堅穴住居跡から3点がまとまって出土したことが公表されている。他の共伴する上器器から、古墳時代前期の上器器に属することは明らかになったが、他の器種に比べると出土例は極めて少なく、當時広範に使用された器種ではないようである。このような形態の土器は北関東地方に分布の中心があることが報告されており（鶴見:1993など）、

当該地方からの影響が伺われる。

- ・古墳時代前期の土師器には、本製品と同様に東海地方や関東地方からの影響を、器種構成・形態・調整技法に認めることができる。

② 押口遺跡北区河川跡 9～10層の土師器

- ・押口遺跡北区河川跡 9 層、10 層（10a 層・10b 層）、10c 層からは、古墳時代前期から後期にかけての土師器が、近接時期のものが混在しながら層位的な整合性を持って出土した。
- ・10c 層からは、古墳時代中期の土師器とともに前期の土師器が多数出土した。第1次調査Ⅰ区の12層 S X - 1 遷溝から出土した多数の前期の土師器と今回の前期土師器を合わせて考えると、この付近に古墳時代前期の集落が存在した可能性が高いものと推定される。
- ・10層から今回はじめて古墳時代後期の住社式期に位置付けられる土師器（第57図1：C-3）が出土したことから、10層の堆積時期が、古墳時代中期だけにおさまるものではなく、古墳時代後期にかかる可能性があることが明らかになった。

2) 木製品

① 河川跡 9 層出土（古墳時代後期）の木製品

蹴放し：押口遺跡南区 9 層から出土した建物の出入口を構成する「蹴放し」は、弥生時代・古墳時代時代を通じて県内で初めて出土した。扉板の軸を挿入する穴の間隔は、内間で 61cm と比較的狭いもので、どのような建物の部材であったのか今後の検討課題である。

② 河川跡 10 層出土（古墳時代中期）の木製品

横鍬：10 層からは、中在家南 4 次調査区から 2 点・押口遺跡北区から 2 点の横鍬が出土した。これまで中在家南遺跡・押口遺跡から出土した古墳時代中期（10・11 層出土）の横鍬は、中在家南第1次調査Ⅱ区11層から出土した柄付きの L-283だけであり、この横鍬は幅が比較的狭く、着柄隆起が前面側について、柄と身部の接続する角度が鈍角となるものであった。今回出土した 4 点の横鍬は、柄の残存するものはないが、着柄隆起を後面とした場合に、柄と身部の接続する角度が鋭角となるもの（中在家南遺跡第4次調査区10層 L-19：第25図1・押口遺跡北区10層 L-7：第61図1）が含まれている。4 点の横鍬の出土によって、後面に短い流線型の着柄隆起がついて、柄と身部の接続角度が鋭角となる横鍬が、当該地方の古墳時代の木製農具を構成する器種のひとつであることが明らかになった。

ナスピ型鍬：ナスピ型鍬は、平鍬 1 点（中在家南遺跡第4次調査区10層 L-21：第25図3）と二又鍬 1 点（押口遺跡北区10層 L-8：第61図6）が新たに出土した。曲柄鍬については、中在家南遺跡及び押口遺跡の第1次調査においては、その出土状況から『古墳時代中期の木製農具は、（中略）広鍬とともに、「東海系曲柄鍬」である膝柄又鍬と膝柄三叉鍬は消滅する。またナスピ型又鍬も消滅して又鍬の形態はなくなる。代わって、東海系の曲柄系の曲柄（膝柄）とナスピ型の柄を折衷したような軸部のナスピ型平鍬が出現する。』と考えた。中在家南遺跡第4次調査区10層出土のナスピ型平鍬 L-21は、前回の調査状況と一致する。一方、押口遺跡北区10層出土のナスピ型二又鍬 L-8 は、前回の結論とは異なり、ナスピ型二又鍬が古墳時代中期にも残存することを示している可能性もある。ただし、押口遺跡北区10層は、古墳時代前期の土師器が多数流入する環境下であったことは、本文および前項に述べたとおりであり、堆積状況の良好な地点の調査または他遺跡での確実な資料の発見をまって結論付けるべきであろう。また、ナスピ型又鍬 L-8 について、身部が二又に分れる部分の内側が残存していると判断したが、この部分も壊れており、本来は平鍬であった可能性も完全には否定できない。いずれ、古墳時代中期に曲柄の二又鍬がある時期まで残ったとしても、これまでの曲柄鍬の出土状況を見ると、全体の傾向として

は前回の調査報告書での結論で大過ないものと考えられる。

堅柄：押口跡にかかる河原跡からは、過去の調査においては、古墳時代中期の柄は出土していなかったが、中在家南遺跡第4次調査区10層から、芯去り材を素材とした堅柄（L-22：第25図4）が出土した。握部先端付近に最大径があり、中央の握り部にかけて徐々に細くなる形態のもので、古墳時代前期の堅柄と大きな変化は認められない。

梯子板：古墳時代中期の梯子板は、中在家南遺跡第1次調査VI区の資料について2例目の出土となった。

③ 河川跡12層出土（古墳時代前期）の木製品

直柄平鉗：中在家南遺跡・押口遺跡両遺跡における農具の変遷について、第1次調査の成果として、直納広鉗は、弥生時代中期以降古墳時代前期まで存続し、古墳時代中期に曲柄平鉗の出現とともに消滅するものと考えられた。中在家南遺跡第4次調査・押口遺跡第3次調査の成果を合わせると、古墳時代前期の直柄平鉗が新たに3点出土した。両遺跡と比較的近い仙台市高田B遺跡出土資料を合わせて古墳時代前期の直柄平鉗をまとめたのが附図2である。直柄広鉗は平面形が台形を呈し、側面部が八字状を呈する。着柄隆起は流線型を呈し、後面に降帶の無いものと、着柄隆起の先端に横方向の降帶が作り出されたものの2種類がある。着柄隆起の上端付近の両側には、泥除を取付ける際に機能したと考えられる孔があげられている。横方向の降帶の位置は、全長の先端側1/3くらいにあるもの（附図2-4）と中央付近にあるもの（附図2-5・6）がある。附図2-2は、身部上端が焼けしており、残存部の形状から着柄隆起の上端付近の両側には、泥除装着孔はないように復元した。しかし、本製品以外の他の直柄広鉗には、再加工等によって痕跡だけを留めるものを含めて4点とも泥除装着孔があることから、附図2-2の頭部幅は、本来的には現状よりも広く、泥除装着孔が存在した可能性も考えられる。泥除装着孔のない直柄広鉗が確実に存在するかどうかの確定は今後の課題である。

古墳時代前期の直柄平鉗には、小型の鉗（附図2-7）も出土しているが、附図2-6のような再加工を経て、結果的に小型化した可能性があり、主要な農具として独立して生産されていたかどうか明らかでない。

附図2-8は、平面的には直柄扶鉗のような形態で、全長の上部から1/3くらいのところに円形の着柄隆起を持つ。側面からみると、着柄隆起側が円面となるような緩い反りがあり、この反りを有効に活用するためには、



附図2 仙台市内の古墳時代前期の直柄平鉗

柄が着納隆起側に伸びて、柄と身部の角度が鈍角に付いた可能性が考えられる。この形態の農具については類例の増加を待って再検討が必要である。

一木二又鋤：前回の調査では、中在家南遺跡II区河川跡12層から出土した身部の先端側半分だけの残る鋤（L-115）を一木二又鋤として復元したが、押口遺跡南区12層から出土した一本二又鋤（第81図6:L-57）は、身部がほぼ完全に残り、この器種が東北地方でも古墳時代前期の農耕具（掘削具）を構成する器種として存在していたことが確実になった。

板状鉄斧用脇柄：中在家南遺跡第1次調査の際に、畠区河川跡12層から板状鉄斧が出土しているが、今回押口遺跡南区河川跡12層から板状鉄斧の柄（第82図2:L-61）が出土したことにより、両形態の斧が使用されていたことが明らかになった。

四脚盤：中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層から出土した四脚盤（第33図1:L-41）は、全長74.8cm・幅46.5cm・高さ15.1cmある大型の製品で、柾目の厚板を加工して作製している。このような製品については一般的な農民層が常用したものとは考え難く、特別な場所や行事または特定の階層あるいは人物が使用したものではないかと推定される。

腰掛：腰掛（第83図1:L-64）も、四脚盤同様に特定の階層あるいは人物が使用したものではないかと推定される。

曲物底板：底板（第83図2:L-58）は、柾円形を呈するもので、約半分ほどが残存する。長軸が58cmを超す大型の製品である。樹種は底板がヒノキで、僅かに残存する側板は樹皮と同定された。曲物の使用が東北地方でも古墳時代前期まではさかのほることが明らかになった。

出土木材の樹種については、中在家南遺跡及び押口遺跡の第1次調査で1528点、今回の中在家南遺跡第4次及び押口遺跡第3次の調査で69点の樹種の同定を行ったが、ヒノキは、中在家南遺跡第1次調査II区河川跡5層（平安時代）出土の木製品L-35:柾目円板（曲物底板？）とVI区河川跡6層（平安時代）出土の木製品L-580:柾目円板（曲物底板？）、II区河川跡16層（弥生時代後期）出土の角材L-472の3点があるだけで、各時代を通して出土数の少ない樹種である。

ヒノキは、分布が関東以西の本州・四国・九州とされていることから、中在家南遺跡・押口遺跡では出土点数が少ないものと解釈される。当方にヒノキが自生していないかったとすれば、底板L-58は、関東以西の地域で製作されたものが中在家南遺跡に搬入されたものと考えられ、木製品にも広い流通があったことが推察される。

新発見の形態の木製品：中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層出土の木製品L-35・36（第32図8・9）は、完成された木製品であるが、用途は不明である。類例の出土を待つて用途の再検討が課題である。

④ 河川跡14・15層出土（弥生時代中期）の木製品

堅忤：中在家南遺跡第4次調査区河川跡14層出土からほぼ完全な堅忤L-71（第39図3）が出土した。掘り部の中央が算盤玉状に膨らみ、掘き部の掘り部側の端部付近には低い隆帯が2条巡っている。このような掘き部の端部付近に隆帯が数条巡る形態及び装飾の堅忤は、これまでにも多数出土しており、弥生時代中期の当該地方の特徴となっている。

打棒：今回の調査でも打棒と名づけた脱穀具と考える木製品が、中在家南遺跡第4次調査区河川跡14層で1点（L-73:第39図2）15層で2点（L-77・84:第39図1・2）の3点が出土した。この形態の木製品が、農具として重要な役割を果たしていたことがあらためて確認された。

斧直柄状木製品：斧直柄状木製品は、斧の直柄のような形態であるが、斧直柄と比較すると小ぶりで、漆塗りの装飾が施される製品で、完成品は中在家南遺跡第1次調査II区河川跡15層出土のL-266がある。斧直柄が、クヌギ節の樹木を素材とするのに対し、斧直柄状木製品はミズキなどの樹木を素材とし、素材も異なっている。この

ような木製品の木製品は、中在家南遺跡第1次調査Ⅳ・Ⅴ区河川跡15層から出土（L-955・956・1091）しているが、中在家南遺跡第4次調査区河川跡14・15層から出土したL-72（第39図4）・L-80（第42図1）は、L-955・956・1091よりも前段階の工程の木製品と考えられる。

漆器鉢：中在家南遺跡第4次調査区河川跡15層から出土した漆器鉢L-78（第41図1）は、赤色の顔料を混入した漆を内外面に塗った製品で、弥生時代中期の漆器としては東北地方ではじめての資料である。中在家南遺跡・押口遺跡での漆塗り製品としても、先の斧直柄状木製品（L-266）に次いで2例目である。また、両遺跡から出土する弥生時代の木製品は、農工具に比べて容器類の占める割合が極めて少ないとおりであるが、少ないながらも漆塗りを含む容器も、必要に応じて製作されていたことが明らかになった。

線刻のあるヘラ状木製品：すでに記したように片面に線刻のある木製品L-82（第43図）が中在家南遺跡第4次調査区河川跡15層から出土した。線は、単なる傷ではなく、直線と弧線を一定の意図をもって×状に組合せて何物かを表現しようとしているように観察される。これを絵画とすればどのようなものを表現しようとしたのか、その解明は今後の課題である。

<引用・参考文献>

〔参考・引用文献〕

- 荒井 格 1992：「東北地方の木製農耕具」加藤稔先生還暦記念『東北文化論のための先史学歴史論集』
- 荒井 格他 2000：「高田B遺跡」「仙台市文化財調査報告書第242集」仙台市教育委員会
- 上原 真人 1993：「木器集成図録 近畿原始篇」「奈良国立文化財研究所史料第36冊」
- 氏家 和典 1957：「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14輯 東北史学会
- 太田 昭夫他 1981：「青塚古墳」「宮城県古川市文化財調査報告書第5集」古川市教育委員会
- 加藤 道男 1989：「宮城県における土師器研究の現状」「考古学論叢Ⅱ」岸沢長介先生還暦記念論文集刊行会編
- 工藤 哲司 1982：「果遺跡」「仙台市文化財調査報告書第43集」仙台市教育委員会
- 工藤 哲司 1996：「中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類」「仙台市文化財調査報告書第213集 中在家南遺跡
他 第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会
- 黒崎 直 1985：「1. くわとすき」「弥生文化の研究 5道具と技術 I (6 農具)」雄山閣
- 黒崎 直 1996：「古代の農具」「日本の美術 2」No375 至文堂
- 佐久間光平・小村田達也 1995：「佐沼城跡」「追町文化財調査報告書第2集」追町教育委員会
- 白鳥 良一 1980：「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要Ⅳ」宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一・加藤道男 1974：「(5)岩切鴻/果遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書 1」宮城県文化財調査報告書第35
集
- 鈴木 三男他 1996：「仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種」「仙台市文化財調査報告書第213集 中在家南遺跡他
第2分冊 分析・考察編」仙台市教育委員会
- 仙台市教育委員会 1996：「中在家南遺跡他」「仙台市文化財調査報告書第213集」
- 仙台市教育委員会 1997：「高屋敷遺跡ほか」「仙台市文化財調査報告書第223集」
- 仙台市教育委員会 2001：「沼向遺跡現地説明会資料」
- 辻 秀人 1995・1995：「東北南部における古墳出現期の土師器編年 - その1 会津盆地 - , その2 」『東北学院
大学論集歴史学・地理学』第26・27号
- 鶴見 貞雄 1993：「粗製器台の用途を考える」「研究ノート 3号」財團法人茨城県教育財團
- 丹羽 茂 1983：「宮前遺跡」「宮城県文化財調査報告書第96集」
- 丹羽 茂 1985：「今熊野遺跡」「宮城県文化財調査報告書第104集」
- 樋上 昇 1989：「木製農耕具の地域性とその変遷」「財團法人愛知埋蔵文化財センター年報昭和63年度」
- 樋上 昇 1993：「木製農耕具研究の一覧点 - ナスピ形農耕具の出現から消滅まで - 『考古学フォーラム』第
3号 考古学フォーラム
- 樋上 昇 1994：「耕作のための道具」「季刊考古学第47号 特集先史時代の木工文化」雄山閣
- 藤沢 敏 1992：「引田式再論」「歴史」第79輯 東北史学会
- 宮城県史編纂委員会 1957：「第Ⅲ章 古墳時代」「宮城県史 1」

写 真 図 版



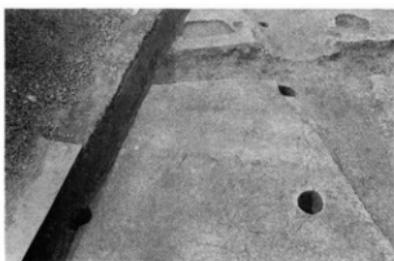
1 第3次調査区北半部全景（西から）



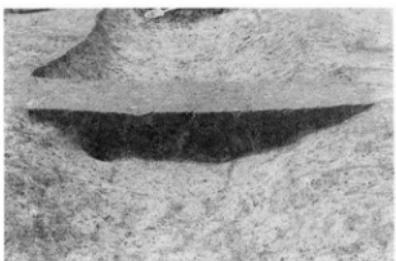
2 基盤壁と河川路16号との境界断面（北区東壁中央部）



3 河川路16号断面（北区東壁南部）



4 SB-1 捜立柱建物跡（南から）



5 SD-1 溝跡土層断面（南から）

図版1 中在家南遺跡第3次調査区 北半部1（全景・土層断面・掘立柱建物跡・溝跡）



1 SD-2 溝跡土層断面（西から）



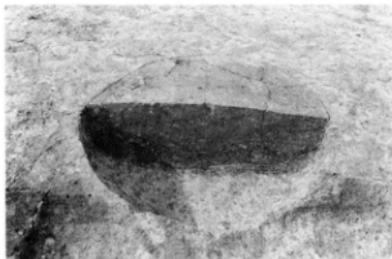
2 SD-3 溝跡土層断面（東から）



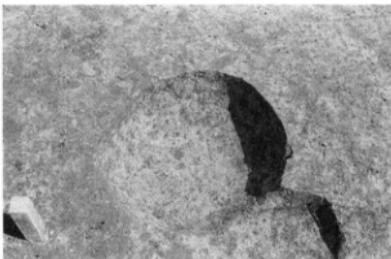
3 SK-1 土坑（南から）



4 SK-2 土坑（南から）



5 SK-3 土坑土層断面（南から）



6 SK-3 土坑空洞状況（南から）



7 SK-4 土坑土器C-6 出土状況（東から）

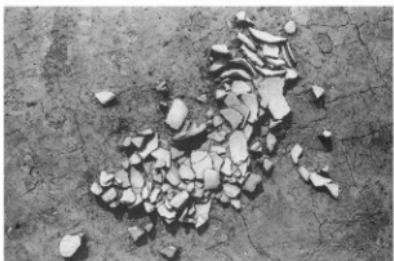


8 SK-4 土坑空洞状況（南から）

図版2 中在家南遺跡第3次調査区 北半部2（溝路・土坑）



1 河川跡検出状況（北から）



2 河川堆積土 9層 土師器C-11出土状況（東から）



3 9～10層調査状況・河川跡断面（西から）

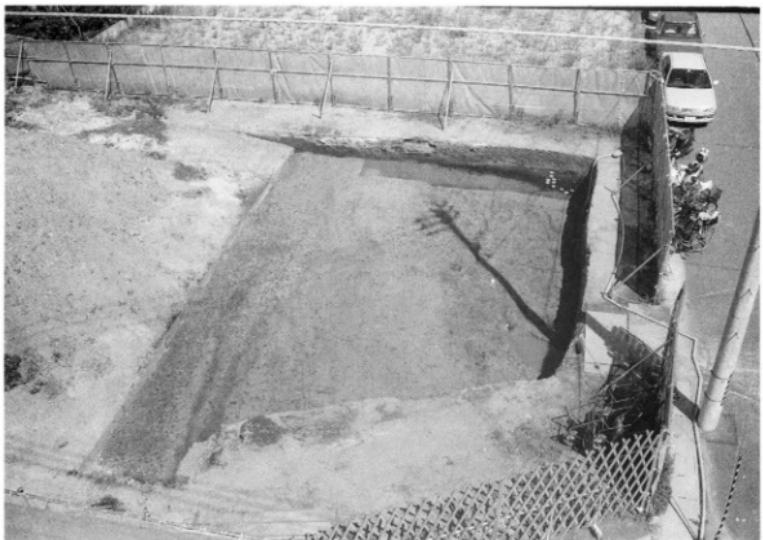


4 9層検出杭1 (L-3) 検出状況（西から）

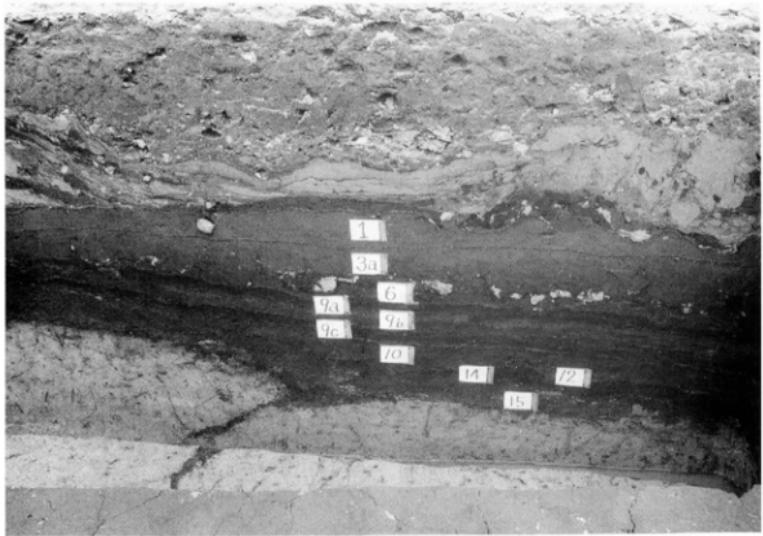


5 16層検出杭1 (L-1) 検出状況（西から）

図版3 中在家南遺跡第3次調査区 南半部1

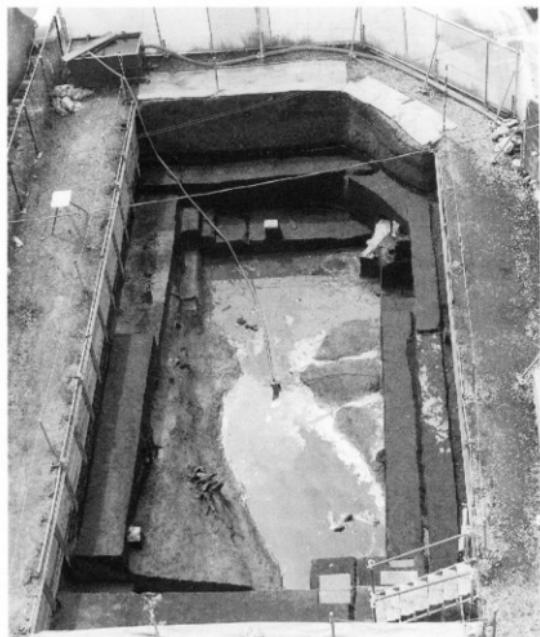


1 河川跡堆積土上部（1～15箇）除去状況（西から）



2 河川跡土層断面（南区東駅南部）

図版4 中在家南遺跡第3次調査区 南半部2



1 河川跡底面検出状況（東から）

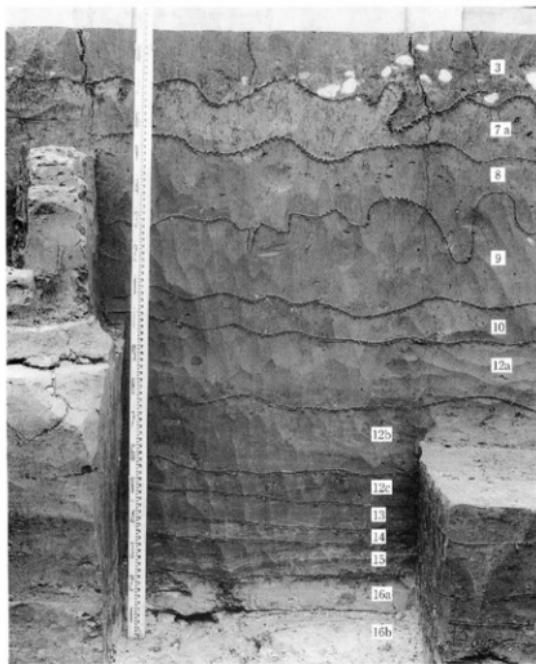


2 河川跡底面検出状況（西から）

図版5 中在家南遺跡第4次調査区1（全景）



1 東壁断面



2 北壁中央部

図版6 中在家南遺跡第4次調査区2（土層断面）



1 河川跡（堆積土1～3a層）検出状況（南西から）



2 3a層水田跡畦畔（紐で表示）検出状況（東から）



3 3a層杭3（L-7）検出状況（南から）



4 4層（灰白色火山灰層）上面検出状況（東から）



5 6層上面検出状況（東から）



6 6層不明木製品L-12出土状況（南から）



7 6層土器D-3出土状況（南から）

図版7 中在家南遺跡第4次調査区3（1～6層）



1 7層検出状況（東から）



2 8・9・10層検出状況（東から）



3 10層上面検出状況（東から）



4 10層杭5（L-33）検出状況（南から）



5 10層杭6（L-32）検出状況（南西から）



6 10層土器C-13出土状況（北から）



7 10層ナスビ型平底L-21出土状況（南から）



8 10層桿杭L-19出土状況（北東から）



9 10層堅竹L-22出土状況（南東から）

図版8 中在家南遺跡第4次調査区4（7～10層）



1 12層遺物出土状況（西から）



2 12層遺物出土状況（東から）

図版9 中在家南遺跡第4次調査区5（12層全景）



1 12層土器C-16・30・37(器台・壺・壺)出土状況(北から)



2 12層土器C-34出土状況(西から)



3 12層土器C-29出土状況(北から)



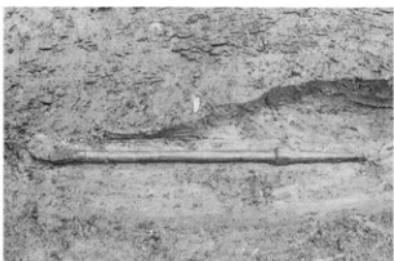
4 12層土器C-17出土状況(南西から)



5 12層直柄平鉗L-61出土状況(南東から)



6 12層ヘラ状木製品L-37出土状況(南から)



7 12層棒先状木製品L-36出土状況(南から)



8 12層四脚盤L-41出土状況(南西から)

図版10 中在家南遺跡第4次調査区6(12層遺物出土状況)



1 12層杭1(右)・3(L-62・67)検出状況(南から)



2 12層杭4(中央)・5(L-69・68)検出状況(南から)

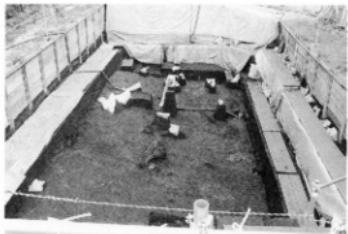


3 12層杭5(L-68)検出状況(西から)



4 12層杭29検出状況(東から)

図版11 中在家南遺跡第4次調査区7(12層検出杭)



1 13層上面検出状況（東から）



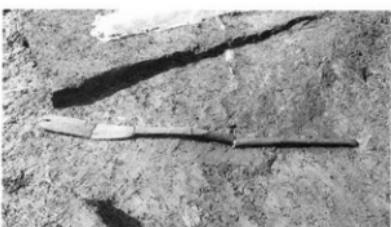
2 15層上面検出状況（東から）



4 15層漆器鉢L-78出土状況（西から）



3 14層堅柄L-71出土状況（北西から）



5 15層打棒L-77出土状況（南から）



6 15層ヘラ状木製品L-82出土状況（北から）

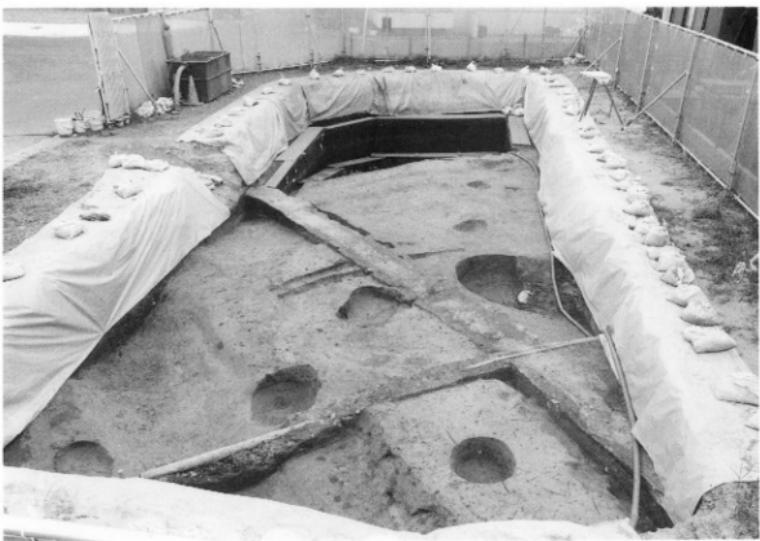


7 14層斧直柄状木製品L-72出土状況（西から）



8 15層斧直柄状木製品L-80出土状況

図版12 中在家南遺跡第4次調査区8 (13~15層)



1 北区全景（東から）



2 北区全景（西から）

図版13 押口遺跡第3次調査 北区1（全景）

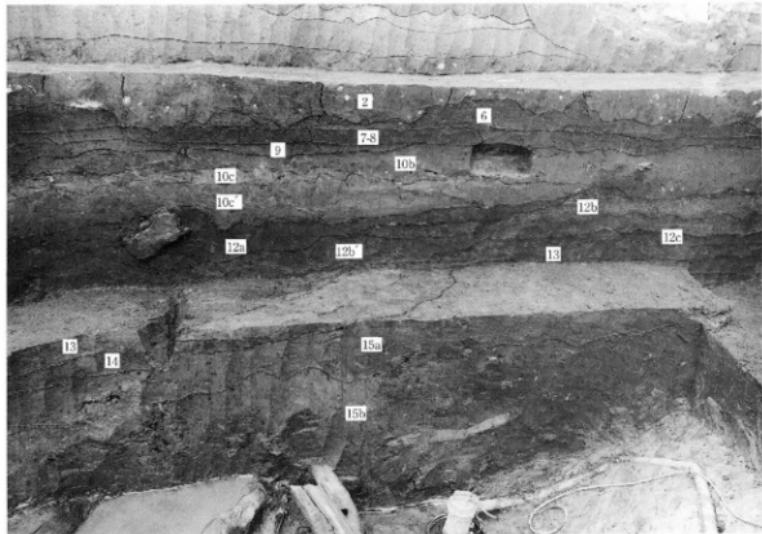


1 基本層断面：手前から河川堆積土上部（1～15層）・下部（16層）・基盤層（Ⅲ層）（北壁西部）

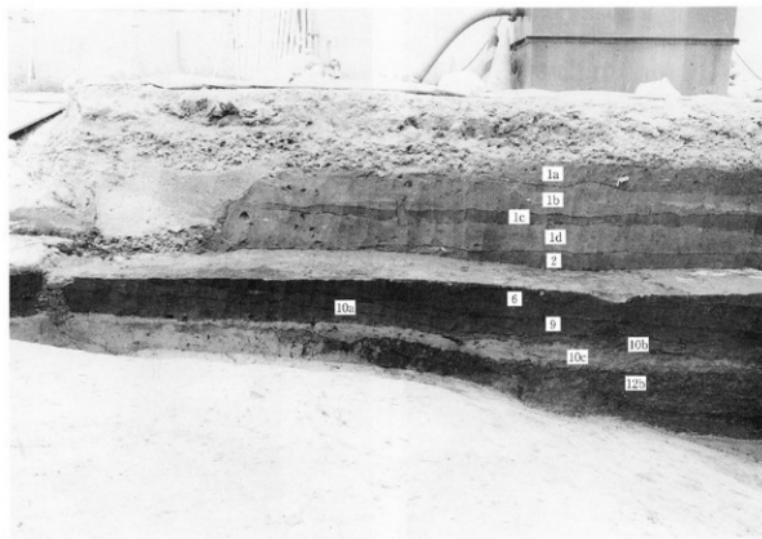


2 大別層の境界（北壁西部）

図版14 押口遺跡第3次調査 北区2（基本層断面）

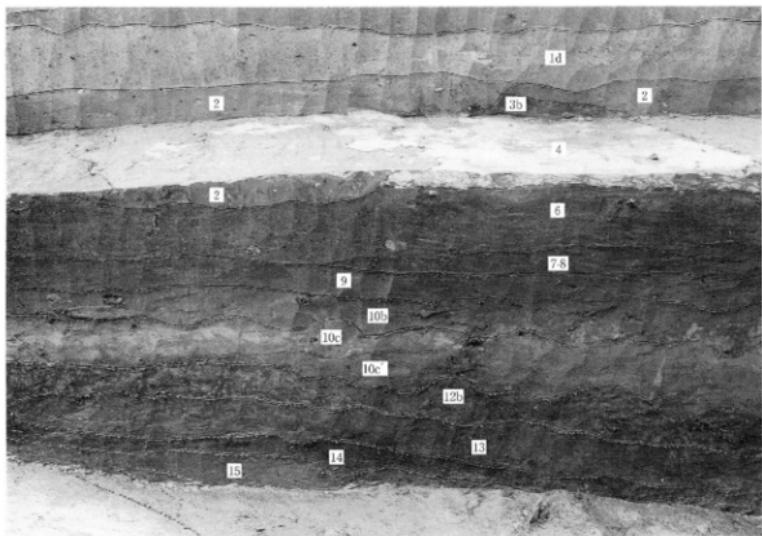


1 河川跡土層断面（調査区西壁）



2 河川跡土層断面（調査区南壁西部）

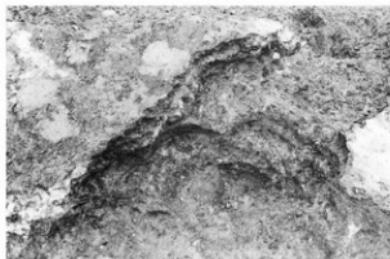
図版15 押口遺跡第3次調査 北区3（河川跡土層断面）



1 河川跡土層断面（調査区南壁西部）



2 2層水田跡堆積物（耕作土除去後：西から）



3 2層水田跡堆積物の掘削痕跡（西から）



4 6層杭1（L-5）検出状況（南から）

図版16 押口遺跡第3次調査 北区4（河川跡土層断面・2～6層）



1 河岸部遺構検出状況（東から）



2 SD-1溝跡土質断面（南西から）



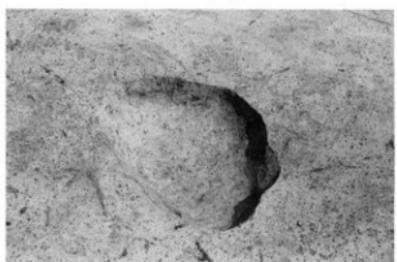
3 SD-2・3溝跡（北西から）



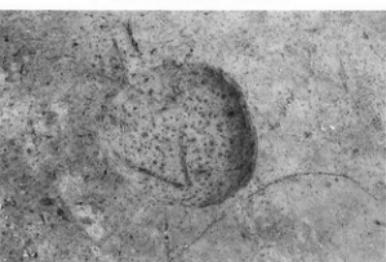
4 SK-1土坑（南から）



5 SK-2土坑土質断面（南西から）



6 SK-2土坑完掘状況（南から）

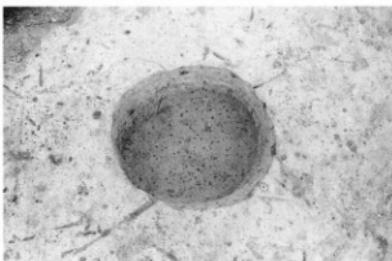


7 SK-3土坑完掘状況（南から）

図版17 押口遺跡第3次調査 北区5（河岸部遺構）



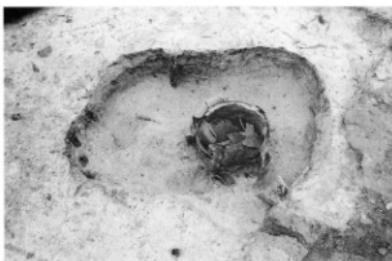
1 SK-4 土坑土器断面（南から）



2 SK-4 土坑完掘状況（南から）



3 SK-5 土坑土器断面（南から）



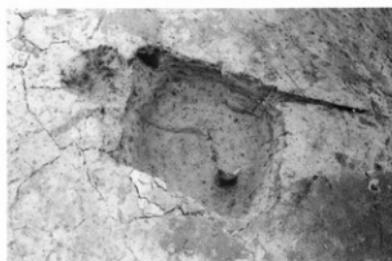
4 SK-5 土坑土器（C-1）出土状況（北から）



5 SK-6 土坑完掘状況（南から）



6 SK-7 土坑完掘状況（南東から）



7 SK-8 土坑土器（C-2）出土状況（北から）



8 SK-1 造構面部（南から）

図版18 押口遺跡第3次調査 北区6（河岸部造構）



1 河川跡10層遺物出土状況（西から）



2 10c層横狹未製品L-21出土状況（南東から）



3 10層横狹L-7出土状況（北から）



4 10層除去、11・12層上面検出状況（南から）



5 12層堅柱L-31出土状況（北西から）

図版19 押口造路第3次調査 北区7（河川跡10～12層）



1 12a層ナスビ型二又窓L-33出土状況（南から）



2 12a層高平窓L-35出土状況（北東から）



3 河川跡15層上面検出状況（南東から）

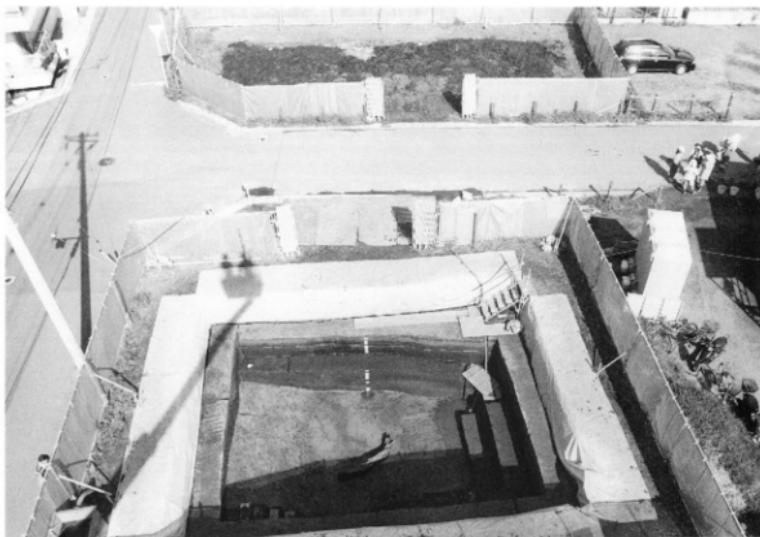


4 15層中からの倒木・流木出土状況（西から）

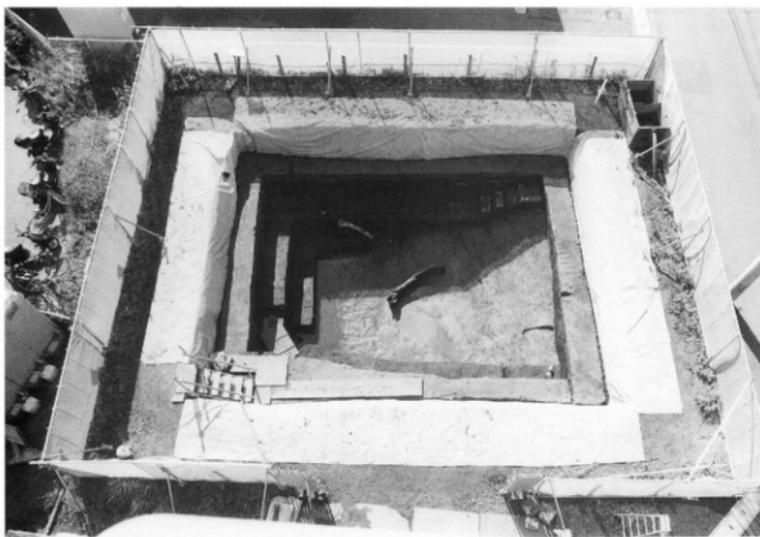


5 調査終了状況（西から）

図版20 押口遺跡第3次調査 北区8（河川跡12層～底面）



1 南区全景：写真上の空き地が北区（南から）

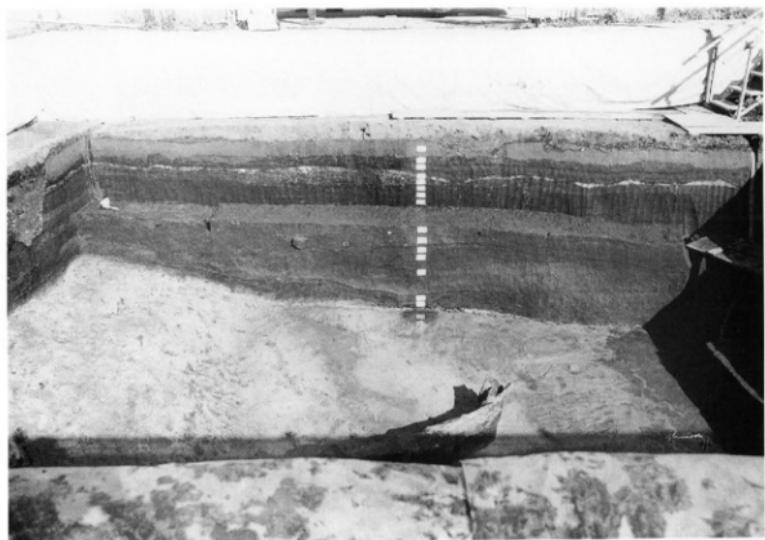


2 南区全景（北から）

図版21 押口遺跡第3次調査 南区1（全景）



1 調査区（河川路）土層断面（調査区西壁）



2 調査区（河川路）土層断面（調査区北壁）

図版22 押口遺跡第3次調査 南区2（土層断面）



1 河川跡（2～3a層水田跡）検出状況（西から）



2 SD-2溝跡定柵状況（南から）



3 SD-2溝跡土層断面（南から）



4 4層（灰白色火山灰層）上面検出状況（西から）



5 6層上面移山状況（西から）



6 6層土器杯D-1出土状況（南東より）



7 7層木皿L-46出土状況（南から）

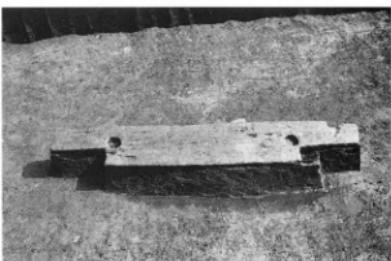


8 7-8層机1L-45検出状況（南東から）

図版23 押口遺跡第3次調査 南区3（河川跡2～8層）



1 9層土師器杯C-37(半分)出土状況(南から)



2 9層下面段放しL-51出土状況(西から)



3 離放し下部からの土師器杯C-37(半分)出土状況(南から)



4 10層上面検出状況(西から)



5 10層遺物出土状況(西から)

図版24 押口遺跡第3次調査 南区4 (9~10層)



1 12層木製品類出土状況（東から）



2 12a層土器壺C-40出土状況（東から）



3 12a層壺柄柄L-59出土状況（北西から）



4 12b層二又鎌L-57出土状況（北東から）



5 12b層斧柄柄L-61出土状況（東から）

図版25 押口遺跡第3次調査 南区5 (12層)



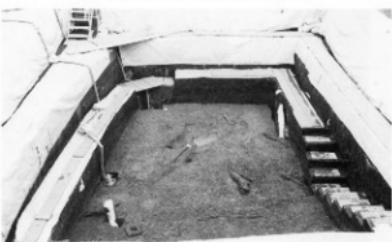
1 12b層腰掛L-64・脚柱柄L-65出土状況（北から）



2 12a層楕円板L-58出土状況（南から）



3 14層上面棟出状況（西から）



4 15層上面棟出状況（西から）



5 調査終了状況：16層・基盤面棟出状況（西から）

図版26 押口遺跡第3次調査 南区6（12層～底面）



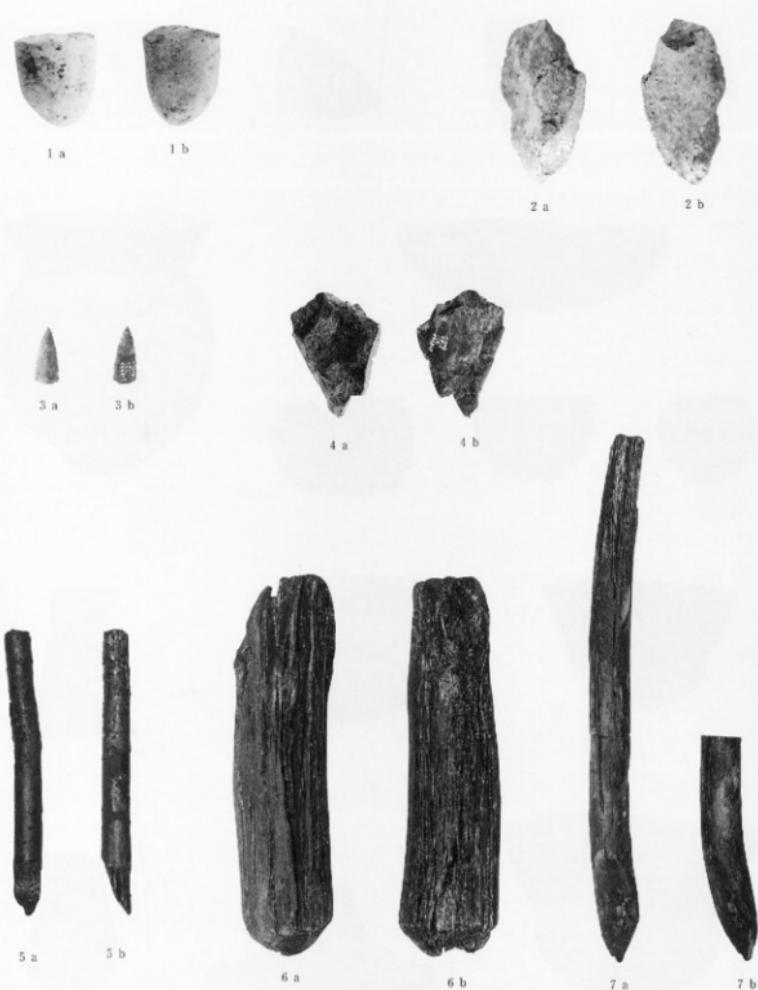
1 壺 B-1 (SD-2) 5 鍤B-3 (SR-1 15層 第15圖5) 9 环C-2 (SD-2 埋土中～下層 第10圖6)
 2 高环B-2 (SD-1 15層 第15圖1) 6 鍤B-6 (SR-1 15層 第15圖4) 10 环C-3 (SD-2 埋土中～下層 第10圖7)
 3 鍤 B-5 (SR-1 15層 第15圖2) 7 壺B-7 (SR-1 15層 第15圖6) 11 环C-4 (SD-2 埋土上層 第10圖4)
 4 鍤 B-4 (SR-1 15層 第15圖3) 8 鍤C-6 (SK-4 第12圖2)

图版27 中在家南遺跡第3次調查出土 弥生土器・土師器1



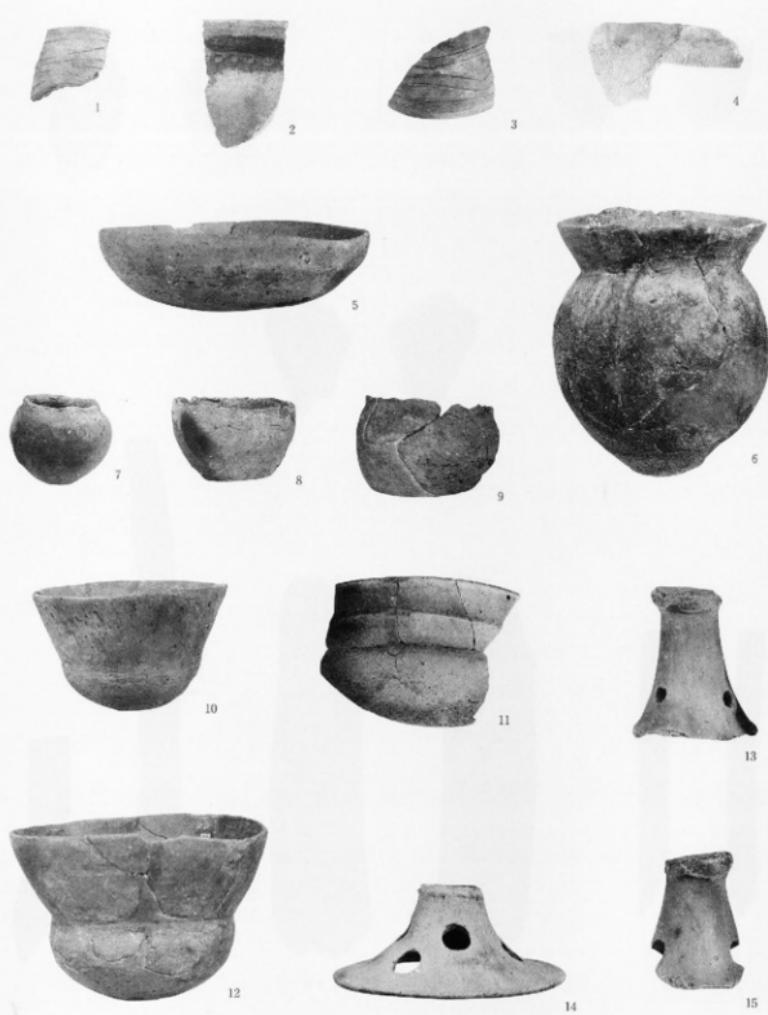
1 瓷C-5 (SD-1 理上 第10图1) 5 高环C-10 (SR-1 9层 第13图2) 9 平瓦G-1 (SR-1 3层 第13图1)
 2 瓷C-7 (SR-1 9层 第13图5) 6 壶 C-9 (SR-1 9层 第13图3) 10 盒 J-1 (1层:田水田)
 3 瓷C-8 (SR-1 9层 第13图6) 7 环 D-1 (SD-2 埋土上部 第10图2) 11 破石K-1 (SD-2 埋土中~下层 第10图9)
 4 瓷C-11 (SR-1 9层 第13图4) 8 壶 D-1 (SK-1 埋土 第12图1)

图版28 中在家南遗址第3次调查出土 土师器2·瓦·磁器·石器1



- 1 惠石？ K-2 (SD-2 地下 第10图 8)
 2 不定形石器K-4 (SR-1 15层 第15图 9)
 3 石镰 K-3 (SR-1 15层 第15图 7)
 4 不定形石器K-5 (SR-1 15层 第15图 8)
- 5 丸核L-1 (SR-1 16层 第14图 2)
 6 丸核L-2 (SR-1 16层 第14图 3)
 7 丸核L-3 (SR-1 9层 第14图 1)

图版29 中在家南遺跡第3次調查出土 石器2・杭



- | | | |
|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 舀 B-8 (SR-1 14層 第38圖1) | 6 壺 C-12 (SR-1 10層 第24圖1) | 11 盆 C-20 (SR-1 12層 第29圖10) |
| 2 壺 B-9 (SR-1 15層 第38圖2) | 7 小底土壺C-14 (SR-1 12層 第29圖1) | 12 盆 C-21 (SR-1 12層 第29圖11) |
| 3 高环脚B-10 (SR-1 15層 第38圖3) | 8 小底土壺C-15 (SR-1 12層 第29圖2) | 13 器台C-22 (SR-1 12層 第29圖7) |
| 4 壺 B-11 (SR-1 15層 第38圖4) | 9 小底土壺C-24 (SR-1 12層 第29圖3) | 14 器台C-17 (SR-1 12層 第29圖4) |
| 5 环 C-13 (SR-1 10層 第24圖2) | 10 盆 C-19 (SR-1 12層 第29圖9) | 15 器台C-23 (SR-1 12層 第29圖6) |

图版30 中在家南造訪第4次調查出土 弥生土器・土師器1



1 器台C-18 (SR-1 12層 第29圖8)
 2 器台C-16 (SR-1 12層 第29圖5)
 3 壺 C-33 (SR-1 12層 第29圖19)
 4 壺 C-28 (SR-1 12層 第29圖16)

5 壺C-27 (SR-1 12層 第29圖15)
 6 壺C-29 (SR-1 12層 第29圖14)
 7 壺C-31 (SR-1 12層 第29圖17)
 8 壺C-32 (SR-1 12層 第29圖18)

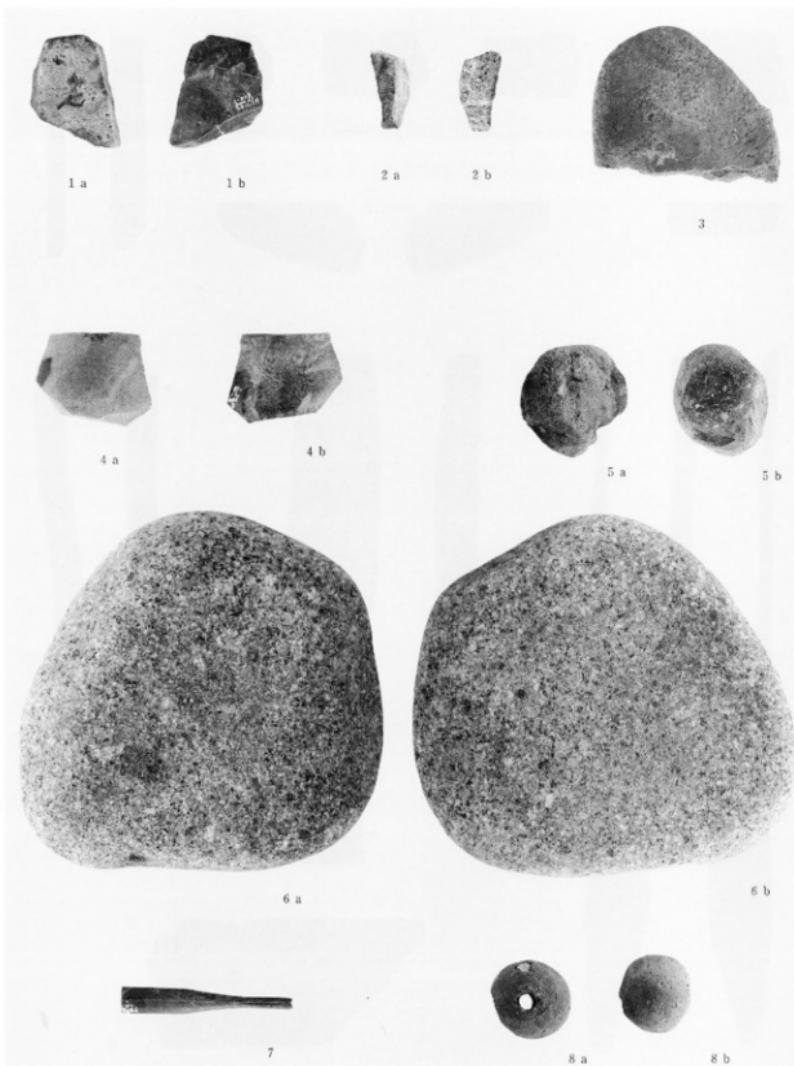
9 壺C-26 (SR-1 12層 第29圖13)
 10 壺C-35 (SR-1 12層 第30圖1)
 11 壺C-34 (SR-1 12層 第30圖4)

图版31 中在冢南遺跡第4次調查出土 土師器 2



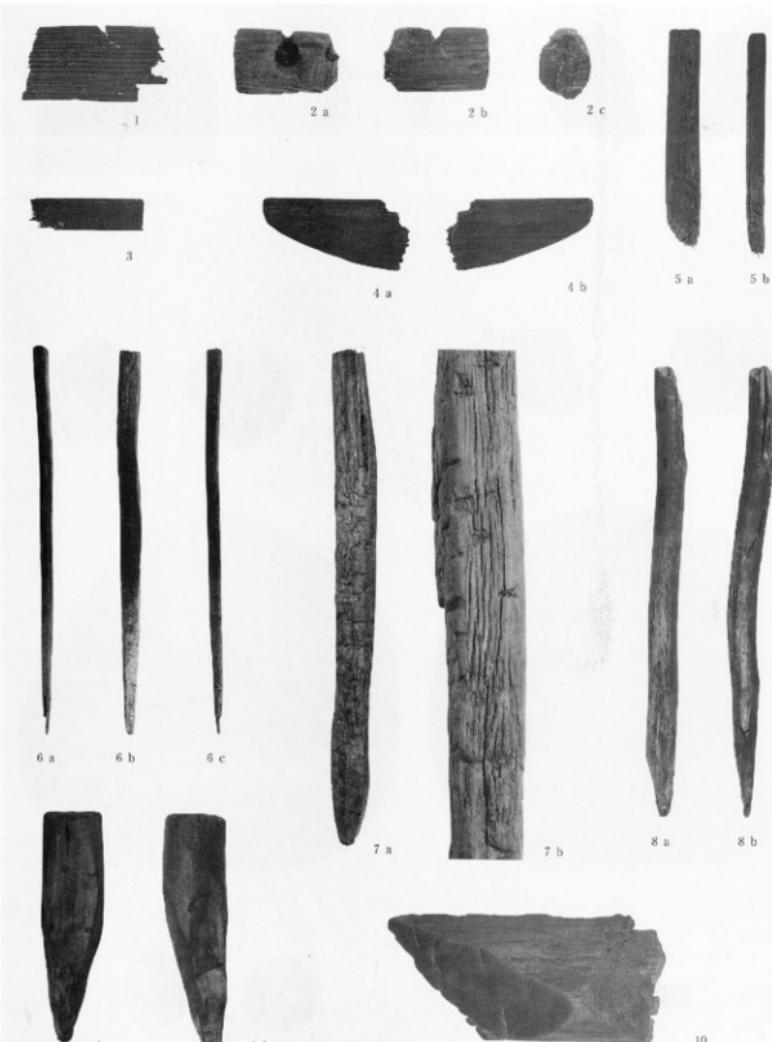
1 瓢C-39 (SR-1 12層 第30圖5)
 2 瓢C-38 (SR-1 12層 第30圖3)
 3 瓢C-37 (SR-1 12層 第30圖2)
 4 瓢C-36 (SR-1 12層 第30圖6)
 5 环 D-3 (SR-1 6層 第20圖9)
 6 磬 E-3 (SR-1 10層 第24圖3)
 7 平瓦 G-2 (SR-1 1層 第20圖1)
 8 瓦質陶器 I-1 (SR-1 2層 第20圖5)
 9 瓢I-2 (SR-1 3a層 第20圖6)
 10 瓢I-3 (SR-1 3a層 第20圖)
 11 瓢I-2 (SR-1 3a層 第20圖)
 12 瓢I-4 (SR-1 3a層 第20圖)

图版32 中在家南道路第4次調查出土 土師器 3、須惠器・瓦・陶磁器



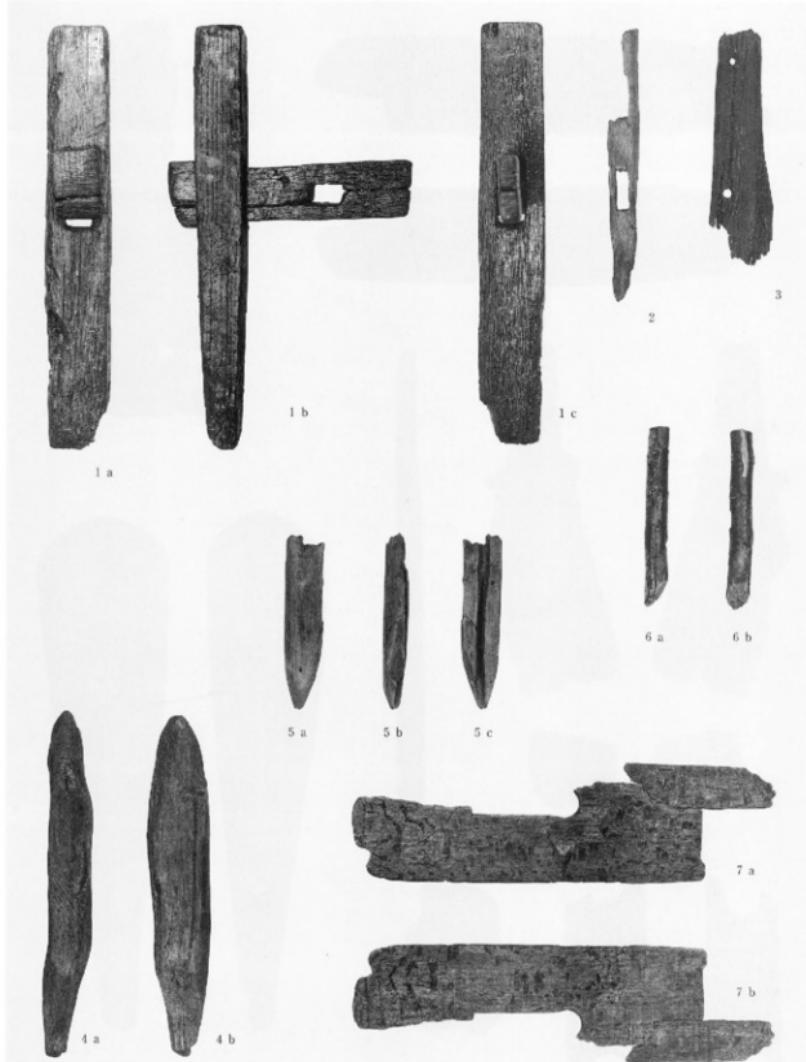
1 狐石K-6 (SR-1 1層 第20回4)
 2 猪石K-7 (SR-1 1層 第20回2)
 3 猪石K-8 (SR-1 6層 第20回8)
 4 石斧K-9 (SR-1 8層 第20回10)
 5 鸣石K-10 (SR-1 3a層 第20回7)
 6 猪石K-11 (SR-1 12層 第31回2)
 7 連續N-1 (SR-1 1層 第20回3)
 8 土錐P-1 (SR-1 12層 第31回2)

図版33 中在家南道路第4次調査出土 石器・石製品・金属製品・土製品



1 板材 L-4 (SR-1 2層 第21図1) 2 火葬品L-5 (SR-1 3a層 第21図2) 3 板材 L-9 (SR-1 3a層 第21図4) 4 角材 L-11 (SR-1 3a層 第21図3) 5 角材L-10 (SR-1 3a層 第21図5) 6 角材L-6 (SR-1 3a層 第21図6) 7 角材L-7 (SR-1 3a層 第21図10) 8 角材L-8 (SR-1 3a層 第21図9) 9 丸机L-90 (SR-1 3層 第21図7) 10 削机L-89 (SR-1 3a層 第21図8)

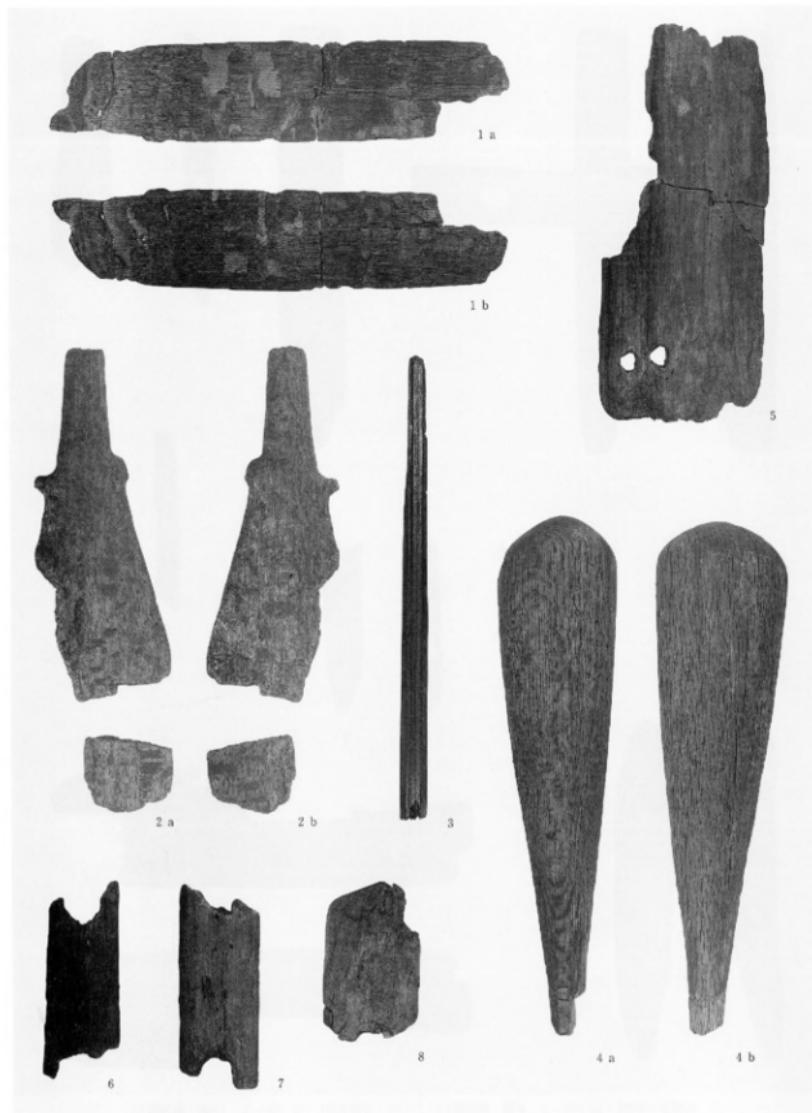
図版34 中在家南道路第4次調査出土 木製品類1 (2層~3a層)



1 木製品・不明 L-12 (SR-1 6層 第22図1)
 2 角材 L-13 (SR-1 6層 第22図2)
 3 板材 L-15 (SR-1 6層 第22図3)
 4 角材 L-14 (SR-1 6層 第22図4)

5 平裁丸材 L-17 (SR-1 7b層 第22図5)
 6 丸材 L-16 (SR-1 7b層 第22図6)
 7 横組 L-19 (SR-1 10層 第25図1)

図版35 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類2 (6層~10層①)



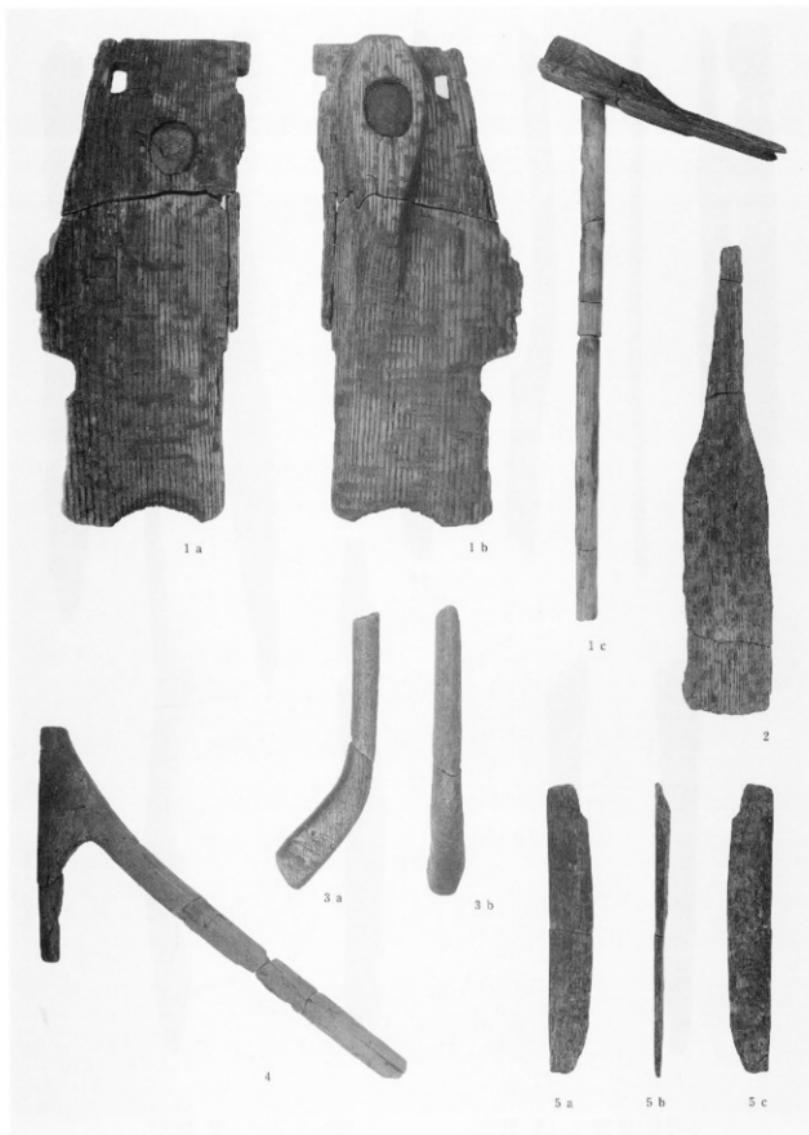
| | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 樹燃？ L-20 (SR-1 10層 第25図2) | 5 板材L-27 (SR-1 10層 第26図5) |
| 2 ナスビ型平頭L-21 (SR-1 10層 第25図3) | 6 板材L-23 (SR-1 10層 第26図2) |
| 3 丸棒 L-18 (SR-1 10層 第25図5) | 7 板材L-29 (SR-1 10層 第26図3) |
| 4 緊栓 L-22 (SR-1 10層 第25図4) | 8 板材L-91 (SR-1 10層 第26図4) |

図版36 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類3 (10層②)



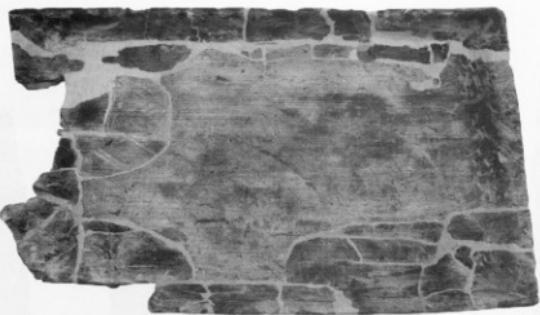
1 梯子L-24 (SR-1 10層 第26圖1)
 2 丸材L-28 (SR-1 10層 第26圖6)
 3 丸材L-25 (SR-1 10層 第26圖8)
 4 丸材L-26 (SR-1 10層 第26圖7)
 5 削杖L-33 (SR-1 10層 第27圖3)
 6 削机L-30 (SR-1 10層 第27圖1)
 7 角机L-32 (SR-1 10層 第27圖2)
 8 九机L-31 (SR-1 10層 第27圖4)

图版37 中在家南遺跡第4次調查出土 木製品類4 (10層③)



1 直柄平櫛 L-61 (SR-1 12層 第32回1)
 2 ハラ伏木櫛 L-37 (SR-1 12層 第32回5)
 3 鎏柄 L-40 (SR-1 12層 第32回4)
 4 銅鏽柄 L-31 (SR-1 12層 第32回3)
 5 曲柄一叉櫛 L-38 (SR-1 12層 第32回2)

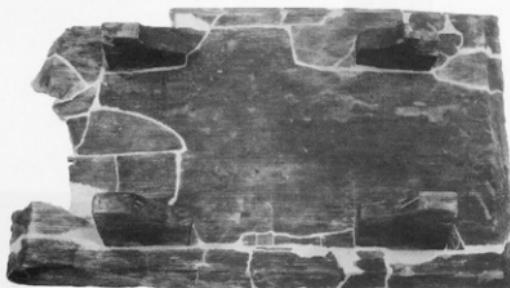
图版38 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類5 (12層①)



1 a



1 b



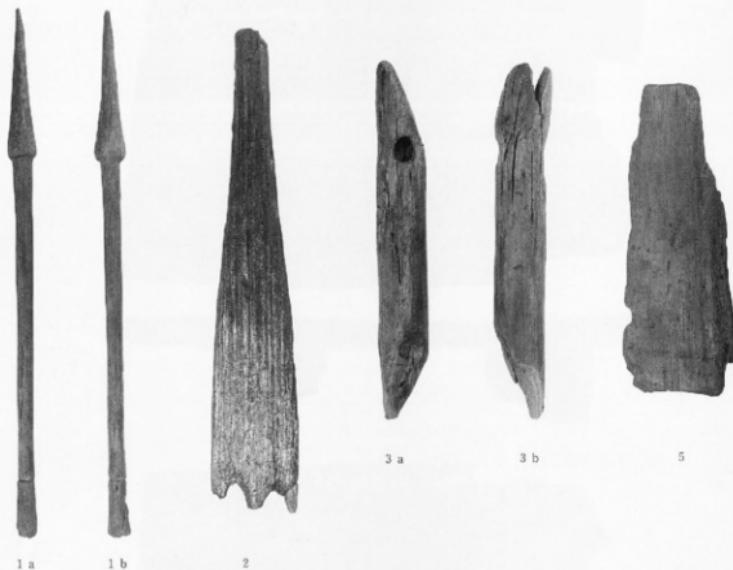
1 c



1 d

1 四脚凳L-41 (SR-1 12層 第33圖1)

圖版39 中在家南遺跡第4次調查出土 木製品類6 (12層②)



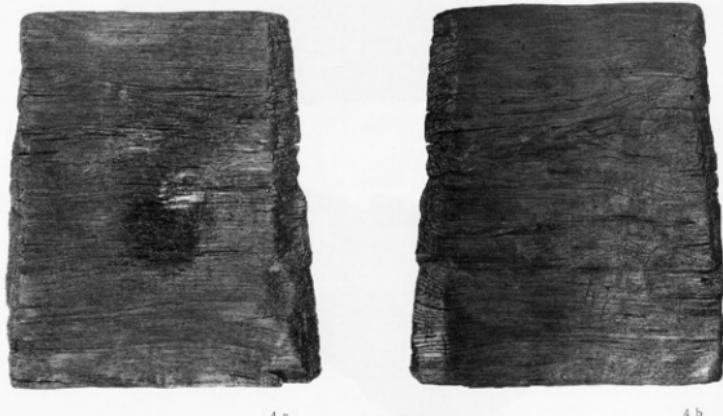
1 a 1 b

2

3 a

3 b

5



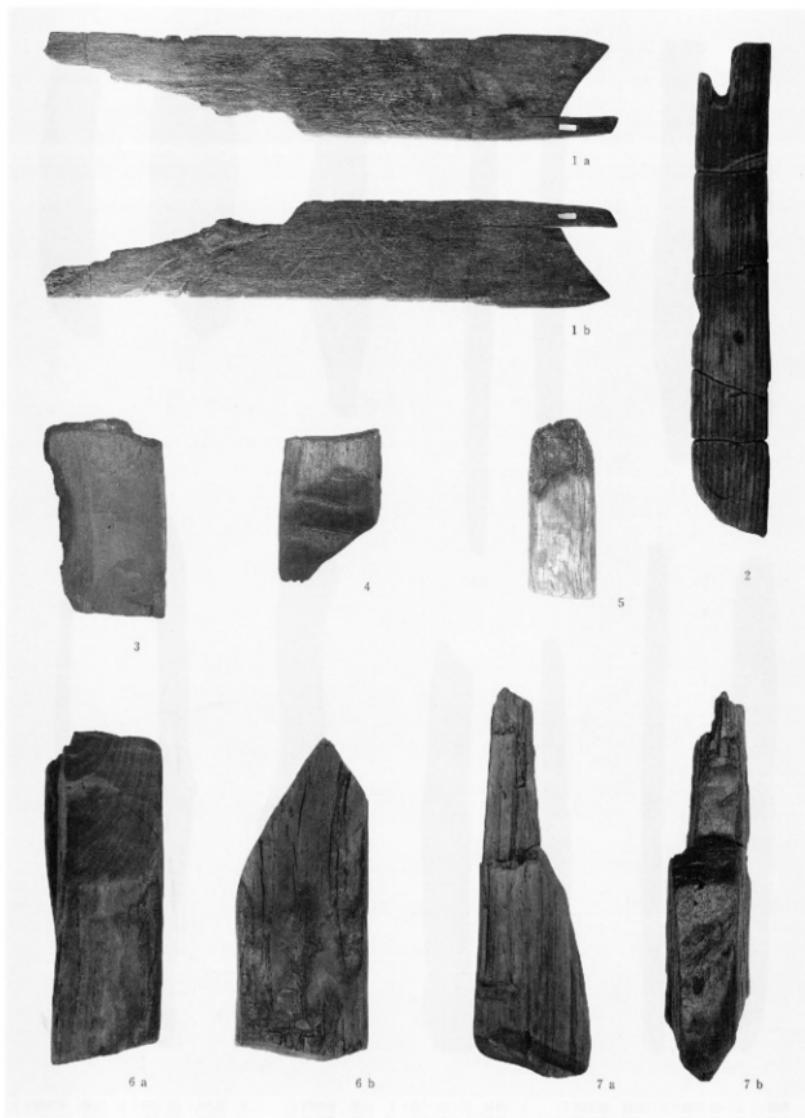
4 a

4 b

1 槌尖狀木製品 L-36 (SR-1 12層 第32圖9)
2 木製品·不明 L-35 (SR-1 12層 第32圖8)
3 木製品·不明 L-45 (SR-1 12層 第32圖7)

4 木製品·不明 L-39 (SR-1 12層 第32圖6)
5 板材 L-42 (SR-1 12層 第34圖2)

圖版40 中在家南遺跡第4次調查出土 木製品類7 (12層③)



1 建築材 L-51 (SR-1 12層 第34区1)
 2 板材 L-48 (SR-1 12層 第34区3)
 3 板材 L-59 (SR-1 12層 第34区4)
 4 角材 L-70 (SR-1 12層 第34区6)
 5 角材L-47 (SR-1 12層 第34区5)
 6 角材L-55 (SR-1 12層 第34区7)
 7 角材L-53 (SR-1 12層 第35区1)

圖版41 中在家南漢路第4次調查出土 木製品類 8 (12層④)



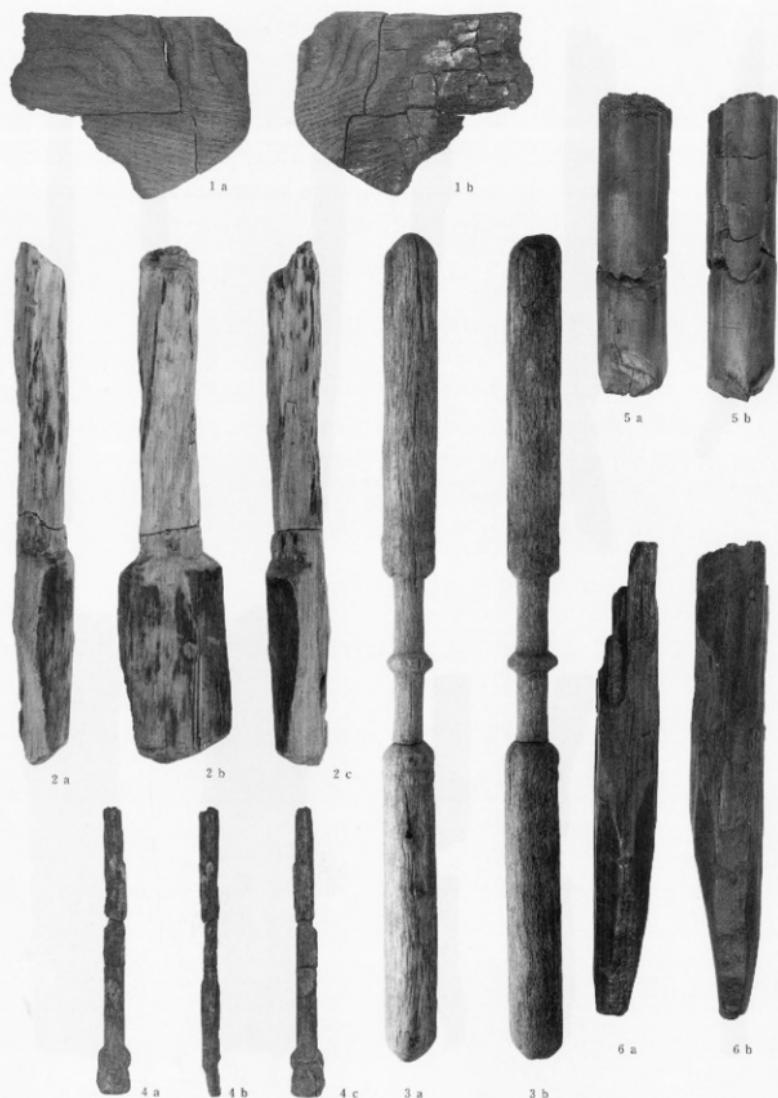
- | | | |
|-------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 1. 角材 L-49 (SR-1 12層 第35図2) | 5. 角材 L-44 (SR-1 12層 第35図3) | 9. 丸材 L-46 (SR-1 12層 第36図3) |
| 2. 角材 L-52 (SR-1 12層 第35図6) | 6. 角材 L-43 (SR-1 12層 第35図5) | 10. 丸材 L-50 (SR-1 12層 第36図4) |
| 3. 分割材 L-56 (SR-1 12層 第33図8) | 7. 分割材 L-60 (SR-1 12層 第35図7) | |
| 4. 平底丸材 L-57 (SR-1 12層 第36図1) | 8. 丸材 L-54 (SR-1 12層 第36図2) | |

图版42 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類 9 (12層⑤)



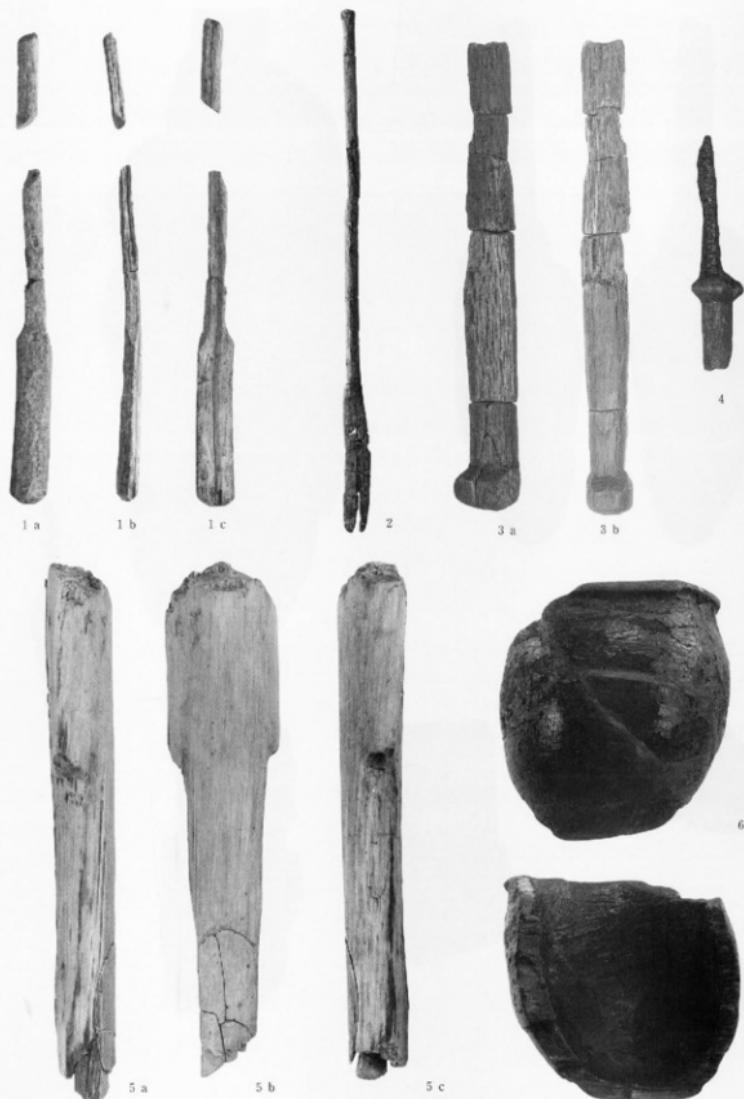
1 角杭L-67 (SR-1 12層 第36圖5)
 2 角杭L-68 (SR-1 12層 第36圖6)
 3 角杭L-63 (SR-1 12層 第37圖1)
 4 角杭L-69 (SR-1 12層 第37圖2)
 5 丸杭L-66 (SR-1 12層 第37圖3)
 6 丸杭L-65 (SR-1 12層 第37圖4)
 7 丸杭L-64 (SR-1 12層 第37圖5)
 8 丸杭L-62 (SR-1 12層 第37圖6)

圖版43 中在家南遺跡第4次調查出土 木製品類10 (12層⑤)



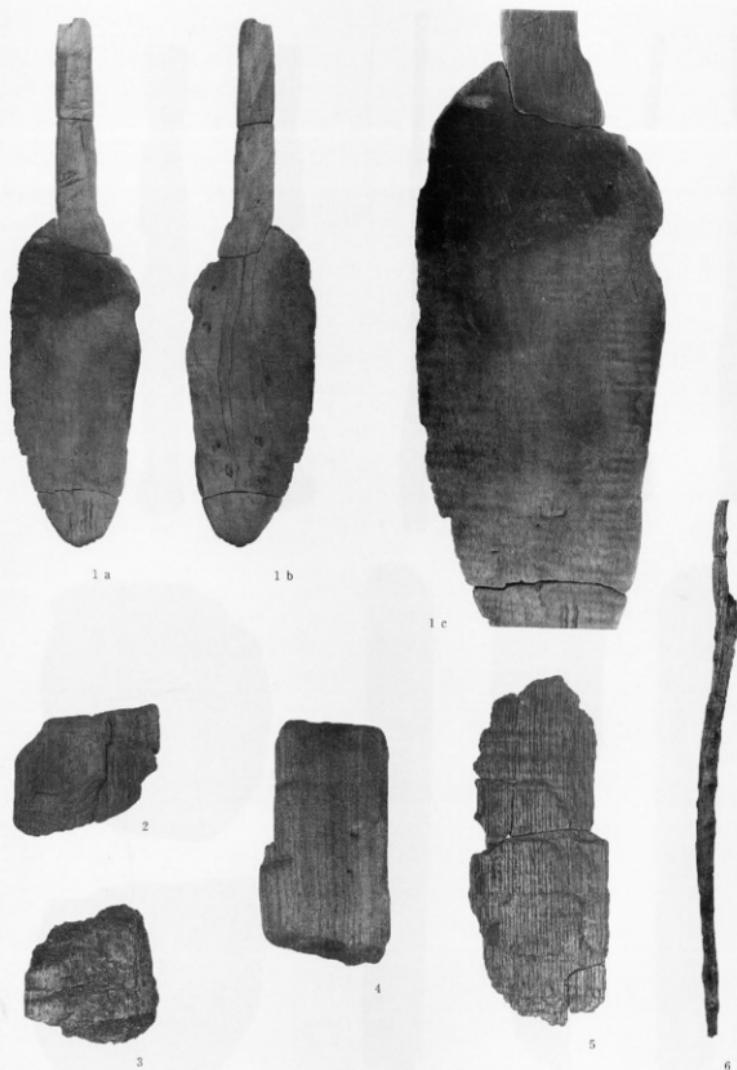
1 泥条 L-74 (SR-1 14層 第39圖1)
2 芳直柄状木製品L-72 (SR-1 14層 第39圖4) 3 壓件L-71 (SR-1 14層 第39圖3) 5 丸杭L-76 (SR-1 14層 第39圖6)
4 打棒L-73 (SR-1 14層 第39圖2) 6 角杭L-75 (SR-1 14層 第39圖5)

图版44 中在家南遺跡第4次調查出土 木製品類11 (14層)



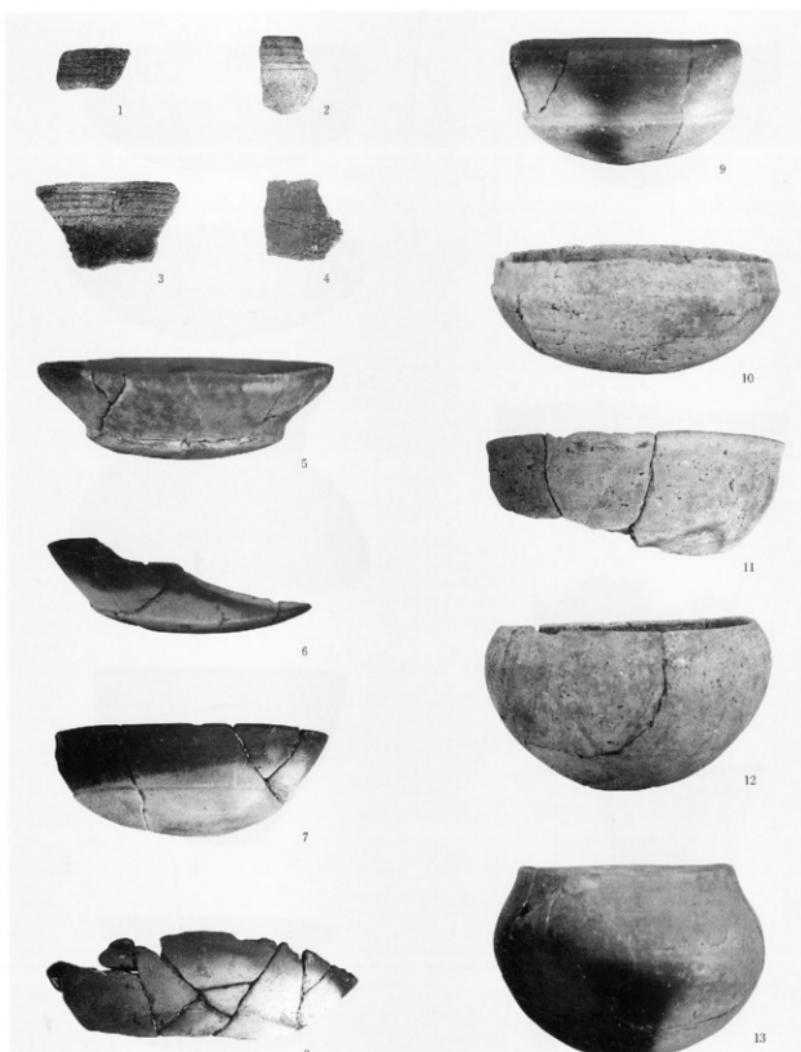
1 打棒L-84 (SR-1 15層 第40圖1)
 2 打棒L-77 (SR-1 15層 第40圖2) 3 穿直柄L-81 (SR-1 15層 第40圖4)
 4 坚件 L-79 (SR-1 15層 第40圖5) 5 穿直柄状木制品L-80 (SR-1 15層 第42圖1)
 6 钺 L-78 (SR-1 15層 第42圖1)

图版45 中在冢南遺跡第4次調查出土 木製品類12 (15層①)



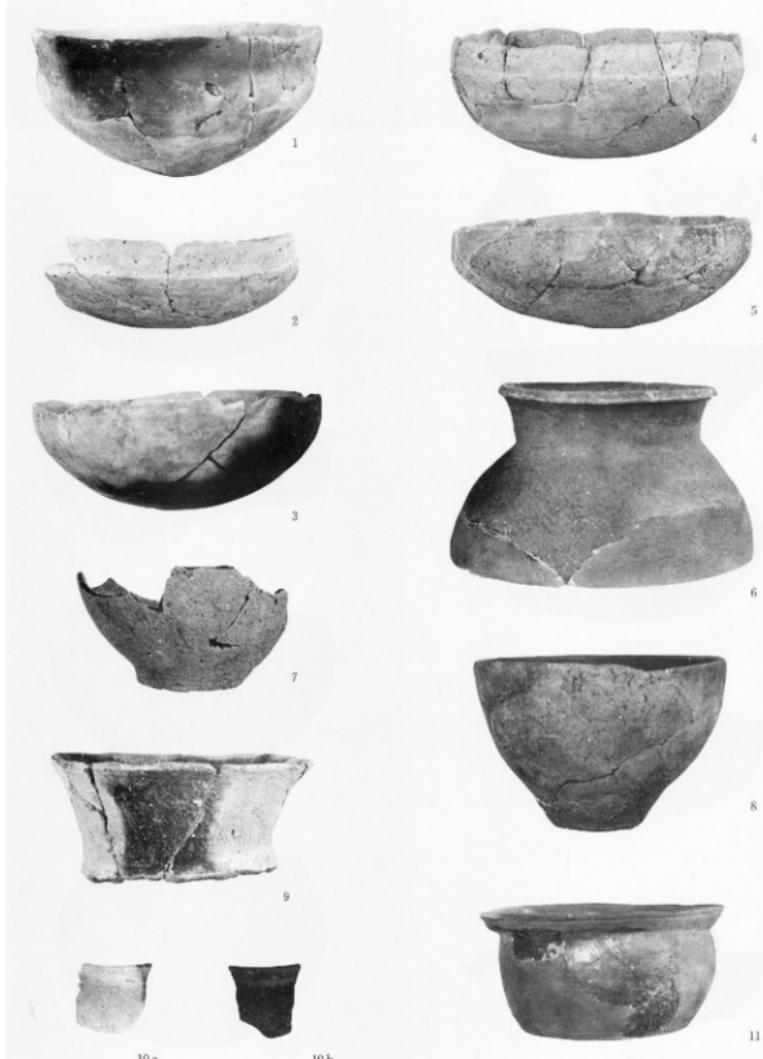
1 ヘラ状木製品L-82 (SR-1 15層 第42図2) 3 板材L-88 (SR-1 15層 第42図4) 5 板材 L-83 (SR-1 15層 第42図6)
2 板材 L-87 (SR-1 15層 第42図3) 4 板材L-86 (SR-1 15層 第42図5) 6 手杖丸材L-85 (SR-1 15層 第42図7)

図版46 中在家南遺跡第4次調査出土 木製品類13 (15層②)



- | | | | | | |
|---------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|-------------|
| 1 钵B-1 (SR-1) | 10 篓 第57图13) | 6 壶C-6 (SR-1) | 9、10 篓 第56图3) | 11 环C-11 (SR-1) | 10 篓 第57图3) |
| 2 钵B-2 (SR-1) | 10 篓 第57图12) | 7 环C-5 (SR-1) | 9、10 篓 第56图2) | 12 环C-8 (SR-1) | 10 篓 第57图4) |
| 3 钵B-3 (SR-1) | 10 篓 第57图14) | 8 环C-7 (SR-1) | 9、10 篓 第56图4) | 13 环C-9 (SR-1) | 10 篓 第57图5) |
| 4 瓢B-4 (SR-1) | 12b 篓 第66图3) | 9 环C-3 (SR-1) | 10 篓 第57图1) | | |
| 5 环C-4 (SR-1) | 9、10 篓 第56图1) | 10 环C-10 (SR-1) | 10 篓 第57图2) | | |

图版47 押口造跡北区出土 异生土器·土师器1



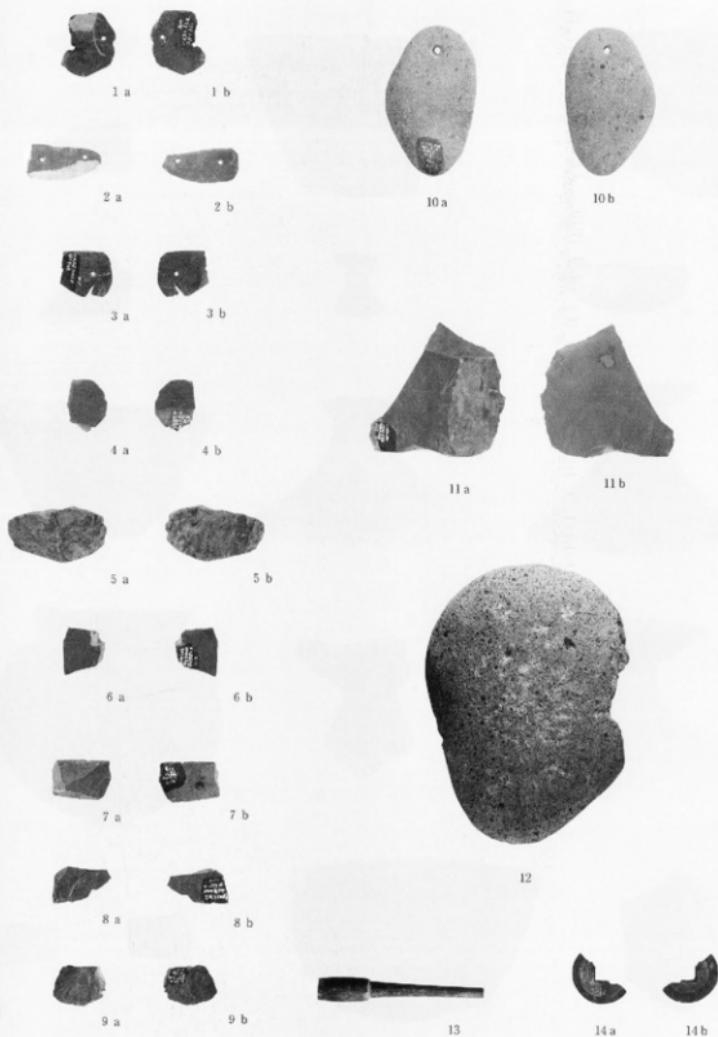
- | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 环C-22 (SR-1 10, 10c层 第58图1) | 5 环C-21 (SR-1 10, 10c层 第58图4) | 9 瓶C-25 (SR-1 10, 10c层 第58图6) |
| 2 环C-20 (SR-1 10, 10c层 第58图3) | 6 壶C-14 (SR-1 10层 第57图6) | 10 罐C-28 (SR-1 10c层 第59图6) |
| 3 环C-19 (SR-1 10, 10c层 第58图5) | 7 壶C-15 (SR-1 10层 第57图9) | 11 壶C-26 (SR-1 10c层 第59图5) |
| 4 环C-18 (SR-1 10, 10c层 第58图2) | 8 壶C-17 (SR-1 10层 第57图8) | |

图版48 押口遗踪北区出土 土师器 2



- | | | |
|-----------------------------|---------------------------------|-------------------------|
| 1 鉢 C-27 (SR-1 10c層 第59図4) | 7 离环 C-12 (SR-1 10層 第57図11) | 13 壺C-1 (SK-5 第49図5) |
| 2 小形鉢C-33 (SR-1 10c層 第59図3) | 8 ミニチュア土器C-34 (SR-1 10c層 第52図1) | 14 环足-1 (SR-1 2層 第53図2) |
| 3 盖 C-24 (SR-1 10c層 第59図7) | 9 器台 C-13 (SR-1 10層 第57図10) | 15 足1-1 (SK-1 1層 第53図1) |
| 4 盖 C-32 (SR-1 10c層 第59図8) | 10 器台 C-23 (SR-1 10層 第59図2) | 16 瓶J-1 (SR-1 2層) |
| 5 盖 C-31 (SR-1 10c層 第59図11) | 11 器台 C-35 (SR-1 11層 第46図1) | |
| 6 盖 C-30 (SR-1 10c層 第59図10) | 12 鍋 C-2 (SK-8 第49図4) | |

図版49 押口遺跡北区出土 土器3・須恵器・陶磁器



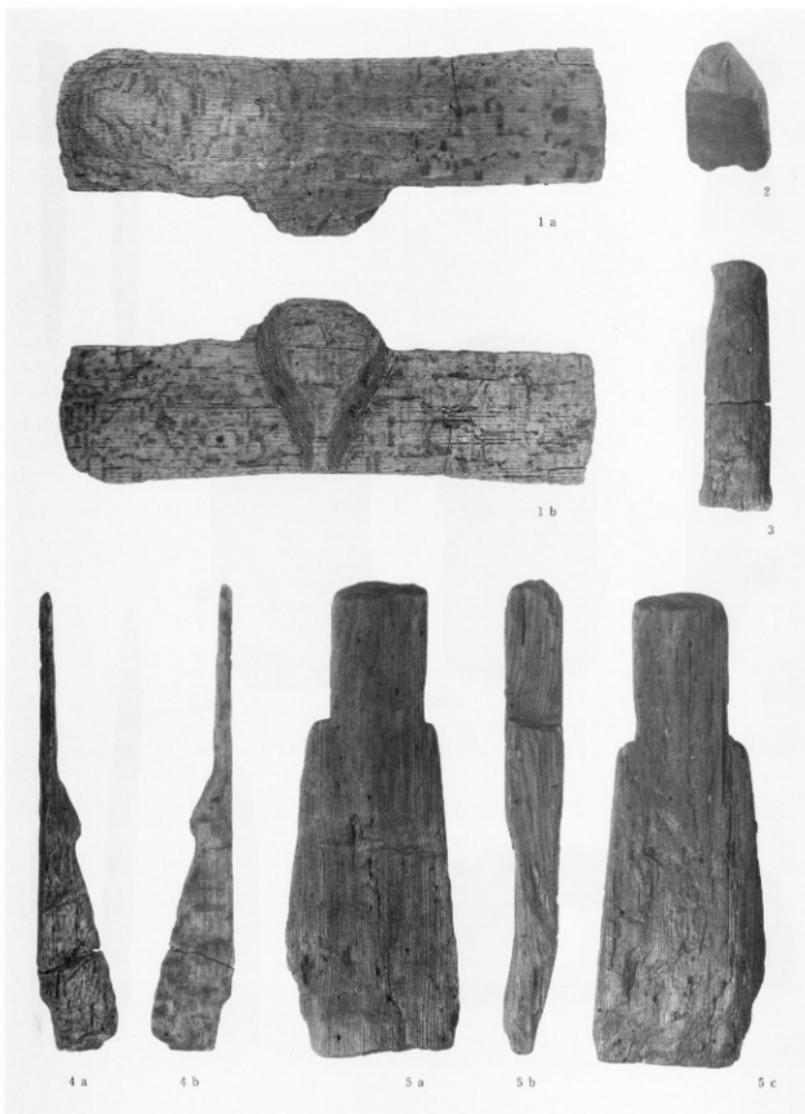
- | | | | | |
|--|--|---|--|--|
| 1 石製模造品K-1 (SR-1 2 石製模造品K-5 (SR-1 3 石製模造品K-2 (SR-1 4 石製模造品K-8 (SR-1 5 石製模造品K-6 (SR-1 | 6 石製模造品K-12 (SR-1 7 石製模造品K-9 (SR-1 8 石製模造品K-10 (SR-1 9 石製模造品K-11 (SR-1 10 有孔鑄製品K-3 (SR-1 | 10c (第60圖5) 10c (第60圖7) 10c (第60圖8) 10c (第60圖9) 10c (第60圖1) | 11 不明K-4 (SR-1 12 圓石K-7 (SR-1 13 鍵管N-1 (SD-1 14 古錢N-2 (SD-1 | 10層 第60圖11) 10層 第60圖12) 第49圖1) 第49圖2) |
|--|--|---|--|--|

图版50 押口渣路北区出土 石製品・金属製品



1 棍 L-1 (1層 第54図1) 4 下歎 L-4 (SR-1 2層 第54図3)
 2 角材L-2 (SR-1 2層 第54図4) 5 半裁丸材L-5 (SR-1 6層 第54図5)
 3 へラL-3 (SR-1 2層 第54図2) 6 丸棒 L-22 (SR-1 10c層 第61図4)

図版51 押口遺跡北区出土 木製品類1 (2層~10層①)



1 横板 L-21 (SR-1 10層 第61図2)
2 木製品・不明 L-19 (SR-1 10層 第61図3) 3 曲板 L-6 (SR-1 10層 第61図5)
ナスピ型二叉脚 L-8 (SR-1 10層 第61図6) 5 木製品・不明 L-20 (SR-1 10層 第61図7)

図版52 押口遺跡北区出土 木製品類2 (10層②)



- 1 構造品？ L-29 (SR-1 10c層 第62図1)
 2 木製品・不明 L-23 (SR-1 10c層 第62図2)
 3 角材 L-13 (SR-1 10層 第62図3)
- 4 角材L-10 (SR-1 10層 第62図4)
 5 角材L-11 (SR-1 10層 第62図5)
 6 板材L-9 (SR-1 10層 第62図6)
- 7 板材L-27 (SR-1 10c層 第63図1)

図版53 押口遺跡北区出土 木製品類3 (10層③)



- 1 板材 L-24 (SR-1 10c層 第63圖2) 5 分割材L-28 (SR-1 10c層 第63圖4) 9 丸材L-18 (SR-1 10層 第64圖4)
 2 半散丸材L-12 (SR-1 10層 第63圖3) 6 丸材 L-26 (SR-1 10c層 第64圖1) 10 丸材L-17 (SR-1 10層 第64圖5)
 3 分割材 L-16 (SR-1 10層 第63圖5) 7 丸材 L-15 (SR-1 10層 第64圖3)
 4 半散丸材L-14 (SR-1 10層 第63圖6) 8 丸材 L-30 (SR-1 10c層 第64圖2)

图版54 窪口造迹北区出土 木製品類 4 (10層④)



1 a



1 b



1 c



2



3 a



3 b



4 a



4 b

1 斧柄平頭L-35 (SR-1 12a層 第67図1)
2 斧柄平頭L-34 (SR-1 12a層 第67図2)

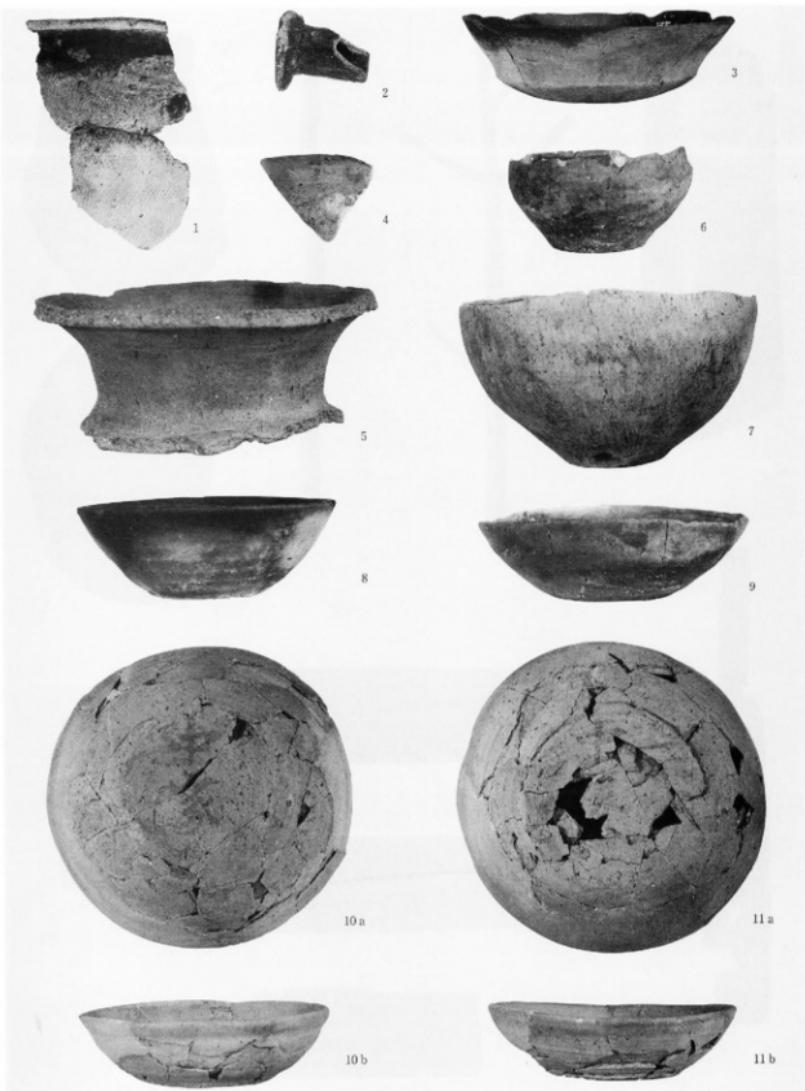
3 矛杆 L-31 (SR-1 12層 第67図5)
4 ナスビ型二叉頭L-33 (SR-1 12a層 第67図3)

図版55 押口遺跡北区出土 木製品類 5 (12層①)



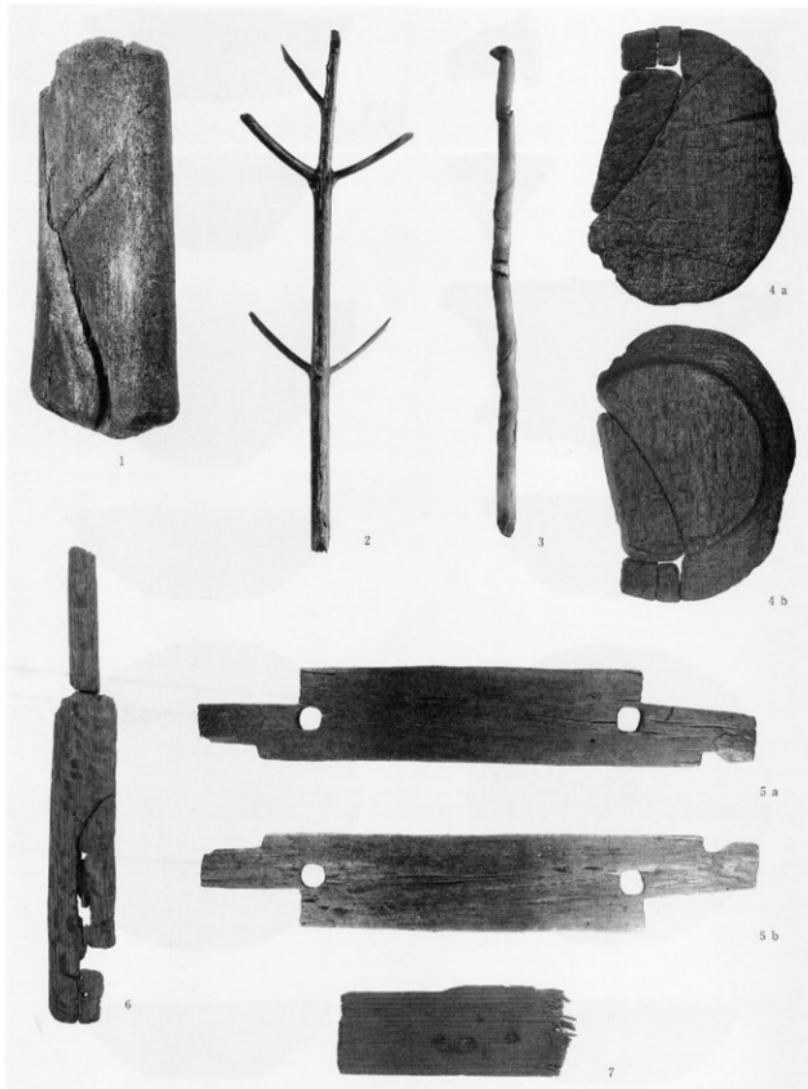
1 菱形孔 L-32 (SR-1 12a層 第67圖4)
 2 有頭木製品 L-40 (SR-1 12b層 第67圖6)
 3 版材 L-36 (SR-1 12a層 第68圖2)
 4 角材L-42 (SR-1 12b層 第68圖4)
 5 版材L-37 (SR-1 12a層 第68圖6)
 6 版材L-41 (SR-1 12b層 第68圖3)

圖版56 押口遺跡北區出土 木製品類 6 (12層②)



1 罐 B-5 (SR-1 14、15層 第74圖12) 5 壺C-39 (SR-1 10層 第74圖8) 9 环D-2 (SR-1 7層 第74圖6)
 2 不明C-36 (SR-1 7層 第74圖5) 6 壺C-41 (SR-1 12b層 第74圖10) 10 环E-3 (SR-1 6層上面 第74圖1)
 3 环 C-37 (SR-1 9、10層 第74圖7) 7 壺C-40 (SR-1 12a層 第74圖11) 11 环E-4 (SR-1 6層 第74圖2)
 4 环 C-38 (SR-1 10層 第74圖9) 8 环D-1 (SR-1 6層 第74圖3)

图版57 押口罐西南区出土 弥生土器・土师器・須惠器



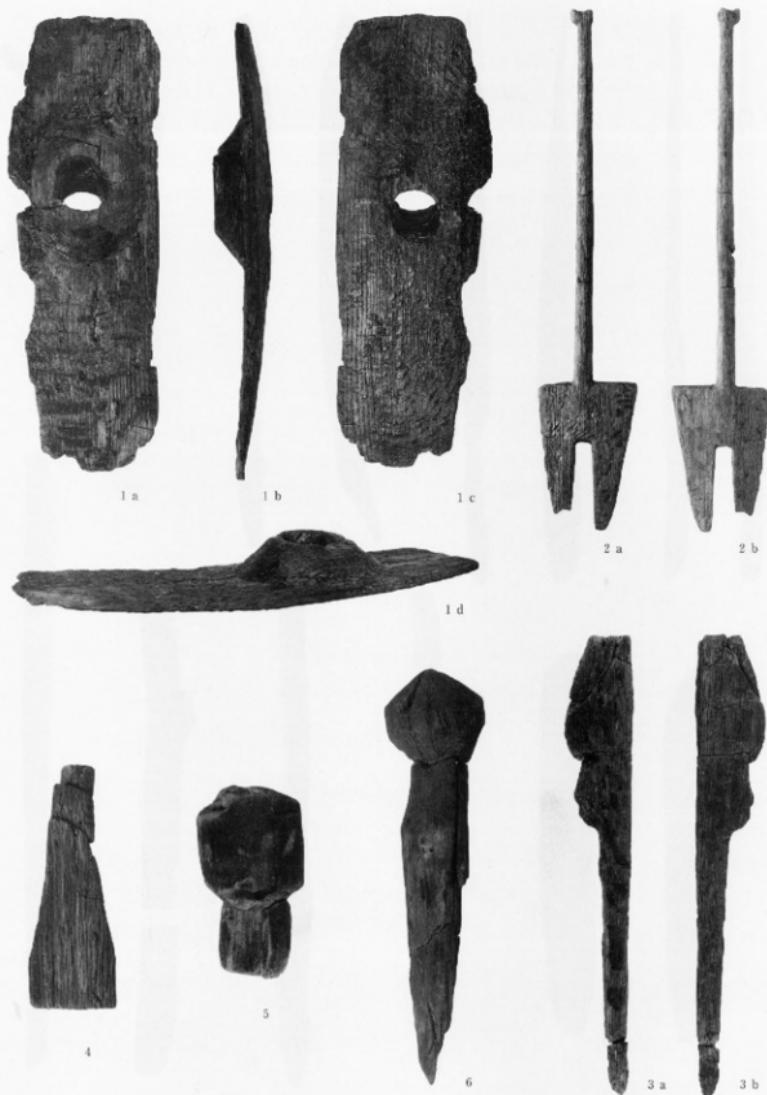
1 丸材L-44 (SR-1 1層 第75図1)
 2 丸材L-87 (SR-1 6層 第75図2)
 3 丸材L-45 (SR-1 7~8層 第75図4)
 4 三 L-46 (SR-1 7層 第75図3)
 5 縦放し L-51 (SR-1 10層 第77図1)
 6 附り棒? L-47 (SR-1 10層 第78図1)
 7 板材 L-48 (SR-1 10層 第78図2)

図版58 押口遣道路南区出土 木製品類1 (1層~10層①)



1 角村L-52 (SR-1 10層 第78圖4)
 2 角村L-53 (SR-1 10層 第78圖5)
 3 角村L-54 (SR-1 10層 第78圖6) 4 丸村L-49 (SR-1 10層 第78圖7)
 5 丸村L-53 (SR-1 10層 第78圖9)
 6 丸村L-50 (SR-1 10層 第78圖8) 7 丸村L-83 (SR-1 10層 第79圖2)
 8 角村L-84 (SR-1 10層 第79圖1)

图版59 挪口遗址南区出土 木製品類2 (10層②)



1 直柄乎漆 L-59 (SR-1 12b層 第81圖1) 3 鋸齒二叉漆 L-66 (SR-1 12b層 第81圖2) 5 有蓋木製品L-69 (SR-1 12a層 第81圖5)
2 二叉漆 L-57 (SR-1 12層 第81圖6) 4 ハラ状木製品L-60 (SR-1 12a層 第81圖3) 6 有蓋木製品L-67 (SR-1 12b層 第81圖4)

圖版60 押口遺跡南區出土 木製品類3 (12層①)



1 a

2

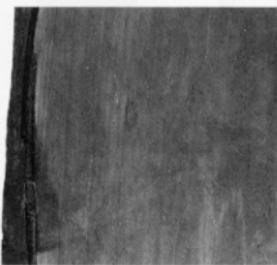
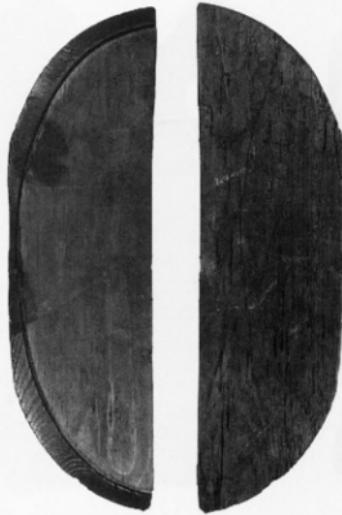
3 a

3 b

3 c

3 d

4 c

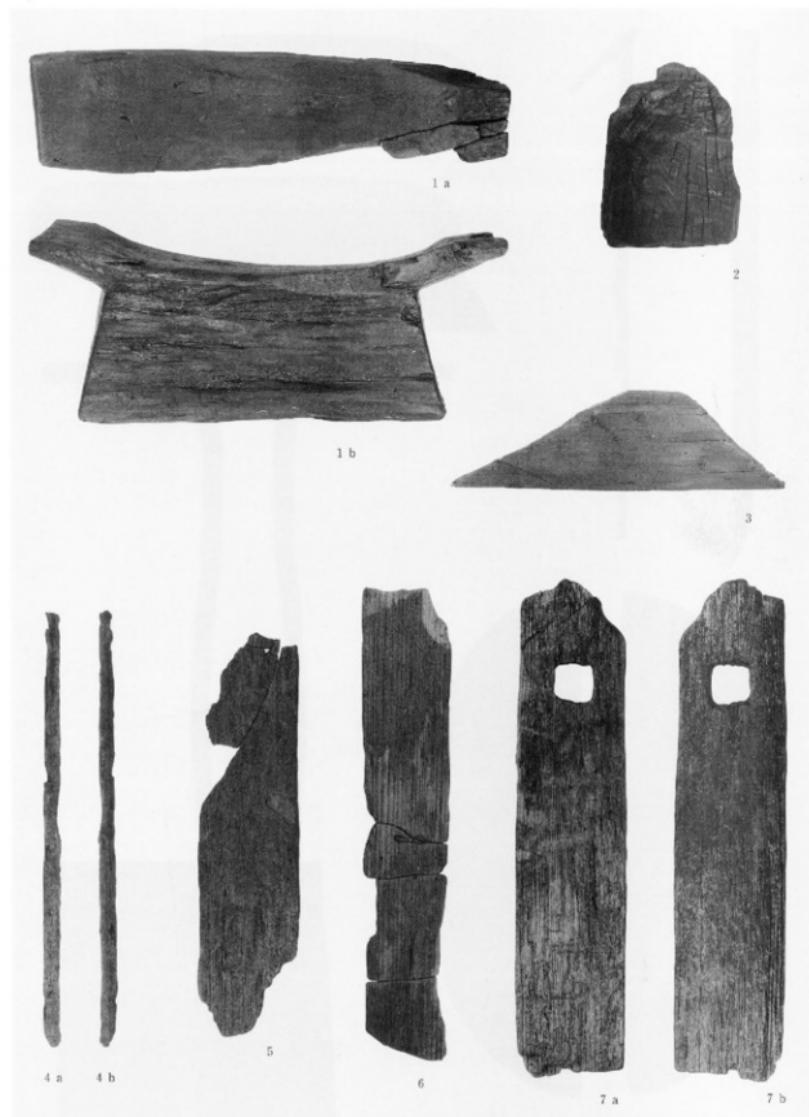


4 a

4 b

1 丸棒 L-62 (SR-1 12b層 第82圖3)
2 銀柶柄L-57 (SR-1 12層 第82圖1)3 芸唐柄L-61 (SR-1 12b層 第82圖2)
4 楠円板L-58 (SR-1 12a層 第83圖2)

圖版61 押口遺跡南區出土 木製品類4 (12層②)



1 橫剖 L-61 (SR-1 12b層 第83圖1)
 2 角材 L-76 (SR-1 12b層 第84圖2)
 3 板材 L-79 (SR-1 12b層 第84圖6)
 4 建築材? L-85 (SR-1 12b層 第84圖1)

圖版62 埋口遺跡南區出土 木製品類5 (12層③)



1 板材 L-74 (SR-1 12a層 第84図8)
 2 刺材 L-89 (SR-1 12b層 第85図1)
 3 平放丸材L-77 (SR-1 12b層 第85図2)
 4 丸材L-70 (SR-1 12b層 第85図4)
 5 丸材L-78 (SR-1 12b層 第85図3)
 6 丸材L-71 (SR-1 12c層 第85図5)
 7 丸杖 L-81 (SR-1 12c層 第85図6)
 8 振り棒L-86 (SR-1 14層 第86図1)

図版63 押口遺跡南区出土 木製品類6 (12層④・14層)

報告書抄録

| | | | | | | | | | | |
|---------------------|--|------------|------------------|--------------------|--------------------|---------------------------|-------------------|-----------------------|--|--|
| ふりがな | なかざいけみみなみいせき | | おさえぐちいせき | | | | | | | |
| 書名 | 中在家南遺跡(第3・4次) 押口遺跡(第3次)発掘調査報告書 | | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 仙台市文化財調査報告書 | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第255集 | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 工藤哲司・鈴木三男 | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 仙台市教育委員会 | | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 電話 022-214-8894 | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成13年3月31日 | | | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | | |
| 中在家南 遺跡 (第3次) | 仙台市若林区 荒井字中在家 23 | 04100 | 01427 | 38° 14' 20" | 140° 56' 12" | 19990708 ~ 19990823 | 300m ² | 仙台市荒井 土地区画整 理事業 | | |
| 中在家南 遺跡 (第4次) | 仙台市若林区 荒井字中在家 33・35 | 04100 | 01427 | 38° 14' 20" | 140° 56' 12" | 20000530 ~ 20000731 | 110m ² | 仙台市荒井 土地区画整 理事業 | | |
| 押口 遺跡 (第3次) | 仙台市若林区 荒井字押口 30・33・34・35 | 04100 | 01312 | 38° 14' 29" | 140° 56' 38" | 20000801 ~ 20001030 | 216m ² | 仙台市荒井 土地区画整 理事業 | | |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | | | |
| 中在家南遺跡 (第3次) | 集落・墓地 河川跡 | 弥生～中世 | 掘立柱建物跡・溝跡 土坑 | 弥生土器・石器 土師器・須恵器 | | | | | | |
| 中在家南遺跡 (第4次) | 集落・墓地 河川跡 | 弥生～中世 | 河川跡・水田跡 | 土師器・須恵器 木製品・土製品 | | | | | | |
| 押口遺跡 (第3次) | 散布地 河川跡 | 弥生～中世 | 溝跡・土坑 河川跡・水田跡 | 土師器・須恵器 木製品 | | | | | | |

仙台市文化財調査報告書第255集

中在家南遺跡(第3・4次)

押口遺跡(第3次)

発掘調査報告書

2002年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893~4

印刷 株式会社東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 022(263)1166

